兵庫県文化財調査報告　第309冊

加古川市

溝之口遺跡

－東播都市計画都市高速鉄道JR山陽本線等連続立体交差事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

２００６年１２月

兵庫県教育委員会

加古川市

溝之口遺跡

－東播都市計画都市高速鉄道 JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

２００６年１２月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は兵庫県加古川市加古川町溝之口に所在する、溝之口遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は東播都市計画都市高速鉄道JR山陽本線等連続立体交差事業に伴うもので、兵庫県加古川土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成10年度・11年度・13年度・15年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は兵庫県東播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成17年度と平成18年度に実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

5．出土品の分析は、竪穴住居の炭化材の樹種同定および土器の胎土分析を、入札によりパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

6．執筆は、第１章～第３章、第６章第１節・第３節・第４節：篠宮　正、
第４章第１節～第３節と第４節・第５節の遺物・第６章第２節：池田征弘、
第４章第４節・第５節の遺構：藤田　淳、
第５章：パリノ・サーヴェイ株式会社が行った。

7．編集は篠宮がおこなった。

8．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。

9．発掘調査および報告書作成にあたり、
大阪市文化財協会・加古川市教育委員会の各機関および、
魚津知克・大庭重信・岡本一士・田中元浩・田中清美・富山直人・長友朋子・西川英樹・森岡秀人（50音順）の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

溝　之　口　遺　跡

東播都市計画都市高速鉄道 JR 山陽本線等連続立体交差事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

例　　言

目　　次

第１章　遺跡をとりまく環境 …… 1
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　調査の契機と経過 …… 5
第１節　調査の契機 …… 5
第２節　溝之口遺跡の発見と既往の調査 …… 6
第３節　調査経過および体制 …… 6
第３章　山陽本線地区の調査成果 …… 11
第１節　概要 …… 11
第２節　Ａ地区 …… 12
第３節　Ｂ地区 …… 15
第４節　Ｃ地区 …… 23
第５節　Ｄ地区 …… 24
第６節　Ｅ地区 …… 25
第７節　Ｆ地区 …… 27
第８節　Ｇ地区 …… 28
第４章　加古川線地区の調査成果 …… 29
第１節　概要 …… 29
第２節　Ｈ地区 …… 29
第３節　Ｉ地区 …… 34
第４節　Ｊ地区 …… 34
第５節　Ｋ地区 …… 38
第５章　自然科学的調査の成果 …… 41
第１節　溝之口遺跡から出土した木材・炭化材の樹種 …… 41
第２節　溝之口遺跡出土土器の胎土分析 …… 43
第６章　まとめ …… 54
第１節　山陽本線地区の遺跡の変遷 …… 54
第２節　加古川線地区の遺跡の変遷 …… 59
第３節　加古川下流域左岸の遺跡動向 …… 69
別表 …… 1～8
図版 …… 1～75
写真図版 …… 1～91
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　確認調査出土土器（1～11）……11
第２図　溝 SD201J とその脇から出土した弥生土器のヘラ記号　……36
第３図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)(2)……48・49
第４図　砂粒・基質・孔隙の割合……49
第５図　胎土中の砂の粒径組成(1)(2)……50・51
第６図　山陽本線地区の遺構変遷……55
第７図　SH301B 出土土師器・韓式系土器の在地胎土と他地域の土器……57
第８図　中世Ⅰ～Ⅳ期の須恵器　……60
第９図　中世Ⅰ～Ⅳ期の土師器・陶磁器……61
第10図　中世Ⅴ期の土器・陶磁器……62
第11図　加古川線地区の遺構変遷(1)(2)……66・67
第12図　溝之口遺跡周辺の微地形と遺跡分布（1/10,0000）……70

表　目　次

第１表　樹種同定結果……41
第２表　胎土分析試料一覧および胎土分類……44
第３表　薄片観察結果(1)(2)(3)……45～47
第４表　遺構出土土器の個体度数……63
第５表　溝之口遺跡周辺の遺跡動態……71

別　表　目　次

別表１　土器一覧(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)……73～79
別表２　鉄器一覧……80
別表３　木器一覧……80
別表４　石器一覧……80

図　版　目　次

図版１		遺跡	１ 兵庫県の位置　２ 加古川市の位置　３ 溝之口遺跡の位置（1/200,000）
図版２		遺跡	４ 溝之口遺跡周辺の地形分類と条里（1/3,000）
図版３		遺跡	５ 大正６年の溝之口遺跡周辺（1/50,000）
図版４			溝之口遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版５		遺跡	６ 溝之口遺跡周辺の主要遺跡（1/35,000）
図版６		遺跡	７ 確認調査と本発掘調査の位置①（1/3,000）
図版７		遺跡	７ 確認調査と本発掘調査の位置②（1/3,000）
図版８	Ａ～Ｆ地区	遺構	８ 山陽本線地区調査位置（1/500）
図版９	Ａ地区	遺構	９ 第１面遺構配置（1/80）
図版10	Ａ地区	遺構	10 第２面遺構配置（1/80）
図版11	Ａ地区	遺構	11 土層断面（1/40・1/100）
図版12	Ａ地区	遺構	12 掘立柱建物 SB201A（1/50）　13 集石 SS2O1A（1/10）
図版13	Ａ地区	遺構	14 溝 SD205A・SD204A 断面（1/20）　15 溝 SD206A 断面（1/20）　16 溝 SD201A 断面（1/20） 17 竪穴住居 SH201A（1/40）　18 土坑 SK201A（1/40）
図版14	Ａ地区	遺物	SD201A（12～17）　SD202A（18～20）　SD206A（21・S1）　包含層（22～25）
図版15	Ａ地区	遺物	SD203A(26～28・W1・W2)　SB201A(29・30)　P201A(31・32)　SK201A(33・34)　SS201A(S2～S4)
図版16	Ａ地区	遺物	SS201A（S5～ S19）
図版17	Ａ地区	遺物	SS201A（S20～ S33）
図版18	Ｂ地区	遺構	19 第１面遺構配置（1/150）
図版19	Ｂ地区	遺構	20 第２面遺構配置（1/150）
図版20	Ｂ地区	遺構	21 土層断面①（1/100・1/40）
図版21	Ｂ地区	遺構	21 土層断面②（1/100・1/40）
図版22	Ｂ地区	遺構	土層断面（1/40）（22 溝 SD301B　23 溝 SD302B　24 溝 SD303B　25 溝 SD310B 26 溝 SD303B・SD311B　27 溝 SD304B　28 溝 SD314B 29 竪穴住居 SH301B・溝 SD317B・土坑 SK303B　30 溝 SD315B）
図版23	Ｂ地区	遺構	土層断面（1/20）（31 溝 SD316B　32 溝 SD309B　33 溝 SD319B　34 溝 SD312B 35 溝 SD320B　36 溝 SD318B　37 溝 SD306B　38 溝 SD305B）　39 掘立柱建物 SB301B（1/40） 40 土坑 SK302B（1/20）
図版24	Ｂ地区	遺構	41 竪穴住居 SH301B（1/50）　42 SH301B 遺物出土状況
図版25	Ｂ地区	遺構	43 竪穴住居 SH302B（1/50）　44 SH302B 遺物出土状況
図版26	Ｂ地区	遺構	45 竪穴住居 SH303B（1/50）
図版27	Ｂ地区	遺構	46 竪穴住居 SH303B 遺物出土状況・土層断面　47 SH303B 中央土坑土層断面 土層断面（1/50）（48 土坑 SK312B　49 土坑 SK307B　50 土坑 SK311B）
図版28	Ｂ地区	遺物	SD304B①（35～52）
図版29	Ｂ地区	遺物	SD304B②（53～55）　SD301B（56～58）　SD302B（59・60）　SD314B（61～65） SD307B（66～69）　SD313B（70）　SD311B（71～73）　SD308B（74）　SD315B（75～77） SD306B（78）　SD317B（79）　SD309B（80）
図版30	Ｂ地区	遺物	SH301B（81～93・M1）
図版31	Ｂ地区	遺物	SH302B①（94～118）
図版32	Ｂ地区	遺物	SH302B②（119～145）
図版33	Ｂ地区	遺物	SH302B③（146～163）　P301B（203）　P307B（204）　P312B（205）　包含層（206～211）
図版34	Ｂ地区	遺物	SH303B（164～202）
図版35	Ｃ地区	遺構	51 遺構配置（1/100）　52 土層断面（1/100・1/40）
図版36	Ｃ地区	遺構・遺物	53 溝 SD102C・SD101C 土層断面（1/40）　54 溝 SD102C・土坑 SK101C 土層断面（1/40） 55 溝 SD103C・土坑 SK102C 土層断面（1/20）　56 溝 SD104C 土層断面（1/20） 57 竪穴住居 SH103C 遺構（1/40）　58 柵 SA101C 遺構（1/40）　59 柱穴 P102C 遺構（1/20） P102C 遺物（212・213）　P103C 遺物（214）　P108C 遺物（215）　SD102C 遺物（216・217） SK102C 遺物（218）　SK103C 遺物（219）　包含層遺物（220・221）
図版37	Ｄ地区	遺構	60 遺構配置（1/100）　61 土層断面①（1/100・1/40）
図版38	Ｄ地区	遺構・遺物	61 土層断面②（1/100・1/40）　遺物（222～241）
図版39	Ｅ地区	遺構	62 遺構配置（1/100）
図版40	Ｅ地区	遺構	63 土層断面（1/100・1/40）　溝土層断面（1/40）（64 SD501E　65 SD502E　66 SD503E 67 SD504E）
図版41	Ｅ地区	遺構	68 掘立柱建物 SB501E（1/40）　69 土坑 SK502E（1/20）
図版42	Ｅ地区	遺物	SD502E（242～244）　SD504E（245～247）　SD503E（248～250）　SK502E（251・252） SD501E（253～263）　包含層（264・265）
図版43	Ｆ地区	遺構	70 遺構配置・土層断面（1/150・1/80）
図版44	Ｆ地区	遺構・遺物	土層断面（1/40）（71 溝 SD601F　72 溝 SD602F） SD601F（266～268）　SD602F（S34）　包含層（269～276）

図版45	G地区	遺構・遺物	73 遺構配置・土層断面（1/100・1/40） 包含層遺物（277～281）
図版46	H～K地区	遺構	74 加古川線地区調査位置（1/500）
図版47	H地区	遺構	75 第1面遺構配置・土層断面（1/200・1/80）
図版48	H地区	遺構	76 掘立柱建物 SB201H（1/80） 77 掘立柱建物 SB203H（1/80）
図版49	H地区	遺構	78 掘立柱建物 SB202H（1/80）
図版50	H地区	遺構	79 掘立柱建物 SB204H（1/80） 80 掘立柱建物 SB206H（1/80）
図版51	H地区	遺構	81 掘立柱建物 SB205H（1/80） 82 溝 SD047H・SD048H・SD050H（1/80）
図版52	H地区	遺構	83 土坑 SK001H（1/40） 84 土坑 SK002H（1/40） 85 土坑 SK010H（1/80） 86 土坑 SK110H（1/40）
図版53	H地区	遺構	87 第2面遺構配置（1/200） 溝土層断面（88 SD301H 89 SD302H 90 SD303H 91 SD304H）
図版54	H地区	遺物	SB201H（401） SB202H（402・403） SB203H（404～406） SB204H（407・408） SB206H（409） SB205H（410～414） P081H（415） SK001H(416・417） SK008H（418・419） SK010H（420） SK110H（421） SK002H（422～425）
図版55	H地区	遺物	SD047H（426～436） SD048H（437） SD050H（438） SR006H（439～446）
図版56	H地区	遺物	SR006H（447～459）
図版57	H地区	遺物	SR006H（460～468）
図版58	H地区	遺物	SR006H（469～480）
図版59	H地区	遺物	SR006H（481～499）
図版60	H地区	遺物	SR006H（500・501） SR080H（502～506） 包含層（507～514） 鉄器（M401～ M404）
図版61	H地区	遺物	石器（S401～ S405）
図版62	I地区	遺構・遺物	92 遺構配置・土層断面（1/200・1/40） SK002I（518～526） SD001I（527）
図版63	J地区	遺構	93 遺構配置・土層断面（1/400・1/40） 94 第1面遺構配置（1/200） 95 第2面遺構配置（1/200）
図版64	J地区	遺構	96 掘立柱建物 SB101J（1/80） 97 掘立柱建物 SB101J 柱穴 P104J 断面（1/20） 98 溝 SD201J 土層断面（1/20）
図版65	J地区	遺構	99 土坑 SK101J（1/40） 100 土坑 SK103J（1/40） 101 土坑 SK102J（1/40）
図版66	J地区	遺物	SB101J（528～534） SK103J（535～541） SK101J（542～557）
図版67	J地区	遺物	SK101J（558～571）
図版68	J地区	遺物	SK102J（572～577） SD101J（578） SD103J（579） 包含層（580・581） 鉄器（M405～ M408） 石器（S406）
図版69	K地区	遺構	102 遺構配置・土層断面（1/200・1/40）
図版70	K地区	遺構	103 掘立柱建物 SB001K（1/80）
図版71	K地区	遺構	104 掘立柱建物 SB004K（1/80） 105 掘立柱建物 SB002K（1/80）
図版72	K地区	遺構	106 掘立柱建物 SB003K（1/80） 107 柵 SA001K（1/80） 108 溝 SD001K ～ SD005K（1/80）
図版73	K地区	遺物	SB001K（582～584） SB002K（585） SB004K（586・587） P113K（588） SD003K（589～603）
図版74	K地区	遺物	SD003K（604～620） SD002K（621） SD001K（622） 包含層（623～625）
図版75	K地区	遺物	包含層（626～634）

写　真　図　版　目　次

写真図版１		遺跡	1 溝之口遺跡 遠景(西から　明石海峡を望む)　2 溝之口遺跡 遠景(北から　播磨灘を望む)
写真図版２		遺跡	3 溝之口遺跡 遠景（東から）　4 溝之口遺跡 遠景（南東から）
写真図版３		遺跡	5 A・B・C・E 地区全景（北東から）　6 B・F 地区全景（北東から）
写真図版４		遺跡	7 溝之口遺跡 遠景（北東から）　8 H 地区全景（北西から）
写真図版５		遺跡	9 J・K 地区全景（南西から）　10 K 地区全景（南東から）
写真図版６	B地区	遺物	竪穴住居 SH301B 出土土器　溝 SD304B 出土土器
写真図版７	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器　竪穴住居 SH303B 出土土器　竪穴住居 SH303B 出土イイダコ壺
写真図版８	J・K地区	遺物	土坑 SK101J 出土土器　溝 SD003K 出土土器
写真図版９		分析	土器胎土薄片（1）
写真図版10		分析	土器胎土薄片（2）
写真図版11		分析	土器胎土薄片（3）
写真図版12		分析	土器胎土薄片（4）
写真図版13		遺跡	11 溝之口遺跡調査地周辺（上が北東）
写真図版14	確認	遺物	a-1・a-2出土土器
写真図版15	A地区	遺構	12 第１面全景（西から）　13 溝 SD201A（南から）　14 溝 SD201A 断面（南から） 15 水田 全景（南から）
写真図版16	A地区	遺構	16 第２面全景（西から）　17 溝 SD203A（南から）　18 溝 SD204A･SD205A 断面（北から） 19 竪穴住居 SH201A（南から）　20 溝 SD204A・SD205A（北から）
写真図版17	A地区	遺構	21 掘立柱建物 SB201A・集石 SS201A（東から）　22 掘立柱建物 SB201A（南から） 23 集石 SS201A（南から）
写真図版18	A地区	遺物	溝出土土器・木器
写真図版19	A地区	遺物	土器
写真図版20	A地区	遺物	集石 SS201A 出土石器
写真図版21	A地区	遺物	集石 SS201A 出土石器・SD206A 出土石製品
写真図版22	B地区	遺構	24 全景（東から）
写真図版23	B地区	遺構	25 1～3区第1面（東から）　26 1～3区東部第2面（東から）
写真図版24	B地区	遺構	27 2～5区全景（西から）　28 溝 SD315B 断面（南から）　29 溝 SD320B 断面（南から） 30 溝 SD314B 断面（南から）　31 溝 SD304B 遺物出土状況（西から）
写真図版25	B地区	遺構	32 2～6区全景（東から）　33 全景（西から）
写真図版26	B地区	遺構	34 竪穴住居 SH301B 周辺（西から）　35 竪穴住居 SH301B（西から）
写真図版27	B地区	遺構	竪穴住居 SH301B　36 壺・甕出土状況　37 高坏・鉢出土状況　38 甕出土状況
写真図版28	B地区	遺構	竪穴住居 SH302B・SH303B　39 全景（南から）　40 全景（東から）
写真図版29	B地区	遺構	竪穴住居 SH302B　41 全景（南から）　42 全景（東から）　43 東端遺物出土状況（西から）
写真図版30	B地区	遺構	竪穴住居 SH302B　44 全景（南から）　45 西端遺物出土状況（東から） 46 西端炭化材出土状況（東から）
写真図版31	B地区	遺構	竪穴住居 SH303B　47 全景（西から）　48 全景（東から）
写真図版32	B地区	遺構	竪穴住居 SH303B　49 中央土坑（南から）　50 土坑 SK305B 検出状況（南から） 51 土坑 SK305B 掘削後（南から）
写真図版33	B地区	遺構	竪穴住居 SH303B　52 土坑 SK304B（南から）　53 土製品190周辺（北から）　54 土坑 SK304B 断面（西から） 55 土製品190出土状況（北から）　56 土坑 SK312B 断面（東から） 57 土器198出土状況（南から）　58 土器184出土状況（南から） 59 土坑 SK306B 遺物出土状況（東から）
写真図版34	B地区	遺構	60 土坑 SK302B(東から)　61 土坑 SK302B 断面(東から)　62 掘立柱建物 SB301B(南から) 63 柱穴 P301B　64 柱穴 P308B と出土礫
写真図版35	B地区	遺物	溝 SD304B 出土土器
写真図版36	B地区	遺物	溝 SD304B・包含層出土土器
写真図版37	B地区	遺物	溝 SD304B 出土土器
写真図版38	B地区	遺物	溝 SD314B・SD307B・SD313B・SD311B・SD308B・SD315B・SD306B・SD317B・SD309B 出土土器
写真図版39	B地区	遺物	柱穴 P301B・P307B・P312B、溝 SD301B・SD302B・SD311B・SD307B・出土土器
写真図版40	B地区	遺物	竪穴住居 SH301B 出土土器・鉄滓
写真図版41	B地区	遺物	竪穴住居 SH301B 出土土器
写真図版42	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器
写真図版43	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器
写真図版44	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器
写真図版45	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器
写真図版46	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器
写真図版47	B地区	遺物	竪穴住居 SH302B 出土土器
写真図版48	B地区	遺物	竪穴住居 SH303B 出土土器
写真図版49	B地区	遺物	竪穴住居 SH303B 出土土器

写真図版50	Ｂ地区	遺物	竪穴住居 SH303B 出土土器
写真図版51	Ｃ地区	遺構	65 南半部全景（北から） 66 東半部全景（北から）
写真図版52	Ｃ地区	遺構・遺物	67 竪穴住居 SH101C（東から） 68 溝 SD101C 土層断面（西から）
			69 溝 SD102C 土層断面（西から） 70 溝 SD102C・SD101C（西から） 土器
写真図版53	Ｄ地区	遺構・遺物	71 全景 （西から） 土器
写真図版54	Ｄ地区	遺物	土器
写真図版55	Ｅ地区	遺構	72 南半部全景（西から） 73 溝 SD502E（東から） 74 全景（北から）
写真図版56	Ｅ地区	遺構	75 溝 SD504E（東から） 76 溝 SD501E（東から）
写真図版57	Ｅ地区	遺物	土器
写真図版58	Ｆ地区	遺構	77 全景（南から） 78 全景（北から） 79 溝 SD601F（東から）
			80 溝 SD601F 土層断面(東から） 81 溝 SD602F(東から） 82 溝 SD602F 土層断面(東から）
写真図版59	Ｆ地区	遺物	土器・石器
写真図版60	Ｇ地区	遺構・遺物	83 全景（西から） 84 溝 SD001G 土層断面（南から） 土器
写真図版61	Ｈ地区	遺構	85 遠景（西から） 86 全景（上が西）
写真図版62	Ｈ地区	遺構	87 第１面全景（南から） 88 第１面全景（北から）
写真図版63	Ｈ地区	遺構	89 南部遺構群（北から） 90 北部遺構群（北から）
写真図版64	Ｈ地区	遺構	91 SB201HP020H（南西から） 92 SB202HP038H（西から） 93 SB202HP150H（北から）
			94 SB203HP140H（北から） 95 SB204HP039H（西から） 96 SB205HP100H（北西から）
			97 SB206HP119H（南西から） 98 P081H（東から）
写真図版65	Ｈ地区	遺構	99 土坑 SK001H（北から） 100 土坑 SK002H（西から） 101 土坑 SK010H（南から）
			102 土坑 SK110H（東から）
写真図版66	Ｈ地区	遺構	103 溝 SD047H（東から） 104 溝 SD048H（東から） 105 溝 SD050H（東から）
			106 流路 SR080H（北から） 107 流路 SR006H（南東から）
写真図版67	Ｈ地区	遺構	108 第２面全景（北から） 109 第２面全景（南から）
写真図版68	Ｈ地区	遺構	110 溝 SD302H・303H（南西から） 111 溝 SD304H（南西から）
			112 溝 SD301H 土層断面（西から） 113 溝 SD302H 土層断面（南西から）
			114 溝 SD303H 土層断面（南西から） 115 溝 SD304H 土層断面（南西から）
写真図版69	Ｈ地区	遺物	掘立柱建物・柱穴・土坑・溝出土土器
写真図版70	Ｈ地区	遺物	溝・流路 SR006H 出土土器
写真図版71	Ｈ地区	遺物	流路 SR006H 出土土器
写真図版72	Ｈ地区	遺物	流路 SR006H 出土土器
写真図版73	Ｈ地区	遺物	流路 SR006H 出土土器
写真図版74	Ｈ地区	遺物	流路 SR080H・包含層出土土器
写真図版75	Ｈ地区	遺物	石器・鉄器
写真図版76	Ｉ地区	遺構・遺物	117 全景（南から） 118 全景（北から） 119 土坑 SK002I（東から）
			120 溝 SD001I（北西から） 土坑 SK002I・溝 SD001I 出土土器
写真図版77	Ｊ地区	遺構	121 掘立柱建物 SB101J 全景（南西から） 122 全景（南西から）
			123 掘立柱建物 SB101J 柱穴 P111J 断面（南東から）
			124 掘立柱建物 SB101J 柱穴Ｐ115J 断面（南東から）
写真図版78	Ｊ地区	遺構	土坑 SK103J 125 全景（南西から） 126 検出状況（北西から） 127 全景（北西から）
			128 土坑上部断面（南西から） 129 下部断面（南西から） 130 土器出土状況（南から）
			131 下層土器出土状況（南西から）
写真図版79	Ｊ地区	遺構	土坑 SK101J 132 全景（南西から） 133 検出状況（南西から） 134 断面１（南西から）
			135 中層土器出土状況（南西から） 136 全景（南東から） 137 断面２（南西から）
			138 断面３（南西から）
写真図版80	Ｊ地区	遺構	土坑 SK102J 139 全景（南西から） 140 全景（北西から） 141 断面（南西から）
			142 検出状況（南西から）
写真図版81	Ｊ地区	遺構	143 全景（北東から） 144 西壁（南から） 145 溝 SD102J・SD103J 断面（南東から）
			146 溝 SD201J（南西から） 147 溝 SD201J 断面（南西から）
			148 溝 SD201J 脇からの土器出土状況（南東から）
写真図版82	Ｊ地区	遺物	掘立柱建物 SB101J・土坑 SK103J・SK101J 出土土器
写真図版83	Ｊ地区	遺物	土坑 SK101J 出土土器
写真図版84	Ｊ地区	遺物	土坑 SK101J・溝 SD101J・SD103J 出土土器 出土鉄器・石器
写真図版85	Ｋ地区	遺構	149 全景（北東から） 150 掘立柱建物群全景（北東から）
写真図版86	Ｋ地区	遺構	151 掘立柱建物群全景（南西から） 152 掘立柱建物 SB001K 柱穴Ｐ026K 断面（東から）
			153 掘立柱建物 SB001K 柱穴Ｐ031K 断面（東から）
			154 掘立柱建物 SB002K 柱穴 P005K 断面（北から）
			155 掘立柱建物 SB003K 柱穴Ｐ015K 断面（北から）
写真図版87	Ｋ地区	遺構	156 溝群全景（北東から） 157 東壁北半断面（南から） 158 溝 SD005K 断面（南から）
			159 溝 SD003K 断面（南から） 160 溝 SD002K 断面（南から）
写真図版88	Ｋ地区	遺物	掘立柱建物・柱穴・溝 SD003K 出土土器
写真図版89	Ｋ地区	遺物	溝 SD003K・SD002K・SD001K 出土土器
写真図版90	Ｋ地区	遺物	溝 SD001K・包含層出土土器
写真図版91		分析	木材・炭化材の木材組織

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境（図版１・２）

溝之口遺跡は兵庫県の中央部、加古川市の南東部の加古川市加古川町溝之口に所在している。

加古川市は兵庫県の中央部に位置しており、西は高砂市と姫路市に、北は加西市と小野市に、東は三木市と加古郡稲美町・明石市・加古郡播磨町に接し、南は瀬戸内海に面している。

溝之口遺跡周辺は北東側が日岡丘陵と段丘、南東側が野口の段丘に囲まれた、加古川左岸の沖積平野あるいは氾濫原上にある。一級河川である加古川は、兵庫県丹波市青垣町を源とし、同市氷上町を経て南下する。そして、日岡山とその西側の升田山に挟まれた狭窄部を過ぎると一気に加古川平野が開け、播磨灘に注ぐ。加古川の氾濫原には弧を描きつつ蛇行して流れた旧流路部分と自然堤防が存在している。

図版２を見るとア地点に旧流路の痕跡が存在しているが、これはＡ地区とＢ地区との間に位置し、調査した地点でも低い部分に相当し、現在でも水路が流れている。イ地点は旧流路の痕跡が存在しており、今回調査を実施したＢ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ地区はア地点とイ地点の間に位置する。ただし、ア地点とイ地点の間の市道より西側半分はＤ地区と確認調査も含めて低い部分にあたり、Ｂ・Ｃ地区とＤ地区の間に埋没段丘崖があるのではないかと考えられる。これと同様の埋没段丘崖は美乃利遺跡でも見つかっている。

ウ地点は旧流路の痕跡に囲まれた微高地である。この地点はＨ・Ｉ・Ｊ・Ｋ地区であり、自然地形が遺跡立地を反映している。エ地点周辺は従来から溝之口遺跡として調査が行われてきた地域である。

別府川より東側は六甲山塊の雌岡山を頂点とする隆起扇状地に当たり、坂元から日岡にかけては高位段丘の裾に当たる。

また、地理的にみて、神戸市と兵庫県第２の都市である姫路市とを結ぶ中継地点であり、両都市間を結ぶJR山陽本線・山陽電鉄・加古川バイパス・明姫幹線などが通っている。さらに、加古川沿いにJR福知山線谷川駅（丹波市山南町）とを結ぶJR加古川線の起点ともなっており、瀬戸内側と内陸部の丹波地方さらには日本海側とを結ぶ交通上の要衝ともなっている。

第２節　歴史的環境（第３・４図、第１表）

溝之口遺跡は加古川市南東部の加古川左岸に所在する。今回検出した遺構は弥生時代中期の溝、弥生時代後期の土坑、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代中期の竪穴住居・土坑、古墳時代後期の掘立柱建物・土坑・溝、中世の掘立柱建物・土坑・溝、近世の溝である。出土した遺物は弥生時代中期・後期、古墳時代前期・中期・後期、平安時代から中世の土器が出土している。したがって、溝之口遺跡を中心に加古川下流域に所在する関係ある時代の遺跡を中心として時代ごとに概観する。時代によって立地や密度が非常に偏った分布を示している。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、日岡山遺跡でサヌカイトのナイフ形石器や黒曜石の楔形細石刃石核などが採集されている。加古川市と播磨町にまたがる山之上・大中遺跡群では発掘調査により包含層が確認されている。ナイフ形石器や角錐状石器、翼状剥片などがあり、多量に採集されている。

このほか各地で採集された石器も存在しているが、点的であり今後の資料の増加を待ちたい。

２．縄文時代

縄文時代の遺跡では、遺構が検出された遺跡はなく、遺物の出土もわずかであり、東中遺跡で後期中葉の土器が出土し、宮山遺跡では後期の土器が採集されているに過ぎない。隣接する高砂市日笠山貝塚からは前期から後期の土器が出土し、播磨地域では数少ない貝塚の一つである。晩期後半は弥生時代前期につながるため、弥生時代で述べたい。

３．弥生時代

弥生時代前期のいわゆる遠賀川系の土器は出土していない。しかし、岸遺跡や坂元遺跡で突帯文系の土器が出土しており、今後、前期の遺跡が見つかる可能性がある。

弥生時代中期になると遺跡数は増大し、溝之口遺跡と美乃利遺跡の集落が新たに形成される。加古川右岸では岸遺跡・砂部遺跡・東神吉遺跡・東中遺跡で新たに集落が形成される。溝之口遺跡では中期初頭の土坑があり、中期中葉以降になると竪穴住居や方形周溝墓・水田などが継続的に営まれる。美乃利遺跡では中期初頭の竪穴住居や土坑･水田が見つかっている。中期後半や後期後半にも竪穴住居が存在する。

中期後半には坂元遺跡・西条廃寺下層遺跡・中西台地遺跡・平山遺跡など丘陵上に遺跡が現れる。大野遺跡では弥生時代中期後半の水田跡が検出されている。

弥生時代後期になると溝之口遺跡・美乃利遺跡・坂元遺跡・今福遺跡・長砂遺跡・粟津遺跡・北在家遺跡・手末遺跡・山之上･大中遺跡群など、遺跡数がさらに増える。溝之口遺跡・美乃利遺跡・坂元遺跡は継続しており、竪穴住居が調査されている。手末遺跡では竪穴住居が調査され、讃岐地域の土器が搬入されている。

弥生時代終末には西条52号墓や神吉山５号墳のように墳丘をもち、列石が巡るいわゆる弥生墳丘墓が築かれるようになる。八つ塚古墳群も貼り石を持ち、弥生墳丘墓の可能性がある。

銅鐸は望塚遺跡で大正時代初期に扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸が出土している。

４．古墳時代

前期の古墳には日岡山古墳群があり、日岡陵古墳・勅使塚古墳・西大塚古墳・南大塚古墳・北大塚古墳の前方後円墳５基を含む８基が群をなしている。加古川右岸には長慶寺山古墳群や天坊山古墳が存在する。

中期の古墳には日岡から東へ約２km の西条古墳群があり、全長100m の前方後円墳の行者塚古墳と帆立貝式の前方後円墳である尼塚古墳・人塚古墳の３基からなる。加古川右岸では池尻２号墳や帆立貝式のカンス塚古墳が調査されている。

後期の古墳には日岡山古墳群や西条古墳群・天王山古墳群などがあり、台地の上に群集墳が営まれる。また坂元遺跡では削平された古墳が見つかっており、具平塚古墳なども存在することから別府川左岸の段丘上には削平された古墳が存在していた可能性が高い。加古川右岸では池尻16号墳や升田山15号墳など巨大石室をもつ単独の首長墳のほかに池尻古墳群や升田山古墳群などの群集墳が存在している。

古墳時代の集落遺跡には溝之口遺跡や砂部遺跡があり、いずれも弥生時代から続く拠点的な遺跡である。北在家遺跡でも古墳時代の竪穴住居が調査されている。これらの遺跡では数棟の竪穴住居や掘立柱建物が調査されたのみで、古墳の数に比べて建物の数が少ない。砂部遺跡からは石製模造品・ガラス小玉・銅鏃などが出土している。

古墳時代後期から須恵器生産が開始され、神野大林古窯跡群では３基の窯跡が調査されている。坂元遺跡では６世紀前半の埴輪窯が調査されている。

５．古代

古代における溝之口遺跡周辺は播磨国加古郡であると考えられる。『播磨国風土記』の「駅家里」、『和名抄』の「賀古郷」にあたると考えられ、郷内に『延喜式』記載の播磨国９駅のうち「賀古駅家」が存在していた。溝之口遺跡のすぐ南側を山陽道が斜行（N44° E）して通り、古大内遺跡に推定されている加古駅家と『続日本後紀』承和六年二月二六日条に見える印南郡佐突駅の間に位置する。前畑遺跡では山陽道の痕跡が調査されている。加古川沖積地の広い範囲には山陽道を基準とした条里地割が顕著に残っている。段丘上の野口廃寺北西地域は正方位の方格地割が認められる。古代の賀古郡衙の位置について、諸説あるが明確になっていない。

溝之口遺跡周辺の古代寺院には西条廃寺・石守廃寺・野口廃寺がある。西条廃寺はいわゆる法隆寺式の伽藍配置をとり、塔・金堂とも瓦積基壇である。心礎は竜山石製で直方体に近い切り石に円形孔を刳り込んでいる。石守廃寺も法隆寺式の伽藍配置を基準とし、方一町の寺域を占めていたと考えられる。塔は石積基壇で心礎は竜山石製である。金堂は瓦積基壇である。８世紀前葉に創建され、９世紀まで存続したものとされている。野口廃寺は賀古駅家の北東に位置している。塔・講堂・小堂宇などが調査され、いずれも瓦積基壇である。創建は７世紀の後葉まで遡る可能性があるという。西条・石守廃寺および野口廃寺はいずれも９世紀にはいったん廃絶したらしく、『日本三代実録』貞観十年（868年）七月条の「播磨国言しけらく、『今月八日、地大に震動りて、諸郡の官舎、諸定額寺の堂塔、尽く頽れ倒れき』と」という記事に記された大地震との関連が考えられている。

鶴林寺は、縁起によれば聖徳太子の建立といい、白鳳期の銅造聖観音立像を伝えるが、実際は平安時代後期ごろに四天王寺として建立され、鳥羽天皇の勅願所となった後、鶴林寺と改められている。

『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社には日岡坐天伊佐々比古神社があり、日岡山に鎮座している日岡神社であると考えられている。

集落遺跡は溝之口遺跡・坂元遺跡・美乃利遺跡・大野遺跡・東沢中遺跡などがある。溝之口遺跡は掘立柱建物が40棟調査され、他に井戸や溝・柵・水田がある。中でも溝と柵に囲まれたコの字状に配置した建物は官衙の要素を備える。遺物は墨書土器・硯・石銙・銅銙・斎串などが出土している。坂元遺跡は掘立柱建物が多数調査され、井戸や溝などもある。美乃利遺跡は掘立柱建物・木棺墓・溝などが調査され、「郡」の記された墨書土器が出土している。大野遺跡は飛鳥時代の掘立柱建物跡や奈良時代の潅漑用の水路が検出されている。東沢中遺跡は掘立柱建物が調査されている。

須恵器生産は加古川市北部の上荘町白沢古窯跡群や志方町中谷古窯跡群・札馬古窯跡群・中津倉古窯跡群・西ノ池古窯跡群・八幡町天王山１号窯跡などで継続的に操業されている。生産された須恵器は平城京や平安京でも出土しており、『延喜式』に記載のある須恵器の調納国としての播磨の一端を知ることが出来る。

６．中世

鎌倉時代には五個荘の荘園に含まれていたと考えられている。中世の遺跡は粟津大年遺跡・美乃利遺跡・大野遺跡・坂元遺跡などで調査が行われている。

粟津大年遺跡は平安時代末～室町時代前期の掘立柱建物・木棺墓・地割溝・畑が調査されている。美乃利遺跡は平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物と屋敷墓が調査されている。大野遺跡は平安時代後期～鎌倉時代の墓・掘立柱建物・土坑・溝と鎌倉時代～室町時代の方形区画を伴う集落跡が調査されている。坂元遺跡は掘立柱建物と水田が調査されている。

西神吉町中西台地遺跡では方形居館の堀が調査されている。

大国山遺跡では14～15世紀の方形の基壇状区画をもった中世墓が調査されている。

７．近世以降

江戸時代は姫路藩領として明治に至る。加古川宿は西国街道の東播地区有数の宿場町として栄えてきた町である。また、加古川を遡り丹波市氷上町本郷までの高瀬船が往来する加古川の舟運の起点であった。西国街道の痕跡は現在も残っており、坂元遺跡では現在より広い道幅の側溝が調査されている。

明治以降には加古川に橋が架かり、渡し船が無くなり、明治21年に山陽鉄道（現 JR 山陽本線）が開通したことにより、宿場町としての機能が失われていった。また、高瀬船についても、大正２年に播州鉄道（現 JR 加古川線）が開通するとともに衰退していった。

加古郡溝口村は明治22年の町村制施行により加古郡氷丘村溝之口となり、昭和12年加古川町と合併し加古郡加古川町溝之口となる。昭和25年に加古郡加古川町は周辺４村と合併し、加古川市として市制の施行を開始した。その後、昭和26年には別府町を、昭和30年には八幡村を、昭和54年には志方町を合併し、現在の加古川市となっている。そして、現在では東播磨地域の中核となっている。

参考文献

- 兵庫県加古川市『加古川市史　第一巻』1989
- 兵庫県加古川市『加古川市史　第四巻』1996
- 兵庫県教育委員会『播磨・東溝弥生遺跡Ⅰ』1968
- 兵庫県教育委員会『播磨・東溝弥生遺跡Ⅱ』1969
- 兵庫県教育委員会『美乃利遺跡』1997
- 兵庫県教育委員会『美乃利遺跡Ⅱ』2006
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成11年度年報』『平成12年度年報』『平成13年度年報』『平成14年度年報』『平成15年度年報』『平成16年度年報』2000　2001　2002　2003　2005　2006
- 加古川市教育委員会『砂部遺跡』1978
- 加古川市教育委員会『溝之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1992
- 加古川市教育委員会『行者塚古墳』1992
- 加古川市教育委員会『手末遺跡発掘調査報告書』2003
- 加古川市教育委員会『加古川市埋蔵文化財調査集報』2003
- 加古川市教育委員会『野口廃寺発掘調査概要報告書』2004

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

１．JR 山陽本線等連続立体交差事業の概要

今回の溝之口遺跡の発掘調査は、加古川駅周辺の東播都市計画都市高速鉄道 JR 山陽本線等連続立体交差事業によるものである。兵庫県内における JR 山陽本線等連続立体交差事業は、明石駅周辺、加古川駅周辺、姫路駅周辺で計画され、すでに明石駅周辺は完成しており、姫路駅周辺でも現在事業が進められている。

加古川駅周辺の東播都市計画都市高速鉄道 JR 山陽本線等連続立体交差事業は、東播磨の玄関口として発展してきた JR 加古川駅周辺の JR 山陽本線及び JR 加古川線を高架化するものであり、南北交通を阻害する踏み切りの撤去、新設道路との立体交差により都市交通を円滑化し、加古川駅周辺の都市機能を強化することを目的として、兵庫県が事業主体となり進めることとなった。

JR 山陽本線は加古川市野口町野口字西ノ澤の県道野口尾上線付近を起点として加古川市加古川町本町字天戸の都市計画道路加古川左岸線付近を終点とする延長2,377m で、６箇所の踏切を除去する。JR 加古川線は加古川市加古川町篠原字三ツ升の加古川駅を起点として加古川市加古川町溝之口字茶屋の国道２号加古川バイパス付近を終点とする延長953m で、６箇所の踏切を除去する。気道車区は加古川線厄神駅付近へ移設する。

事業は平成２年12月に都市計画の決定がなされ、平成５年３月に建設省により連続立体交差の事業認可が行われた。事業期間は当初、平成４年度から平成15年度の12年間を予定した。途中事業の遅れに伴い、平成17年度の完成予定に改められた。

JR 加古川駅周辺の山陽本線高架化が完成し、平成15年６月26日に供用が開始した。JR 加古川線は平成16年12月19日に供用が開始し、周辺の環境整備を残して事業は終了した。

２．埋蔵文化財の対応

JR 山陽本線等連続立体交差事業の計画に伴い、兵庫県教育委員会と加古川土木事務所とが埋蔵文化財調査の取り扱いに関する協議を行った。事業予定用地内には周知の埋蔵文化財包蔵地は存在していないが、隣接地に弥生時代から古代を中心とした溝之口遺跡が存在しているため、確認調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認することとした。確認調査により埋蔵文化財の存在が確認された地点については、改めて協議を行い、工法上保存不可能なため、記録保存を前提とした本発掘調査を行った。調査予定地は、兵庫県が事業主体の JR 線高架事業部分と加古川市が事業主体の市道部分が一体化して存在しているため、兵庫県教育委員会が一括して調査を行った。

なお、JR 山陽本線等連続立体交差事業で溝之口遺跡より西側の加古川駅構内周辺や主要地方道加古川別府港線周辺でも確認調査を行っている。しかし、埋蔵文化財が確認されなかったことや、今回報告する溝之口遺跡と直接関係ないことから、記述を省略する。また、JR 山陽本線等連続立体交差事業の山陽本線地区の別府川より東側の加古川市野口町坂元では遺跡は未周知であった。平成11年度に確認調査を実施した結果、遺跡の存在が明らかになり（坂元遺跡）、平成11年度に本発掘調査を実施した。

なお、兵庫県教育委員会が調査を実施した隣接地は、加古川市の都市計画街路設置のため、高架事業終了後の旧レール撤去後、平成17年度に加古川市教育委員会が発掘調査を実施した。

第２節　溝之口遺跡の発見と既往の調査

溝之口遺跡の発見は、昭和42年６月に建設省（当時）の国道２号加古川バイパスの工事中に地元の中学生が多量の遺物を採集し、東神吉道跡を調査していた県教育委員会が弥生遺跡の存在を確認した。しかしすでにバイパス工事は側道の一部分を除いて殆んど完成に近く、側道とバイパス下り線の一部が残っているのみであった。このため、昭和43年７月までに調査を終了することを条件として、工事を中止したのであった。

昭和43年５月19日から７月19日にかけて、バイパス北側道33m×12mの第１次全面調査および、線路南側600mにわたって坪掘りによる範囲の確認調査を実施した。全面調査では弥生時代中期中頃の土坑２基・木棺墓２基、弥生時代後期の住居跡２棟、その他溝６条を検出した。あわせて分布調査も行われ、土器の散布する範囲は東西約550m、南北約1,800mであることが判明し、東溝之口地区の地名をとり東溝遺跡と呼称した。

線路南側の確認調査では遺跡の存在が明らかになったため、改めて全面調査を実施することとなった。第２次調査は昭和44年１月10日から３月１日、第３次調査は昭和44年７月15日から10月９日にかけて実施した。調査の結果、弥生時代中期前半の土坑１基、弥生時代中期中葉の竪穴住居１棟・土坑１基、弥生時代中期末の竪穴住居２棟、弥生時代後期の竪穴住居４棟、古墳時代中期の竪穴住居１棟、平安時代の掘立柱建物２棟、その他溝４条を検出した。加古川バイパスに伴う調査で、弥生時代中期前半から平安時代にかけての遺跡であることが判明した。

その後、住宅需要の増加に伴い、加古川バイパスの調査地点の周囲で発掘調査は行われた。その範囲は加古川町溝之口と加古川町美乃利にわたり、従来の東溝遺跡は溝之口遺跡と改称された。溝之口遺跡の存在する場所はJR加古川駅や加古川バイパス加古川ランプにも近いため、今まで水田であった場所に、分譲住宅の建設が計画された。このため、昭和57年度には加古川バイパスの南側で、昭和58年度・昭和61年度・昭和62年度・昭和63年度には加古川バイパスの北側で加古川市教育委員会が調査を実施した。加古川バイパスの北側では弥生時代中期の竪穴住居５棟・方形周溝墓14基・円形周溝墓１基、土坑６基・溝、古墳時代後期の竪穴住居13棟・掘立柱建物２棟・溝、奈良時代の掘立柱建物38棟・柵２基・井戸２基・溝などを検出した。これにより、弥生時代と奈良時代を中心とした弥生時代中期前半から平安時代にかけての遺跡であることが判明した。また、加古川バイパスとの間には谷が存在し、弥生時代から古墳時代にかけての水田があることが判明した。

第３節　調査経過および体制（図版６・７）

１．山陽本線地区の発掘調査の経過

事業予定地は、溝之口遺跡の南側に隣接し、遺跡が広がる可能性が指摘されていた。このため、JR山陽本線等連続立体交差事業に伴い、加古川土木事務所の依頼によって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が予定地内の埋蔵文化財の有無について、確認調査を実施し判断することとなった。

溝之口遺跡に隣接する確認調査の範囲は別府川（37k970m付近）から加古川駅の間の延長約１kmである。高架線は現線路の南側に並行して走るため、南側の用地において実施した。

確認調査

確認調査は用地の取得などの関係で、平成９年度から平成11年度にかけて、ａ地区からｈ地区に分けて、順次実施した。安全のため、すべての調査区でJRの軌道敷よりも５ｍ以上の間隔をおいて設定し、

機械により盛土・耕作土の掘削を行い、それ以下の掘削・遺構検出作業は人力で行った。その後、人力により遺構の一部掘削あるいは完掘、壁面の清掃を行い、遺構の有無を判断した。

平成９年度

〔ａ～ｃ地区〕（調査番号970232）

平成９年度第１次の確認調査は、平成９年７月22日から７月30日にかけて実施した。調査地区は東からａ地区・ｂ地区・ｃ地区の３箇所であり、面積は194㎡である。

ａ地区は37k970m付近から38k210m付近の延長約240mであり、調査区を５箇所設定した。東からａ-１調査区・ａ-２調査区・ａ-３調査区・ａ-４調査区・ａ-５調査区と呼称した。

ｂ地区は38k420m付近から38k570m付近の延長約150mであり、直交する市道平野神野線との交差部分の市道延長81mを含めて、調査区を９箇所設定した。JR線沿いに東からｂ-１調査区・ｂ-２調査区・ｂ-３調査区・ｂ-４調査区・ｂ-５調査区とし、市道東側をｂ-６調査区とし、市道西側をｂ-７調査区とし、JR線北側で市道東側をｂ-８調査区とし、JR線北側で市道西側をｂ-９調査区と呼称した。

ｃ地区は38k650m付近から38k750m付近の延長約90mであり、調査区を３箇所設定した。東からｃ-１調査区・ｃ-２調査区・ｃ-３調査区と呼称した。

〔ｄ・ｅ地区〕（調査番号970428）

平成９年度第２次の確認調査は、平成10年２月12日と２月13日に実施した。調査地区は東からｄ地区・ｅ地区の２箇所であり、面積は70㎡である。

ｄ地区はａ地区とｃ地区の間に位置し、38k210m付近から38k370m付近の延長約160mであり、調査区を５箇所設定した。東からｄ-１調査区・ｄ-２調査区・ｄ-３調査区・ｄ-４調査区・ｄ-５調査区と呼称した。

ｅ地区はｂ地区の西側38k570m付近から38k650m付近の延長約70mであり、調査区を２箇所設定した。東からｅ-１調査区・ｅ-２調査区と呼称した。

平成10年度

〔ｆ・ｇ地区〕（調査番号980330）

平成10年度の確認調査は、平成11年３月16日から３月24日にかけて実施した。調査地区は東からｆ地区・ｇ地区の２箇所であり、面積は108㎡である。

ｆ地区はｈ地区とｃ地区の間に位置し、38k665m付近から38k690m付近の延長約25mであり、調査区を２箇所設定した。東からｆ-１調査区・ｆ-２調査区と呼称した。

ｇ地区はｃ地区の西側に位置し、38k750m付近から38k800m付近の延長約50mであり、調査区を３箇所設定した。東からｇ-１調査区・ｇ-２調査区・ｇ-３調査区と呼称した。

平成11年度

〔ｈ地区〕（調査番号990180）

平成11年度の確認調査は、平成11年７月５日に実施した。調査地区はｈ地区の１箇所であり、面積は４㎡である。38k650m付近から38k665m付近の延長約15mであり、調査区を１箇所設定した。

本発掘調査

平成９年度から平成11年度にかけての確認調査に基づき、平成10年度と平成11年度に本発掘調査を実施した。

平成10年度

〔Ａ～Ｆ地区〕（調査番号980213）

Ａ～Ｆ地区は平成９年度第１次調査で確認調査を実施したｂ地区に当たり、38k420m付近から38k520m付近である。調査地はJR山陽本線・市道神野平野線および水路により６箇所の調査区に分割されている。Ａ地区がｂ－１調査区、Ｂ地区がｂ－２・ｂ－３調査区、Ｃ地区がｂ－４調査区、Ｄ地区がｂ－６調査区、Ｅ地区がｂ－８調査区、Ｆ地区がｂ－９調査区に当たる。調査はJRの近接工事に当たるため、覚書を取り交わして安全に充分注意して調査を進めた。

調査は確認調査の成果に基づき、平成10年12月28日から平成11年３月25日にかけて実施した。調査はＣ地区・Ａ地区・Ｂ地区・Ｄ地区・Ｅ地区・Ｆ地区の順に進めていった。盛土や耕作土などの無遺物層を機械で掘削し、それ以下を人力で遺構検出・遺構掘削をしていった。調査中あるいは調査後写真や図面などによる記録を撮り調査を進めた。最後に断割りなど補足調査を行った。

この間、空中写真撮影を２月13日・２月23日・３月12日の３回実施し写真記録を撮った。掘削土は仮置きし、調査終了後に埋め戻した。

調査面積は、県施行の高架部分1,086㎡と市施行の側道部分434㎡の全面調査、合計1,520㎡である。

平成11年度

〔Ｇ地区〕（調査番号990287）

Ｇ地区は平成９年度第１次調査で確認調査を実施したｃ地区のｃ－１調査区にあたる38k733m付近である。

調査は確認調査の成果に基づき、平成12年１月17日から平成12年３月17日にかけて、坂元遺跡の本発掘調査と並行して実施した。調査面積161㎡である。

２．加古川線地区の発掘調査の経過

事業予定地は、溝之口遺跡の西側に隣接し、遺跡が広がる可能性が指摘されていた。このため、JR山陽本線等連続立体交差事業に伴い、加古川土木事務所の依頼によって、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が予定地内の埋蔵文化財の有無について、確認調査を実施し判断することとなった。

確認調査

確認調査は用地取得などの関係で、平成９年度と平成10年度に実施した。

平成９年度

〔ｉ地区〕（調査番号970322）

平成９年度の確認調査は、平成９年10月８日から10月14日にかけて実施した。調査地区はｉ地区の１箇所であり、面積は109㎡である。

ｉ地区は0k380m付近から0k800m付近の延長約420mであり、調査区を12箇所設定した。西からｉ－１調査区・ｉ－２調査区・ｉ－３調査区・ｉ－４調査区・ｉ－５調査区・ｉ－６調査区・ｉ－７調査区・ｉ－８調査区・ｉ－９調査区・ｉ－１０調査区・ｉ-11調査区・ｉ－１２調査区と呼称した。

平成10年度

〔ｊ地区〕（調査番号980330）

平成10年度の確認調査は、平成11年３月16日から３月24日にかけて実施した。調査地区はｊ地区の１箇所であり、面積は９㎡である。

ｊ地区はｉ地区の加古川駅より0k320m付近から0k380m付近の延長約60mであり、調査区を３箇所設定した。西からｊ－１調査区・ｊ－２調査区・ｊ－３調査区と呼称した。

本発掘調査

確認調査の成果に基づき、平成13年度と平成15年度の２箇年にわたって本発掘調査を実施した。

平成13年度

〔J・K 地区〕（調査番号2001074）

J・K 地区は平成９年度に確認調査を実施したｉ地区である。

J 地区は0k660m 付近から0k730m 付近で、確認調査のｉ-９・ｉ-１０・ｉ-１１調査区に当たる。

K 地区は0k530m 付近から0k580m 付近で、確認調査のｉ-５調査区に当たる。

調査は確認調査の成果に基づき、平成13年10月９日から平成13年12月６日にかけて実施し、その後、市施工の側道部分の調査を12月19日～12月25日にかけて実施した。

調査はJ 地区・K 地区の順に進めていった。耕作土などの無遺物層を機械で掘削し、それ以下を人力で遺構検出・遺構掘削をしていった。調査中あるいは調査後写真や図面などによる記録を撮り調査を進めた。最後に断割りなど補足調査を行った。この間、空中写真撮影を11月20日に実施し、写真測量を行った。

市施工部分では、写真測量は行わず遺構全体図は手書きの実測を行った。溝などはさらに東側に広がることがわかっていたが、土壌改良剤が使用されて地盤が固化してしまっていたため、これ以上範囲を広げて調査を行うことはできなかった。

調査面積は県施工の高架部分1,043㎡と市施工の側道部分110㎡をあわせて1,153㎡となる。

J・K 地区では、調査の成果を地域に公開するために、12月２日に地元説明会を実施し、加古川市立氷丘南小学校などが実施した「ウォークラリー」のコースにも組み込まれた。さらに、11月には「トライやるウィーク」で、神戸市内や高砂市内の中学生が発掘などを体験する場を提供した。

平成15年度

〔H 地区〕（調査番号2003073）

H 地区は平成９年度に確認調査を実施したｉ地区である。

H 地区は0k750m 付近から0k800m 付近で、確認調査のｉ-12調査区に当たる。

調査は確認調査の成果に基づき、平成15年５月27日から平成15年７月４日にかけて実施した。

〔I 地区〕（調査番号2003226）

I 地区は平成９年度に確認調査を実施したｉ地区で、0k730m 付近から0k750m 付近である。

調査は確認調査の成果に基づき、平成15年12月８日から平成15年12月10日にかけて実施した。

３．出土品整理の経過

出土品の整理は、発掘調査時の取り扱いの回答における協議に基づき実施した。兵庫県東播磨県民局長からの依頼により、平成17年度と平成18年度に実施することとなり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成17年度

平成17年度は、出土遺物の水洗・注記を行った後、接合・補強を行い、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、実測・拓本を行った。遺物実測図は遺構図と共にトレースを実施した。土器の復原を行い、石器・木器・金属器とあわせて遺物の写真撮影を行った。木器・金属器は台帳作成を行い、保存処理を行った。併せて、弥生土器の胎土分析および竪穴住居の炭化材樹種と木器の樹種の同定を入札によりパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

平成18年度

平成18年度は、昨年度に製図したトレース図のレイアウトを行い、原稿執筆・編集を行った後、平成18年12月に報告書を刊行した。

４．調査の体制

発掘調査

平成９年度

山陽本線　確認調査〔ａ～ｃ地区〕（調査番号970232）　調査担当：　篠宮　正・野村展右

加古川線　確認調査〔ｉ地区〕（調査番号970322）　調査担当：　種定淳介

山陽本線　確認調査〔ｄ・ｅ地区〕（調査番号970428）　調査担当：　鈴木敬二

平成10年度

山陽本線　本発掘調査〔Ａ～Ｆ地区〕（調査番号980213）　調査担当：　篠宮　正・矢野治巳
調査補助員：　田中　騰・小谷義男・大村　喬・田中かおり

山陽本線　確認調査〔ｆ・ｇ地区〕（調査番号980330）　調査担当：　岡田章一・松岡千寿

加古川線　確認調査〔ｊ地区〕（調査番号980330）　調査担当：　岡田章一・松岡千寿

平成11年度

山陽本線　確認調査〔ｈ地区〕（調査番号990180）　調査担当：　多賀茂治

山陽本線　本発掘調査〔Ｇ地区〕（調査番号990287）　調査担当：　西口和彦・中川　渉

平成13年度

加古川線　本発掘調査〔Ｋ地区〕（調査番号2001074）　調査担当：　藤田　淳・小川弦太
調査補助員：　小谷義男・森崎由起子

加古川線　本発掘調査〔Ｋ地区〕（調査番号2001215）　調査担当：　藤田　淳

平成15年度

加古川線　本発掘調査〔Ｈ地区〕（調査番号2003073）　調査担当：　篠宮　正・池田征弘
調査補助員：　折井千枝子・森崎由起子

加古川線　本発掘調査〔Ｉ地区〕（調査番号2003226）　調査担当：　甲斐昭光

出土品整理

平成17年度

整理担当：　藤田　淳・篠宮　正・池田征弘

保存処理担当：　藤田　淳・岡本一秀

嘱託員：　柏原美音・森本貴子・岡崎輝子・岸野奈津子・佐伯純子・川村由紀・柏木明子・長川加奈子・三島重美・眞子ふさ恵・島村順子・中田明美・小野潤子・奥野政子・又江立子・三好綾子・奥野政子・荒木由美子・藤池かづさ

平成18年度

整理担当：　藤田　淳・篠宮　正・池田征弘

嘱託員：　柏原美音・佐伯純子・柏木明子

第３章　山陽本線地区の調査成果

第１節　概要

１．確認調査の成果（図版６・７　第１図　写真図版14）

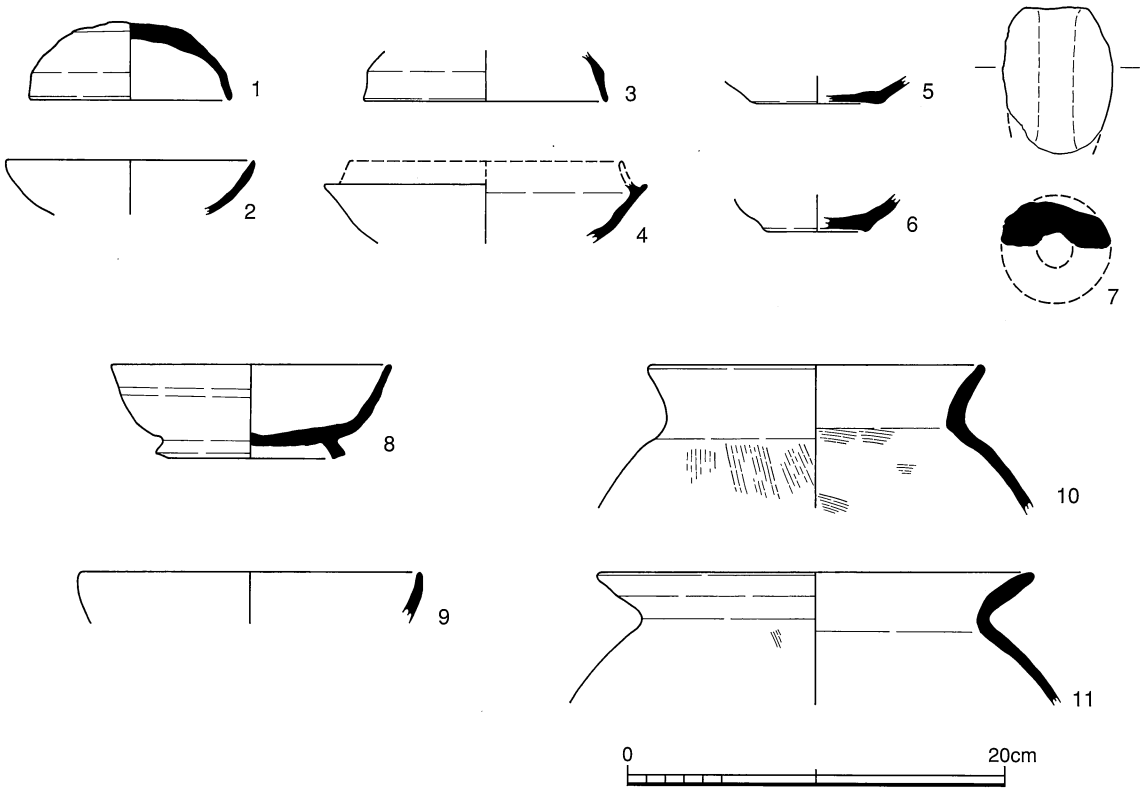
ａ－１調査区では古墳時代後期の溝を検出し、須恵器・土師器が出土した。１・２は溝から出土した。飛鳥時代須恵器坏Ｈ蓋１は小振りで天井部はヘラ切り未調整である。土師器坏２は口縁部の小片である。

ａ－２調査区では溝を検出し、中世の土師器・須恵器、奈良時代の須恵器が出土した。３～７は包含層から出土した。飛鳥時代の須恵器坏Ｈ蓋３は口縁部と天井部の境が屈曲する。古墳時代後期の須恵器坏Ｈ４は大振りで立ち上がりを欠く。平安時代の須恵器椀の底部５はヘラ切りである。６は土師器坏の底部で糸切りである。７は管状土錘である。

ａ－３調査区では遺構･遺物ともに検出できなかった。ａ－４調査区とａ－５調査区は遺構が検出できず、遺物は中世の須恵器が出土したのみである。

ｂ－１調査区では溝を検出し、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土した。ｂ－２調査区では溝を検出した。ｂ－３調査区では竪穴住居と柱穴を検出し、古墳時代初頭の土師器が出土した。ｂ－４調査区では溝と柱穴を検出した。ｂ－５調査区では遺構は検出できず、古墳時代後期から平安時代の須恵器が出土した。ｂ－６調査区では遺構は検出できず、中世の土師器が出土した。

ｂ－７調査区では東から西に向って落ち込む遺構を確認し、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器が出土した。８～11は落ち込む遺構から出土した。須恵器坏Ｂ８は完形でしっかりした高台が付く。土師器椀９は口縁部の破片である。土師器甕10・11は口縁部がくの字に外反する。



第1図　確認調査出土土器

ｂ－８調査区では溝を検出し、弥生時代中期の土器と古墳時代前期の土器が出土した。ｂ－９調査区では柱穴を検出した。

ｃ－１調査区では溝を検出し、中世の土師器・須恵器が出土した。ｃ－２調査区とｃ－３調査区は遺構が検出できず、中世の遺物が出土した。

ｄ地区は５箇所とも、遺構・遺物は検出できなかった。

ｅ地区は２箇所とも、遺構・遺物は検出できなかった。

ｆ地区は２箇所とも、遺構・遺物は検出できなかった。

ｇ地区は４箇所とも、遺構・遺物は検出できなかった。

ｈ地区では、遺構・遺物は検出できなかった。

以上、ｂ地区の一部とｃ地区の一部で遺構や遺物を検出したため、本発掘調査が必要であると判断した。

２．本発掘調査の概要（図版６～８　写真図版３）

山陽本線地区は確認調査において調査が必要と認められた範囲を本発掘調査した。大きく分けて確認調査のｂ地区の一部とｃ地区の一部の２地区である。ｂ地区は市道平野神野線のJR山陽線踏切前後の旧高砂線の鶴林新道から白根川の間である。調査地はJR山陽線・市道平野神野線および水路により６箇所の調査区に分割されている。調査区は踏切の南東部を東からＡ地区・Ｂ地区・Ｃ地区、南西部をＤ地区、北東部をＥ地区、北西部をＦ地区と呼称した。ｃ地区はＧ地区と呼称した。なお記述に当たっては座標の方位とは別に、調査区方向の方位を使うことがある。

第２節　Ａ地区

１．概要（図版８　写真図版３）

Ａ地区は本発掘調査の東端に位置する。JR線の南に位置し、鶴林新道（旧日本国有鉄道高砂線）の西側で水路の東に挟まれた地点である。西側にＢ地区が位置し、調査面積は212㎡である。約１ｍの盛土と約0.3mの旧耕作土を機械で除去した後、人力で掘削した。遺構検出面は標高5.5m前後である。東側は旧耕作土直下が遺構検出面で西側に向かって低くなっている。古代･古墳時代後期と古墳時代後期･古墳時代前期の２面の遺構面を調査した。

２．遺構（図版９～13　写真図版15～17）

(1)　第１面

第１面では流路と大畦畔と水田を検出した。

SD203A（写真図版16）

調査区の西端に位置する水路（流路）である。ほぼ調査区に直交し、北から南に流れている。幅は６ｍ以上で、Ｂ地区には達していないため11m以下である。Ａ地区とＢ地区の間を流れる水路が最終的な姿の可能性が高い。深さは1.0m程度で水が流れた堆積状況をしている。

遺物は古墳時代後期、平安時代中期の土器と木器が出土している。

水田（SD202A）（写真図版15）

調査区のほぼ中央に位置する。西側は大畦畔を挟んで水路SD203Aがあり、東側は削平された面が存在し、遺構は存在していない。幅3.8m～3.2mで小畦畔は存在していない。下面は水田土壌が存在しており、上面は洪水砂が堆積しており、一部水田土壌が流されている部分がある。

遺物は洪水砂から古墳時代の須恵器坏、高坏が出土している。

大畦畔

水路 SD203A と水田との間に並行して位置する。幅2.4m ～1.0m、水田面からの高さは0.1m である。遺物は出土していない。

⑵　第２面

第２面では流路・溝・掘立柱建物・竪穴住居・土坑を検出した。

SB201A（図版12　写真図版17）

調査区の東寄り、SD201A と SD203A の間で検出した掘立柱建物である。SK201A を切り、SD204A･SD205A に切られている。北から東に16°振る東西棟方向で、梁行２間(2.9m)、桁行３間(4.2m)の総柱建物である。上層の溝 SD204A・SD205A と確認調査のトレンチで切られたりしているが、西辺中央柱は溝間の高まりにかろうじて底部が残っている。柱通りはほぼ通っており、梁行方向の柱穴間距離は1.3m ～1.6m である。桁行方向の柱穴間距離は1.4m ～1.5m とほぼそろっている。

柱掘形は円形を基調としており、直径30cm ～40cm の規模がある。柱掘形は検出面からの深さ50cm ～25cm で、柱痕跡は直径18cm 程度であり、シルト化しており柱材は遺存していなかった。

遺物は柱穴 P101A 掘形から古墳時代後期の須恵器が出土した。柱穴 P102A 掘形から土師器甕が出土した。

SS201A（図版12　写真図版17）

集石 SS201A は掘立柱建物 SB201A の東辺柱穴 P104A と P103A の中間に位置する。南北50cm ×東西70cm の範囲で円板状の石器が32点重なって出土した。掘形は検出できなかったため面に置かれていたものと考えられる。

SD201A（図版13　写真図版15）

調査区の東端に位置し、北から東に33°振る南北溝である。溝は両端とも調査区外に続いている。幅1.9m 前後、深さ0.9m 前後で、僅かに北から南に傾斜している。SD206A に切られている。断面形は上方が U 字形、下面が箱形をしている。遺物は多く、古墳時代後期を中心に弥生時代後期の土器が出土した。

SD203A（写真図版16）

第１面と同一場所であり、幅は７m 以上で、深さ1.2m 程度である。第１面より広く深い。堆積状況からさらに以前から流れていた可能性が高い。

SD204A・SD205A（図版13　写真図版16）

調査区の中央部に位置する２条並行する南北溝で、第１面の水田面の東辺の下層にあたる。SD205A が SD204A を切っている。幅は SD204A が0.45m で、SD205A が0.5m である。深さは0.2m である。断面形はいずれも浅い U 字形である。遺物は SD204A からは古墳時代前期・古墳時代後期の土器が、SD205A からは古墳時代後期の土器が少量出土した。

SD206A・SD207A（図版13）

調査区の北端に位置する２条並行する東西溝で、SD207A が SD206A を切っている。SH201A を切っており、SD204A・SD205A に切られている。幅は SD206A が0.55m 程度で、深さは0.1m である。断面形はいずれも浅い U 字形である。遺物は SD206A から古墳時代後期の土器が少量と石製有孔円板が、SD207A から古墳時代の土器が少量出土した。

SK201A（図版13）

SD204A の東側に位置し、調査区外に延びている。SB201A に切られている。東西1.5m、南北1.6m 以上の土坑で、深さ0.05mを測る。遺物は古墳時代前期と後期の土器が出土した。

SH201A（図版13　写真図版16）

調査区の北端に位置し、SD206A・SD207A に切られており、調査区外に延びている。東西2.7m 以上、南北2.0m 以上の隅丸方形の竪穴住居を考えているが、柱穴などの施設は検出していないため断定できない。床面は平坦であり、壁際はわずかに窪んでいる。遺物は出土していない。

３．遺物（図版14～17　写真図版18～21）

⑴　第１面

SD201A（12～17）

弥生土器器台12は口縁端部を垂下させ櫛描直線文が巡る。13は脚部で４孔を穿孔している。須恵器坏Ｈ蓋14は体部と天井部の境界に稜を作り、口縁端部内面に段を作る。天井部のケズリの範囲は広い。須恵器壺15は頸部に波状文を描く。須恵器甕16は大甕で口縁直下に突帯が巡る。須恵器甕17は大甕の頸部から肩部にかけての破片で頸部は沈線と櫛描波状文を施す。肩部には格子タタキが残る。

水田 SD202A（18～20）

須恵器坏Ｈ蓋18は体部と天井部の境界に稜を作る。須恵器坏 H19は短い立ち上がりが内傾する。須恵器高坏20は方形透しを持つ脚部である。

SD206A（21・S1）

土師器甕21は球形の体部に外傾する口縁が付く。石製有孔円板 S1は直径23mm 前後の不整円形である。厚さ3.5mm である。側面の整形は雑で、未整形部分がある。11.5mm 間隔で直径２mm の孔を片面から穿孔している。

SD203A（26～28・W1・W2）

須恵器甕26は口縁直下に段を持ち、頸部に波状文を施す。須恵器高坏27は坏部外面と脚内面に自然釉が掛かる。土師器台付椀28は貼り付け高台の底部から体部が直線的に斜めに開く。板 W1は形を整えたスギの板である。箱 W2は組合箱の側板で底部との接合に木釘穴が４箇所残る。小口の縁には毛挽き痕が残る。ヒノキ材で全体に細かい傷が存在する。

⑵　第２面

SB201A（29・30）

須恵器坏 H29は柱穴 P101A 掘形から出土した。小振りで立ち上がりは内傾する。土師器甕30は柱穴 P102A 掘形から出土した。土師器甕口縁部の小片である。

P201A（31・32）

土師器坏31は体部がわずかに膨らみ口縁は外反する。土師器甕32は小形で口縁部は外反する。

SK201A（33・34）

土師器甕33は布留式甕で口縁端部を肥厚し内傾させる。須恵器坏Ｈ蓋34は体部と天井部の境界に稜を作り、口縁端部内面に段を作る。

SS201A（集石）（S2～ S33）

円板状の石は、直径４cm ～13cm の不整形をしており、厚さ２cm 前後で偏平である。材質は竜山石であり表面は石の特質のため、加工を認識できないものが多いが、縁辺に加工を加えているもの（S2・

S16・S23・S32）や対する２箇所を打ち欠いて石錘状にしているもの（S13）などがある。重さは72g～265gで、合計5841g、平均182gである。用途は不明である。

包含層（22～25）

須恵器甕22は口縁直下に突帯を貼り付ける。韓式系土器23は平底鉢の底部である。弥生土器鉢24は体部が直線的に開き外反する口縁部が付く。端部にはキザミをつける。有孔棒状土錘25は一端を欠く。

４．小結

A地区は東から西方向に向かって傾斜しており、古墳時代中期の溝（SD203A・SD201A）と土坑（SK201A）、古墳時代後期の掘立柱建物（SB201A）と集石（SS201A）と溝（SD203A・SD206A）、平安時代の溝（SD203A）を検出した。SD203Aは古墳時代以前から平安時代まで流れており、東側の微高地上も切り合いが著しく、継続して生活していたことが判明した。古墳時代後期の掘立柱建物SB201Aに伴うと考えられる集石SS201Aから出土した円板状の石の用途は不明である。

第３節　B地区

１．概要（図版８・18～21　写真図版３・22）

B地区はJR線の南で市道の東、水路の西に位置し、調査面積は635㎡である。調査区は東から10m毎に仮に１区から６区と呼称した。１区から３区の東半分にかけては以前の建物のコンクリート基礎が残っており、基礎除去後調査を進めた。３区西半分から６区にかけては約１mの盛土除去後、旧耕作土と床土を除去して調査を進めた。遺構検出面は標高4.5m前後である。１～３区は２面、３～６区は１面の調査を行った。中世、古代、古墳時代後期、古墳時代の遺構を検出した。

２．遺構（図版18～27　写真図版23～34）

SD301B（図版22）

１区に位置する溝でSD306Bと下層の水田面を切っている。調査区に直交し、北から東に約30°振る。幅1.4m、深さ0.5mで、断面形はU字形である。遺物は平安時代前期を中心に古墳時代中期の土器が少量出土している。

SD302B（図版22）

SD301Bの西側の２区に位置する溝でSD306Bを切っている。調査区に直交し、北から東に約39°振る。幅1.55m、深さ0.45mで、断面形は浅いU字形である。遺物は平安時代を中心に古墳時代後期の土器が少量出土している。

SD303B（図版22）

SD302Bの西側の２区に位置する溝で、SD306B・SD307B・SD311Bを切っている。調査区に直交し、北から東に約44°振る。幅1.2m、深さ0.6mである。遺物は平安時代の土器が少量出土している。

SD304B（図版22　写真図版24）

SD303Bの西側の３区に位置する溝で、SD313B・SD320Bを切っている。調査区に直交し、北から東に約37°振る。幅3.6m、深さ1.2mである。遺物は平安時代の土器が多量に出土している。

SD305B（図版23）

調査区の東端の１区に位置する溝で、北から東に約25°振る。幅0.6m、深さ0.4mで、断面形はU字形である。遺物は古墳時代の土器が少量出土している。

SD306B（図版23）

SD301BからSD303Bの間の１区・２区に位置する溝で、水田を切り、SD301B・SD302B・SD303Bに切られている。やや蛇行するが、北から西に約80°振る。幅0.65m、深さ0.15mで、断面形は浅いU字形である。遺物は古墳時代中期の土器が少量出土している。

SD307B

SD303Bとほぼ同じ位置にある溝で、SD303Bに切られており、SD311Bを切っている。北から東に約56°振る。幅3.2m、深さ0.75mである。遺物は古墳時代後期を中心に古墳時代前期の土器が多量に出土している。

SD308B

３区のSD304BとSD317Bの間に位置する溝で、SD313B・SD317B・SH301Bを切っている。北から東に約45°振る。幅1.75m、深さ0.75mである。遺物は古墳時代後期の土器が少量出土している。

SD309B（図版23）

４区に位置する溝で、SD312B・SD318Bを切っており、北壁面でSD310Bを切っている。北から東に約43°振る。幅0.85m、深さ0.4mで、断面形はU字形である。遺物は古墳時代中期の土器が少量出土している。

SD310B（図版22）

４区に位置する溝で、SD318Bを切っており、北壁面でSD309Bに切られている。わずかに蛇行し、北から東に約63°振る。幅1.15m、深さ0.6mで、断面形はV字形である。遺物は古墳時代前期・中期・後期の土器が少量出土している。

SD311B（図版22）

２区に位置する溝で、SD320Bを切っており、SD307B・SD303Bに切られている。北から東に約48°振る。幅3.4m、深さ0.75mで、断面形は浅いU字形である。遺物は古墳時代後期を中心に前期・中期の土器が出土している。

SD312B（図版23）

３・４区に位置する溝で、SD318Bを切っており、SD309Bに切られている。北から東に約45°振る。幅0.5m、深さ0.25mで、断面形はU字形である。遺物は出土していない。

SD313B

３区に位置する溝で、SD308B・SD304Bに切られている。北から東に約62°振る。幅2.2m、深さ0.9mで、断面形はU字形である。遺物は古墳時代後期の土器が出土している。

SD314B（図版22　写真図版24）

５区に位置する溝で、SD319B・SK302B・SH302Bを切っている。調査区に直交し、北から東に約41°振る。幅2.3m、深さ0.5mで、断面形は浅いU字形である。遺物は平安時代後期を中心に古墳時代中期・平安時代中期の土器が出土している。

SD315B（図版22　写真図版24）

５区のSD314Bの西に位置し、SD319B・SH302Bを切っている。直線的な溝で、調査区に直交し、北から東に約45°振る。幅1.15m、深さ0.8mで、断面形はV字形である。遺物は古墳時代前期、古墳時代中期、平安時代の土器が出土している。

SD316B（図版23）

６区に位置する溝で、SH303B を切っている。調査区に直交し、北から東に約45°振る。幅0.7m、深さ0.2m で、断面形は浅い U 字形である。遺物は古墳時代初頭の土器が少量出土している。

SD317B（図版22）

３区の SH301B の下層に位置し、SH301B・SD308B に切られている。直線的な溝で、北から東に約65°振る。幅0.6m、深さ0.2m で、断面形は U 字形である。遺物は古墳時代中期の土器が少量出土している。

SD318B（図版23）

３区・４区の SD317B と SH302B の間に位置する溝である。SD312B・SD309B・SD310B に切られ、大きく屈曲している。幅0.3m、深さ0.2m で、断面形は浅い U 字形である。遺物は出土していない。

SD319B（図版23）

５区の SD314B と SD315B の間に位置し、SD314B・SD315B に切られている。北から西に約80°振る東西溝である。幅0.25m、深さ0.1m で、遺物は出土していない。

SD320B（図版23）

２区の SD304B と SD311B の間に位置する。直線的な溝で、SD304B・SD311B に切られている。北から西に１°振る南北溝である。幅0.45m、深さ0.2m で、遺物は古墳時代中期の土器が少量出土している。

SH301B（図版22・24　写真図版26・27・34）

３区に位置する竪穴住居である。東側は SD308B に切られており、SD317B と SK303B を切っている。平面形は南北4.0m、東西3.5m 以上の方形で、西壁の主軸方向は北から東に31°振っている。床面は焼けた面と炭の面が広がっており、床面の標高は4.53m である。壁の立ち上がりは0.1m で、周壁溝は存在しない。床面積は37.2㎡以上である。屋内施設は２本の柱穴を検出した。規模は P308B が直径30cm、深さ35cm、P309B は直径25cm、深さ20cm である。P308B は小礫から大礫までが105個程度充満していた。遺物は床面直上から土師器甕・高坏、韓式系土器甕・鉢と椀形滓が出土した。

SH302B（図版25　写真図版28～30）

５区に位置する高床部をもつ竪穴住居である。北側は調査区外に延びており、約1／2の調査を実施したことになる。遺構内を調査区に直行する上層の溝 SD314B と SD315B に大きく切られており、遺構の残存状況は非常に悪い。

平面形は東西6.0m、南北推定6.2m の方形で、南壁の主軸方向は北から西に24°振っている。高床部からの壁の立ち上がりは0.23m と浅く、低床部の標高は4.25m、高床部の標高は4.38m である。床面積は復原推定37.2㎡である。屋内施設は高床部・壁際土坑・中央土坑・周壁溝・主柱穴がある。

高床部は調査区外の北面は不明であるが、壁際土坑を除いて全周すると考えられる。南面の幅1.1m、西面の幅1.1m、東面の幅1.1m、高さ0.13m である。南西角の壁際の床面には中央部に向いた直径６cm の芯持の炭化材（クヌギ節）が出土した。垂木と考えられる。

壁際土坑は東壁中央に接して存在し、周壁溝が接続している。南北1.4m、東西1.0m 以上、高床部からの深さ0.25m 以上である。中央土坑は住居中央部に存在する。調査区外に一部延びている。東西0.4m 以上、南北0.6m 以上、床面からの深さ0.4m である。周壁溝は残存部分に全周しており、幅15cm 前後、深さは10cm 前後ある。主柱穴は高床部との低床部の境の隅に存在しており、推定４本であるが、北西と北東の２本の主柱穴は調査区外のため、南東（P201B）と南西（P202B）の２本を検出した。規模は

P201B が直径25cm、床面からの深さ25cm、P202B は直径25cm、深さ35cm である。

遺物は多量に出土したため、出土位置により東高床部・西高床部・南高床部・中央床面に分けて取り上げた。東高床部は SD314B の東側で多量であったため、①～④・⑥の土器群として取り上げた。報告では③土器群として取り上げた壁際土坑北側に集中していた一群を東高床部土器群 A、①・②・⑥土器群として取り上げた③群の北側から調査区の壁際までの疎らな一群を東高床部土器群 B、④土器群として取り上げた壁際土坑周辺の一群を壁際土坑周辺土器群とに分けて報告する。①～③・⑥の土器群は床面より10cm 以上浮いた状態で密集して出土しており、東側から投棄された状態である。西高床部は SD315B より西側である。中央床面は SD314B と SD315B の間の北部である。南高床部は SD314B と SD315B の間の南部であり、⑤土器群として取り上げた。

SH303B（図版26・27　写真図版28・31～33）

６区に位置し、SH302B の西側に接する高床部をもつ竪穴住居である。SD316B に切られており、SK304B・SK305B・SK306B・SK307B なども土層から見ると SH302B より新しい。

平面形は南北5.8m、東西5.3m の方形で、南壁の主軸方向は北から西に36°振っている。高床部からの壁の立ち上がりは0.12m と浅く、低床部の標高は4.32m、高床部の標高は4.50m である。床面積は30.7㎡である。屋内施設は高床部・中央土坑・周壁溝・主柱穴がある。

高床部は基盤層に盛土をして作っており、南面以外は盛土部分を掘りすぎてしまった。床面と高床部の間には溝が巡ることから、東面中央南部分以外は高床部が存在していたようである。高床部の幅は1.1m で、盛土は南面で10cm から15cm である。高床部の側面は材が炭化していた。

中央土坑は床面南寄りに存在し、周囲に低い土手をもち、一部赤変し、炭が充満していた。直径0.75m、床面からの深さ0.18m である。周壁溝は幅10cm 前後、深さは５cm 前後あり、周壁溝は掘りすぎた部分を除いて全周していることから、本来全周していたと考えられる。主柱穴は高床部と低床部との境の隅に存在しており、４本である。直径は20cm、深さは P501B が55cm、P502B が65cm、P503B が50cm、P504B が45cm である。

遺物はいずれも床面から出土している。

水田 SK301B

調査区東端の１区・２区の最下層で検出した水田面である。SD302B の東側に位置し、SD306B・SD301B・SD305B に切られている。わずかな小畦畔と水田面が残る。SD306B は古墳時代中期であるため、古墳時代中期以前の水田である。

SK302B（図版23　写真図版34）

５区の SB302B の西側に位置する土坑で、SD314B に切られ、SD319B を切っている。南北0.7m、東西0.4m の隅丸長方形で、深さは0.35m である。遺物は古墳時代の土師器が少量出土している。

SK303B（図版22）

３区に位置する土坑で、SH301B と SD308B に切られている。直径１m 前後の円形で、深さは1.0m である。遺物は出土していない。

SK304B（図版27　写真図版33）

６区に位置する土坑で、SH303B を切っている。一辺1.1m の隅丸方形で、深さは0.9m である。底部は平坦で、土器が出土した。

SK305B（図版27　写真図版32）

６区に位置する土坑で、SD316B に切られ、SH303B を切っている。直径1.4m 前後の円形で北側に長方形の浅い張り出しが付く。深さ0.65m で、張り出し部分の深さは３cm である。遺物は鉢が出土した。

SK306B（図版27　写真図版33）

６区に位置する土坑で、SH303B を切っている。2.5m ×1.4m の隅丸長方形で、深さは0.5m である。底部は平坦で、一部に炭が存在し、土器はやや浮いた状態で出土した。

SK307B（図版27）

５区に位置する土坑で、SD316B に切られ、SH303B を切っている。直径1.5m 前後の不整円形で、深さは0.4m である。底部は平坦で炭が存在した。

SK311B（図版27）

SH303B 内に位置する。中央土坑の北側の３cm 程度窪んだ場所である。SH303B の一部であると考えられる。

SK312B（図版27　写真図版33）

６区に位置する土坑で、SH303B 内に位置する。SH303B の検出中に見つかったため、切り合い関係は不明である。直径0.6m の円形で、深さは0.2m である。

P301B（写真図版34）

４区に位置する柱穴である。直径30cm、深さ20cm である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

P307B

４区に位置する柱穴である。直径18cm、深さ５cm である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。P307B から西に向って2.5m の等間隔で４本の柱が一直線に並ぶ。

P312B

５区に位置する柱穴で、直径20cm である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

SB301B（図版23　写真図版34）

６区に位置する掘立柱建物である。北から西に約38°振る南北棟方向で、梁行１間（1.5m）、桁行２間（1.8m）である。遺物は出土していない。

３．遺物（図版28～34　写真図版35～50）

SD304B（35～55）

土師器坏・椀・台付椀、須恵器坏・椀・皿・台付皿・瓶・壺・鉢・甕、丸瓦、平瓦がある。

土師器坏（35～37）は口縁端部が直線的に開く。土師器椀（38～40）は平高台である。台付椀41は高台を貼り付ける。小形丸底壺42は古墳時代前期の混入である。

須恵器坏（43・44）は44が口縁部の破片で、43は底部をヘラ切りしている。須恵器椀45は平高台で底部は糸切りである。皿46は口縁端部が外反する。台付皿47は高台を底部周縁に貼り付け、口縁端部は外反する。瓶48は瓷器写しの瓶で本来把手が付くが残っていない。壺49は倒卵形の体部の肩に２条の突帯を貼り付ける。本来、突帯上に１対の耳を付けるが残っていない。鉢（50・51）は口縁部がくの字に外反し、51は高台が付く。甕52は大形品の体部の一部で外面は長方形の格子タタキ、内面は同心円当て具痕跡が残り、一部放射状ひび割れ痕跡が存在する。

丸瓦53は凹面に布目と糸切り痕跡が残る。凸面はナデ調整され、側縁は面取りがなされている。平瓦54・55は凹面が布目、凸面は粗いタタキが施され、側縁は面取りがなされている。

SD301B（56～58）

平瓦56は崩れた格子タタキである。須恵器坏Ｂ蓋57は口縁部を屈曲させる。須恵器甕58は口縁端部に面をつくる。

SD302B（59・60）

須恵器壺59は口縁端部が拡張する。平瓦60は凸面に平行タタキが施されている。

SD314B（61～65）

白磁碗61は玉縁の口縁でⅣ類である。東播系須恵器鉢（62・63）は62が中形で63は大形である。須恵器壺64は底部に高台を雑に貼り付け、やや膨らむ体部をもつ。須恵器器台65は櫛描の組紐文を施す初期須恵器である。

SD307B（66～69）

須恵器坏Ｈ（66・67）は立ち上がりが内傾し、端部を丸く作る。66は内面に同心円の置台の痕跡を残す。底部は濃緑の自然釉が掛かる。土師器高坏68は口縁部が直線的に開く。弥生土器甕69は底部破片である。

SD313B（70）

須恵器坏Ｈ蓋70は体部と天井部の境界は丸く、口縁端部内面に段を作る。

SD311B（71～73）

須恵器坏H71は小振りで口縁端部に内傾する段を持つ。蓋72は口縁部と天井部の境界は丸く、口縁端部内面に段を作る。内面には同心円の置台の痕跡を残す。身73は口縁端部を丸く作る。

SD308B（74）

土師器高坏74は脚柱状部内面をケズリ、接合部は円錐状の粘土を充填している。

SD315B（75～77）

土師器小型器台75は受部が浅く、柱状部は中空である。陶質土器把手76は貼り付けがはずれた牛角状で、上面に切り込みを入れている。土師器椀77は糸切りの平高台である。

SD306B（78）

韓式系土器78は格子タタキで仕上げている

SD317B（79）

弥生土器鉢79は口縁部の破片である。

SD309B（80）

弥生土器有孔鉢80は平底を穿孔している。

SH301B（81～93・M1）

土師器壺・高坏・甕、韓式系土器平底鉢・甕、椀形滓がある。土師器壺81は底部を欠くが球形の体部に直立する口頸部に退化した突帯が付く。土師器高坏83は坏部の破片である。土師器高坏84は坏部を水平につくり稜を残して口縁部は外傾する。脚部は大きく開いており、接合部は円錐状の粘土を充填している。甕85は体部から外反する口縁部である。甕86は倒卵形の体部に外傾する口縁部が付く。外面はハケ調整である。韓式系土器平底鉢82はやや膨らんだ体部に短く外反する口縁が付く。外面下端部にケズリを施す。体部外面は強く火を受けており、調整は不明である。内面は上部におこげ状の帯状の変色が認められる。韓式系土器甕87は体部下半で部分的に変形した格子タタキが残る。韓式系土器甕88～93は同一個体と考えられ格子タタキで仕上げている。椀形滓 M1は外面が球形で厚さ0.4cm の砂が付着して

おり、鉄部分は厚さ0.8cmで気泡が認められる。

SH302B（94～163）

東高床部土器群Ａ（94～118）

広口壺94は口縁部が大きく外反している。広口直口壺95はまっすぐ外傾し、口縁部はハケ調整である。甕（96～103）は96が小形で倒卵形の体部から外反する口縁が付く。ドーナッツ底である。97はハケ調整である。98～103は球形の体部に外反する口縁が付く。壺底部104はドーナッツ底で外面はハケ調整である。甕底部（105～110）は外面がタタキで底部は小さく丸底気味である。鉢（111・112）は111が球形の体部に外反する口縁部が付く。内面はミガキ、外面はタタキ後ミガキである。112は底部である。高坏（113～117）は113が口縁部を短く外反させる。114は口縁部が直立気味に外反する。115は口縁部が大きく外反する。117は脚部で裾に４孔を穿孔する。小型器台118は細い筒状の脚部の裾に４孔を穿孔する。

東高床部土器群Ｂ（119～145）

広口直口壺119は球形の体部に外傾する口縁が付く。外面はミガキ、内面はハケ調整である。二重口縁壺（120・121）は120が緩やかな稜の二重口縁である。121は口縁外面に波状文を施す。壺底部（122・131）は122が突出した平底で体部はハケ調整である。131は突出した底部を作る。甕（123～130）は123・124・127・128が倒卵形の体部から外反する口縁が付く。125は偏平な体部である。126・129・130は球形の体部である。甕底部（132～134）は球形の体部を意識した平底である。鉢（135～139）は135～138が小さな底部から直線的に延びる体部をもつ。139は下膨れで外面はミガキを行っている。小型丸底鉢140は球形の体部に短く外傾する口縁部が付く。高坏（141～143）は141が柱状部から屈折して裾部が付き３孔を穿孔する。142は柱状部、143は裾部の破片である。小型器台144は柱状部の破片である。弥生中期土器壺145は混入である。

壁際土坑周辺土器群（146～149）

甕と鉢がある。甕（146・147）は球形の体部に口頸部が屈折する。鉢（148・149）は148が小形で、149は浅い体部に口縁部を外反させる。底部はドーナッツ状である。

西高床部（150・151）

甕と有孔鉢がある。甕150は球形の体部に口頸部が外反する。有孔鉢151は平底に１孔穿つ。

南高床部（159）

甕159は球形の体部に口頸部が屈折する。

中央床面（152～158・160～163）

広口壺・甕・鉢・高坏がある。広口壺（152～154）は152が外傾する口縁部で、153は口縁端部である。154は直立する頸部に外反する口縁部が付く。壺底部155は小さな平底である。甕（156～158）は頸部が屈折する。甕底部（160・161）は160が上げ底気味の底部で、161が底部を絞って作っており、尖底を呈する。高坏（162・163）は162が椀形の坏部で、163が脚柱状部である。

SH303B（164～189）

広口壺・甕・鉢・高坏・土製品がある。広口壺（164）は外反する短い口頸部である。壺底部（165～170）は167～169が小形の壺である。170は底部が小さく体部は偏平であることから細頸壺だと考えられる。甕171は口縁端部に擬凹線が巡る。甕底部（172～176）は172～174が突出する平底で、176は上底である。鉢Ａ（177・183）は口縁部が外反するもので、177は中形で口縁部が短い。183は大形で片口を作り出す。

鉢Ｂ（178・179）は口縁部が直線的に開くもので、178はミガキにより仕上げており、179はタタキにより整形している。鉢底部（180～182）は180・181が外面をタタキにより整形している。182は短い脚台をつける。高坏（184・185）は184が有稜高坏で、外反する坏部の口縁部を横ミガキしている。185は脚柱状部から屈折する裾部の一部である。イイダコ壺（186～188）は器面がマーブル状になっているため、紐作りはしていない。土製品189は小形の砧状を呈し、端部は環状だと考えられるが欠けている。

SK304B（190・191）

甕（190・191）は190が球形の体部に外反する口縁部が付く。191は底部である。

SK305B（192）

鉢192は小さな底部である。

SK306B（193～198）

広口壺193は口縁部が大きく外反する。甕底部194は内面がハケ調整、外面はタタキ後部分的にハケ調整を行っている。高坏（195・198）は195が坏体部、198が口縁部である。イイダコ壺（196・197）は196が底部を絞って作っている。197は丸底である。

SK311B（199～202）

甕199は球形の体部である。鉢200は底部である。イイダコ壺（201・202）は201が完形で器面の胎土は縞状になっているため、紐作りはしていない。

P301B（203）

広口壺203は口頸部が大きく外反し、口縁端部に櫛列点文を施す。

P307B（204）

甕204は直線的な体部上半から屈折し口縁部をつける。

P312B（205）

甕205は底部で外面を縦ミガキする。

包含層（206～211）

遺構に伴わない主要な遺物を図化した。須恵器坏Ｈ蓋206は体部と天井部の境界に稜をもち、口縁端部内面に段を作る。外面は自然釉が掛かり、別個体が付着している。須恵器坏 H207は、受部に蓋が融着している。須恵器瓶208は口縁部である。陶質土器甕209は外面の縄目タタキの上に連続螺旋状沈線を施す。土製紡錘車210は半分残存しており、中央に孔を穿孔している。平瓦片211は凹面に布目、凸面には斜格子のタタキが施され、側縁は面取りをしている。

４．小結

Ｂ地区では弥生時代中期の柱穴（P301B・P307B・P312B）、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居（SH302B・SH303B）、古墳時代中期の竪穴住居（SH301B）、古墳時代後期の溝（SD305B・SD311B・SD308B・SD309B・SD310B）、平安時代の溝（SD301B・SD302B・SD303B・SD304B・SD314B・SD315B）を検出した。

弥生時代中期の柱穴は時期不明のものも含めて一直線に並ぶ可能性のものがあり、柵などの存在が想定できる。弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居は西端の微高地縁辺に位置する。SH302B は竪穴住居廃絶後に東側から多量に土器が廃棄されており、周辺に住居が存在していたことが想定できる。SH302B に投棄された土器は小型器台が存在しており、高坏や甕の形態から庄内並行期に位置づけられる。

東端で検出した水田は層位と切り合いから古墳時代中期以前に位置づけられる。

古墳時代中期の竪穴住居 SH301BH は床面から韓式系土器平底鉢・甕、土師器壺・甕・高坏がまとまって出土しており良好な資料である。韓式系土器平底鉢・甕は胎土分析の結果、他地域からの搬入土器であり今後製作地を解明しなければならない。中期初頭に位置づけられる。椀形滓も出土しており、渡来人との係わりを考える上で重要である。古墳時代後期の溝はやや東西方向にあり、平安時代の溝は調査区に直交しており、条里方向に近い。

第４節　Ｃ地区

１．概要（図版８・35・36　写真図版３・51）

Ｃ地区はJR線の南で市道の東、Ｂ地区の南に位置し、調査面積は 162㎡である。約0.9m の盛土と約0.2m の旧耕作土を機械で除去した後、人力で遺構を検出した。遺構検出面は標高4.7m 前後であり、南に向って傾斜している。遺物包含層はほとんどなく、遺構検出面となる。溝・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・柱穴群を検出した。

２．遺構（図版35・36　写真図版51・52）

SD101C（図版36　写真図版52）

調査区の南端に位置する東西溝である。南西部分は調査区外のため幅は不明であるが、直線的な溝で、北から東に約44°振る。幅0.8m 以上、深さ0.25m で、断面形はＵ字形である。遺物は出土していない。

SD102C（図版36　写真図版52）

溝 SD101C の北側に平行して走る東西溝である。直線的な溝で、北から東に約42°振る。最大幅1.3m、深さ0.35m で、断面形はＵ字形である。遺物は弥生時代中期の土器が少量出土した。

SD103C（図版36）

調査区の北端に位置する東西溝である。北側は調査区外のため幅は不明であり、深さは最大0.25m である。遺物は出土していない。

SD104C（図版36）

調査区の北東部に位置する東西溝である。長さ1.9m、幅0.2m、深さ0.04mである。遺物は出土していない。

SA101C（図版36）

調査区の西端に位置する柵もしくは掘立柱建物である。柱穴は３本検出しており、柱間は1.9m、2.0m である。柱列の方向は、北から東に30°振っている。遺物は柱穴 P102C から弥生時代後期土器が出土した。

SH101C（図版36　写真図版52）

調査区の東端に位置する竪穴住居で、西壁の一部と床面・壁溝を検出したのみで、ほとんどが調査区外に存在する。平面形は南北2.5m 以上、東西1.7m 以上の方形と考えられ、西壁の主軸方向は北から西に16°振っている。壁の立ち上がりは0.2m と浅く、床面の標高は4.3m である。遺物は古墳時代の土器が少量出土した。

SK101C（図版36）

調査区の西端に位置する土坑で、溝 SD102C を切っており、調査区外に延びている。東西1.1m 以上、

南北0.7m 以上の楕円形で、深さ0.3mを測る。遺物は古墳時代後期の土器が少量出土した。

SK102C（図版36）

調査区の北端に位置する土坑で、溝 SD103C に切られており、調査区外に延びている。東西1.1m 以上、南北0.6m 以上で、深さ0.1mを測る。遺物は古墳時代後期の土器が少量出土した。

３．遺物（図版36　写真図版52）

P102C（212・213）

弥生土器壺212は底部に木葉痕が残る。高坏213は脚部で大きく外反し４孔を穿孔する。

P103C（214）

弥生土器甕214は受け口状の口縁をもつ。

P108C（215）

須恵器坏 H215は立ち上がりが内傾する。

SD102C（216・217）

弥生土器壺底部（216・217）はいずれも外面は縦ミガキを行っている。

SK102C（218）

古墳時代の土師器甕218は口縁部がくの字に外反する。

SK103C（219）

須恵器坏Ｈ蓋219は天井部と体部の境に稜を作り、口縁端部内面に段を有する。天井部は手持ちヘラケズリである。

包含層（220・221）

須恵器坏Ｈ 220は底部外面に自然釉が掛かる。高坏221は脚部の破片で、４方向に長方形透かしをもつ。

４．小結

Ｃ地区では遺構検出面はほぼ同一でありながら、弥生時代中期の溝（SD102C）、弥生時代後期から古墳時代初頭の柵（SA101C）、古墳時代後期の竪穴住居（SH101C）と土坑（SK102C･SK103C）を検出した。SD101C は遺物が出土しなかったが、SD102C と並行していることや埋土の状況から SD102C と同様に弥生時代中期の可能性が高い。

調査区の南端にも遺構が存在していたことから、遺跡の範囲は南側にさらに広がることが判明した。

第５節　Ｄ地区

１．概要（図版８）

Ｄ地区はJR 線の南側に接し、Ｂ地区の西側の市道の西に位置し、調査面積は141㎡である。約１ｍの盛土と約0.4m の旧耕作土と床土を機械で除去した後、人力で掘削した。自然堤防西側の氾濫原に位置するため、顕著な遺構は検出できなかった。

２．遺構（図版37・38　写真図版53）

Ｄ地区はＢ地区やＦ地区などの遺構が存在する微高地の縁辺下に位置する。土層の堆積状況は灰色・灰オリーブ色・灰黄褐色のシルト質極細砂が堆積しており、標高４ｍ以下の堆積はラミナで流木などが入っている。遺物は微高地から流れてきた状況で、中世から弥生時代にかけての土器が出土した。

３．遺物（図版38　写真図版53）

遺物はすべて遺構に伴っていない。

須恵器坏Ｈ蓋222は天井部と口縁部には明瞭な境はなく、口縁端部は傾斜した面を作っている。須恵器坏H223は小振りで、立ち上がりを欠く。須恵器皿224は口縁部が外反する。須恵器皿225は、やや上げ底の底部から口縁部が短く外傾し立ち上がる。須恵器椀226・227は、口縁部が直線的に開く。大振りの227は外面に沈線が巡る。須恵器高坏脚部228は透孔の一部が残る。須恵器短頸壺229は口縁端部に面を持つ。須恵器甕230は肩部にカキメを施し、最大径部分に沈線に挟まれた波状文が巡る。須恵器壺231は肩部の破片で、最大径部分に波状文が巡る。須恵器提瓶232は環状の把手が付く。体部成形時の蓋部の内面には布目痕跡が残る。須恵器甕口縁233は、外傾する口縁端部には沈線が巡り、頸部内面には縦２本のヘラ記号が記されている。

黒色土器椀234は、底部に貼り付け輪高台を有する。内面は黒色で、ミガキを行っている。土師器椀（235・236）は235が口縁端部を外反させる。236は口縁部が直線的に開く。土師器甕（237・238）は237が口縁端部内面に段を作る。238は口縁が大きく外反する。

弥生土器鉢底部239は内面にハケ調整が残る。青磁碗底部240は、龍泉窯系碗Ⅲ類で高台内面まで釉が掛かっている。製塩土器破片241は器壁が厚く、表面は白い。他に複数の破片を合わせて合計270gがある。

４．小結

Ｄ地区は顕著な遺構が検出できなかった。Ｂ地区やＦ地区などでは遺構が存在する微高地が存在しているため、市道平野神野線が遺構の存在する微高地との境界線になると考えられる。遺物は微高地から流れてきた状況で、中世から弥生時代にかけての土器が出土した。確認調査のｂ－７調査区はＤ地区のすぐ南側に位置し、東から西に向って落ち込む遺構を確認し、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器・須恵器が出土した。このことから市道平野神野線が微高地の縁辺と考えられ、Ｄ地区や確認調査ｂ－７調査区で出土した遺物は微高地から廃棄された遺物と考えられる。

第６節　Ｅ地区

１．概要（図版８・39・40）

Ｅ地区はJR線の北で市道平野神野線の東、Ｂ地区の北に位置し、調査面積は139㎡である。約１ｍの盛土と約0.3ｍの旧耕作土を機械で除去した後、人力で掘削した。旧耕作土直下が遺構検出面である。遺構検出面は標高4.6ｍ前後である。検出した遺構は近世の溝と弥生時代の溝・掘立柱建物跡・土坑である。

２．遺構（図版39～41　写真図版55・56）

SB501E（図版41　写真図版56）

調査区の南端に位置する掘立柱建物で、東側の調査区外に延びており、SD504Eを切っている。北から東に28°振り、南北1間（2.7m）、東西1間（2.5m）以上である。柱掘形は円形で、直径0.3m～0.25mの規模があり、検出面からの深さは0.5m～0.7mである。遺物は出土していない。

SD501E（図版40　写真図版56）

調査区の北端に位置する溝で、北から東に約62°振る。SD502E・SD503Eを切っている。幅2.1m、深さ0.6mで、断面形は開いたＶ字形であり、何度か掘り直している。遺物は近世の土器を中心に弥生時

代後期・平安時代の土器が多量に出土した。

SD502E（図版40　写真図版55）

調査区の中央部に位置し、北から西に約72°振る東西溝である。SD501E に切られている。幅1.5m、深さ0.6m で、断面形は浅い U 字形である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

SD503E（図版40）

調査区の東部に位置し、北から西に約71°振る東西溝である。SD501E に切られている。幅1.6m、深さ0.3m で、断面形は浅い U 字形である。遺物は弥生時代中期と後期の土器が出土した。

SD504E（図版40　写真図版56）

調査区の南端に位置する溝で、東から西に弧を描きながら流れており、SK501E と SK502E、SB501E に切られている。幅1.5m、深さ0.4m で、断面形は浅い U 字形である。遺物は弥生時代中期の土器が出土した。

SK501E

調査区の南端に位置する土坑で SD504E を切っている。西端の調査区外に延びており、東西1.9m 以上、南北0.7m 以上、深さ0.3m で、断面形は浅い U 字形である。遺物は平安時代前期と弥生時代中期の土器が出土した。弥生時代中期の土器は下層の SD504E が混入したものと考えられる。

SK502E（図版41　写真図版56）

SK501Eの北東に位置する土坑でSD504Eを切っている。直径0.7m、深さ0.5mで、断面形はU字形である。遺物は弥生時代後期の土器が出土した。

３．遺物（図版42　写真図版57）

SD502E（242～244）

SD502E からは弥生土器壺・甕が出土した。壺242は体部上半の破片で２本の櫛で文様帯を描き、二帯以上施している。甕底部243は厚く作っている。244は壺底部である。

SD504E（245～247）

SD504E からは弥生土器壺・甕が出土した。壺245は体部上半の破片で櫛描直線文が三帯以上施される。甕246は口縁部を欠くが、体部上半に櫛描直線文を施す。甕247は底部である。

SD503E（248～250）

弥生土器壺248は広口壺口縁で端部は拡張し凹線文を巡らし、円形浮文を貼り付けている。鉢249は口縁部がくの字に外反する。鉢250は底部である。

SK502E（251・252）

SK502E からは弥生土器壺・鉢が出土した。壺251は口縁部で大きく外反する。鉢252は突出する平底である。

SD501E（253～263）

SD501E からは上層（253～257）と下層（258～260）に分けて取り上げた。なお261～263は層位不明である。土師器坏253は厚い平高台である。陶器皿254は口縁に煤が付着しており灯明皿として用いられている。須恵器瓶255は小形で底部は糸切りである。土師器焙烙256は型造りで、底部から体部にかけて屈曲している。丹波焼擂鉢257は口縁部のみである。須恵器椀258は外反する口縁部である。土師器羽釜259・260は鍔部が退化している。備前焼擂鉢261は口縁部のみである。陶器擂鉢262は10本の擂目である。土師器甕263は底部が窪む。

包含層（264・265）

遺構に伴わない遺物は弥生土器と須恵器がある。弥生土器高坏264は高坏脚部の破片である。須恵器鉢265は小形で口縁部を丸く作る。

４．小結

Ｅ地区は１面の調査で弥生時代中期の溝（SD504E・SD502E）、弥生時代後期の土坑（SK502E）と溝（SD503E）、平安時代の土坑（SK501E）、近世の溝（SD501E）を検出した。SD501E は現代まで続く溝である。変形した狭い調査区であるが、微高地縁辺に立地し、弥生時代中期と弥生時代後期の遺構密度が高いことが判明した。

第７節　Ｆ地区

１．概要（図版８）

Ｆ地区はJR線の北でＥ地区西側の市道の西に位置し、調査面積は231㎡である。約１ｍの盛土と約0.3mの旧耕作土と床土を機械で除去した後、人力で掘削した。遺構検出面は標高4.6m 前後である。南西角には近代の工事による攪乱が存在していた。調査した遺構検出面は１面である。

２．遺構（図版43・44　写真図版58）

SD601F（図版44　写真図版58）

調査区の南に位置し、北から西に約35°振る南北溝である。幅0.8m、深さ0.2m で、ほぼ水平である。埋土はシルト質極細砂である。遺物は平安時代後期を中心に古墳時代後期の土器が少量出土した。

SD602F（図版44　写真図版58）

調査区の北端に位置し、北から東に約10°振る南北溝である。溝は両端とも調査区外に続いている。幅1.8m 前後、深さ0.4m 前後で、僅かに北から南に傾斜している。埋土はシルト質極細砂である。遺物は平安時代後期を中心に古墳時代前期の土器が少量と砥石が出土した。

３．遺物（図版44　写真図版59）

SD601F（266～268）

須恵器坏Ｈ蓋と須恵器椀が出土している。須恵器坏Ｈ蓋266は口縁部の小破片で、天井部との境に稜はない。須恵器椀267は口縁部、268は底部の破片である。

SD602F（S34）

砂岩製の砥石 S34が出土している。偏平な断面をしており、砥面は側面に７面、小口面に１面ある。

包含層（269～276）

弥生土器短頸壺269は外面がタタキ、内面は粘土紐接合痕跡が残る。土師器皿270は体部からわずかな稜を作り、口縁部は外反する。陶質土器271は体部破片で、上部に櫛描波状文二帯以上、下部に縄目タタキを行い、螺旋沈線を巡らす。須恵器坏H蓋272は天井部と口縁部の境に稜を作り、口縁端部は段を作っている。外面は自然釉が掛かっている。須恵器坏 B273は低い高台を貼り付ける。須恵器椀274～276は、口縁部（274・275）と、底部（276）の破片である。276の底部は糸切りである。

４．小結

平安時代後期の遺構面を調査し、溝２条（SD601F・SD602F）を検出した。遺物が少ないため集落の中心からは、離れていると考えられる。包含層には弥生時代後期や古墳時代中期・後期の土器が出土しており、周辺に弥生時代後期や古墳時代中期・後期の遺構の存在が推定できる。

第７節　Ｇ地区

１．概要

Ｄ地区から加古川駅よりに約200mの地点に位置し、調査面積は161㎡である。約１ｍの盛土と約0.6mの旧耕作土と床土を機械で除去した後、人力で掘削した。その下の遺物包含層からは室町時代の土師器などが出土した。包含層の下の遺構検出面では溝SD00lGを検出した。

また調査区内において地震による液状化の痕跡である「噴砂」が３箇所見つかった。この噴砂は床土層に切られており、比較的新しい時期のものと考えられる。

２．遺構（図版45　写真図版60）

SD00lG

SD00lGは調査区に直交しており、北から南に流れている。幅2.5m、深さ1.2mで、北から東に約50°振る。埋土はラミナの入った灰色シルトである。遺物は東播系須恵器椀が出土した。

３．遺物（図版45　写真図版60）

SD00lG（277）

東播系須恵器椀277は、体部と底部の境界が不明瞭になっている。

包含層（278～281）

遺構に伴わない土器が出土している。東播系須恵器鉢278・279は小形品（278）と大形品（279）がある。279の口縁部は上下に拡張している。東播系須恵器甕280は底部に近い。外面は平行タタキ、内面はナデで仕上げている。丹波焼擂鉢281は、内面に６本の櫛描の擂目が放射状に施されている。

４．小結

今回調査を行った地点では遺構面を１面検出し、溝が１条（SD00lG）見つかった。この溝は加古川条里の坪界溝の位置と一致する。周辺は加古川の氾濫原であり、条里施工時期の問題があるが、今回の調査では、時期が決められる遺物は出土していない。

第４章　加古川線地区の調査成果

第１節　概要

１．確認調査の成果（図版６・７）

ｉ-５調査区（Ｋ地区）・ｉ-９～11調査区（Ｊ地区）・ｉ-１2調査区（Ｈ地区）で平安時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。遺構・遺物が検出されなかったｉ-１～４・ｊ-１～３調査区では旧河道による砂礫の堆積、ｉ-６～８調査区では湿地状の堆積が確認された。

２．本発掘調査の概要

旧河道や湿地に挟まれた３つの微高地状の部分について調査（Ｈ・Ｉ地区、Ｊ地区、Ｋ地区）を行った。調査の結果、主として中世の集落跡を検出した。その他には10世紀の建物跡（Ｈ地区）、溝（Ｋ地区）、８世紀の溝（Ｉ地区）、古墳時代後期の溝（Ｈ地区）、弥生時代後期の溝（Ｊ地区）などを検出した。

第２節　Ｈ地区

１．概要（図版46・47　写真図版４・61）

調査対象範囲の北端に位置する調査区である。北側は加古川バイパスに隣接し、南側はＩ地区に隣接している。調査前は宅地であり、標高は6.5mである。

調査区内は厚さ約60cmの石炭殻による盛土がなされ、その下に盛土直前の耕土層が残存している。厚さ20～30cmの耕土層と床土を除去すると主としてオリーブ褐色のシルト質極細砂をベースとする遺構面である。この遺構面で、中世と古墳時代の２面の遺構面を検出した。さらに、ベース面より50～60cm下げると河川の堆積による細砂～中砂層が現れる。

第１面　検出された遺構には掘立柱建物跡６棟、土坑４基、溝３条、流路などがある。調査区の中ほどは流路（SR006H）によって大きく西側から抉られ、調査区北部西端も流路（SR080H）によって抉られている。掘立柱建物跡・土坑・溝などの遺構はこれらの流路によって削り残された南部と北部で検出している。今回検出された集落の南側の範囲は隣接するＩ地区まで延びている。土坑は南部でSK001H・SK002H、北部でSK010Hを検出した。溝は北部で東西方向のものを３条検出した。

第２面　第１面とほぼ同じ検出面で、第２面の遺構を検出した。検出した遺構は南北方向の溝３条（SD302H～304H）と東西方向の溝１条（SD301H）のみであるが、いずれも断面Ｖ字のしっかりした溝である。

２．遺構（図版48～53　写真図版62～68）

(1)　第１面（写真図版62・63）

SB201H（図版48　写真図版64）

流路の南側で検出された総柱の掘立柱建物跡である。桁行２間（5.5m）以上、梁行２間（4.5m）で、建物の方位はN12°Ｅである。SB202Hに切られ、柱穴より須恵器鉢（401）が出土している。

SB202H（図版49　写真図版64）

流路の南側で検出された総柱の掘立柱建物跡である。桁行５間（9.1m）、梁行２間（5.0m）で、中央の柱間が1.2mと他の柱間（1.8～2.2m）に比べて狭い。建物の方位はN22°Ｅである。SB201H・SB203Hを切り、柱穴より須恵器椀（402）、白磁碗（403）が出土している。

SB203H（図版48　写真図版64）

流路の南側で検出された総柱の掘立柱建物跡である。桁行３間（6.3m）、梁行２間（4.4m）である。建物の方位はN18°Ｅである。SB202Hに切られ、柱穴より須恵器椀（404）、土師器坏（405）・鍋（406）が出土している。

SB204H（図版50　写真図版64）

流路の南側で検出された総柱の掘立柱建物跡である。桁行３間（5.3m）、梁行2間（4.8m）である。建物の方位はN21°Ｅである。柱穴より須恵器椀（407）、土師器小皿（408）が出土している。

SB205H（図版51　写真図版64）

流路の北側で検出された総柱の掘立柱建物跡である。桁行３間以上（6.9m）、梁行２間以上（4.5m）である。建物の方位はN6.5°Ｗである。柱穴より土師器坏（410）・皿（411～413）・羽釜（414）が出土している。

SB206H（図版50　写真図版64）

流路の北側で検出された側柱の掘立柱建物跡である。桁行３間以上（6.8m）、梁行２間以上（5.1m）である。建物の方位はＮ５°Ｗである。柱穴より土師器小皿（409）が出土している。

P043H

SB204HのP044Hに切られるピットである。直径は45cm、深さは44cmである。鉄釘（M401）が出土している。

P081H（写真図版64）

SB205Hの南側に位置する。直径は40cm、深さは20cmである。須恵器皿（415）が出土している。

SK001H（図版52　写真図版65）

調査区南端部で検出された長方形の土坑である。規模は長さ1.8m、幅1.3mで、深さは15cmと浅い。底面中央部には粘土質の土が貼り付けられている。須恵器椀（416）、土師器皿（417）、鉄製品（M404）が出土している。

SK002H（図版52　写真図版65）

流路の南側で検出された長方形の土坑である。規模は長さ2.0m、幅1.35mの長方形で、深さは16cmである。SB202Hを切っている。床面から須恵器椀（422・423）、土師器皿（425）・羽釜（424）が出土している。

SK008H（図版47）

調査区南東隅で検出された不整形の落ち込みである。深さは７cm程度と浅い。須恵器鉢（418）、土師器小皿（419）が出土している。

SK010H（図版52　写真図版65）

流路の北側で検出された長方形の土坑である。長さ8.5m、幅2.8mであるが、本来の北端は削平されたと考えられる。深さは10cm程度と浅く、床面には凹凸があり、牛などの足跡が若干認められた。SD047H・SD048Hを切り、SR006H・SR080Hが埋没途中に水田として利用された時期と同一のものと考えられる。

SK110H（図版52　写真図版65）

流路の北側で検出された長方形の土坑である。規模は長さ1.3m以上、幅67cmで、深さは５cmと浅い。土師器椀（421）が出土している。

SD047H（図版51　写真図版66）

流路の北側で検出された東西方向の溝である。幅70cm、深さ25cm で、断面は逆台形を呈している。方位は N55° W である。須恵器椀（426～430）・鉢（431）、土師器鍋（432）・羽釜（433）・土錘（435）、白磁碗（436）が出土している。

SD048H（図版51　写真図版66）

流路の北側で検出された東西方向の溝である。幅30cm、深さ５cm である。方位は N55° W で、SD047H と等しい。土師器鉢（437）が出土している。

SD050H（図版51　写真図版66）

流路の北側で検出された東西方向の溝である。幅40cm、深さ10cm である。方位は N60° W である。須恵器椀（438）が出土している。

SR006H（図版47　写真図版66）

加古川あるいはその支流による氾濫によって形成された落ち込みである。落ち込みは湿地化の後、水田として利用されたと考えられる。なお湿地化した時期にはゴミ捨て場として利用されており、13世紀後半から15世紀前半にかけての土器（439～499）・瓦（500・501）や鉄鏃（M403）など多くの遺物が出土している。

SR080H（図版47　写真図版66）

加古川あるいはその支流による氾濫によって形成された落ち込みである。13世紀頃までの土器（502～506）や鉄釘（M402）が出土しており、SR006H より古いものと思われる。

⑵　第２面（写真図版67）

SD301H（図版53　写真図版68）

調査区北部で検出された南北方向の溝である。幅1.4m、深さ0.8m である。遺物は出土していない。

SD302H（図版53　写真図版68）

調査区北部で検出された南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.8m である。須恵器提瓶の破片（515～517）が出土している。

SD303H（図版53　写真図版68）

調査区北部で検出された南北方向の溝である。幅1.3m、深さ0.45m である。遺物は出土していない。

SD304H（図版53　写真図版68）

調査区中部で検出された東西方向の溝である。幅1.2m、深さ0.6m である。遺物は出土していない。

３．遺物（図版54～61　写真図版69～75）

⑴　第１面

SB201H（401）

401は須恵器鉢である。P020H より出土している。

SB202H（402・403）

402は須恵器椀である。底部は糸切りである。P061H より出土している。403は白磁の底部である。内面見込みの釉が輪状に掻き取られている。P019H より出土している。

SB203H（404～406）

404は須恵器椀である。底部は糸切りである。405は土師器坏である。底部は糸切りである。406は土師器鍋である。体部外面に平行タタキが施されている。404～406とも P026H より出土している。

SB204H（407・408）

407は須恵器椀である。底部は糸切りである。P045H より出土している。408は土師器小皿である。手づくね成形である。P139H より出土している。

SB205H（410～414）

410は土師器坏である。底部は比較的丁寧なナデである。P096H より出土している。411～413は土師器皿である。底部は411・413が糸切り、412がヘラ切りである。411・412が P100H、413が P098H より出土している。414は土師器羽釜である。体部外面は横方向の板ナデ、体部内面は縦方向のナデである。P087H より出土している。

SB206H（409）

409は土師器皿である。手づくね成形である。P051H より出土している。

P081H（415）

415は須恵器皿である。底部は糸切りである。

SK001H（416・417）

416は須恵器椀である。底部は糸切りである。417は土師器皿である。手づくね成形である。

SK002H（422～425）

422・423は須恵器椀で、底部は糸切りである。424は土師器羽釜である。体部下位から底部外面に平行タタキがわずかに残存し、底部には指頭痕も認められる。425は土師器皿で、手づくね成形である。

SK008H（418・419）

418は須恵器鉢である。419は土師器小皿である。底部は糸切りである。

SK010H（420）

420は須恵器椀である。底部は糸切りである。

SK110H（421）

421は土師器椀である。底部は糸切りである。

SD047H（426～436）

426～430は須恵器椀である。底部は糸切りである。431は須恵器鉢である。432は土師器鍋である。433は土師器羽釜である。434は土師器底部である。高い高台をもっている。底部は回転ナデである。435は土錘である。重量は4.5g である。436は白磁碗である。横田・森田分類のⅣ－１ａ類である。

SD048H（437）

437は土師器鉢である。

SD050H（438）

438は須恵器椀である。外側に踏ん張る高台をもっている。底部は糸切りである。

SR006H（439～501）

439～444は須恵器椀である。底部は糸切りである。445は須恵器坏Ｂ蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリである。446は須恵器壺の底部である。底部は不調整である。447～459は須恵器鉢である。内面は斜め方向の仕上げナデが施され、底部は糸切りである。456は小形の鉢である。内面は回転ナデが施されている。458・459は内面が細かく爆ぜており、付着物が残っている。460～469は須恵器甕である。461は焼成が土師質である。469の体部内面は同心円当て具痕の後、その当て具を用いたハケ状の調整やナデが施されている。体部下位から底部にかけての当て具痕は体部上・中位の当て具痕に比べて木目の

細かいものが使用されている。470～473は土師器小皿である。手づくね成形のものである。474・475は土師器底部である。底部は糸切りである。476はタコ壺である。内外面とも回転ナデであるが表面に粘土紐の痕跡を残している。477～480は土師器鍋である。体部外面に平行タタキが施されている。481～486は土師器羽釜である。481は大形の羽釜の口縁部と考えられる。482は外面にハケ調整が、484・486は外面に平行タタキが施されている。487・488は三足付鍋もしくは羽釜である。489～493は瓦質土器羽釜である。494～498は白磁碗である。494～497は横田・森田分類のⅣ類、498はⅤ類である。499は青磁碗である。底部外面から畳付までが露胎で、見込み部に草花文のスタンプが押されている。横田・森田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５ｂ類である。500は丸瓦である。501は平瓦である。

SR080H（502～506）

502・503は須恵器鉢である。504は須恵器椀である。底部は糸切りである。505は土師器底部である。底部は糸切りである。506は土師器鍋である。

包含層（507～514）

507～510は須恵器椀である。底部は糸切りである。511・512は須恵器小皿で底部は糸切りである。513は瓦器椀である。口縁部のヨコナデの幅が広く、森島編年Ⅲ－１期のものと考えられる。514は緑釉陶器である。ケズリ出し高台で、高台内にまで粗く施釉されている。京都系のものである。

石製品（S401～ S405）

S401・S402はSB205HのP096Hより出土したものである。必ずしも道具として使用されたと確認できるものではない。地鎮等の目的で故意に柱穴内に入れられた可能性がある。

S403は叩石である。SR047Hより出土したものである。S404・S405は砥石である。SR006Hより出土したものである。４面とも使用されている。

金属製品（M401～ M404）

M401・M402は鉄釘である。M401はP043Hより出土したもので、大形に属するものである。M402はSR080Hより出土したものである。M403は鉄鏃で、関部から頸部が残存している。SR006Hより出土したものである。M404は不明鉄製品である。断面は方形で、捩られている。SK001Hより出土したものである。

(2)　第２面

SD302H（515～517）

515～517は須恵器提瓶の体部の破片である。

４．小結

上層の遺構は大きく３つの時期に分かれる。

10世紀後半頃に方位がN6.5° Wの掘立柱建物跡（SB205H）・土坑（SK110H）が現れる。溝（SD050H）は方位が異なりこの時期かやや下がる時期のものと考えられる。本格的に集落として開発されるのは12世紀後半頃からである。以後、掘立柱建物跡（SB201H ～ SB204H）は13世紀前半までのうちに４時期の建て替えが認められる。13世紀には河川の大きな氾濫があったようで、地山面が抉られ、湿地が形成されている。この湿地には14世紀を前後する時期に多量の土器が捨てられており、調理具である須恵器こね鉢や土器製煮炊具の比率が高いことが注目される。

下層については古墳時代の遺構は後期の溝（SD301H ～ SD304H）のみであったが、古墳時代の様相の一点が明らかになったといえる。

第３節　Ｉ地区

１．概要（図版46・62　写真図版76）

Ｈ地区の南側に位置する調査区である。調査前は駐車場であり、標高は6.5mである。

調査区内は厚さ約60cmの盛土がなされ、その下に盛土直前の耕土層が残存している。厚さ20～30cmの耕土層と床土を除去すると遺構面である灰白色シルト混じり細粒砂～極細粒砂層が現れる。ただしこの層はマンガンの集積が顕著なため、これを除去して黄灰色のシルト質極細粒砂層で遺構の検出を行った。南へ低くなる微高地縁辺部に位置し、溝１条、土坑２基、柱穴約20基を検出した。

２．遺構（図版62　写真図版76）

SK002I

ほぼ東西に主軸をとる土坑で、規模は長さ2.0m、最大幅95cm、深さ10cmである。埋土は灰白色シルト質極細粒砂であり、炭片と多くの土器を含んでいる。土器は坑底より浮いており、土師器皿（518）・小皿（519～524）・羽釜（525）、白磁碗（526）が出土している。

SD001I

微高地縁辺部に位置する溝である。直角に近く屈曲しながら南西に流れる。幅は最大1.0m、深さ40cmを測る。埋土は茶灰色シルト質極細粒砂で、遺物をほとんど含まない。最上層から須恵器坏Ｂ蓋（527）が出土している。

柱穴

柱穴の平面は円形であり、直径15～35cmの規模を測る。柱痕の認められるものは２基のみである。出土した遺物は多いが、小片のため時期は判然としない。

３．遺物（図版62　写真図版76）

SK002I（518～526）

518は土師器皿である。手づくね成形のものである。519～524は土師器小皿である。519～522は手づくね成形のもので、523・524は底部が糸切りである。525は土師器羽釜である。526は白磁碗である。横田・森田分類のⅣ類である。

SD001I（527）

527は須恵器坏Ｂ蓋である。形態は笠形で、天井部外面は回転ナデが施されている。８世紀中頃のものである。

４．小結

Ｈ地区で検出された12～13世紀の集落が微高地南辺部にまで広がり、８世紀頃の溝も存在することが明らかとなった。

第４節　Ｊ地区

１．概要（図版46・63　写真図版５・77）

Ｊ地区はJR加古川線沿いの東側に位置し、幅約10m、延長約65m、面積644㎡の範囲を調査した。調査区の長軸は北から約45°東に振るが、以下では便宜上、調査区の長軸方向を南北、短軸方向を東西と呼ぶ。遺構面は基本的には平安時代後期（12世紀中頃）の１面であるが、下層から弥生土器を伴う溝が出土したことから、ごく限定した範囲で第２面の調査を行っている。

Ｊ地区の基本層序は、上面に酸化マンガン斑や酸化鉄が集積した土層が繰り返し堆積している（２～

７層)。その最下位にあって酸化マンガン斑紋が明瞭に認められる砂質シルト層（北半では７層、南半では５層）の上面が第１面であり、現地表からは約50cm 下に位置し、標高は概ね5.3m である。第２面は調査区の南半のみで調査し、７・８層の上面、第１面の下約15cm にある。

第１面の遺構密度は低い。調査区の南端付近に平安時代後期の掘立柱建物１棟（SB101J）と、屋内に当たる位置に土坑３基（SK101J ～103J）があるものの、そこから中央にかけては遺構が見あたらない。北半では調査区にほぼ直交する細い溝３条（SD101J ～103J）があるが、出土遺物が少なく建物と同時期の溝とは言い切れない。このうち SD101J は他の遺構よりも数 cm 上位のマンガンの集積層から切り込んでおり、正確には同一遺構面の遺構ではない。

第２面は調査区南端付近で西側の側溝を掘削している際に弥生土器が出土し、東西方向の細い溝（SD201J）が存在することが判明したため、南端から約15m 分のみ調査したものである。土器はこの１点のみで、他に遺構が認められなかったことから、調査区全域の調査は行わなかった。

なお、調査区中央付近の７層下にも、斜めに走行する溝状の落ち込みがあることが、側溝断面で確認できたが、遺物が出土しなかったことから平面的な調査は行っていない。

２．遺構（図版64・65　写真図版77～81）

(1)　第１面

SB101J（図版64　写真図版77）

調査区の南端に位置する掘立柱建物で、他に重複する建物は無い。南辺と西辺は調査区外に伸びている可能性もあり、正確な規模は不明であるが、少なくとも南北４間、東西３間の規模を有する。南北方向を主軸とすると、その方向は北から40°東に振っており、調査区の方向に沿った建物である。柱の通りは比較的良く、柱間は南北では北端の１間が最も狭く1.8～2.0m、次いで南端の１間が約2.2m、中央の２間は2.3～2.5m と少し広くなる。東西では東端の１間が少し狭く1.9m 前後、他は1.9～2.2m となっている。北辺の柱では重なり合うものがあり、柱の据え換えが行われたと察せられる。この他、東辺寄りにある通りを外れた小穴も、この建物に伴う何らかの痕跡と考えたい。また、以下で報告する土坑３基はいずれもこの掘立柱建物の内側に位置し、SK103J の西側では柱を１本欠いている。

遺物は、柱穴内から土器や鉄器（鉄鏃）、石製品（砥石）などが出土している（528～534、M405・S406)。土器には完形品が無く、小片が多い。

SK101J（図版65　写真図版79）

J 地区の３基の土坑は SB101J の内側に位置しているが、それぞれ異なった特徴を持つ。

SK101J は東辺際の中央付近にあり、一辺75～80cm の隅丸方形状の土坑である。小さい割には深さが約１ｍもあり、シルト層～砂層を掘り抜いて、その下にある砂礫層を30cm 近く掘り込んでいる。土層は15層にも細分されるが、同じような厚さで水平に堆積したものが多い。上位の１～４層には炭化物や焼土、灰などが比較的多く含まれ、特に３層は炭化物や灰で黒っぽい色調を呈する。５層以下では黄褐色系の層と灰白色系の層とが交互に堆積しているような状況を示す。

遺物は多数出土しているが３～５層や最下位にある14・15層には少なく、１・２層、６・７層、９～13層に集中する（542～571)。比較的大形の破片が目に付き、小皿などには完形のものも含まれている。土器の接合状況をみると上位層の遺物と中～下位層の遺物は接合しておらず、土坑が埋るにしたがって、土器が廃棄されたと考えられる。出土遺物の中で中～下位層から出土した土器は545、569、570の３点で、他は上位層から出土している。また、10～20cm 大ほどの礫も出土している。

SK102J（図版65　写真図版80）

SK101J の１間南にある浅い土坑である。南北1.7m、東西1.5mの歪な台形状の土坑で、南に向かって浅い溝状の窪みが延びるが、どこまで延びていたかは、明確には捉えられていない。埋土はシルト質の１層で炭化物が混じる。

遺物はほぼ全面に散らばるように出土しているが、SK101J に比べ細片化したものが多い（572～577）。

SK103J（図版65　写真図版78）

SK101J とは１間隔てた西側にある長方形の土坑で、長さ1.9m、幅70～80cm、深さ30cm ある。埋土は３層に細分されるが、褐色系で暗い色調の２層が南半に、灰白色系の白っぽい色調の３層が北半に分布する。２層中には３層類似土のブロックが図示する以上に多く含まれ、３層下部にも２層がブロック状に含まれていることから、人為的な埋め戻しを想起させる。

遺物は土器では完形品が無く、小片が散在して出土している。須恵器の椀や鉢、土師器小皿や鍋などがあり（535～541）、鉄鏃（M406・M407）や拳大以下の礫も出土している。分布状況を見ると、土器は北半に集中し、特に２層と３層の境付近を中心に散らばる傾向が確認できる。また、少し大形の破片は上層に多い傾向にある。これに対して鉄鏃は中央以南の下層から出土している。土器の接合状況をみると、535と536の須恵器椀の破片はほぼ満遍なく散在しており、541の白磁碗の破片４片も土坑中央付近に散らばっていた。平面形や埋土の状況は土壙墓に近いものであるが、遺物が供献されたような出土状況を示していないことから、何らかの作業に伴う土坑と考えておきたい。

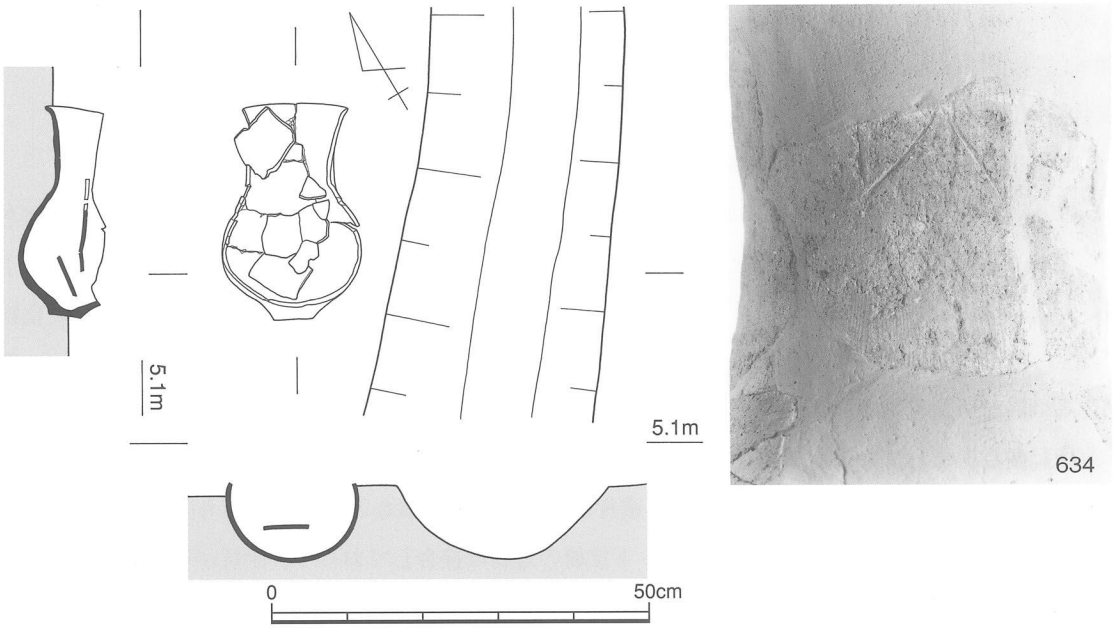
SD101J（図版63）

調査区の北端近くにあり、二股に分かれている。西壁の断面を見ると SD102J・SD103J よりも上位の４層下部から切り込んでいることが分かる。出土遺物は少なく、須恵器椀（578）を図示する。

SD102J・SD103J　（図版63　写真図版81）

調査区の中央やや北側にあり、東西に並んで走行する溝である。掘立柱建物とは５°ばかり方向を違えている。南側の SD103J は幅75cm、深さ20cm あり、断面形は逆台形でしっかりと掘り込まれている。これに対して北側の SD102J は深さが半分ほどで、幅も少し狭い溝である。

出土遺物はわずかで、奈良時代の須恵器坏（579）は混入の可能性がある。



第2図　溝SD201Jとその脇から出土した弥生土器のヘラ記号

(2)　第２面

SD201J（第２図　写真図版81）

調査区の南西隅を斜めに走行する小規模な溝で、方位は北から40°東に振る。幅約60cm、中央部の深さは約20cmあるが、部分的に両脇はこれより一段浅くなっている。埋土は２層に分かれるが、シルトが主体の土層である。埋土中からは弥生土器の小片がわずかながら出土している。

また、この溝の西脇から弥生時代後期の壺が１点出土している（634）。土器は長軸が溝に沿った方向で、横転した状態で出土しているが、溝の掘削面中に埋まり込んでいる。埋納を示すような掘方は確認できなかったが、周辺からは他に何も発見されていないことから、溝と何らかの関連性のある土器と考えたい。近接地に弥生時代の集落があるのかもしれない。

３．遺物（図版66～68　写真図版８・82～84）

(1)　第１面

SB101J（528～534）

528・529は須恵器椀である。底部は糸切りである。530は須恵器鉢である。531は須恵器小皿である。底部は糸切りである。532は土師器坏である。底部は糸切りである。533は土師器小皿である。底部は糸切りである。534は土師器皿である。手づくね成形のものである。

SK103J（535～541）

535・536は須恵器椀である。底部は糸切りである。537は須恵器鉢である。538・539は土師器小皿である。底部は糸切りである。540は土師器鍋である。541は白磁碗である。口縁の玉縁は小さい。

SK101J（542～571）

542～551は須恵器椀である。底部は糸切りである。552～556は須恵器小皿である。底部は糸切りである。557は須恵器鉢である。558～561・564・565は土師器小皿である。558～561は底部が糸切りで、564・565は手づくね成形のものである。562は土師器坏である。底部は糸切りである。563は土師器皿である。手づくね成形のものである。566～571は土師器鍋である。566～568は体部外面にユビナデが施され、569～571は体部外面に平行タタキが施されている。

SK102J（572～577）

572・573は須恵器椀で、底部は糸切りである。574は須恵器小皿で、底部は糸切りである。575は須恵器鉢である。576は土師器鍋で、体部外面に平行タタキが施されている。577は土師器坏で、底部は糸切りである。

SD101J（578）

578は須恵器椀である。

SD103J（579）

579は須恵器坏Ａである。底部はヘラ切りである。

包含層（580・581）

580は青磁碗である。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類である。581は平瓦である。凸面に斜格子のタタキが施され、布目は８～11本／cmである

金属製品（M405～M408）

M405～M407は鉄鏃である。M405はSB101J、M406・M407はSK103Jより出土したものである。M407は茎部に木質が残存している。M408は鉄釘である。SK102Jより出土したものである。

石製品（S406）

S406は砥石である。SB101Jより出土したものである。側面は４面とも使用されている。

⑵　第２面

634は弥生土器長頸壺である。外面はハケ調整で頸部には意匠不明のヘラ記号がある（第２図）。

４．小結

Ｊ地区の主要な遺構は12世紀中頃の掘立柱建物１棟と土坑３基である。出土遺物をみるとSK101JとSK103JがSB101Jよりも少し古く位置づけられるが、建物の存続時期を考えれば、３基の土坑は建物と共存し、その屋内での何らかの作業に伴う遺構であると考えられる。確認調査によれば、Ｊ地区南側には低湿な状況を示す土層が認められており、別の建物が展開していくことは考えにくい。昭和20年代の米軍撮影の空中写真では、Ｊ地区の南を東西にのびる市道に沿ってのみ家があり、その周囲には田畑が広がっている。Ｊ地区での遺構の分布はこのような散村の状況を反映していると考えたい。

第５節　Ｋ地区

１．概要（図版46・69　写真図版５・85）

Ｋ地区はＪ地区と同様にJR加古川線の南脇を調査したもので、Ｊ地区の約900m南西に位置する。当初の調査範囲は、幅約10m、延長約40mの約399㎡であったが、その後、南に隣接する加古川市施工の側道部分110㎡を調査したため、面積は509㎡となった。調査区の長軸は北から約65°東に振るが、以下では長軸側を東西、短軸側を南北と呼ぶ。

遺構面は平安時代（10世紀～12世紀後半）の１面である。Ｋ地区では西端から10～17mの範囲が、東側より約40cm高い微高地となっており、その方向は調査区に対して約30°北に振っている。微高地上では掘立柱建物４棟をはじめ多数の柱穴が、東側の低くなったところでは溝７条と畦畔・旧河道を発見した。掘立柱建物はすべて重複しており、規模や平面形を変えながら同じ場所で建て替えが行われている。

土層の堆積状況を見ると、調査区の西端付近では暗灰色の砂礫層（11層）が盛土直下で露呈しているが、東側へ向かって、次第にシルト層（７層）下に埋没していく。つまり、掘立柱建物のある微高地は、この隆起した砂礫層を中心に展開しており、柱穴の分布は、砂礫層が埋没するあたりから段落ち際にかけての狭い範囲に集中している。建物の方向は段落ちの向きに揃っており、柱穴の深さは砂礫層上では浅く、砂礫層がシルト層下に埋没するにしたがって深くなっている。

遺構面は、微高地上では盛土直下あるいは耕作土下５cm以内の高さにあるが、低地部ではさらに約40～50cm深くなっている。東に向かってわずかに深度を増しながら、調査区東端では旧河道に至る。

遺物は、柱穴内からは平安時代後期の土器小片がわずかに出土したに過ぎないが、溝内や溝が集まる段下付近の４～６層からは比較的多くの土器が出土し、瓦も出土した。溝ではSD003Kに集中し、他の溝からはわずかしか出土していない。溝（SD003K）や包含層から出土した土器は平安時代前期（10世紀代）のものが主体を占めるが、わずかながら古墳時代や平安時代後期（12世紀後半）のものも含まれている。

２．遺構（第70～72　写真図版85～87）

SB001K（図版70　写真図版86）

東西４間、南北５間をＬ字形に配する総柱の掘立柱建物である。南北軸は北から８°東に振る。柱間間隔は東西方向では2.0～2.5mとややばらつくが、2.2m前後となるものが多い。南北方向では、中央の

１間が1.4m と際だって狭くなっており、この東隣が1.6m、さらに東が1.8m となる。西隣では2.1m、その西側では2.1～2.3m となり、外側に向かって柱間間隔が広くなる。南辺では中央の柱を１本欠いており、ここに出入り口が想定できるかもしれない。

遺物は柱穴から須恵器の椀や鉢の破片が出土している（583・584）。

SB002K（図版71　写真図版86）

南辺は調査区際に柱があるため、さらに延びる可能性があるが、現状では３間（7.6m）×４間（8.8m）の東西棟で収まっているため、以下では、この規模の建物として記述する。主軸方向は東から３°北に振る。柱間間隔は梁行方向で2.4～2.6m、桁行方向で2.1～2.2m と梁行方向の方が少し長くなっている。南辺の柱列の一部が欠けているが、調査区の際に位置しているため、わずかなところで発見できなかったのかもしれない。遺物は柱穴から須恵器小皿が出土している（585）。

SB003K（図版72　写真図版86）

SB002K より１m ほど南東方向にずれた位置にある。南辺は調査区際に柱があるため、さらに延びる可能性があるが、現状では３間（6.6m）×４間（8.4m）の東西棟で収まっているため、以下では、この規模の建物として記述する。主軸方向は東から３°北に振る。柱間間隔は梁行方向で1.9～2.2m、桁行方向で1.8～2.2m とほぼ同じ長さとなる。間数は SB002K と同じであるが、柱間間隔が狭くなっているため、一回り小さな建物となっている。東辺中寄りの柱が１本欠落している。

SB004K（図版71）

４棟の中では最も小規模で、梁行２間（5.0m）、桁行３間（6.8m）の南北棟の総柱建物である。西辺では柱を１本欠くが、確認トレンチ内に位置するため、もともと無かったのかどうかは不明である。柱は南東隅の１本を除くと、比較的通りが良い。梁行方向の柱間間隔は2.1～2.4m、桁行方向の柱間間隔は2.2～2.5m である。主軸方向は北から５°西に振る。遺物は柱穴から須恵器小皿や土師器椀の破片が出土している（586・587）。

SA001K（図版72）

SB001K の北西にある４本の柱列で、建物と方向がほぼ揃っている。柱間間隔は2.2～2.4m である。SB001K との位置関係から、板塀や柵、垣根のような区画施設と考えられる。

SD001K ～ SD005K（図版72　写真図版87）

微高地の段差に沿って走行する小規模な溝である。分岐したり、途中で途切れたりしているものもあるが、中央を走る SD003K が最もしっかりと掘り込まれている。幅1.1m、深さ30cm あり、埋土中からは多くの須恵器や土師器が出土し、灰釉陶器も含まれる（589～620）。土器の時期は平安時代前期（10世紀代）のもので占められる。他の溝から出土した遺物は小片がわずかである（621・622）。

SD006K

段下の溝群から離れた小規模な浅い溝で、方向も異なる。

SF001K

調査区の北端に近い位置にあり、方向は溝（SD001K ～ SD005K）に近いが、より東に振っている。明瞭な高まりが確認できたわけではないが、周りの土に比べて酸化マンガンが少なく、粘質の強い部分が帯状に走行しており、断面でもわずかに隆起していることがうかがえたため、畦畔状の遺構と判断した。南辺に沿って１条の溝状の窪みが走る。

SR001K

調査区の北端にあり、南肩側のみを調査した。北側の側溝掘削の際に湧水が生じたため、最上部のシルト質砂層のみを約20cm掘削し、調査終了後に部分的に断ち割りを行うに留めた。遺物はほとんど出土していない。

３．遺物（図版73～75　写真図版８・88～90）

SB001K（582～584）

582・583は須恵器椀である。583は底部糸切りである。584は須恵器鉢である。

SB002K（585）

585は須恵器小皿である。底部は糸切りである。

SB004K（586・587）

586は須恵器小皿である。底部は糸切りである。587は土師器椀である。底部は糸切りである。

P113K（588）

588は須恵器小皿である。底部は糸切りである。

SD003K（589～620）

589は須恵器坏身である。590～596は須恵器椀である。590・591は輪高台を持ち、底部はヘラ切りである。592は底部ヘラ切りで、593～596は底部糸切りである。596は内外面に火襷をもっている。597は須恵器坏である。底部はヘラ切りで、内外面に火襷をもっている。598～601は須恵器壺である。599・600は双耳壺で、601は底部不調整である。602・603は須恵器甕である。604～608は土師器椀である。607・608は輪高台をもっている。表面が摩滅したものが多いが、604・608は底部ヘラ切りである。609は土師器底部で、高い輪高台をもっている。610～614は土師器坏である。表面が摩滅したものが多いが、底部はヘラ切りによるものと思われる。615・616は土師器皿である。615は表面が摩滅し、616の底部はナデが施されている。617は土師器羽釜である。618は土師器鉢である。619・620は灰釉陶器碗である。619は口縁部から体部にかけて浸け掛けで施釉し、底部はヘラケズリがなされているが、わずかに糸切りが残存している。620は体部内外面に自然釉が付着し、底部は糸切りである。

SD002K（621）

621は須恵器椀である。底部は糸切りである。

SD001K（622）

622は土師器皿である。615と同様の器形と考えられる。

包含層（623～633）

623～625は須恵器鉢、626～628は須恵器甕である。629は土師器羽釜である。630～632は白磁碗である。630・631は横田・森田分類白磁碗Ⅳ－１類、632は白磁碗Ⅳ－２類である。633は平瓦である。

４．小結

Ｋ地区では10世紀代に微高地の段下に溝（SD001K・SD003K）が掘削され、土器が棄てられているが、これに対応する建物は見つかっていない。その後、12世紀中頃までには溝がほぼ埋没し、微高地上に掘立柱建物が建つ。建物はほぼ同じ場所で形や規模を変えながら4回ほど建て替えが行われていると考えられる。わずかな出土遺物を手掛かりにすれば、SB001K → SB003K → SB002K・SB004K の変遷が想定できる。これ以外にも調査区南端で柱の並びが確認できるものがあり、集落は南側へ展開する可能性がある。微高地西側には砂礫層が広がって、柱穴の密度も極端に低くなることから、Ｊ地区と同じく散村の状況を示すと考えられる。

第５章　自然科学的調査の成果

第１節　溝之口遺跡から出土した木材・炭化材の樹種（写真図版91）

パリノ・サーヴェイ株式会社
高橋　敦

はじめに

加古川市に所在する溝之口遺跡では、平安時代（10世紀頃）とされる溝や弥生時代後期とされる焼失住居が検出されている。今回の分析調査では、溝から出土した木器、および弥生時代後期の焼失住居より出土した炭化材について、樹種同定を実施し、当時の木材の利用状況に関する資料を得る。

１．試料

試料は、木製品２点（W-1・2）と焼失住居跡から出土した垂木と考えられる炭化材２点（西1-1・2）の合計４点である。出土遺構、時期等については結果を呈示した第１表に併記する。

２．分析方法

木製品は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

炭化材は、自然乾燥させた後、３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）およびWheeler 他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織の特徴については、林（1990）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

３．結果

樹種同定結果を第１表に示す。木製品は針葉樹２種類（スギ・ヒノキ）、炭化材は２点とも落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

• スギ（Cryptomeria japonica（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

• ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

第１表　樹種同定結果

試料No.	報告No.	遺構	時期	器種	樹種
W-1	W1	SD203A	平安時代(10世紀)	箱	ヒノキ
W-2	W2	SD203A		板	スギ
西1-1		SH302A（焼失住居）	弥生時代後期	垂木？	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
西1-2		SH302A（焼失住居）	弥生時代後期	垂木？	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

• コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

４．考察

木製品は、箱（W1）がヒノキ、板（W2）がスギであった。スギとヒノキは、共に木理が通直で割裂性が高く、加工が容易であり、板状の加工を施す製品の樹種としては適材である。箱については、これまでにも但馬地域や播磨地域で出土例があり、樹種はスギとヒノキが利用されている。今回の結果とも調和的である（中村，2001）。板状加工を施す製品は、地域によって器種構成が異なるが、スギやヒノキが多く利用されており、日本海側でスギ、瀬戸内海側でヒノキが多い傾向がある。

一方、竪穴住居から出土した炭化材は、垂木の可能性が考えられており、いずれもクヌギ節であった。クヌギ節は、二次林等にみられる落葉広葉樹であり、木材は重硬で強度が高い。弥生時代の建築部材は、播磨地域でコナラ節、淡路地域でサカキが柱に利用された例が確認されている（中村，2001）。弥生時代の竪穴住居の構築部材については調査事例が少ないが、資料を蓄積することにより、地域性や他の木製品との樹種による使い分け等の状況が復元できる可能性がある。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料32，京都大学木質科学研究所，66-176.

伊東　隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料35，京都大学木質科学研究所，47-216.

中村　弘，2001，兵庫県における樹種同定資料について．兵庫県埋蔵文化財研究紀要，創刊号，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所，103-121.

島地　謙・伊東　隆夫,1982,図説木材組織．地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

第２節　溝之口遺跡出土土器の胎土分析（写真図版９～１２）

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・石岡智武

はじめに

加古川市に所在する溝之口遺跡は、加古川下流域左岸に形成された沖積低地上に位置する。発掘調査では弥生時代、古墳時代、平安時代の各時代の集落跡が確認されており、それぞれ竪穴住居跡や掘立柱建物跡などをはじめとする遺構やそれらに伴う多数の土器などの遺物が検出されている。

本報告では、古墳時代中期初頭とされる遺構から出土した土師器および韓式系土器、さらに弥生時代後期とされる遺構から出土した弥生土器の材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各土器間、各器種間および各時期間での胎土の類似性あるいは特異性を見出し、溝之口遺跡から出土した土器の製作に関わる資料を作成する。特に、韓式系土器については、大阪市に所在する長原遺跡出土のものとの類似性が指摘されていることから、ここでは長原遺跡出土韓式系土器についても分析を行い、その比較を行う。また、胎土から検出された鉱物および岩石の種類構成から、材料の採取地についても検討を行う。

１．試料

試料は、溝之口遺跡から出土した土師器片５点、韓式系土器片３点、弥生土器片５点および長原遺跡より出土した韓式系土器片３点の合計16点である。各試料にはそれぞれ報告No.が付されている。各試料の出土した遺構や器種、時期などは一覧表にして第２表に示す。

２．分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉砕による重鉱物分析や切片による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光Ｘ線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の分析で対象とする弥生土器および土師器も、同一の地質分布範囲内で作られた可能性もあるため、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

第２表　胎土分析試料一覧および胎土分類

報告No.	種別	器種	時期	出土地区	遺構	遺構2	備考	胎土分類																									
								A										C										D				
								1					2					1					2									
								c	m	f	vf	csi	c	m	f	vf	csi	c	m	f	vf	csi	c	m	f	vf	csi	c	m	f	vf	csi
84	土師器	高坏	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B									■	■	■																
81	土師器	小型壺	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B															■	■											
86	土師器	甕	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B									■		■																
87	韓式系土器	甕	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B														■			■										
82	韓式系土器	平底鉢	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B														■			■										
96	弥生土器	甕	弥生時代後期	溝之口遺跡	SH302B				■	■	■	■																				
119	弥生土器	壺	弥生時代後期	溝之口遺跡	SH302B			■	■	■	■	■																				
147	弥生土器	甕	弥生時代後期	溝之口遺跡	SH302B					■	■																					
184	弥生土器	高坏	弥生時代後期	溝之口遺跡	SH303B				■	■																						
187	弥生土器	イイダコ壺	弥生時代後期	溝之口遺跡	SH303B						■																					
83	土師器	高坏	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B																					■						
85	土師器	甕	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B								■	■	■	■																
88	韓式系土器	平底鉢	古墳時代中期	溝之口遺跡	SH301B																								■		■	
A	韓式系土器	平底鉢	古墳時代中期	長原遺跡	北区南半包含層	R874	格子タタキ					■																				
C	韓式系土器	平底鉢	古墳時代中期	長原遺跡	北区北半包含層	R1253	平行タタキ				■																					
E	韓式系土器	平底鉢	古墳時代中期	長原遺跡	南区長原213号墳東周溝上層	R1974	ハケ			■																						

胎土分類の説明
A1：岩石片の種類構成が主にチャート・凝灰岩・流紋岩・花崗岩類からなる
A2：岩石片の種類構成はA1と同様であるが、火山ガラスを比較的多く含む
C1：主要な岩石片は花崗岩類のみであり、鉱物片に角閃石または酸化角閃石をやや多く含む
C2：主要な岩石片は花崗岩類のみであり、鉱物片に黒雲母をやや多く含む
D：主要な岩石片は頁岩であり、極めて微量の安山岩を伴う
ピークを構成する粒径：c;粗粒砂　m;中粒砂　f;細粒砂　vf;極細粒砂　csi;粗粒シルト

３．結果

観察結果を第２・３表、第３～５図に示す。鉱物片および岩石片の種類構成をみると、いずれの試料も石英の鉱物片が最も多く、これに次いで斜長石の鉱物片とカリ長石の鉱物片を比較的多く含むことは共通する。しかし、それ以外の鉱物片および岩石片の種類構成は、報告No.81・87・82・83の４点と報告No.88の１点およびこれらを除いた11点とに分けることができる。報告No.81・87・82・83の４点は、主要な岩石片といえるのは花崗岩類のみであることが特徴である。その中で、報告No.81・87・82の３点は角閃石または酸化角閃石の鉱物片がやや多く含まれ、報告No.83は黒雲母がやや多く含まれる。また、報告No.88は、主要な岩石片は頁岩であり、その他に極めて微量の安山岩が含まれている。一方、これら以外の11点は、鉱物片では報告No.81・87・82と同様に角閃石が含まれる程度であるが、岩石片には、チャート、頁岩などの堆積岩類、凝灰岩と流紋岩・デイサイトとされる火山岩類、さらに花崗岩類（多結晶石英を含む）や火山ガラスなど多種の岩石片が混在する。

第3表　薄片観察結果(1)

報告No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																					合計
			鉱物片									岩石片										その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
84	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂	2											1											3
		中粒砂	2		2									3			1	1					3		12
		細粒砂	1	1	1		1							1									8		13
		極細粒砂	5	1	2									1			1						4	1	15
		粗粒シルト	4	1	2																			1	8
		中粒シルト	2	1	2																				5
	基質																								196
	孔隙																								7
81	砂	細礫																							0
		極粗粒砂		1																					1
		粗粒砂	4	1	1													3							9
		中粒砂	6	1	4													2							13
		細粒砂	7		7	1	1							1											17
		極細粒砂	17	3	7		2				1														30
		粗粒シルト	13	2	11																			1	27
		中粒シルト	4		5																				9
	基質																								193
	孔隙																								12
86	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂	1										3	1	3		1	1				1	1		12
		中粒砂	1	1	1							1	4	5	3								5		21
		細粒砂			1									1									6		8
		極細粒砂	6	1	2																		2		11
		粗粒シルト	3	1	3																		1		8
		中粒シルト	1		1																				2
	基質																								128
	孔隙																								3
87	砂	細礫																1							1
		極粗粒砂	1																						1
		粗粒砂	6	5	1													4							16
		中粒砂	33	5	2	3									1			7							51
		細粒砂	23	2	5	2												1					1		34
		極細粒砂	24	4	6						1														35
		粗粒シルト	21	5	16																			4	46
		中粒シルト	11	2	3																				16
	基質																								377
	孔隙																								24
82	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂			2													3							5
		中粒砂	3	1	1				1								1	1							8
		細粒砂	1	1	3	1																			6
		極細粒砂	2				2				1														5
		粗粒シルト	2	1	1		2																		6
		中粒シルト			1																				1
	基質																								52
	孔隙																								21
96	砂	細礫	1																						1
		極粗粒砂	2																						2
		粗粒砂	3	2								1													6
		中粒砂	11	3	1							1		2			2								20
		細粒砂	13	1	4							2	1	1			1								23
		極細粒砂	14	1	4																				19
		粗粒シルト	12	1	6																				19
		中粒シルト	7		4																				11
	基質																								167
	孔隙																								18

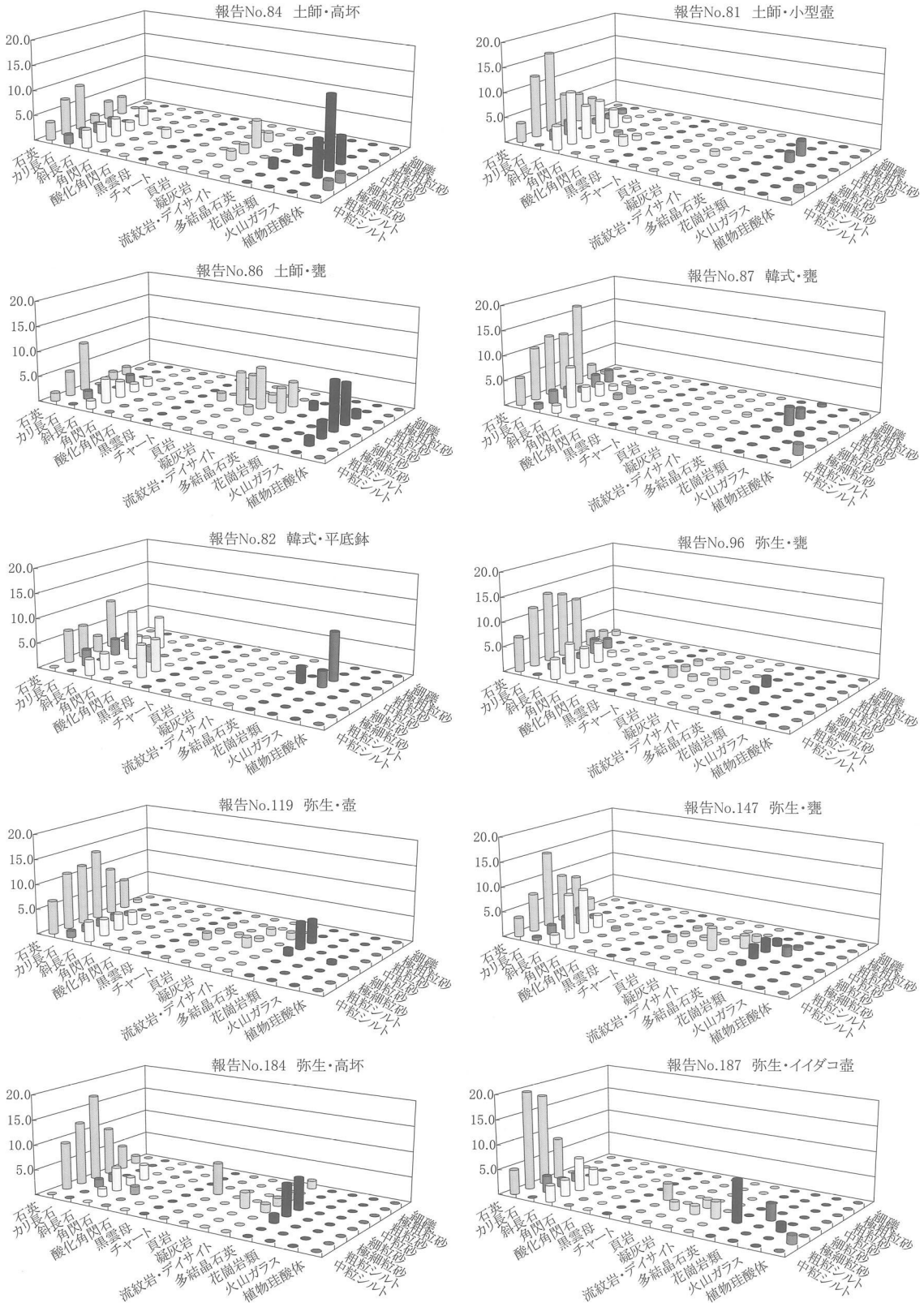
第3表　薄片観察結果(2)

報告No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計
			鉱物片									岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
119	砂	細礫																							0
		極粗粒砂	1																						1
		粗粒砂	9									1		2	2		7								21
		中粒砂	14	1	1							1	1	1			8								27
		細粒砂	21	2	4							2		3			2						1		35
		極細粒砂	18	2	5							1													26
		粗粒シルト	17	2	5																				24
		中粒シルト	10	2	6																				18
	基質																								261
	孔隙																								15
147	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂	4									1			2		2	1							10
		中粒砂	13	1								1	1	1	4		4	3							28
		細粒砂	15	5	4	1						2	1	7			4				1				40
		極細粒砂	24	4	14												1								43
		粗粒シルト	12	3	14																				29
		中粒シルト	6	1	3																				10
	基質																								233
	孔隙																								17
184	砂	細礫													1										1
		極粗粒砂	1																						1
		粗粒砂	3												1										4
		中粒砂	6		2							4			1		4								17
		細粒砂	11	1	1									2	1		4								20
		極細粒砂	8	1	3	1											1								14
		粗粒シルト	6		1																				7
		中粒シルト																							0
	基質																								118
	孔隙																								12
187	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂																							0
		中粒砂																							0
		細粒砂	5	1	2							2		1				2							13
		極細粒砂	11	1	4								1	1	2		5						1		26
		粗粒シルト	12	2	2																			1	17
		中粒シルト	3		2																				5
	基質																								106
	孔隙																								5
83	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂	1		1													4							6
		中粒砂	2	2	4					1							1	3				1			14
		細粒砂	2	3	6					3							1								15
		極細粒砂	10	4	13	1				2							1						1		32
		粗粒シルト	1	1	10			1			1														14
		中粒シルト	1	1	5																				7
	基質																								199
	孔隙																								4
85	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂	4	1									3									1			9
		中粒砂	3		1								3		3										10
		細粒砂	1	1	1								3				1						3		10
		極細粒砂	1	1	3								1				1						1		8
		粗粒シルト	1																						1
		中粒シルト			2																				2
	基質																								122
	孔隙																								9

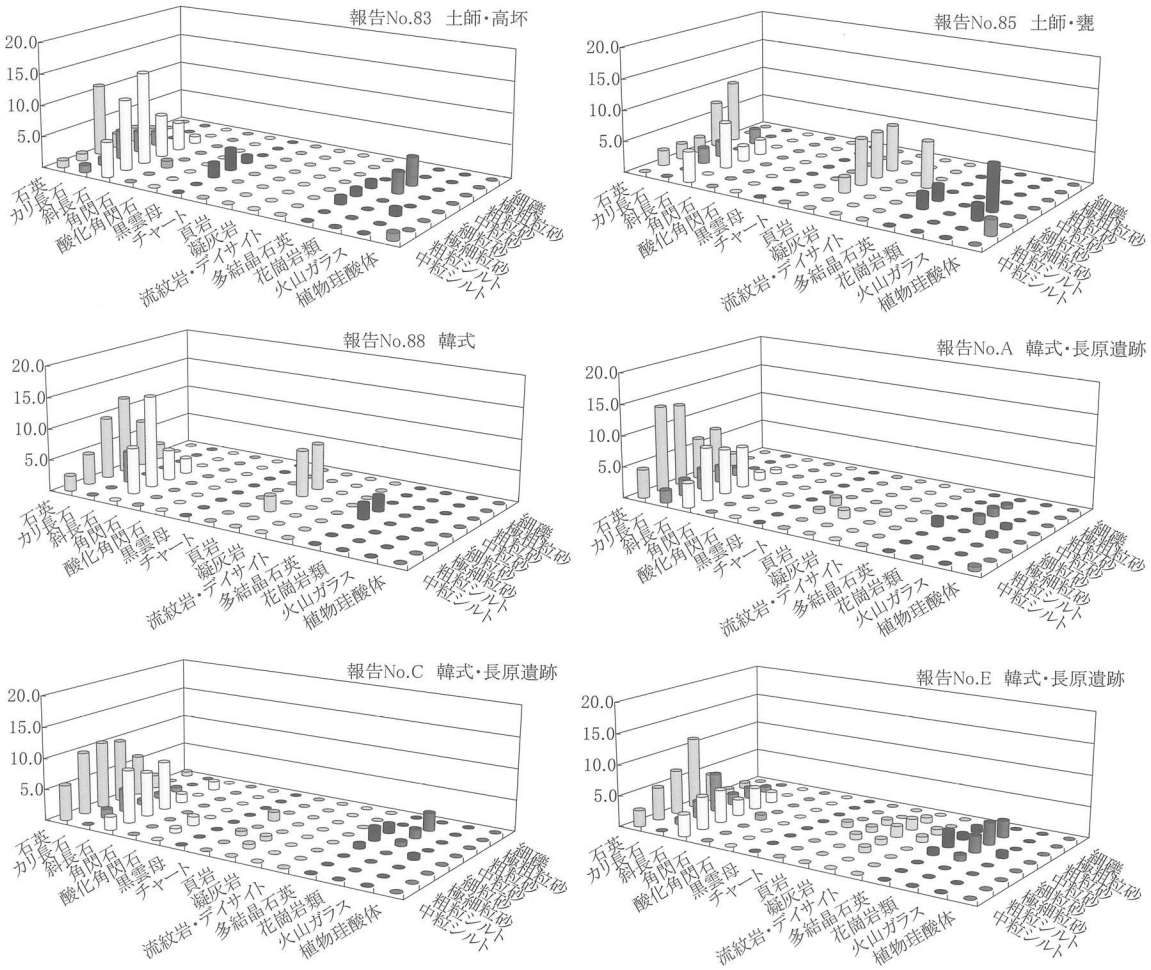
第3表　薄片観察結果(3)

報告No.	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計
			鉱物片									岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	酸化角閃石	緑廉石	白雲母	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	破砕状花崗岩	結晶片岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
88	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																							0
		粗粒砂	1										3									1			5
		中粒砂	3		1								3			1	1								9
		細粒砂	5		2												1								8
		極細粒砂	4	2	6								1												13
		粗粒シルト	2		3																				5
		中粒シルト	1																						1
	基質																								116
	孔隙																								7
A	砂	細礫																							0
		極粗粒砂																1							1
		粗粒砂	3		1													2							6
		中粒砂	11	2	2													2	1				1		19
		細粒砂	10	4	10							2		1			2						1		30
		極細粒砂	20	5	11							1	2												39
		粗粒シルト	21	4	13						3														41
		中粒シルト	7	3	6																				16
	基質																								497
	孔隙																								23
C	砂	細礫	1																						1
		極粗粒砂			2													4							6
		粗粒砂	3	1													2	2	3						11
		中粒砂	9	1	2							2					3	1							18
		細粒砂	14	1	11			1									1						1		29
		極細粒砂	15	5	10		2					1	1												34
		粗粒シルト	14	2	12		1	1					1												31
		中粒シルト	8		3																				11
	基質																								364
	孔隙																								13
E	砂	細礫																							0
		極粗粒砂	1	1										1			1	3							7
		粗粒砂	1	2	2								1	2	1		1	4	1	1					16
		中粒砂	5	2	4							1	1	2	1		3	3	1				1		24
		細粒砂	13	7	3	1							1	1			1	1							28
		極細粒砂	8	3	6									1											18
		粗粒シルト	6	1	6																				13
		中粒シルト	3		4																				7
	基質																								301
	孔隙																								7

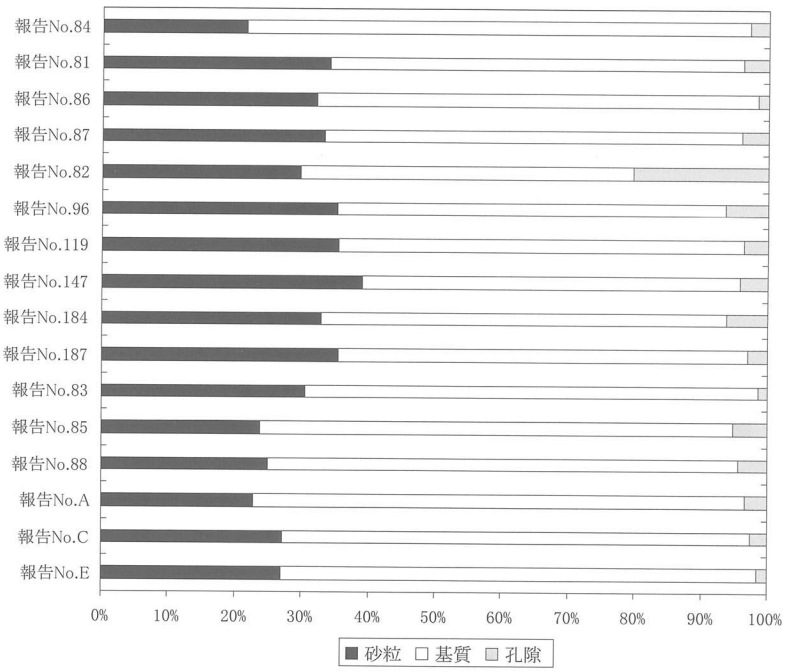
これらの状況から、報告No.81・87・82・83の４点と報告No.88の１点を除いた11点をＡ類とし、その中で特に火山ガラスの多い報告No.84・86・85の３点をＡ２類として、他をＡ１類と分類する。このＡ１類およびＡ２類の鉱物片・岩石片の種類構成は、これまでに当社が胎土分析を行った伊丹市所在の岩屋遺跡および小阪田遺跡における弥生土器胎土の分類であるＡ１類およびＡ２類とほぼ同様である。また、報告No.81・87・82・83の４点の胎土は、ここではＣ類とし、その中で角閃石をやや多く含む報告No.81、87、82をＣ１類とし、黒雲母をやや多く含む報告No.83をＣ２類とする。これらをＢ類としない理由は、上述した伊丹市所在の２遺跡における胎土分類のＢ類との混同をさけるためである。さらに、報告No.88についてはＤ類とする。



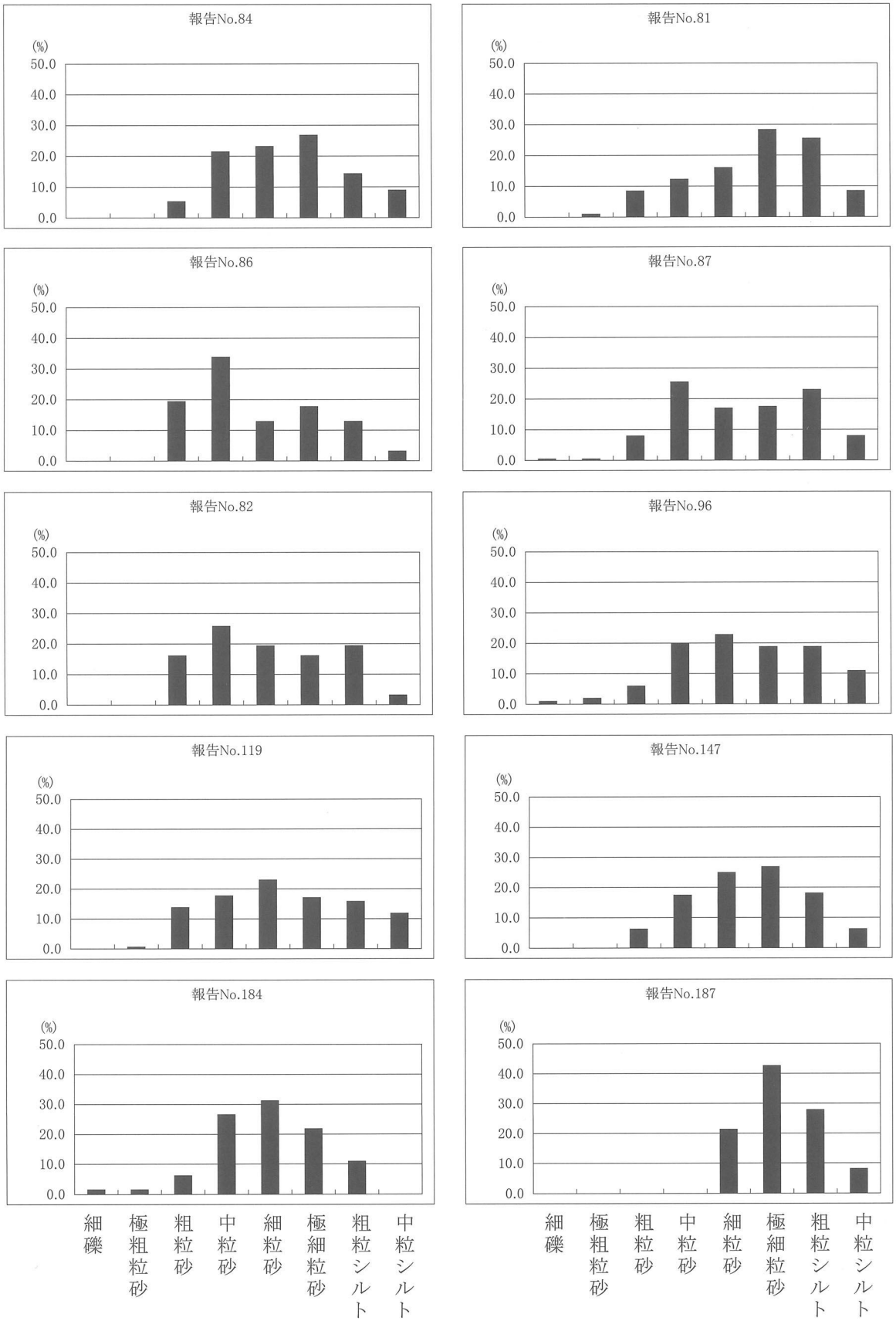
第３図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）



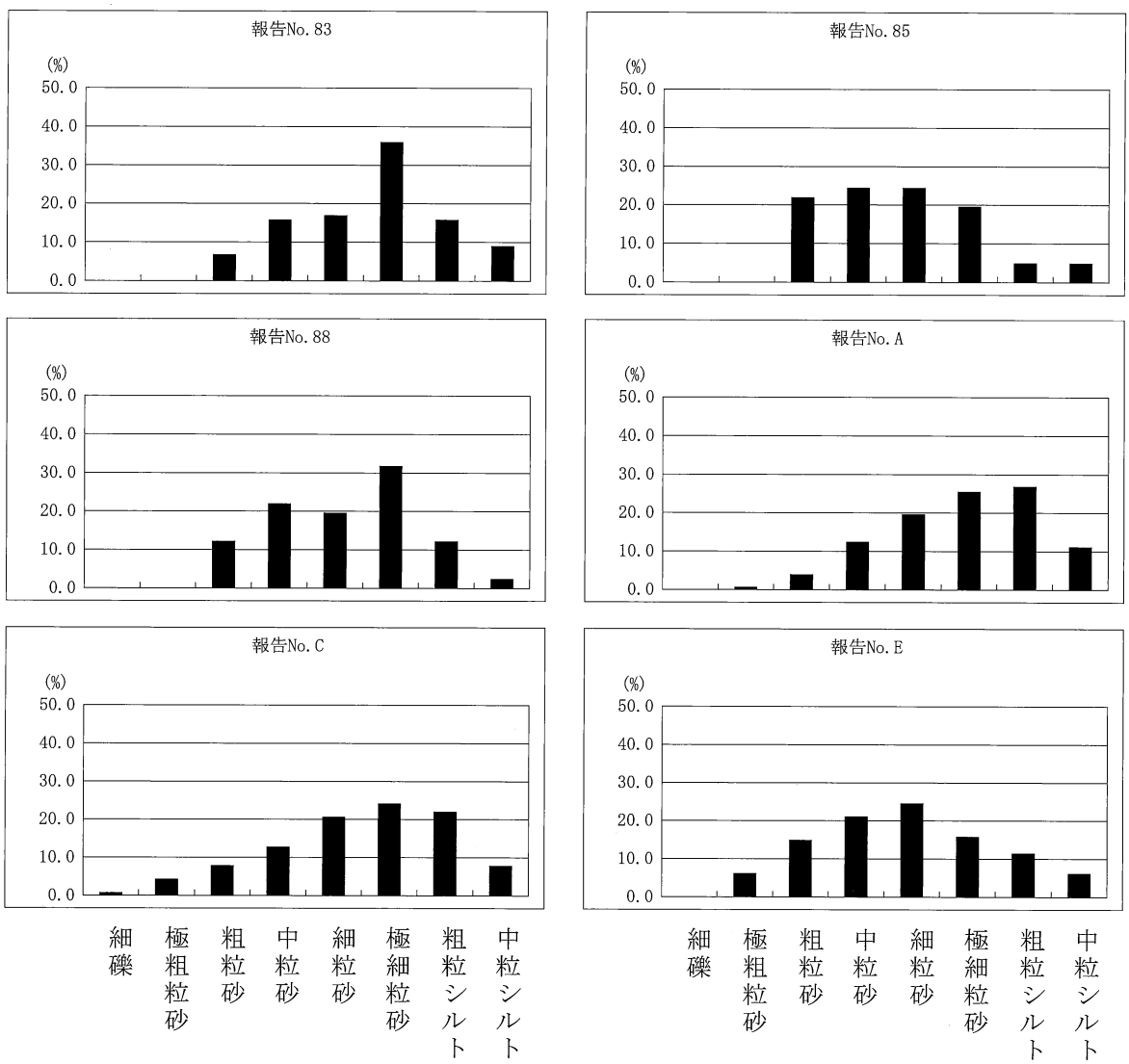
第３図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）



第４図　砂粒・基質・孔隙の割合



第5図　胎土中の砂の粒径組成（1）



第５図　胎土中の砂の粒径組成（2）

一方、各試料の粒径組成をみると、試料間でやや違いのあることがわかる。すなわち、第５図に示されたヒストグラムにおいて、単独峰の形状を示すものだけではなく、複数のピークを示すものもある。また、そのピークとなる粒径も極粗粒砂から粗粒シルトまで様々である。さらに、ピークがなだらかであり、それを構成する粒径は複数におよぶと見た方がよいものもある。このような状況から、本分析では、粒径組成の状況を、ピークを構成する粒径を表記することで表す。

前述した鉱物片および岩石片の種類構成による分類と上述の粒径組成の状況を表記した結果を第１表に併記する。この結果を土器の種別でみると以下のようになる。

１）土師器

５点の試料のうち、報告 No.84・86・85の３点はＡ２類、報告 No.81はＣ１類、報告 No.83はＣ２類にそれぞれ分かれる。さらに、粒径組成では、Ａ２類の試料も特徴が異なり、報告 No.84と85は粗粒砂または中粒砂から極細砂までの幅広いピークを示し、報告 No.86は中粒砂と極細粒砂の２つのピークを持つ。また、Ｃ１類の報告No.81は細粒砂から極細粒砂の、Ｃ２類の報告No.83は細粒砂の比較的明瞭なピークを持つ。

２）韓式系土器

溝之口遺跡出土試料３点のうち、報告No.87と82の２点はともにＣ１類に分類され、報告No.88はＤ類に分類された。また、粒径組成では、３点ともに中粒砂と粗粒シルトまたは極細粒砂の２つのピークを持つヒストグラムを呈する。

一方、長原遺跡出土試料の３点は、いずれもＡ１類に分類された。また、粒径組成では、いずれも比較的明瞭なピークを持つヒストグラムである。ただし、ピークの粒径は、報告No.Aが粗粒シルト、報告No.Cが極細粒砂、報告No.Eが細粒砂となっている。

３）弥生土器

５点の試料は、いずれもＡ１類に分類される。ただし、粒径組成は、５点の試料間で異なっている。甕の報告No.96は、ピークが明瞭ではなく、中粒砂から粗粒シルトに至る範囲では、ほとんど差のない粒径組成を示す。壺の報告No.119も同様に不明瞭なピークであり、粗粒砂から中粒シルトまでの差が小さい。一方、甕の報告No.147および高坏のNo.184は、比較的明瞭なピークを持つヒストグラムを呈し、ピークの粒径は、それぞれ細粒砂～極細粒砂、中粒砂～細粒砂である。イイダコ壺の報告No.187は、極細粒砂に非常に明瞭なピークを持つヒストグラムを呈し、さらに中粒砂以上の粗粒の砂が認められないことも他の弥生土器とは異なる特徴である。

４．考察

播磨平野東部に相当する加古川下流域の背後に広がる地質については、猪木（1981）や日本の地質「近畿地方」編集委員会編（1987）および尾崎ほか（1995）などにより概観することができる。加古川下流域から中流域の左岸側には鮮新世～更新世の湖成-河成堆積物である大阪層群により構成される台地と丘陵が広がり、右岸側には相生層群と呼ばれる流紋岩質やデイサイト質の溶岩および火砕岩（凝灰岩）からなる地質の山地が広がる。また、相生層群が広がる山地には白亜紀～古第三紀に貫入した播磨花崗岩類の岩体が点在する。さらに加古川の上流域の山地には、チャート、砂岩、頁岩などの堆積岩からなる丹波帯と呼ばれる地質が分布する。したがって、加古川下流域の堆積物中には、これらの地質に由来する岩石片や鉱物片が混在していると考えられる。その状況は、今回の分析における胎土Ａ類の鉱物片・岩石片種類構成とほぼ一致することから、溝之口遺跡出土試料における胎土Ａ類は、加古川下流域の堆積物を材料としている可能性がある。なお、Ａ類の特徴の一つである火山ガラスは、大阪層群中に挟まれる未固結のテフラ層に由来すると考えることができる。Ａ１類とＡ２類の違いは、加古川下流域内における材料の採取地あるいは採取層位の違いに起因すると考えられる。今回の溝之口遺跡出土試料でいえば、土師器と弥生土器との間にその違いがあったと言うことができる。

また、発掘調査所見では、弥生土器のイイダコ壺は、土器表面に砂粒がほとんど認められないことから、その胎土の特異性が指摘されたが、砂粒の種類構成は他の弥生土器と同じＡ類である。したがって、材料の採取地は他の弥生土器と同様に加古川下流域である可能性が高い。しかし、イイダコ壺の胎土の特異性は、その粒径組成によって示されたことから、他の弥生土器とは異なる製作事情があったと考えられる。なお、粒径組成の違いは、弥生土器間および弥生土器の甕間（報告No.96と報告No.147）でも認められた。これらの試料間の粒径組成の違いの意味を考えるためには、１箇所の製作地における胎土の均一性（ばらつき）の程度を把握するなどの分析事例の蓄積が必要である。今後の展開に期待したい。

ところで、前述したように、伊丹市所在の岩屋遺跡および小阪田遺跡出土の弥生土器も、今回のＡ１類およびＡ２類と同様の鉱物・岩石種類構成を示す。これは、伊丹市の平野の地質学的背景が、加

古川下流域とほぼ共通していることによるものであると考えられ、この分析結果によって、特に両地域の弥生土器に密接な関係があったと言うことではない。

同様に長原遺跡出土の韓式土器３点の胎土が示すＡ類の組成も、加古川下流域との関係を示すものではない。長原遺跡の立地する大阪平野東南部の地質学的背景を宮地ほか（1998）などにより概観すると、砕屑物の供給源としての地質は、生駒山地南部を構成する領家帯の花崗岩類および金剛山地北部を構成する二上層群の凝灰岩および溶岩類、さらに山地周囲の丘陵を構成する大阪層群などがあげられる。大阪層群の礫層中にはチャートや頁岩などの堆積岩類が含まれている。したがって、長原遺跡出土の韓式土器３点が示すＡ類の胎土は、長原遺跡の地質学的背景を反映していると考えられる。

なお、現時点における各地のＡ類を詳細に見れば、伊丹市の２遺跡出土の弥生土器胎土の鉱物組成は、斜長石の量比が溝之口遺跡出土の弥生土器胎土に比べて高い傾向にあり、試料によっては石英と同量程度に多いものも認められる。長原遺跡出土韓式土器のＡ類は、伊丹市の弥生土器同様に斜長石の量比が高い傾向にあることと、極めて微量であるが花崗斑岩の岩石片を伴っていることも指摘できる。今後の各地における分析事例の蓄積により、これらの微小な違いが、局地性を示す特徴となる可能性もあると考えられる。

凝灰岩および流紋岩がほとんど含まれずに花崗岩を主体とするＣ類およびＤ類の胎土は、加古川下流域の地質学的背景と異質であるといってよい。その岩石片の構成から、花崗岩類が広く分布する地質学的背景を持った地域との関わりが考えられる。花崗岩類を背景とする地域は近畿・中国地方から九州北部地域さらには韓半島にも広く分布する。また、Ｄ類は頁岩と安山岩という岩石片の組み合わせであるが、花崗岩類も伴わないという特徴も重要である。すなわち、上述したように近畿以西の地域では、花崗岩類の分布しない地域は、紀伊半島南半部から瀬戸内を除く四国および九州中～南部となる。現時点ではＣ類およびＤ類ともに関わりのある具体的な地域名を特定することはできないが、少なくともＣ類およびＤ類に分類された試料は、加古川下流域外の地域からの搬入品である可能性がある。これに相当する試料は、報告No.81と83の土師器および溝之口遺跡出土の韓式系土器３点であった。ここで、特に注目されるのは、溝之口遺跡出土の韓式系土器は３点ともに他地域からの搬入品である可能性があることが指摘されたのに対して、長原遺跡出土の韓式系土器は、３点ともに遺跡周辺域での製作が示唆されたことである。このことは、地域による韓式系土器の製作事情の違いを示しているのかも知れない。今後、「韓式」の名前の由来となっている韓半島産の土器も含めた分析事例による解析が望まれる。

今後も兵庫県内各地における土器の胎土分析事例を蓄積し、解析するためには、胎土の共通性を見出すことも必要であるが、それと同時に、より局所的な違いも識別し、整理していくことが必要であると考える。

引用文献

猪木幸男，1981，20万分の１地質図幅「姫路」. 地質調査所 .

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121.

宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川　旭，1998，大阪東南部地域の地質. 地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，113p.

日本の地質「近畿地方」編集委員会，1987，日本の地質６　近畿地方．共立出版，297p.

尾崎正紀・栗本史雄・原山　智，1995，北条地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１図幅），地質調査所，100p.

第６章　まとめ

第１節　山陽本線地区の遺跡の変遷（第６図）

今回調査を行った溝之口遺跡のうち山陽本線地区の遺構の変遷の概略をまとめる。

山陽本線地区は線路と道路と水路で分断されたＡ地区・Ｂ地区・Ｃ地区・Ｄ地区・Ｅ地区・Ｆ地区・Ｇ地区の７地区で本発掘調査を実施した。第３章では地区ごとに遺構と遺物の各説を行ってきたので、ここでは時代ごとに遺構の変遷をまとめ、環境とのかかわりを述べたい。

１．遺構の変遷

今回調査を行った溝之口遺跡の山陽本線地区では、弥生時代中期・弥生時代後期から古墳時代初頭・古墳時代中期・古墳時代後期・平安時代・中世・近世の大きく７時期の遺構と遺物を確認した。奈良時代については遺構と遺物、ともに確認できなかった。

弥生時代中期

弥生時代中期はＣ地区の溝 SD102C、Ｂ地区の柱穴 P301B・P307B・P312B、Ｅ地区の溝 SD504E・SD502E が存在する。いずれも市道平野神野線より東側の埋没微高地の縁辺に存在している。検出した遺構は溝と柱穴のみである。溝 SD502E・SD504E はⅡ様式であり、溝 SD102C、柱穴 P301B・P307B・P312B はⅢ様式である。遺物はこれらの遺構の他にはＢ地区の新しい遺構に混入した土器があるのみであり、出土量は少ない。このことから、弥生時代中期は埋没微高地の縁辺高所に立地しており、削平されている可能性を考慮しても遺構密度は低く、集落の縁辺である。

弥生時代後期から古墳時代初頭

弥生時代後期から古墳時代初頭はＣ地区の柵 SA101C、Ｂ地区の竪穴住居 SH302B・SH303B・土坑 SK304B・SK305B・SK306B・SK307B、Ｅ地区の溝 SD503E が存在する。弥生時代中期と同様にいずれも市道平野神野線より東側の埋没微高地の縁辺に存在している。検出した遺構は竪穴住居と土坑と柵と溝である。竪穴住居 SH303B および竪穴住居 SH302B は庄内並行期である。土器の廃棄状況から SB302B の東側にも別の竪穴住居の存在が考えられる。Ｂ地区東端の水田は土層と遺構の切り合いから、この時期に位置づけられる。

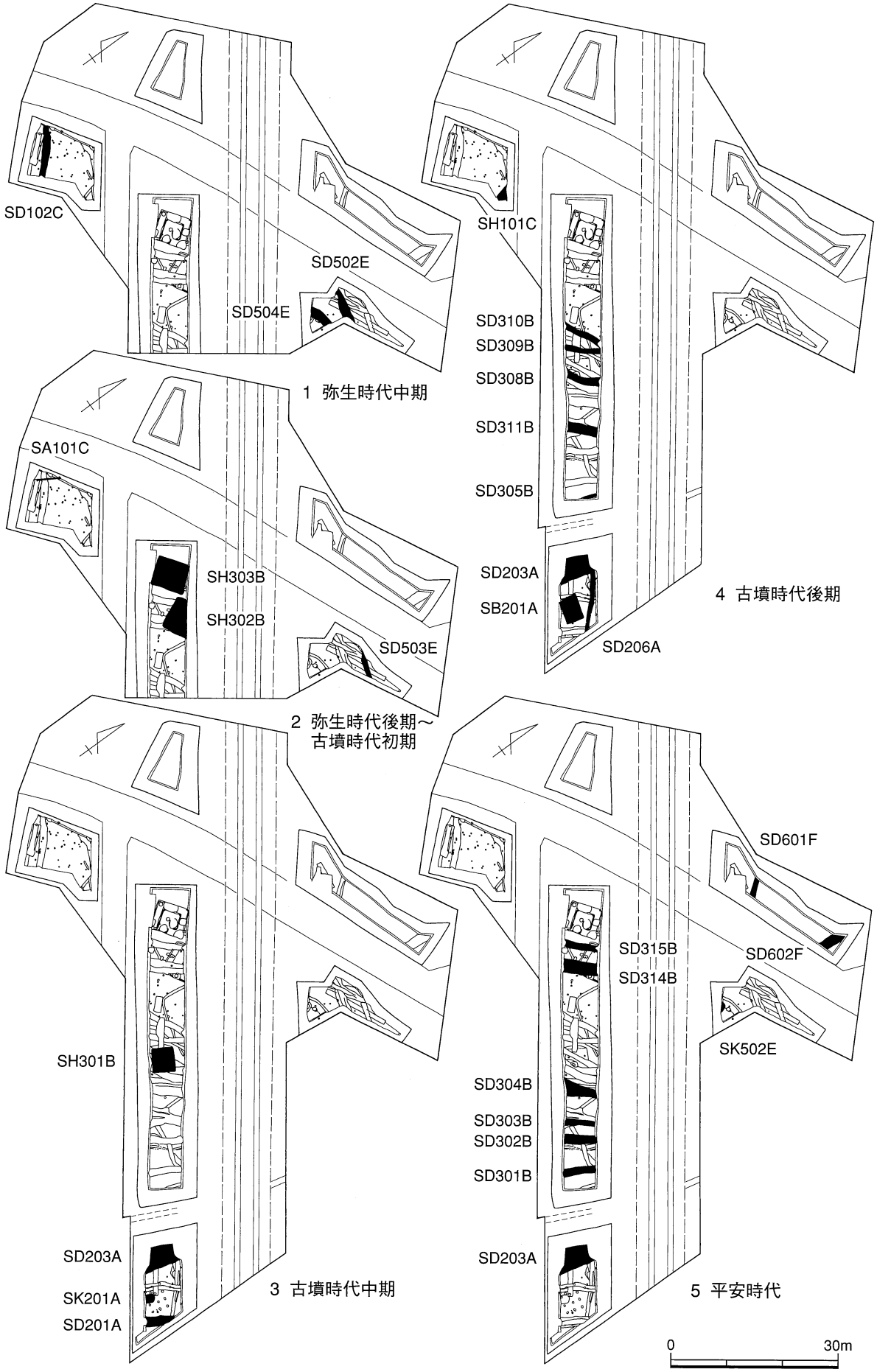
古墳時代中期

古墳時代中期はＡ地区の溝 SD203A・SD201A・土坑 SK201A 、Ｂ地区の竪穴住居 SH301B が存在し、分布範囲が東側に大きく広がった。この他に、新しい遺構に混入したり遺構に伴わない初期須恵器や陶質土器が、Ａ地区･Ｂ地区･Ｆ地区で出土しており、密度は少ないものの周囲に遺構の存在が考えられる。

古墳時代後期

古墳時代後期はＡ地区の掘立柱建物 SB201A・溝 SD203A・SD206A、Ｂ地区の溝 SD305B・SD311B・SD308B・SD309B・SD310B、Ｃ地区の竪穴住居 SH101C が存在する。竪穴住居は調査区外に続いており様相は明らかでない。

奈良時代は遺構と遺物がともに確認できていないが、平安時代の溝に切られ遺物が出土していない溝が存在するため、奈良時代の可能性も考えられる。もしそうだとすれば、これらの溝は水路であると考えられ、居住域とは離れた水田地帯であったと考えられる。



第6図　山陽本線地区の遺構変遷

平安時代

平安時代はＡ地区の溝 SD203A、Ｂ地区の溝 SD301B・SD302B・SD303B・SD304B・SD314B・SD315B、Ｅ地区の土坑 SK502E、Ｆ地区の溝 SD601F・SD602F が存在する。Ｂ地区の溝はいずれも線路に直行し、北から37°～45°に振っており、条里方向に近い南北溝である。SD304B からは10世紀の遺物がまとまって出土しており、上流である北側の比較的近い場所に居住域が存在する可能性が高い。

中世

中世はＦ地区の溝 SD601F とＧ地区の溝 SD001G が存在する。SD601F は正南北の溝であり、SD001G は条里の坪界溝である。遺物量は非常に少なく、居住域と離れていると考えられる。

近世

近世はＥ地区の溝 SD501E が存在する。Ｂ地区の SD314B の上層につながるものと考えられる。埋め立てして造成がなされるまでの水田の水路として利用されていた。したがって、江戸時代後半から埋め立てされるまでは、水田としての景観が復原できる。ただし、明治21年の山陽鉄道の開通が景観を大きく変えたことは言うまでもない。

２．竪穴住居 SH302B・SH303B の位置づけ

古墳時代初頭は、２棟の竪穴住居 SH302B と SH303B を検出した。また、SH302B は床面の土器のほかに、東側から廃棄された土器の出土状況を示しており、この２棟以外にも東側に新しい竪穴住居の存在が推定できる。

この２棟の竪穴住居 SH302B と SH303B の時期を遺構と遺物から考えてみる。

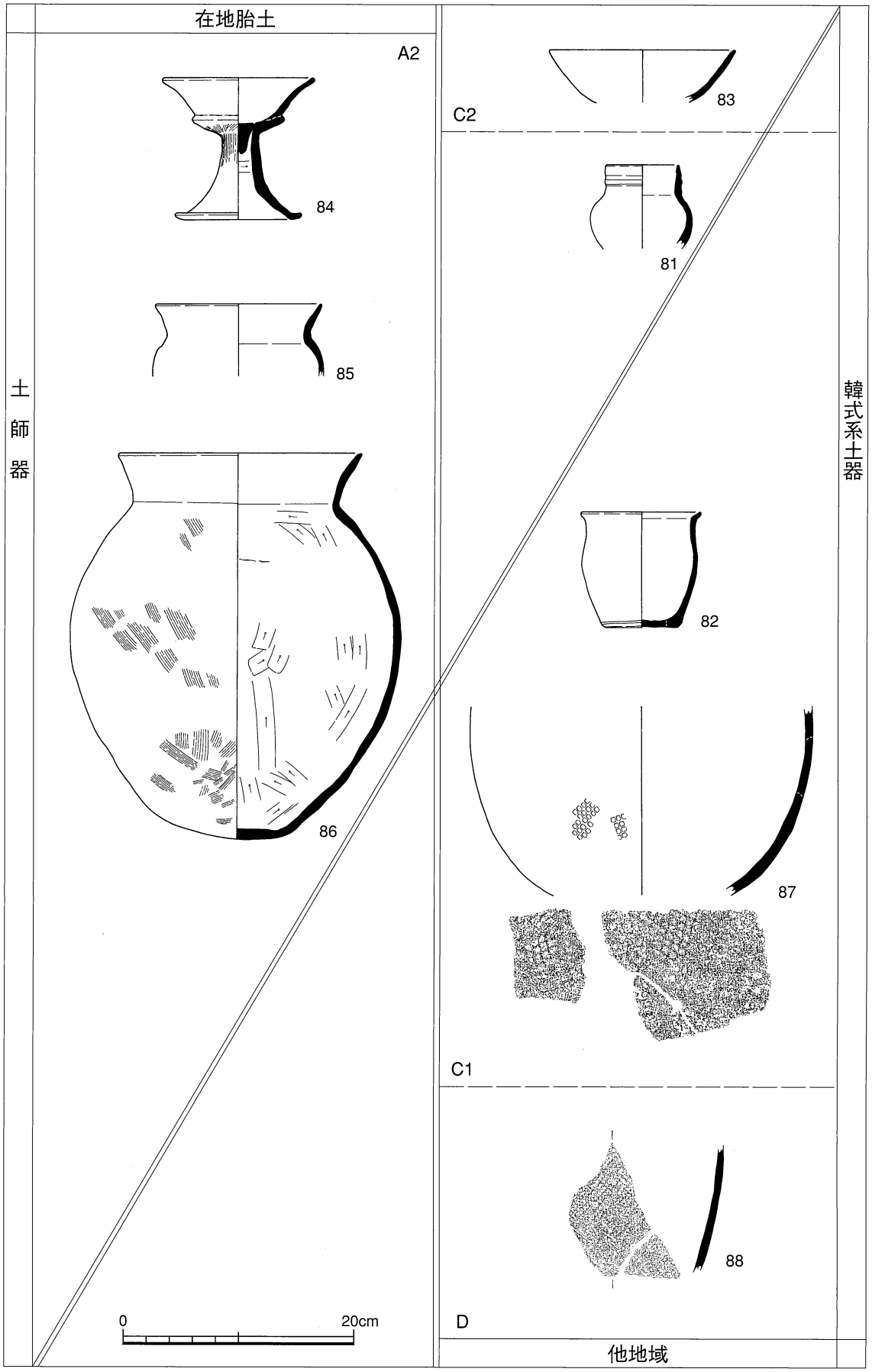
SH303B はほぼ全容がわかり、SH302B は半分程度しか調査できていないが、検討する材料はそろっている。竪穴住居の構造はいずれも方形で高床部を備えている。SH302B は中央土坑と壁際土坑を備えており、SH303B は住居内に土坑が存在するが土層の観察により新しいものであるため、SH303B は土手をもった中央土坑のみである。SH302B のような壁際土坑が存在するものは、姫路市和久遺跡(1)や播磨町大中遺跡(2)で明らかにされているように、庄内並行期に存在している。SH303B のような構造は弥生時代後期末から庄内並行期に存在している。

遺物は SH302B では床面の土器と東側から廃棄された土器（東高床部土器群Ａ・Ｂ）とに分けられる。東側から廃棄された土器には坏部が大きく開く有稜高坏・小型器台や小型丸底鉢が存在しており、甕は体部が球形化し尖底あるいは丸底気味のものが見られることから庄内期に位置づけられ、床面の土器は甕の体部が球形化し尖底のものが見られることから庄内並行期に位置づけられる。SH303B の床面の土器は有稜高坏と甕の底部の状況から庄内並行期に位置づけられる。高坏の坏部の比較から SH302B より SH303B が新しい。

以上の遺構と遺物の分析により、古墳時代初頭の竪穴住居は SH303B → SH302B → SH302B 東側の調査区外竪穴住居の順に変遷している。このことは、上述の遺構の変遷でも分析したように、弥生時代中期から古墳時代にかけて遺構の広がりが東に向かって拡張していったこととも符合する。

３．竪穴住居 SH301B の位置づけ（第７図）

竪穴住居 SH301B は削平や新しい遺構により切られており全容が把握できず、カマドや周壁溝は確認できなかった。播磨地域の韓式系土器が出土した竪穴住居は姫路市市ノ郷遺跡(3)や加西市土井ノ内遺跡(4)・神戸市北区淡河中村遺跡(5)が知られている。市ノ郷遺跡 SH18は韓式系土器平底鉢・鍋が出土している。土井ノ内遺跡 SX21は韓式系土器甑が出土しており、淡河中村遺跡 SH291は韓式系土器平



第7図　SH301B出土土師器・韓式系土器の在地胎土と他地域の土器

底鉢が出土している。土井ノ内遺跡 SX21では焼土が存在していたが、カマドは検出されていない。市ノ郷遺跡 SH18と淡河中村遺跡 SH291では造り付けカマドを備えている。周壁溝は溝之口遺跡 SH301B と同様に３遺跡の竪穴住居とも検出されていない。

SH301B の土器は胎土分析（第５章）で大きな成果を得た。すなわち SH301B の土器は伝統的な技法で作られた土師器（壺・高坏・甕）と韓式系土器（平底鉢・甕）とがある。土師器は在地胎土の高坏84と甕85･86、他地域の壺81と高坏83がある。韓式系土器は在地胎土ではないことから他地域からもたらされたことが明らかになった。Ｃ類に分析された平底鉢82と甕87、Ｄ類に分類された甕88がある。土師器壺81と高坏83もＣ類であることも注目される。つまり SH301B の土器には在地の土師器の高坏と甕、他地域からもたらされた土師器高坏と壺、他地域からもたらされた韓式系土器平底鉢と甕がある。他地域もＣ類とＤ類の地域が存在する。Ｃ類は近畿・中国地方から九州北部地域から韓半島の花崗岩を主体とし、凝灰岩と流紋岩をほとんど含まない地域であり、Ｄ類は紀伊半島南部から瀬戸内を除く四国および九州中～南部の花崗岩類が分布しない地域である。具体的な他地域が明らかにされたわけではないが、複数の他地域であり、今後の分析の進展によって地域が特定されれば古墳時代中期前半における渡来系氏族の移動や交流・文物の移動など古墳出土の金属製品とあわせて考えることが出来、重要である。また、新しい遺構に混入したり遺構に伴わない初期須恵器や陶質土器が出土しており、周辺に同時期の集落が広がっていることが想定できる。

播磨地域の渡来系文物については富山直人氏がまとめており(6)、このうち韓式系土器や初期須恵器などの出土は、加古川下流域の集落遺跡では砂部遺跡や岸遺跡･東神吉遺跡があり、古墳では池尻２号墳･カンス塚古墳などいずれも加古川右岸で出土しているのみである。今回溝之口遺跡で出土した韓式系土器や初期須恵器は加古川下流域左岸としては初めてであり注目すべきである。これは加古川下流域左岸に位置し、古墳時代中期前半に位置づけられている行者塚古墳の意義付けにも重要である。行者塚古墳からは初期の轡などの馬具や金銅製の帯金具・鉄鋌などの渡来系文物が出土しており、被葬者や渡来系工人集団と溝之口遺跡竪穴住居 SH301B を結びつけると理解しやすいと考える。

また、SH301B からは小形の椀形滓が出土している。加古川下流域の古墳時代中期前半における鍛冶関係の遺物は、行者塚古墳とカンス塚古墳から出土している。行者塚古墳では鉄の素材である鉄鋌や鉄床などの鍛治具が出土しており、カンス塚古墳は鉄鉗・鎚などの鍛治具が出土しており、これら古墳と渡来人と鉄生産の関係が理解できる溝之口遺跡竪穴住居 SH301B は重要である。

今後、加古川下流域左岸の溝之口遺跡周辺において古墳時代中期の集落の調査が増加すれば、渡来系工人と在地人の関係が明らかになるであろう。

註

１．小柴治子「「｜○（いちまる）型中央土坑」の変遷 - 和久遺跡検出資料の検討 - 」『續文化財學論集』文化財學論集刊行会　2003
２．多賀茂治「大中遺跡の再検討」『大中遺跡』2004
３．淡神文化財協会『淡河中村遺跡発掘調査報告書』1992
４．大谷大学資料館『土井ノ内遺跡』1993
５．兵庫県教育委員会『市ノ郷遺跡』2005
６．富山直人「播磨における大陸との交流」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版　2005

第２節　加古川線地区の遺跡の変遷

加古川線地区では調査を行ったＨ・Ｉ地区、Ｊ地区、Ｋ地区の３つの地区で主として中世の集落跡が検出され、それに伴う遺物も出土している。

１．遺物の変遷（第８～10図）

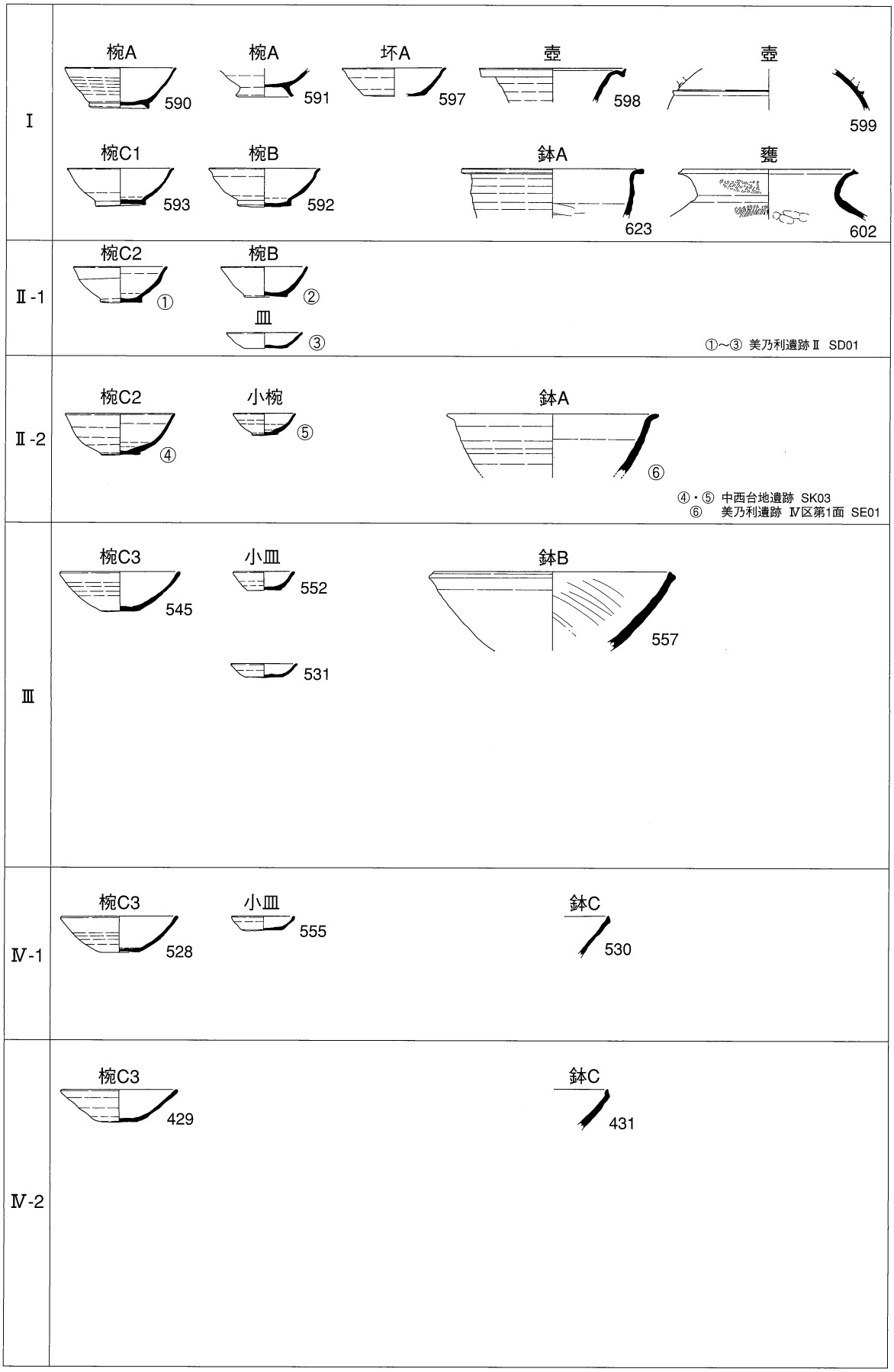
加古川線地区では、やや断続的ながらも10世紀から15世紀にかけての土器が遺構から出土している。ここではそれらを中世Ｉ期～中世Ｖ期に分けて検討する。ただし、溝之口遺跡内での出土がない時期については他の加古川市内の出土例を加えて検討する。

中世Ｉ期　SD003Kの資料を挙げることができる。SD003Kは溝であり、若干時期幅がある可能性があるが、この時期の遺物を比較的多く出土している。須恵器には底部に輪高台をもつ椀Ａ、底部がヘラ切りである椀Ｂ、底部が糸切りである椀Ｃ、坏Ａ、口縁部が外反する鉢Ａ、突帯壺、甕などがある。椀Ｃは高台と体部の境がシャープである（椀C1）。鉢Ａは体部に丸みをもっている。甕は口縁部内面を内上方へ立ち上げていることが特徴的である。土師器には底部に輪高台をもつ椀Ａ、底部がヘラ切りである椀Ｂ、底部が糸切りである椀Ｃ、底部がヘラ切りである坏Ａ、底部がヘラ切りである皿Ａ、口縁直下に鍔をもつ羽釜Ａ、鉢などがある。灰釉陶器は碗が出土している。折戸53号窯式のもので、10世紀前半の時期と考えられる(1)。須恵器は志方窯跡群の志方Ｅ期に相当し、須恵器椀Ａのなかに高い輪高台をもつものも見られることから、なかでも新しい札馬５号窯と同時期と考えられる(2)。志方Ｅ期は平安京Ⅱ期古段階（840年頃～870年頃）とされているが、Ｅ期でも新しい段階のものであることから10世紀まで降るものと考えたい。

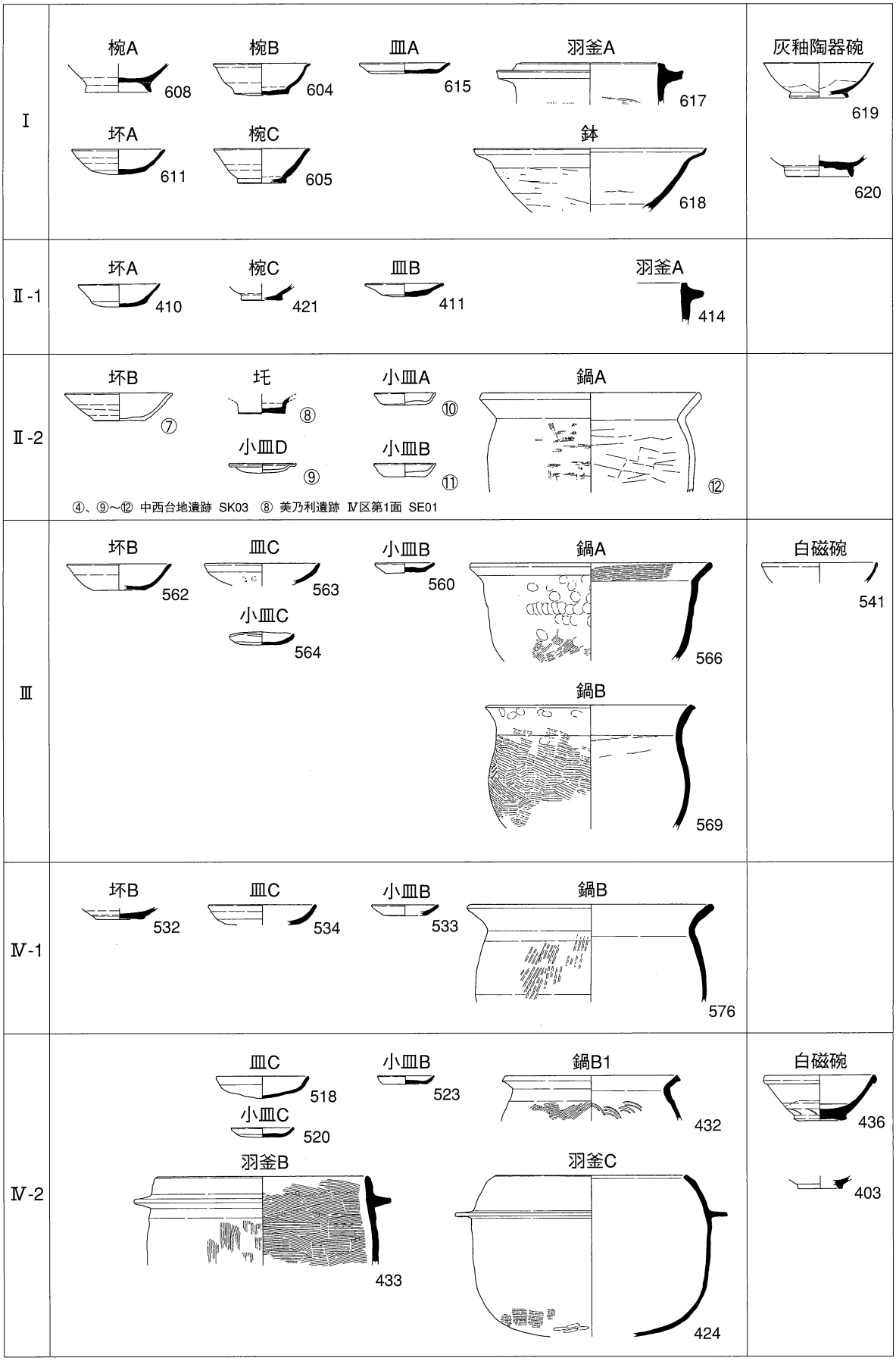
中世Ⅱ－１期　この時期の資料はSB205Hの柱穴より土師器がわずかに出土しているのみである。須恵器については美乃利遺跡Ⅱ SD01から出土したものを挙げておく(3)。須恵器には椀Ｂ・Ｃ、皿がある。椀Ｃは底部と体部の境がなだらかである（椀C2）。土師器には椀Ｃ、坏Ａ、底部が糸切りである皿Ｂ、羽釜Ａなどがある。前後との関係から10世紀後半頃と考えたい。

中世Ⅱ－２期　溝之口遺跡内では良好な出土例はなく、周辺の遺跡でも非常に乏しい。わずかに美乃利遺跡Ⅳ区第1面SE01(4)、中西台地遺跡SK02(5)を挙げることができる。須恵器には椀C2、小椀、鉢Ａがある。鉢ＡはＩ期のものに比べると体部の丸みがかなりなくなっている。志方窯跡群では中津倉１－Ⅰ・Ⅱ号窯がほぼ同時期であると考えられる(6)。土師器には底部が糸切りである坏Ｂ、底部がヘラ切りである小皿Ａ、底部が糸切りである小皿Ｂ、いわゆる手の字状口縁の小皿Ｄ、圷、くの字に開く口縁をもち、体部外面の調整がハケを主とする鍋Ａなどがある。小皿Ｄのように手づくね成形のものがみられる。平安京Ⅳ期中段階（11世紀中頃）の平安京左京北辺三坊六町内膳町SD41A出土の須恵器鉢が、鉢Ａとやや心許ないが形態的には近いことから11世紀前半頃と考えておきたい(7)。

中世Ⅲ期　SK101Jの資料を挙げることができる。須恵器には平高台の突出がほとんどなくなる椀C3、小皿、端部断面が方形である鉢Ｂなどがある。椀C3は器高が５cm以上のものが多く、小皿は小椀の系統を引く器高の高いものが含まれている。土師器には坏Ｂ、手づくね成形の皿Ｃ、小皿Ｂ、手づくね成形の小皿Ｃ、鍋Ａ、くの字に開く口縁をもち体部外面に平行タタキを残す鍋B1などがある。皿・小皿類は手づくね成形のものが増えている。鍋Ａは頸部のくびれがなくなり、鍋B1は口縁部が長くなっている。陶磁器には玉縁の小さい白磁碗Ⅳ類がある。Ⅲ期とⅡ－２期の間には時間差があり、須恵器椀C3・鉢Ｂ・小皿の形態から見ると森田編年のＩ－２期に含まれるが、その後半の様相を示す垣内１号

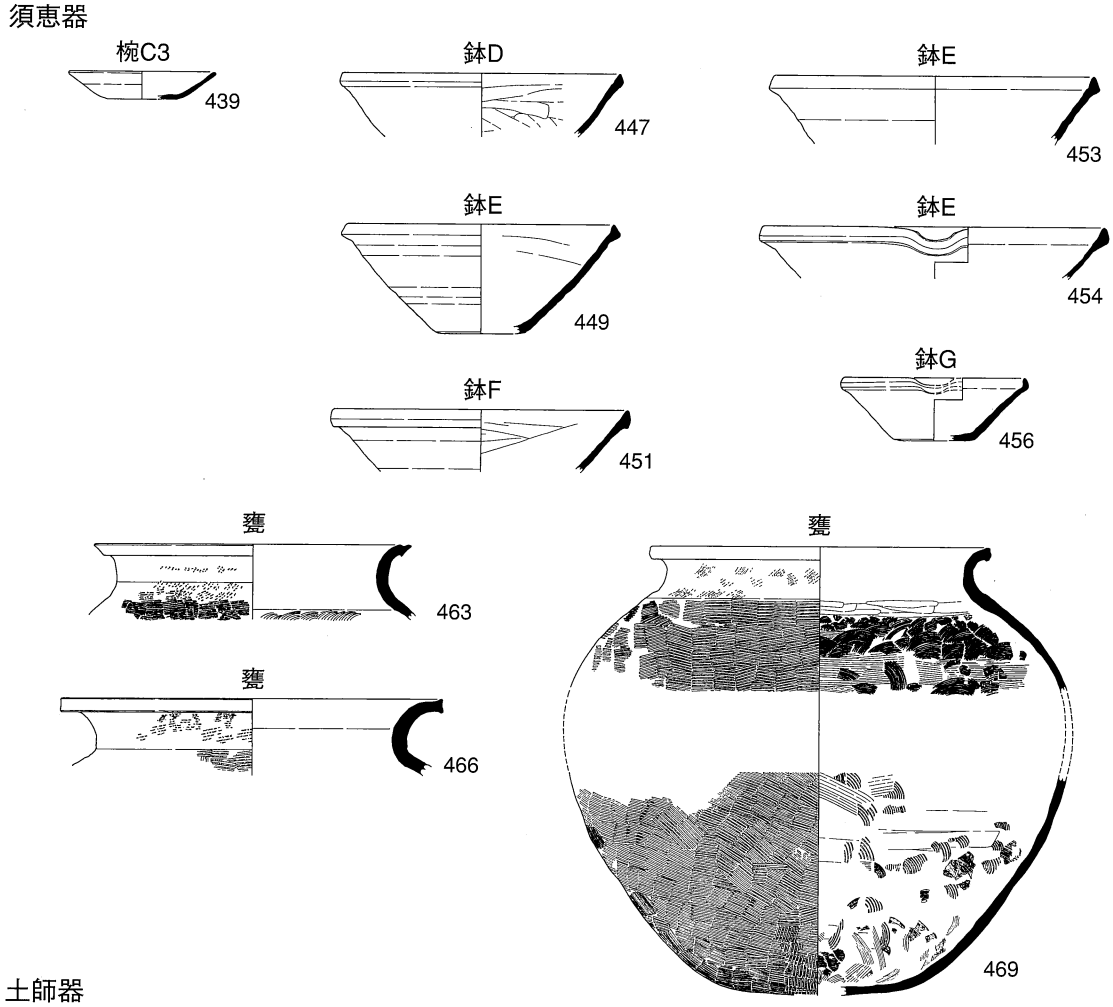


第8図　中世Ⅰ～Ⅳ期の須恵器

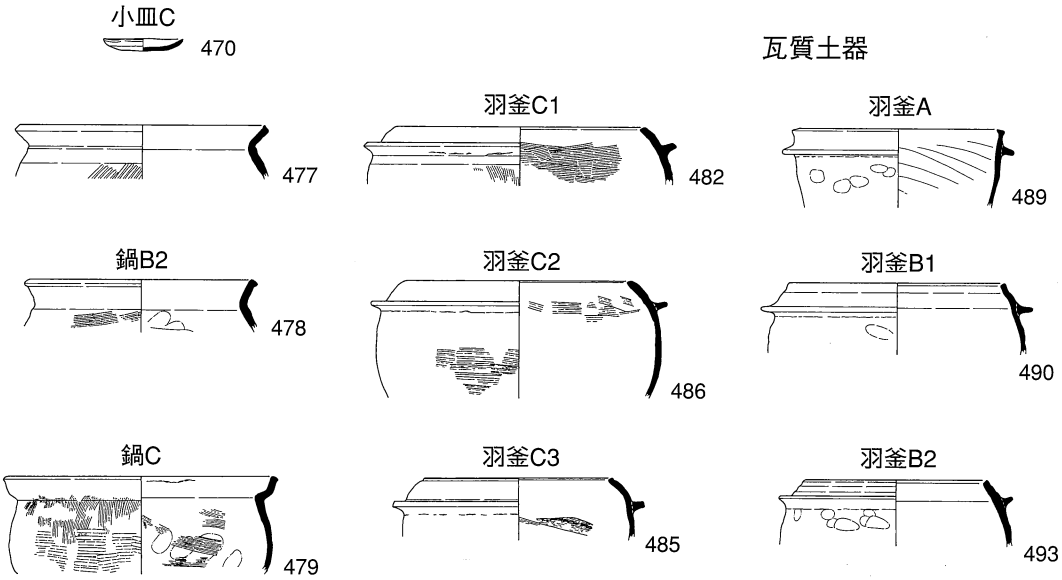


第9図　中世Ⅰ～Ⅳ期の土師器・陶磁器

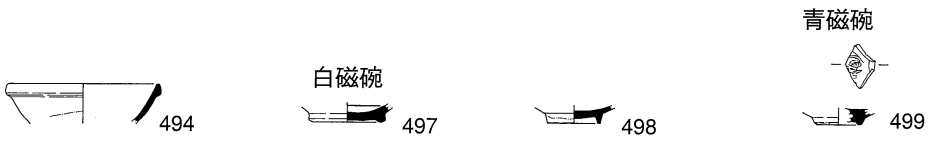
須恵器



土師器



陶磁器



第10図　中世Ⅴ期の土器・陶磁器

第４表　遺構出土の土器個体度数

H地区

	須恵器						土師器						瓦質土器		陶磁器
遺構	椀	皿・小皿	鉢	甕	その他	計	椀	坏・皿	鍋	羽釜	その他	計	羽釜	その他	
SB201H	2		1			3			2			2			
SB202H	14	2				16		11	1			12			
SB203H	4					4		3	3			6			
SB204H	13	2				15		4				4			
SB205H								25		1		26			
SB206H	1					1	3	15				18			
pit	36	18	2			56		34	1			35		2	1
SK001H	5					5		7				7			
SK002H	40		2			42		5		2		7			
SK007H															
SK008H	6		2			8		8				8			
SK010H	2			1		3			1			1			
SK110H															
SD047H	55	2				57		3	4	8		15			5
SD048H								1			1	2			
SD050H	6					6		1				1			
SR006H	90	4	126	25	6	251		76	21	57	7	161	57		3
SR080H	20		9	1		30		10	1			11			
計	294	28	142	27	6	497	3	203	34	67	8	316	57	2	9

I地区

	須恵器						土師器						瓦質土器		陶磁器
遺構	椀	皿・小皿	鉢	甕	その他	計	椀	坏・皿	鍋	羽釜	その他	計	羽釜	その他	
SD001I					5	5									
SK002I	14					14		154				154			
計	14				5	19		154				154			

J地区

	須恵器						土師器						瓦質土器		陶磁器
遺構	椀	皿・小皿	鉢	甕	その他	計	坏・碗	皿	鍋	釜	その他	計	羽釜	その他	
SD003K	83			2	10	95	101	24		5	4	134			2
SD002K	5					5									
SD001K								1				1			
SB001K	4		1			5									
SB002K	5	33				38									
SB003K	1					1		5				5			
SB004K		4				4									
pit	4	5				9		6				6			
計	102	42	1		10	157	101	36		5	4	146			2

K地区

	須恵器						土師器						瓦質土器		陶磁器
遺構	椀	皿・小皿	鉢B	甕	その他	計	椀	坏・皿	鍋	釜	その他	計	羽釜	その他	
SB101J	48	2	2			52		25	1			26			
SK103J	52		3			55		23		1		24			2
SK101J	242	86	3			331		180	57			237			
SK102J	81	13	2			96		5	7			12			
pit	1					1		3				3			
SD101J	3					3									
計	427	101	10			538		236	65	1		302			2

数値は口縁部の1/36を1として計数したものである

窯に近く、12世紀前半と考えられる(8)。

中世Ⅳ－１期　SB101J・SK102J を挙げることができる。須恵器には椀 C3、小皿、口縁部の端面が外傾する鉢 C などがある。椀 C3は器高５cm 前後のものが多い。小皿は器高が低いもののみである。土師器には坏 B、皿 C、小皿 B、鍋 B などが出土している。須恵器の形態から森田編年のⅡ－１期に相当し、12世紀中頃と考えられる。

中世Ⅳ－２期　SK002H・SD047H・SK002I を挙げることができる。須恵器には椀 C3、鉢 C などがある。椀 C3の器高は５～4.5cm と低くなっている。土師器には皿 C、小皿 B・C、鍋 B、口縁部が上方に延びる羽釜 B・口縁部が内湾する羽釜 C などがある。皿、小皿は手づくね成形のもののほうが多くなり、

羽釜Ａから一度途絶えていた羽釜の存在が目立つようになる。陶磁器には白磁碗Ⅳ類がある。その他、Ｈ地区では包含層からではあるが瓦器椀（513）が出土している。須恵器から森田編年のⅡ－２期に相当し、12世紀末葉～13世紀初頭と考えられる。

中世Ⅴ期　SR006Hを挙げる。落ち込みに、比較的長期間にわたって土器が捨てられているため、比較的長期間の時期のものを含んでいる。また、他の時期に比べて調理具・煮炊具の比率が非常に高いことが注目される。須恵器には椀C3、鉢Ｄ～Ｇ、甕などがある。須恵器鉢には口縁端部に丸味をもつＤ類、口縁端部外縁が外方へ突出するＥ類、口縁端部外縁を垂下させるＦ類、口縁端部を内側へ折り曲げるＧ類などがあり、他の時期と比べると鉢の多さが目立っている。椀C3はⅣ－２期のものに比べて、さらに器高が３cmと低くなっている。土師器は煮炊具が多く、皿Ｃのほかに鍋Ｂ、口縁部が受け口状になる鍋Ｃ、羽釜Ｃなどがある。鍋Ｂには口縁部外縁が突出しないB1、口縁部外縁が突出するB2があり、羽釜Ｃには口縁端部に面をもつC1、口縁端部に丸味をもつC2、口縁部外面が凹線状に凹むC3がある。また煮炊具には瓦質土器羽釜も見られる。羽釜は盥形の体部をもち、口縁部が上方を向くＡ、球状の体部をもち、口縁部が内傾するＢに分かれる。羽釜Ｂはさらに口縁部外面に明瞭な凹線状の窪みをもたないB1と口縁部外面に明瞭な凹線状の窪みをもつB2がある。陶磁器には白磁碗Ⅳ類・Ⅴ類のほかに青磁碗がある。

須恵器鉢はバリエーションが豊富で、13世紀～15世紀前半のものまでを含んでいると考えられ、土師器鍋Ｂは兵庫津播但タイプⅠ類で13世紀後半、羽釜Ｃは兵庫津羽釜タイプⅠ類で14世紀前半頃と考えられる(9)。瓦質土器については、羽釜A1が京都中世Ⅲ期（13世紀後葉～14世紀中葉）の土釜CI類、羽釜B1が北河内・摂津北東部中世Ⅲ期、羽釜B2が和泉・中河内中世Ⅳ期（14世紀後葉～15世紀中葉）が近いようである(10)。おおむね14世紀前後の様相を示しているということができる。

２．遺構の変遷（第11図）

加古川線地区は、溝之口遺跡のうち郡衙推定地とされる集落中枢部よりは約500m西側に離れている。加古川線地区の微高地は、西側は加古川の氾濫原に面して洪水の影響を受けやすい位置にあり、東側は現水路部がやや谷状に窪み、集落中枢部とも地形的に隔てられている。氾濫の影響の恐れを持ちながらも、中世の時期に開発が進められている状況をみることができる。

中世以前　弥生時代後期・古墳時代後期・律令期に溝が設けられている。弥生時代後期の溝はＪ地区で１条(SD201J)、古墳時代後期の溝はＨ地区で４条(SD301H～304H)、律令期の溝はＩ地区で１条(SD001I)、Ｊ地区で１条（SD103J）が検出されている。律令期のSD103Jを除けば北東から南西に向いている。この周辺の地形は大まかに見れば、北東から南西に向かって緩やかに傾斜しており、溝はこの傾斜に沿って設けられているものが多く、基幹的な水路かあるいは給水よりも排水を機能としたものと考えられる。

SD103Jは北西から南東に向いている。方位はN45°Ｅと、偶然かも知れないが条里の方向とほぼ等しく、以後の時期のＪ地区周辺の地割にまで影響を残しているものと思われる。

また、それぞれの溝からの出土遺物は非常に少なく、近隣に集落の存在する可能性は低い。

中世Ⅰ期　Ｋ地区で南北方向の溝（SD001K・003K）が設けられる。おそらく等高線に沿う形の用水路と考えられる。この時期までには調査区の東側には基幹水路が整備され、以後それが使用され続けるものと推定される。

この時期の検出された遺構は溝のみであるが、SD003Kからは土器が比較的多量に出土しており、律令期以前とは異なり、近隣に集落が存在する可能性がある。出土遺物の中には灰釉陶器が含まれていることから、やや有力な階層による開発が行われたと考えられる。

中世Ⅱ－１期　Ｈ地区で掘立柱建物跡（SB205H）と溝（SD050H）が検出されている。SB205Hは総柱の掘立柱建物で、方位はN6.5°Ｗと南北方位をとり、Ｋ地区の溝と同様に南北方向を向いている。SD050Hは等高線に沿った方向の溝と考えられる。建物とは方位が異なり、SB205Hよりやや時期の新しいものと考えられる。

中世Ⅱ－２期　調査範囲内では、この時期の遺構は検出されていない。Ⅱ－１期の地割が後の時期まで続くものが多いことから、断続的にでも耕地として利用されたと考えられる。

中世Ⅲ期　Ｋ地区で掘立柱建物跡・溝、Ｊ地区で土坑、Ｈ地区で溝などが検出され、この地区での開発が再び活発になり始める。

Ｋ地区では中世Ⅰ期のSD001K・003Kとほぼ同方位の溝SD002Kや掘立柱建物跡SB001K・SB003Kが現れる。SB001Kは東西の柱間のうち東３間が狭く、特に中央の１間が狭い。４間×２間と２間×２間の２棟をＬ字形に連接したような構造と推定される。床面積は57㎡である。SB003Kは４間×３間の総柱建物跡で、床面積は51㎡である。SB001Kよりは新しく、Ⅳ－２期の建物跡よりは古いものと考えられる。

Ｊ地区では土坑が２基（SK103J・SK101J）検出されている。掘立柱建物跡SB101Jは柱穴の出土遺物はⅣ－１期の土器が出土しているが、土坑との関係を考えるとⅢ期に建てられたものと考えられる。４間以上×３間以上の総柱建物跡で、面積は48㎡以上である。律令期の溝SD103Jとほぼ同じ方位をとっている。

Ｈ地区では溝SD048Hが検出されている。Ⅱ－１期のSD050Hとほぼ同じ方位をとっている。

中世Ⅳ－１期　Ｋ・Ｊ・Ｈ地区とも掘立柱建物跡が見られ、開発の最盛期と考えられる。集落間の間隔は約100m（60歩）で、１町につき１つの宅地により開発が進められたことが想定される。

Ｋ地区ではSB003Kの後にSB002K、SB004Kが建てられている。SB002Kは４間×３間以上の総柱建物跡で、床面積は61㎡である。SB004Kは３間×２間の総柱建物跡で、床面積は31㎡である。

Ｊ地区ではSB101Jがこの時期まで建っていたと考えられる。

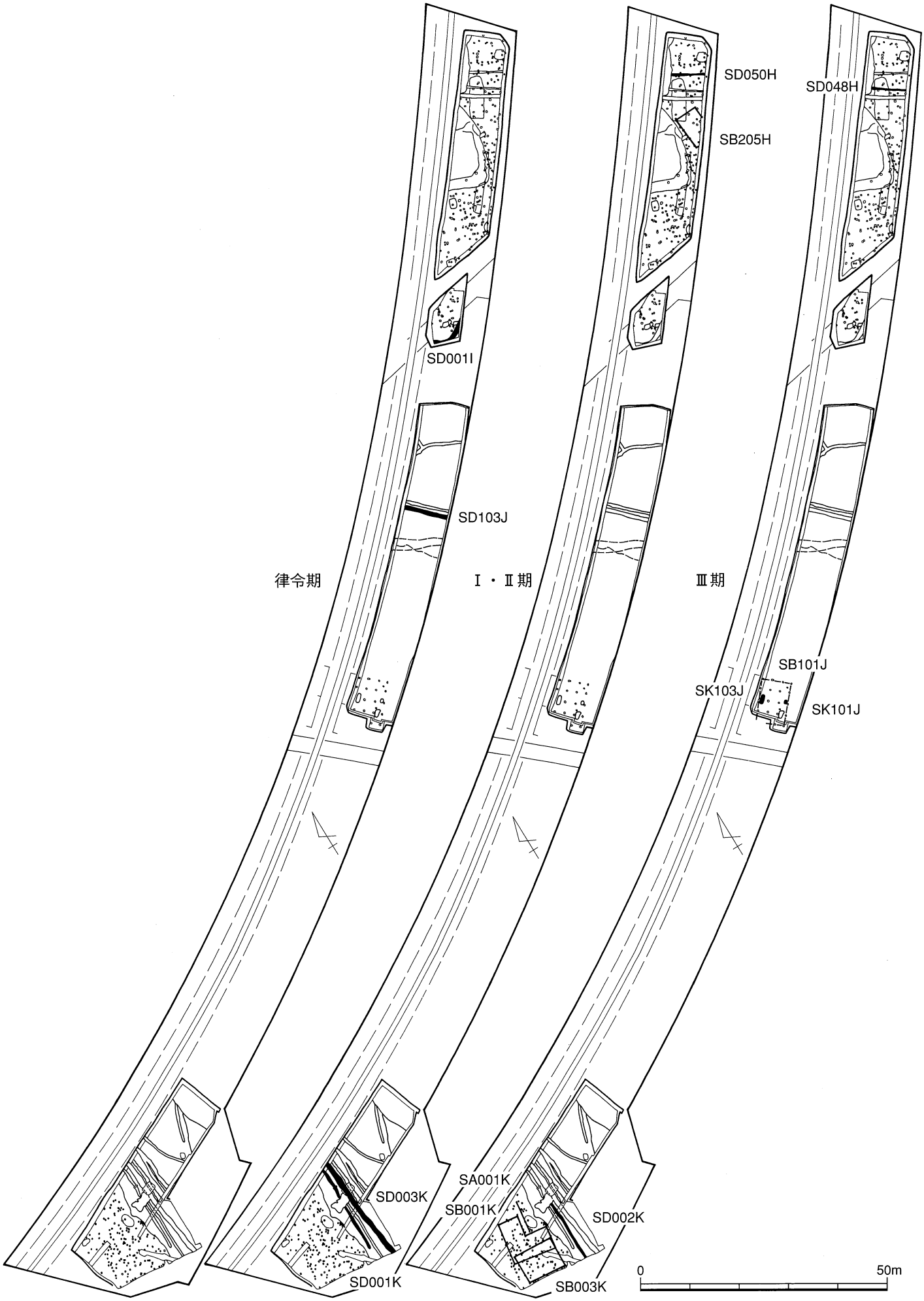
Ｈ地区ではSB201H・SB203Hが建てられている。SK001Hは遺構の方位から見て、SB201Hに付属するものと考えられる。SB201Hは２間以上×２間の総柱建物跡で、床面積は24㎡以上である。SB203Hは３間×２間以上の総柱建物跡で、床面積は28㎡以上である。Ｋ・Ｊ地区で検出されている建物よりも規模がやや小さいようである。

中世Ⅳ－２期　Ｋ・Ｊ地区では建物跡がなくなり、Ｈ・Ｉ地区のみ集落が存続している。

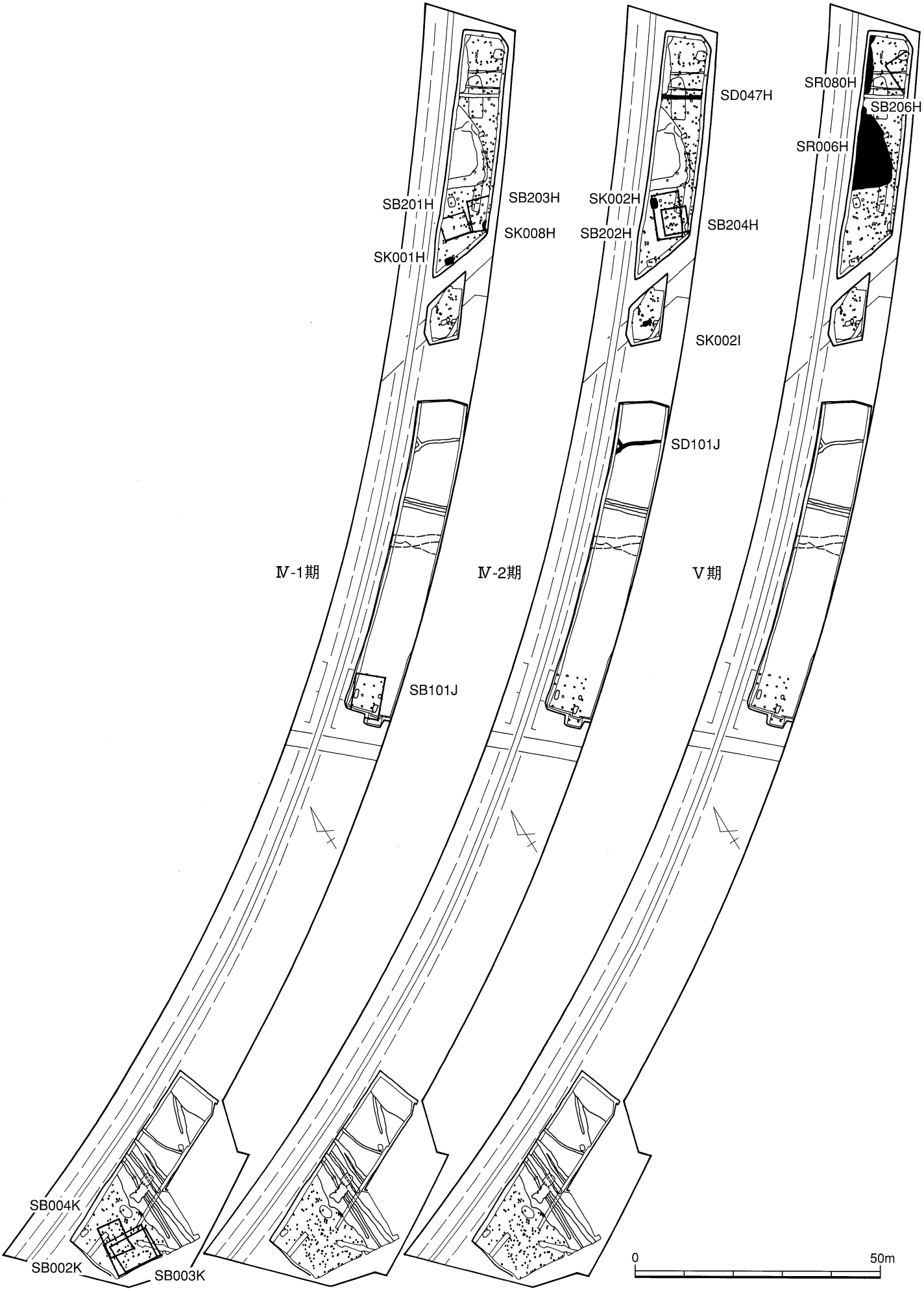
SB202Hは５間×２間の総柱建物跡で、床面積は45㎡である。SB204Hは３間×２間以上の総柱建物跡で床面積は25㎡である。SK002Hはこの建物に伴うものと考えられる。Ｊ地区ではＨ地区の集落に対応すると考えられる溝SD101Jが検出されている。

中世Ⅴ期　Ｈ地区では洪水により西側より抉られている。この影響により、集落は一度断絶する。洪水により、まず13世紀中頃に北側のSR080Hの部分が削られてから埋まり、さらに南側のSR006Hの部分が削り取られ、窪みとして残ったと考えられる。嘉禄年間（1225～1227）に大洪水が起こったと伝えられるように、この時期に洪水が相次いだのかもしれない。

洪水後は掘立柱建物跡SB206Hが建てられ、洪水でできた窪み（SR006H）はゴミ捨て場として14世紀を中心に百数十年は利用されたようである。SB206Hは３間以上×２間の側柱建物跡で、床面積は35㎡以上である。方位はＮ５°Ｗと南北方位であるが、SR006Hの形状の影響を受けたものであろう。他の建物と異なる側柱建物であり、SR006Hの出土遺物の構成から見ても、厨房的な施設が存在していたことが想定される。



第11図　加古川線地区の遺構変遷（1）



第11図　加古川線地区の遺構変遷(2)

３．小結

加古川線地区の開発は大きく中世以前、中世Ⅰ・Ⅱ期、中世Ⅲ・Ⅳ期、中世Ⅴ期の４つに分かれる。

中世以前は東側に位置する集落中枢部を拠点として、溝が設けられ断続的に開発が行われた。

中世Ⅰ・Ⅱ期（10・11世紀）になると、「富豪層」と呼ばれるような上級階層により新たな開発拠点が設けられ、開発が進められる。しかしながら、継続性には乏しく成功はしなかったのであろう。ただし律令期以降、この時期までには基幹水路は整備されているようである。

中世Ⅲ・Ⅳ期（12～13世紀）には、改めて１町単位を範囲とするような開発が稠密に進んでいくようになっている。建物規模から「小規模経営農民層」による開発と考えられ(11)、Ｊ・Ｋ地区とＨ地区では建物規模に若干の階層差も認められる。この時期の開発は、Ⅳ期の終わりには退潮が認められる。

中世においては、溝之口周辺がその中に含まれていたかどうかは判然としないが、五箇荘という荘園が存在していた(12)。五箇荘は加古郡から明石郡に渡る広大な所領である。仁安２年（1167）に平清盛に対して印南野に大功田が与えられ、それを元に五箇荘が成立したと考えられている。平家滅亡後には播磨国守護領となったようで、寺家町に置かれたとされる守護所を支える中核的な所領であったと考えられている。この時期については、一般的に開発が進む時期ではあるが、開発の盛衰にこのような事情が関連していたと考えることもできる。

中世Ⅴ期（13～15世紀）の13世紀中頃には、開発の退潮に追い討ちをかけるように洪水が起こり、様相が一変する。洪水後の14世紀を中心する時期には、食品加工でも行っていたのであろうか、厨房的な施設が安定して長期間存在していたようである。

註

１．斉藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３－』古代の土器研究会　1994年

２．森内秀造「白沢・志方窯跡群における遺物の特徴」『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』兵庫県教育委員会　2001年

３．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『美乃利遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2006年

４．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『美乃利遺跡』兵庫県教育委員会　1997年

５．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『北谷・中西台地遺跡』兵庫県教育委員会　2003年

６．大谷女子大学博物館『中津倉』　2000年

７．古代の土器研究会『古代の土器３・都城の土器集成Ⅲ』　1994年

８．森田　稔「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』　1995年
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『神出窯跡群』兵庫県教育委員会　1998年

９．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2004年

10．鋤柄俊夫「西日本の土製煮炊具にみる地域性」『中世村落と地域性の考古学的研究』　1999年

11．広瀬和雄「中世村落の形成と展開」『物質文化』50号　1988年

12．石田善人「中世の加古川」『加古川市史　第１巻』兵庫県加古川市　1989年

第３節　加古川下流域左岸の遺跡動向（第12図）

JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴い溝之口遺跡の調査を行った結果、加古川下流域左岸という広い範囲での溝之口遺跡の位置付けを行いたい。検討を行う対象範囲は、北東側が日岡丘陵と段丘、南東側が野口段丘、西側が加古川に囲まれた、加古川左岸の沖積平野あるいは氾濫原上にある。坂元遺跡は野口段丘上に立地しており、溝之口遺跡・美乃利遺跡・大野遺跡・粟津遺跡・平野遺跡は加古川左岸の沖積平野に立地している。

１．溝之口遺跡と周辺の遺跡

溝之口遺跡 M は、北東から南西にかけて約1,000m、北西から南東にかけて約600mの、加古川に沿った長い範囲に分布している。現在までに、遺跡範囲内を大きく分けて５地点で調査を行っている。

溝之口遺跡 M1地点は昭和43年・44年の加古川バイパスの調査地区及び、昭和62年度三次調査地区である。弥生時代中期前半の土坑、中期中葉から後半の竪穴住居・土坑・木棺墓、後期の竪穴住居、古墳時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の溝、平安時代の掘立柱建物などがある。

溝之口遺跡 M2地点は住宅開発にかかわる昭和61年度～平成９年度の調査区である。M1地点から東に約200mの場所に位置する。弥生時代中期前半の土坑、中期中葉から後半の方形周溝墓、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝、奈良時代の掘立柱建物・柵・井戸・溝などがある。

溝之口遺跡 M3地点は住宅開発にかかわる昭和57年度～平成４年度の調査区である。M1地点と M2地点の間に位置する。弥生時代中期の水田・溝・流路、古墳時代の水田などがある。

溝之口遺跡 M4地点は今回報告の JR 山陽本線地区の A ～ F 地区である。M1地点から南西に約600mの場所に位置する。弥生時代中期の柱穴・溝、古墳時代初頭の竪穴住居・溝、古墳時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の掘立柱建物・竪穴住居・溝、平安時代の溝、近世の溝などがある。

溝之口遺跡 M5地点は今回報告の JR 加古川線地区の H ～ K 地区である。M1地点から西に約200mの場所に位置する。弥生時代後期前半の土器、古墳時代後期の溝、平安時代後半から鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・溝などがある。

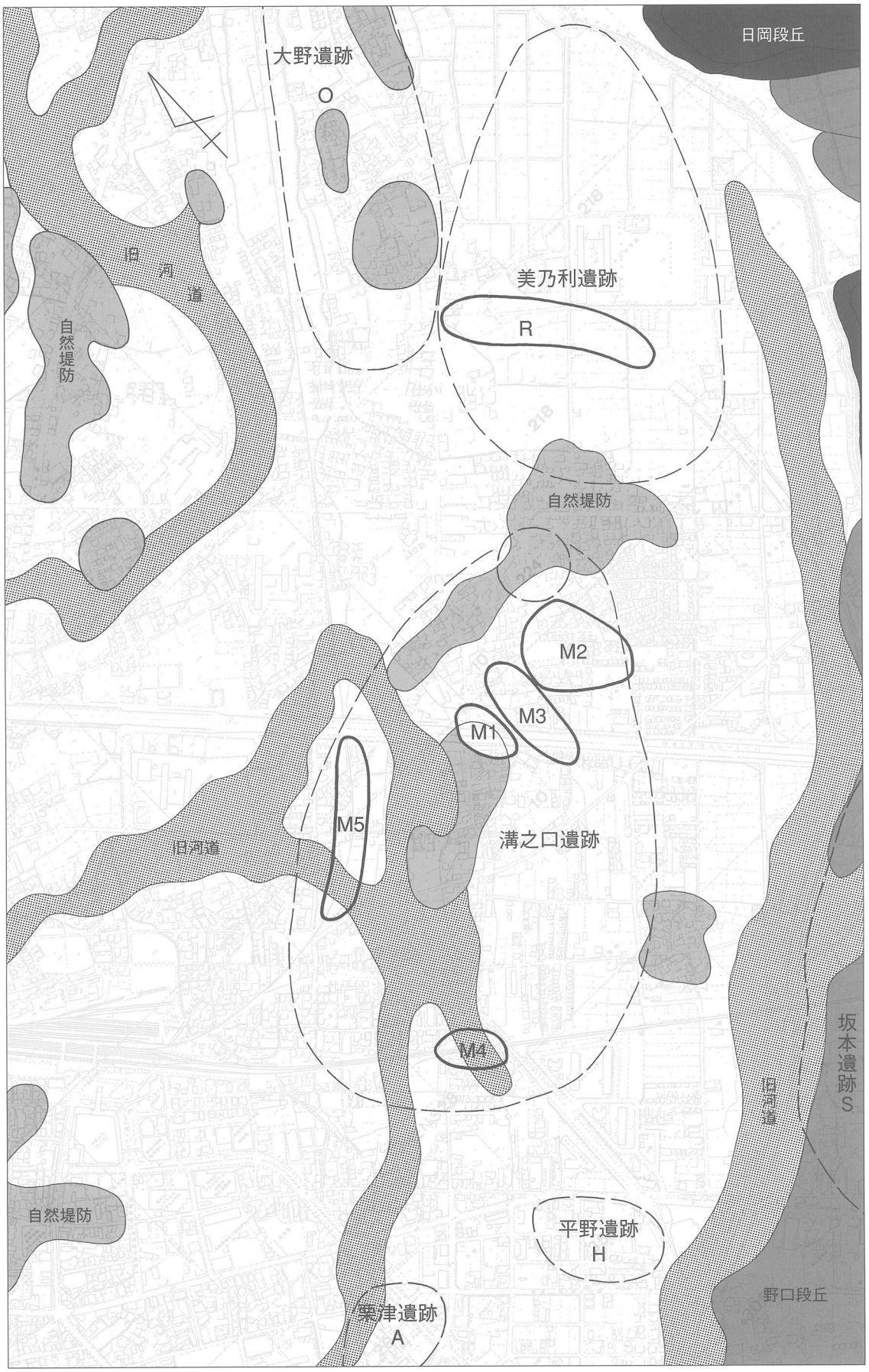
美乃利遺跡 R は溝之口遺跡 M1地点から北東に約700mの場所に位置する。弥生時代前期の水田、弥生時代中期前半の土坑・溝、弥生時代中期後半の竪穴住居・土坑・溝、弥生時代後期後半の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物・溝、平安時代の掘立柱建物・井戸・木棺墓・畠、鎌倉時代の溝などがある。

大野遺跡 O は溝之口遺跡 M1地点から北に約800mの場所に位置する。弥生時代中期の溝、奈良時代・鎌倉時代の掘立柱建物、室町時代の掘立柱建物などがある。

粟津遺跡 A は溝之口遺跡 M1地点から南西に約1,000mの場所に位置する。

平野遺跡 H は溝之口遺跡 M1地点から南西に約900mの場所に位置する。

坂元遺跡 S は溝之口遺跡 M1地点から南東に約800mの場所に位置する。弥生時代中期の竪穴住居・２箇所の方形周溝墓群・土坑、弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の土坑・埴輪窯、奈良時代の掘立柱建物・井戸、鎌倉時代の掘立柱建物などがある。



第12図　溝之口遺跡周辺の微地形と遺跡分布（1/10,000）

第５表　溝之口遺跡周辺の遺跡動態

	立地	弥生時代前期	弥生時代中期前半	弥生時代中期中葉	弥生時代中期後半	弥生時代後期前半	弥生時代後期後半	古墳時代前期	古墳時代中期	古墳時代後期	奈良時代	平安時代前半	平安時代後半	鎌倉時代	室町時代
美乃利遺跡	埋没微高地	田	坑溝田		住坑溝		住				住溝		住墓畠		
溝之口遺跡 M2	埋没微高地		坑		住墓		住			住溝	住柵溝				
溝之口遺跡 M3	埋没微高地				田溝		溝			溝					
溝之口遺跡 M1	埋没微高地		坑	住坑	住墓		住			住	住		住		
溝之口遺跡 M4	埋没微高地		溝	柱			住柵	住	住坑溝	住		溝			
平野遺跡	埋没微高地														
粟津遺跡	埋没微高地														
大野遺跡	沖積地				溝						住			住	住
溝之口遺跡 M5	沖積地									溝	溝	溝	住	住	
粟津大年遺跡	沖積地													住墓畠	
坂元遺跡	段丘上				住墓坑		住			墓窯	住			住	

２．遺跡の変遷（第５表）

溝之口遺跡周辺の上記の遺跡変遷をまとめてみる。

弥生時代前期は美乃利遺跡Ｒの水田がある。

弥生時代中期前半は美乃利遺跡Ｒで土坑・溝・水田などあり、多量の土器が出土している。溝之口遺跡M1地点・M2地点で土坑を、M4地点で溝を検出しており、溝之口遺跡の初源である。確実な住居は見つかっていない。

弥生時代中期中葉は溝之口遺跡M1地点で土坑・竪穴住居が調査されている。

弥生時代中期後半は溝之口遺跡M1地点で竪穴住居・墓、溝之口遺跡M2地点で方形周溝墓群・竪穴住居が調査されており、間に位置する溝之口遺跡M3地点で水田と溝が調査されている。美乃利遺跡Ｒでは竪穴住居、坂元遺跡Ｓで竪穴住居と２群の方形周溝墓群が調査されている。

弥生時代後期前半は溝之口遺跡M5地点下層の堆積層から土器が出土しているのみであり、弥生時代後期後半になって溝之口遺跡M1地点、美乃利遺跡Ｒ、坂元遺跡Ｓで竪穴住居が調査されており、溝之口遺跡M4地点では古墳時代初頭まで継続している。

古墳時代中期は調査例が少なく、溝之口遺跡M4地点で竪穴住居などがある。

古墳時代後期は溝之口遺跡M1地点・M2地点・M4地点で竪穴住居などが調査されている。坂元遺跡Ｓでは埴輪窯があり、古墳？や土坑などもある。

奈良時代は溝之口遺跡M2地点で掘立柱建物・柵・井戸・溝などが調査されており、官衙的様相が強い。坂元遺跡Ｓでは掘立柱建物・井戸などが調査されており、加古駅の駅子の集落と考えられている。

平安時代後期は溝之口遺跡M1地点・M5地点で掘立柱建物・溝、溝之口遺跡M4地点で溝などが調査されており、鎌倉時代にかけて沖積地の開発が進んでいったと考えられる。

鎌倉時代は溝之口遺跡M5地点で掘立柱建物・溝、大野遺跡Ｏ・坂元遺跡Ｓで掘立柱建物などが調査されている。

３．遺跡の変遷と環境変化

溝之口遺跡周辺の上記の遺跡変遷と立地を中心にまとめてみる。

日岡以南の加古川左岸の現在の地形は、加古川から東に向かって、加古川の沖積平野と段丘がある。沖積平野には氾濫原と微高地があり、さらに下層には氾濫原と埋没低位段丘がある。これらは加古川の沖積作用によって変化している。沖積平野には条里地割が存在している場所があり、存在していない場

所は、条里地割が施工されなかった場所と、後に洪水により消滅した場所とがある。埋没低位段丘上の遺跡は、上流から美乃利遺跡・溝之口遺跡・平野遺跡・粟津遺跡などの居住域が存在している。これらのうち律令期より前は洪水などの自然条件に大きく影響されていることが考えられる。

また平安時代以降は低位段丘の埋没化と氾濫原の微高地化により、埋没低位段丘より西側に居住域の範囲を広げていった。この結果、溝之口遺跡 M5地点や大野遺跡・粟津大年遺跡などが新たに形成された。

坂元遺跡は高位の野口段丘上に立地しているため、洪水などの影響がなく、弥生時代から中世にかけて存在しない時期もあるが継続して存在している。

以上のように、東から高位段丘に立地する坂元遺跡、現在埋没している低位段丘に立地する美乃利遺跡・溝之口遺跡 M1～ M4地点・平野遺跡・粟津遺跡、氾濫原に立地する大野遺跡・溝之口遺跡 M5地点・粟津大年遺跡に分かれる。これらの立地は遺跡の成立時期に違いがあることが判明した。

３．溝之口遺跡について

溝之口遺跡は昭和43年以来、大きく５地域で調査が行われており、弥生時代中期から中世にかけての遺跡であることが判明している。今回の JR 山陽本線等連続立体交差事業に伴って、山陽本線地区と加古川線地区の２箇所で調査を行なった。山陽本線地区のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｅ地区（溝之口遺跡 M4地点）は埋没低位段丘上に立地し、主に古墳時代前期から後期の集落であることが判明し、加古川線地区のＨ・Ｉ・Ｊ・Ｋ地区（溝之口遺跡 M5地点）は沖積地に立地し、主に平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物を中心とした集落であることが判明した。

溝之口遺跡の範囲は第1次調査時の分布調査の成果によって囲まれているが、この範囲は分布調査が行われた範囲とほぼ同じであり、分布調査が行われなかった今回調査の山陽本線地区のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｅ地区などにより当然分布範囲が広がることが想定できる。そこで確認調査により遺構の存在が明らかになった段階で溝之口遺跡の範囲を拡大した。ところが、今回の報告にあるように多様な遺跡内容であり、地点により内容も異なっていることが明らかになった。そこで、溝之口遺跡の範囲の再考をすべきであると考える。

加古川下流域左岸の帯状に分布する埋没低位段丘上の美乃利遺跡・溝之口遺跡・平野遺跡・粟津遺跡などは、美乃利・溝之口遺跡群として捉えることが良いのではないかと考える。将来的に、遺跡群中の発掘調査が進展し、地形的なまとまりや時代的なまとまりがはっきりした段階で、遺跡範囲を再検討すべきであると考える。詳細な発掘調査の進展を期待する。

参考文献

参考文献は第１章第２節のＰ．４に掲げている。

別表 1　土器一覧(1)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
1	第1図		14	須恵器	坏H蓋	口縁～底部 完形	確認			10.5	4.2			970232	518
2	第1図		14	土師器	坏	口縁～体部	確認			(13.0)	2.9+			970232	519
3	第1図		14	須恵器	坏H蓋	口縁～体部	確認			(12.6)	2.6+			970232	524
4	第1図		14	須恵器	坏H	体部	確認				3.3+			970232	521
5	第1図		14	須恵器	椀	底部	確認				1.5+	7.0		970232	520
6	第1図		14	土師器	坏	底部	確認				1.9+	5.7		970232	522
7	第1図		14	土師器	土錘	片面	確認			長 7.8	幅 (5.8)	高 (2.2)		970232	523
8	第1図		14	須恵器	坏B	口縁～底部	確認			14.7	5.1	10.0		970232	526
9	第1図		14	土師器	椀	口縁	確認			(18.0)	2.7+			970232	525
10	第1図		14	土師器	甕	口縁～体部	確認			17.4	7.9+			970232	516
11	第1図		14	土師器	甕	口縁～体部	確認			22.5	7.0+			970232	517
12		14	19	弥生土器	器台	口縁	A地区	SD201A		17.7	2.8+			980213	301
13		14	19	弥生土器	器台	脚	A地区	SD201A			8.4+			980213	304
14		14	18	須恵器	坏H蓋	口縁～天井部	A地区	SD201A		12.8	3.8			980213	302
15		14	18	須恵器	壺	体部	A地区	SD201A			8.6+			980213	303
16		14	18	須恵器	甕	口縁	A地区	SD201A		(52.9)	9.7+			980213	322
17		14	18	須恵器	甕	頸部～肩部	A地区	SD201A			15.4+			980213	305
18		14	19	須恵器	坏H蓋	口縁	A地区	SD202A		(15.4)	3.0+			980213	315
19		14	19	須恵器	坏H	口縁～体部	A地区	SD202A		(12.0)	3.4+			980213	316
20		14	19	須恵器	高坏	脚	A地区	SD202A			4.1+	10.0		980213	314
21		14	18	土師器	甕	口縁～底部	A地区	SD206A		13.0	20.5+			980213	320
22		14	19	須恵器	甕	口縁	A地区	包含層		(18.4)	1.9+			980213	321
23		14	19	韓式系土器	平底鉢	体部～底部	A地区	包含層			3.9+	(9.1)		980213	312
24		14	39	弥生土器	鉢	口縁～体部	A地区	包含層		(12.8)	4.6+			980213	469
25		14	19	土製品	土錘	一方の端部欠	A地区	包含層		長 4.6+	幅 1.5	厚 1.3		980213	313
26		15	19	須恵器	甕	口縁	A地区	SD203A		(19.8)	1.9+			980213	318
27		15	19	須恵器	高坏	体部～脚部	A地区	SD203A			4.4+			980213	317
28		15	18	土師器	椀	口縁～底部	A地区	SD203A		15.6	6.3	10.4		980213	319
29		15	19	須恵器	坏H	体部	A地区	SB201A	P101A		3.3+			980213	308
30		15	19	土師器	甕	口縁	A地区	SB201A	P102A	(13.6)	2.3+			980213	309
31		15	19	土師器	坏	口縁	A地区	P201A		14.6	3.1+			980213	310
32		15	19	土師器	甕	口縁	A地区	P201A		15.6	4.3+			980213	311
33		15	19	土師器	甕	口縁	A地区	SK201A		17.8	3.7+			980213	307
34		15	18	須恵器	坏H蓋	口縁～天井部	A地区	SK201A		14.4	4.7+			980213	306
35		28	35	土師器	坏	口縁～体部	B地区	SD304B		(12.8)	3.9+			980213	455
36		28	6・35	土師器	坏	口縁～底部	B地区	SD304B		13.7	3.7	8.3		980213	466
37		28	6・35	土師器	坏	口縁～体部	B地区	SD304B		13.0	3.3	6.9		980213	464
38		28	6・35	土師器	椀	口縁～底部	B地区	SD304B		13.0	3.5	7.2		980213	470
39		28	6・35	土師器	椀	口縁～底部	B地区	SD304B		(13.4)	4.0+	7.7		980213	471
40		28	6・35	土師器	椀	口縁～底部	B地区	SD304B		13.7	5.2+	7.0		980213	473
41		28	35	土師器	椀	底部	B地区	SD304B			3.3+	8.8		980213	472
42		28	37	土師器	小型丸底壺	体部～底部	B地区	SD304B			5.2+			980213	465
43		28	6・35	須恵器	坏	口縁～底部	B地区	SD304B		14.2	3.4	8.1		980213	462
44		28	35	須恵器	坏	口縁～体部	B地区	SD304B		(13.8)	3.2+			980213	459
45		28	35	須恵器	椀	底部	B地区	SD304B			2.3+	7.1		980213	456
46		28	35	須恵器	皿	口縁～体部	B地区	SD304B		13.8	1.8+			980213	461
47		28	35	須恵器	皿	口縁～底部	B地区	SD304B		(13.6)	2.9	(7.6)		980213	458
48		28	36	須恵器	瓶	体部～底部	B地区	SD304B			25.6+	14.1		980213	479
49		28	6・36	須恵器	壺	体部	B地区	SD304B			16.4+			980213	480
50		28	35	須恵器	鉢	口縁～体部	B地区	SD304B		16.4	5.3+			980213	474
51		28	6・36	須恵器	鉢	口縁～底部	B地区	SD304B		(24.7)	24.6+	16.4		980213	478
52		28	－	須恵器	甕	体部	B地区	SD304B			13.2+			980213	364
53		29	37	瓦	丸瓦	端部～胴部	B地区	SD304B		長 15.8+	幅 14.7	厚 1.7		980213	477
54		29	37	瓦	平瓦	側面	B地区	SD304B		長 15.5+	幅 12.3+	厚 2.3		980213	475
55		29	37	瓦	平瓦	側面～体部	B地区	SD304B		長 11.5+	幅 19.0+	厚 2.2		980213	476
56		29	39	瓦	平瓦	体部片	B地区	SD301B		長 9.8+	幅 4.4+	厚 2.2		980213	468
57		29	39	須恵器	坏B蓋	口縁	B地区	SD301B			2.1+	14.5		980213	457
58		29	39	須恵器	甕	口縁	B地区	SD301B		(14.0)	2.4+			980213	460
59		29	39	須恵器	壺	口縁	B地区	SD302B		12.5	3.4+			980213	463
60		29	39	瓦	平瓦	体部片	B地区	SD302B		長 9.8+	幅 9.7+	厚 2.0		980213	467
61		29	38	白磁	碗(Ⅳ類)	口縁	B地区	SD314B		(16.0)	3.8+			980213	493
62		29	38	須恵器	鉢	口縁	B地区	SD314B		(24.0)	4.4+			980213	492
63		29	38	須恵器	鉢	口縁～体部	B地区	SD314B		(24.0)	6.2+			980213	495
64		29	38	須恵器	壺	体部～底部	B地区	SD314B			8.8+	8.0		980213	491
65		29	38	須恵器	器台	体部	B地区	SD314B			6.1+			980213	494
66		29	39	須恵器	坏H	口縁～底部	B地区	SD307B		12.0	5.1	8.6		980213	481
67		29	38	須恵器	坏H	口縁	B地区	SD307B		(13.8)	2.8+			980213	482
68		29	38	土師器	壺	口縁	B地区	SD307B		(17.3)	4.7+			980213	483
69		29	38	弥生土器	甕	底部	B地区	SD307B			3.5+	5.0		980213	484
70		29	38	須恵器	坏H蓋	口縁～体部	B地区	SD313B		(14.6)	3.7+			980213	490
71		29	38	須恵器	坏H	口縁～底部	B地区	SD311B		10.0	4.4+			980213	487
72		29	38	須恵器	坏H蓋	口縁～天井部	B地区	SD311B		(14.8)	4.2			980213	489
73		29	39	須恵器	坏H	口縁～底部	B地区	SD311B		(14.4)	4.5			980213	488
74		29	38	土師器	高坏	体部～脚部	B地区	SD308B			6.0+			980213	485

別表 1　土器一覧(2)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
75		29	39	土師器	小型器台	口縁～脚部	B地区	SD315B		(9.5)	7.0+			980213	498
76		29	38	陶質土器	把手		B地区	SD315B		長　3.5	幅　3.0	厚　1.2		980213	497
77		29	38	土師器	椀	底部	B地区	SD315B			1.5+	6.5		980213	496
78		29	41	韓式系土器		体部	B地区	SD306B			6.6+			980213	334
79		29	38	弥生土器	鉢	口縁	B地区	SD317B		(11.4)	3.8+			980213	499
80		-	38	弥生土器	有孔鉢	底部	B地区	SD309B			2.1+	2.0		980213	486
81		30	6・40	土師器	小型壺	口縁～体部	B地区	SH301B		6.1	7.2+		◎	980213	343
82		30	6・40	韓式系土器	平底鉢	口縁～底部	B地区	SH301B		(10.2)	10.0	6.2	◎	980213	344
83		30	41	土師器	高坏	口縁～体部	B地区	SH301B		(16.0)	4.5+		◎	980213	341
84		30	6・40	土師器	高坏	口縁～脚部	B地区	SH301B		(12.8)	12.2	(11.0)	◎	980213	342
85		30	41	土師器	甕	口縁～体部	B地区	SH301B		(14.3)	6.2+		◎	980213	345
86		30	6・40	土師器	甕	口縁～底部	B地区	SH301B		20.7	33.4	10.7	◎	980213	333
87		30	41	韓式系土器	甕	体部	B地区	SH301B			17.3+		◎	980213	346
88		30	41	韓式系土器	甕	小片	B地区	SH301B			10.8+		◎	980213	340
89		30	41	韓式系土器	甕	小片	B地区	SH301B			8.7+			980213	337
90		30	41	韓式系土器	甕	小片	B地区	SH301B			4.4+			980213	339
91		30	41	韓式系土器	甕	小片	B地区	SH301B			8.8+			980213	338
92		30	41	韓式系土器	甕	小片	B地区	SH301B			8.3+			980213	335
93		30	41	韓式系土器	甕	小片	B地区	SH301B			8.6+			980213	336
94		31	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	東高床部土器群A	18.7	1.8+			980213	412
95		31	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(15.6)	5.4+			980213	405
96		31	7・42	弥生土器	甕	体部～底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		11.3+	3.5	◎	980213	350
97		31	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(11.6)	5.5+			980213	403
98		31	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	13.9	4.8+			980213	379
99		31	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(13.7)	5.7+			980213	357
100		31	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(14.0)	7.6+			980213	356
101		31	43	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(14.4)	17.0+			980213	367
102		31	45	弥生土器	甕	口縁	B地区	SH302B	東高床部土器群A	18.7	3.7+			980213	377
103		31	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(19.9)	5.3+			980213	404
104		31	44	弥生土器	壺	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		1.8+	4.7		980213	395
105		31	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		3.4+	2.7		980213	397
106		31	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		4.3+	(2.5)		980213	386
107		31	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		3.5+	丸底		980213	387
108		31	43	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		5.8+	2.5		980213	394
109		31	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		5.6+	4.9		980213	396
110		31	43	弥生土器	甕	体部～底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(19.7)	22.2+	2.8		980213	368
111		31	43	弥生土器	鉢	体部～底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		14.7+	4.9		980213	369
112		31	44	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		3.7+	4.1		980213	378
113		31	47	弥生土器	高坏	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	15.9	4.3+			980213	416
114		31	47	弥生土器	高坏	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	20.6	7.3+			980213	417
115		31	47	弥生土器	高坏	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群A	(24.2)	5.9+			980213	413
116		31	47	弥生土器	高坏	坏部	B地区	SH302B	東高床部土器群A		6.1+			980213	414
117		31	47	弥生土器	高坏	脚	B地区	SH302B	東高床部土器群A		8.0+			980213	418
118		31	7・46	弥生土器	器台	脚	B地区	SH302B	東高床部土器群A		8.8+	11.8		980213	415
119		32	7・42	弥生土器	壺	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	12.1	9.9+		◎	980213	353
120		32	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(18.6)	4.3+			980213	351
121		32	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	東高床部土器群B	16.2	3.1+			980213	421
122		32	46	弥生土器	壺	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		2.7+	4.7		980213	352
123		32	45	弥生土器	甕	体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		7.1+			980213	362
124		32	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(11.9)	3.2+			980213	354
125		32	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	12.4	6.1+			980213	380
126		32	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(15.2)	3.8+			980213	402
127		32	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(12.3)	6.2+			980213	400
128		32	7・42	弥生土器	甕	口縁～底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	13.0	17.5	4.4		980213	366
129		32	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(13.4)	6.4+			980213	381
130		32	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(16.6)	5.9+			980213	360
131		32	46	弥生土器	壺	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		2.4+	4.4		980213	371
132		32	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		2.5+	3.9		980213	385
133		32	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		1.9+	4.0		980213	384
134		32	44	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		4.3+	4.2		980213	383
135		32	44	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		4.2+	1.8		980213	389
136		32	44	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		2.7+	1.9		980213	390
137		32	44	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		4.8+	3.4		980213	391
138		32	44	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		5.2+	2.7		980213	388
139		32	43	弥生土器	鉢	体部～底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B		12.2+	(4.2)		980213	393
140		32	7・42	弥生土器	鉢	口縁～底部	B地区	SH302B	東高床部土器群B	8.9	9.1+	2.4(ほぼ丸)		980213	361
141		32	7・46	弥生土器	高坏	脚	B地区	SH302B	東高床部土器群B		9.6+	14.9		980213	419
142		32	47	弥生土器	高坏	脚	B地区	SH302B	東高床部土器群B		5.5+			980213	410
143		32	47	弥生土器	高坏	脚	B地区	SH302B	東高床部土器群B		1.3+	(11.9)		980213	420
144		32	47	弥生土器	器台	脚	B地区	SH302B	東高床部土器群B		4.7+			980213	411
145		32	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	東高床部土器群B	(20.8)	2.9+			980213	401
146		33	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	壁際土坑周辺土器群	12.2	5.5+			980213	363
147		33	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	壁際土坑周辺土器群	(13.5)	12.2+		◎	980213	358
148		33	44	弥生土器	鉢	体部～底部	B地区	SH302B	壁際土坑周辺土器群		4.5+	3.2		980213	398

別表 1　土器一覧(3)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
149		33	7・42	弥生土器	鉢	口縁～底部	B地区	SH302B	壁際土坑周辺土器群	20.5	8.4	3.9		980213	399
150		33	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	西高床部	(16.5)	9.4+			980213	355
151		33	46	弥生土器	有孔鉢	底部	B地区	SH302B	西高床部		2.3+	3.5		980213	347
152		33	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	中央床面	(16.2)	3.2+			980213	406
153		33	46	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	中央床面	(17.2)	1.8+			980213	409
154		33	7・42	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH302B	中央床面	(18.0)	5.7+			980213	349
155		33	44	弥生土器	壺	底部	B地区	SH302B	中央床面		6.7+	3.1		980213	392
156		33	45	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	中央床面	(13.6)	7.4+			980213	407
157		33	45	弥生土器	甕	口縁	B地区	SH302B	中央床面	14.2	3.2+			980213	373
158		33	45	弥生土器	甕	口縁	B地区	SH302B	中央床面	(16.3)	2.7+			980213	370
159		33	7・42	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SH302B	南高床部	(14.5)	6.9+			980213	359
160		33	46	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	中央床面		2.3+	3.0		980213	372
161		33	43	弥生土器	甕	底部	B地区	SH302B	中央床面		5.8+	丸底		980213	382
162		33	46	弥生土器	高坏	口縁～体部	B地区	SH302B	中央床面	(12.8)	5.9+			980213	348
163		33	47	弥生土器	高坏	脚	B地区	SH302B	中央床面		5.0+			980213	408
164		34	50	弥生土器	壺	口縁	B地区	SH303B		13.1	4.0+			980213	440
165		34	49	弥生土器	壺	底部	B地区	SH303B			2.8+	5.7		980213	433
166		34	49	弥生土器	壺	底部	B地区	SH303B			3.9+	4.4		980213	436
167		34	49	弥生土器	壺	底部	B地区	SH303B			4.2+	3.3		980213	429
168		34	49	弥生土器	壺	底部	B地区	SH303B			3.2+	4.1		980213	430
169		34	49	弥生土器	壺	底部	B地区	SH303B			4.4+	2.3		980213	451
170		34	49	弥生土器	壺	底部	B地区	SH303B			2.0+	2.0		980213	437
171		34	50	弥生土器	甕	口縁	B地区	SH303B		14.2	3.9+			980213	438
172		34	49	弥生土器	甕	体部～底部	B地区	SH303B			6.1+	4.4		980213	443
173		34	49	弥生土器	甕	底部	B地区	SH303B			4.5+	4.1		980213	446
174		34	49	弥生土器	甕	底部	B地区	SH303B			2.6+	5.3		980213	447
175		34	49	弥生土器	甕	底部	B地区	SH303B			3.0+	3.6		980213	434
176		34	49	弥生土器	甕	底部	B地区	SH303B			2.1+	4.2		980213	444
177		34	50	弥生土器	鉢A	口縁～体部	B地区	SH303B		(21.6)	6.1+			980213	439
178		34	7・48	弥生土器	鉢B	口縁～底部	B地区	SH303B		14.0	7.0+	3.8		980213	425
179		34	7・48	弥生土器	鉢B	口縁～底部	B地区	SH303B		(12.0)	7.2	4.4		980213	441
180		34	49	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH303B			2.8+	3.0		980213	450
181		34	49	弥生土器	鉢	底部	B地区	SH303B			3.0+	4.2		980213	426
182		34	49	弥生土器	鉢	体部～底部	B地区	SH303B			3.3+	3.4		970232	422
183		34	50	弥生土器	鉢A	口縁	B地区	SH303B		(44.2)	3.8+			980213	432
184		34	7・48	弥生土器	高坏	口縁～脚部	B地区	SH303B		16.7	7.6+		◎	980213	431
185		34	50	弥生土器	高坏	脚	B地区	SH303B			7.0+			980213	449
186		34	7・48	弥生土器	イイダコ壺	口縁～底部	B地区	SH303B		4.9	9.9+	丸底		980213	427
187		34	7・48	弥生土器	イイダコ壺	口縁～底部	B地区	SH303B		5.0	9.2		◎	980213	435
188		34	50	弥生土器	イイダコ壺	底部	B地区	SH303B			1.8+	2.5		980213	448
189		34	48	土製品	ミニチュア	砧状	B地区	SH303B		長　7.1+	幅　1.3・3	厚　1.2・3.0		980213	454
190		34	7・48	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SK304B		13.6	11.2+			980213	442
191		34	49	弥生土器	甕	底部	B地区	SK304B			1.6+	5.0		980213	445
192		34	49	弥生土器	鉢	体部～底部	B地区	SK305B			4.2+	2.2		980213	500
193		34	50	弥生土器	壺	口縁	B地区	SK306B		19.0	8.6+			980213	424
194		34	49	弥生土器	甕	底部	B地区	SK306B			3.0+	4.3		980213	502
195		34	50	弥生土器	高坏	坏部	B地区	SK306B			3.2+			980213	428
196		34	7・48	弥生土器	イイダコ壺	口縁～底部	B地区	SK306B		4.8	9.8	1.2		980213	452
197		34	50	弥生土器	イイダコ壺	底部	B地区	SK306B			2.3+	丸底		980213	423
198		34	50	弥生土器	高坏	口縁	B地区	SK306B		(23.8)	3.1+			980213	501
199		34	50	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	SK311B		(13.7)	6.0+			980213	376
200		34	49	弥生土器	鉢	底部	B地区	SK311B			2.7+	2.7		980213	375
201		34	7・48	弥生土器	イイダコ壺	口縁～底部	B地区	SK311B		4.6	10.2	3.5		980213	453
202		34	50	弥生土器	イイダコ壺	口縁～体部	B地区	SK311B		4.4	6.7+			980213	374
203		33	39	弥生土器	壺	口縁～頸部	B地区	P301B		15.8	5.7+			980213	503
204		33	39	弥生土器	甕	口縁～体部	B地区	P307B		(17.5)	6.5+			980213	504
205		33	39	弥生土器Ⅲ	甕	底部	B地区	P312B			4.4+	5.8		980213	505
206		33	36	須恵器	坏H蓋	口縁～体部	B地区	包含層		15.9	4.5+			980213	508
207		33	36	須恵器	坏H	口縁～体部	B地区	包含層		12.5	3.5+			980213	509
208		33	36	須恵器	瓶類	口縁	B地区	包含層		7.0	5.0+			980213	506
209		33	36	陶質土器	甕	小片	B地区	包含層			3.7+			980213	507
210		33	36	土製品	紡錘車		B地区	包含層		長　3.1	幅　5.5	厚　1.2		980213	511
211		33	36	瓦	平瓦	側面	B地区	包含層		長　9.0	幅　9.1+	厚　2.2		980213	510
212		36	52	弥生土器	壺	底部	C地区	P102C			3.8+	5.7		980213	328
213		36	52	弥生土器	高坏	脚部	C地区	P102C			8.8+			980213	327
214		36	52	弥生土器	甕	口縁	C地区	P103C		(22.6)	1.7+			980213	329
215		36	52	須恵器	坏H	口縁	C地区	P108C		(12.4)	1.9+			980213	330
216		36	52	弥生土器	壺	体部～底部	C地区	SD102C			8.3+	(10.2)		980213	323
217		36	52	弥生土器	壺	体部～底部	C地区	SD102C			8.0+	11.6		980213	324
218		36	52	土師器	甕	口縁	C地区	SK102C		(16.6)	5.3+			980213	325
219		36	52	須恵器	坏H蓋	口縁～天井部	C地区	SK103C		(12.0)	5.6+			980213	326
220		36	52	須恵器	坏H	口縁～体部	C地区	包含層		13.2	3.0+			980213	332
221		36	52	須恵器	高坏	脚部	C地区	包含層			3.6+	9.2		980213	331
222		38	53	須恵器	坏H蓋	口縁～天井部	D地区	包含層		(15.7)	3.9+			980213	540

別表 1　土器一覧(4)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
223		38	54	須恵器	坏H	体部	D地区	包含層			2.8+	(6.7)		980213	535
224		38	54	須恵器	皿	口縁	D地区	包含層		(15.0)	2.1+			980213	533
225		38	53	須恵器	皿	口縁～底部	D地区	包含層		(14.6)	3.0	12.1		980213	532
226		38	54	須恵器	椀	口縁	D地区	包含層		(15.7)	3.2+			980213	534
227		38	54	須恵器	椀	口縁～体部	D地区	包含層		18.3	5.6+			980213	545
228		38	54	須恵器	高坏	脚	D地区	包含層		0	1.8+	(10.4)		980213	541
229		38	54	須恵器	短頸壺	口縁～体部	D地区	包含層		7.4	4.8+			980213	542
230		38	54	須恵器	甕	肩	D地区	包含層			3.2+			980213	544
231		38	54	須恵器	壺	肩	D地区	包含層			3.3+			980213	543
232		38	54	須恵器	提瓶	体部・把手	D地区	包含層			16.1+			980213	546
233		38	53	須恵器	甕	口縁	D地区	包含層		21.8	4.5+			980213	539
234		38	53	黒色土器	椀	口縁～底部	D地区	包含層		17.7	3.7+	6.6		980213	547
235		38	54	土師器	椀	口縁	D地区	包含層		(13.9)	2.0+			980213	537
236		38	54	土師器	椀	口縁～体部	D地区	包含層		(15.8)	4.2+			980213	548
237		38	54	土師器	甕	口縁	D地区	包含層		(16.6)	2.7+			980213	549
238		38	54	土師器	甕	口縁	D地区	包含層		(21.4)	5.9+			980213	550
239		38	54	弥生土器	鉢	底部	D地区	包含層			2.8+	4.6		980213	538
240		38	54	青磁	碗	底部	D地区	包含層			2.6+	5.6		980213	536
241		38	54	土師器	製塩土器	小片	D地区	包含層						980213	551
242		42	57	弥生土器	壺	体部	E地区	SD502E			4.7+			970232	515
243		42	57	弥生土器	甕	底部	E地区	SD502E			7.2+	6.0		980213	558
244		42	57	弥生土器	壺	底部	E地区	SD502E			6.4+	13.7		980213	557
245		42	57	弥生土器	壺	体部上半	E地区	SD504E			5.6+			980213	561
246		42	57	弥生土器	甕	体部	E地区	SD504E			4.2+			980213	562
247		42	57	弥生土器	甕	底部	E地区	SD504E			5.7+	5.4		980213	563
248		42	57	弥生土器	壺	口縁	E地区	SD503E		(23.6)	5.2+			980213	560
249		42	57	弥生土器	鉢	口縁～体部	E地区	SD503E		(16.5)	3.9+			970232	514
250		42	57	弥生土器	鉢	底部	E地区	SD503E			2.7+	5.4		980213	559
251		42	57	弥生土器	壺	口縁	E地区	SK502E		(10.0)	2.2+			980213	552
252		42	57	弥生土器	鉢	底部	E地区	SK502E			2.0+	6.2		980213	553
253		42	57	土師器	坏	底部	E地区	SD501E			2.3+	4.6		980213	579
254		42	57	陶器	皿	口縁～体部	E地区	SD501E		(9.2)	2.1+			980213	580
255		42	57	須恵器	瓶	体部～底部	E地区	SD501E			3.4+	8.0		980213	581
256		42	57	土師器	焙烙	口縁～体部	E地区	SD501E		(29.1)	6.1+			980213	556
257		42	57	丹波	擂鉢	口縁	E地区	SD501E		(25.0)	3.3+			980213	582
258		42	57	須恵器	椀	口縁	E地区	SD501E		(16.0)	2.6+			980213	575
259		42	57	土師器	羽釜	口縁	E地区	SD501E		(23.0)	4.6+			980213	554
260		42	57	土師器	羽釜	口縁～体部	E地区	SD501E		(26.5)	6.0+			980213	555
261		42	57	備前	擂鉢	口縁	E地区	SD501E		(29.4)	4.0+			980213	577
262		42	57	陶器	擂鉢	口縁～体部	E地区	SD501E		(16.9)	4.9+			980213	578
263		42	57	土師器	甕	底部	E地区	SD501E			1.9+	3.5		980213	576
264		42	-	弥生土器	高坏	脚	E地区	包含層			3.1+	(13.1)		980213	513
265		42	-	須恵器	鉢	口縁	E地区	包含層		(17.5)	2.5+			980213	512
266		44	59	須恵器	坏H蓋	口縁	F地区	SD601F			2.5+	(14.0)		980213	573
267		44	59	須恵器	椀	口縁	F地区	SD601F		(15.6)	2.0+			980213	574
268		44	59	須恵器	椀	底部	F地区	SD601F			1.2+	6.9		980213	572
269		44	59	弥生土器	壺	口縁～体部	F地区	包含層		(8.6)	3.9+			980213	567
270		44	59	土師器	皿	口縁～体部	F地区	包含層		(9.9)	2.2+			980213	565
271		44	59	陶質土器		体部	F地区	包含層			5.5+			980213	571
272		44	59	須恵器	坏H蓋	口縁～天井部	F地区	包含層			4.0+	(11.2)		980213	568
273		44	59	須恵器	坏B	底部	F地区	包含層			2.1+	(12.6)		980213	570
274		44	59	須恵器	椀	口縁	F地区	包含層		14.1	1.9+			980213	564
275		44	59	須恵器	椀	口縁	F地区	包含層		(14.6)	1.8+			980213	566
276		44	59	須恵器	椀	体部～底部	F地区	包含層			1.5+	(6.1)		980213	569
277		45	60	須恵器	椀	体部～底部	G地区	SD001G			3.9+	(7.2)		970232	531
278		45	60	須恵器	鉢	口縁	G地区	包含層			2.8+			970232	530
279		45	60	須恵器	鉢	口縁	G地区	包含層		(28.5)	3.6+			970232	528
280		45	60	須恵器	甕	体部	G地区	包含層			4.4+			970232	529
281		45	60	陶器	擂鉢	体部	G地区	包含層			4.6+			970232	527
401		54	69	須恵器	鉢	口縁～体部	H地区	SB201H	P020H		4.1+			2003073	202
402		54	69	須恵器	椀	口縁～体部	H地区	SB202H	P061H	(16.0)	4.0	(5.9)		2003073	207
403		54	69	白磁	碗	体部～底部	H地区	SB202H	P019H		1.8+	(6.1)		2003073	201
404		54	69	須恵器	椀	体部～底部	H地区	SB203H	P026H		3.9+	(5.8)		2003073	204
405		54	69	土師器	坏	底部	H地区	SB203H	P026H		1.6+	7.3		2003073	203
406		54	69	土師器	鍋	口縁～体部	H地区	SB203H	P026H	(28.3)	8.6+			2003073	205
407		54	69	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SB204H	P045H	(15.6)	4.4+	6.7		2003073	206
408		54	69	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SB204H	P139H	(9.0)	1.9+	(6.0)		2003073	208
409		54	69	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SB206H	P051H	7.0	1.4+	3.8		2003073	214
410		54	69	土師器	坏	口縁～底部	H地区	SB205H	P096H	11.3	3.2+	7.9		2003073	210
411		54	69	土師器	皿	口縁～底部	H地区	SB205H	P100H	10.7	1.9	6.2		2003073	212
412		54	69	土師器	皿	口縁～底部	H地区	SB205H	P100H	10.1	1.9+	5.8		2003073	213
413		54	69	土師器	皿	口縁～底部	H地区	SB205H	P098H	9.6	1.8+	4.8		2003073	211
414		54	69	土師器	羽釜	口縁	H地区	SB205H	P087H		5.8+			2003073	209
415		54	69	須恵器	皿	口縁～底部	H地区	P081H		11.0	2.6+	6.4		2003073	215

別表 1　土器一覧(5)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
416		54	69	須恵器	椀	体部～底部	H地区	SK001H			3.1+	6.7		2003073	175
417		54	69	土師器	皿	口縁～体部	H地区	SK001H		12.5	2.3+			2003073	174
418		54	69	須恵器	鉢	口縁	H地区	SK008H		(18.2)	2.3+			2003073	179
419		54	69	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SK008H		8.3	2.0+	4.3		2003073	180
420		54	69	須恵器	椀	底部	H地区	SK010H			2.1+	6.0		2003073	181
421		54	69	土師器	椀	底部	H地区	SK110H			2.3+	5.8		2003073	182
422		54	-	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SK002H		16.0	5.3+	5.2		2003073	177
423		54	69	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SK002H		14.5	3.9+	6.3		2003073	176
424		54	69	土師器	羽釜	口縁～体部	H地区	SK002H			22.4+			2003073	183
425		54	69	土師器	皿	口縁	H地区	SK002H		(13.8)	1.9+			2003073	178
426		55	-	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SD047H		(16.4)	4.3	(5.8)		2003073	187
427		55	69	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SD047H		15.9	4.7	5.7		2003073	192
428		55	69	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SD047H		16.7	4.8	5.5		2003073	193
429		55	70	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SD047H		15.6	4.5	4.9		2003073	195
430		55	69	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SD047H		(15.6)	4.9	6.1		2003073	186
431		55	70	須恵器	鉢	口縁	H地区	SD047H			5.6+			2003073	185
432		55	70	土師器	鍋	口縁～体部	H地区	SD047H		(23.8)	6.2+			2003073	188
433		55	70	土師器	羽釜	口縁～底部	H地区	SD047H		29.2	12.4+			2003073	194
434		55	70	土師器		底部	H地区	SD047H		0	3.4+	8.8		2003073	189
435		55	70	土製品	土錘	端部若干欠	H地区	SD047H		長 4.8	幅 1.0	高 1.0		2003073	184
436		55	69	白磁	碗	口縁～底部	H地区	SD047H		15.2	6.4+	7.3		2003073	172
437		55	70	土師器	鉢	口縁	H地区	SD048H			4.1+			2003073	190
438		55	70	須恵器	椀	底部	H地区	SD050H			2.4+	(7.8)		2003073	191
439		55	70	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	SR006H		(15.0)	2.9	(7.2)		2003073	114
440		55	70	須恵器	椀	口縁～体部	H地区	SR006H		(16.7)	2.9+			2003073	119
441		55	70	須恵器	椀	口縁～体部	H地区	SR006H		(15.4)	2.5+			2003073	118
442		55	70	須恵器	椀	口縁～体部	H地区	SR006H		(14.0)	2.7+			2003073	117
443		55	70	須恵器	椀	体部～底部	H地区	SR006H			2.5+	(5.3)		2003073	110
444		55	70	須恵器	椀	底部	H地区	SR006H			1.4+	(6.4)		2003073	116
445		55	70	須恵器	坏B蓋	口縁～天井部	H地区	SR006H		(16.6)	1.8+			2003073	115
446		55	70	須恵器	壺	底部	H地区	SR006H			3.6+	(15.6)		2003073	111
447		56	71	須恵器	鉢	口縁	H地区	SR006H		29.0	7.1+			2003073	122
448		56	71	須恵器	鉢	口縁～体部	H地区	SR006H		27.0	8.8+			2003073	128
449		56	71	須恵器	鉢	口縁～底部	H地区	SR006H		28.0	11.5+	9.5		2003073	127
450		56	70	須恵器	鉢	口縁～底部	H地区	SR006H		25.7	10.0+	8.9		2003073	131
451		56	71	須恵器	鉢	口縁	H地区	SR006H		31.0	6.5+			2003073	132
452		56	71	須恵器	鉢	口縁	H地区	SR006H		29.5	6.6+			2003073	126
453		56	71	須恵器	鉢	口縁	H地区	SR006H		33.8	7.2+			2003073	124
454		56	71	須恵器	鉢	口縁	H地区	SR006H		35.8	5.4+			2003073	123
455		56	71	須恵器	鉢	口縁～体部	H地区	SR006H		35.6	9.9+			2003073	130
456		56	70	須恵器	鉢	口縁～底部	H地区	SR006H		19.0	6.6	9.2		2003073	121
457		56	71	須恵器	鉢	体部～底部	H地区	SR006H			5.7+	(8.4)		2003073	129
458		56	71	須恵器	鉢	体部～底部	H地区	SR006H			10.0+	11.6		2003073	125
459		56	71	須恵器	鉢	底部	H地区	SR006H			5.1+	8.4		2003073	120
460		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(21.0)	6.5+			2003073	138
461		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(31.0)	2.9+			2003073	151
462		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(43.4)	7.1+			2003073	137
463		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(33.4)	7.9+			2003073	136
464		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(38.0)	5.8+			2003073	134
465		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(39.8)	7.3+			2003073	139
466		57	71	須恵器	甕	口縁～頸部	H地区	SR006H		(40.0)	8.2+			2003073	141
467		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(36.6)	5.0+			2003073	140
468		57	71	須恵器	甕	口縁	H地区	SR006H		(49.0)	4.2+			2003073	135
469		58	71	須恵器	甕	口縁～体部	H地区	SR006H		35.6	47.5+			2003073	133
470		58	72	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SR006H		8.3	1.3			2003073	144
471		58	72	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SR006H		(8.5)	1.3			2003073	142
472		58	72	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SR006H		8.5	1.6	7.6		2003073	149
473		58	72	土師器	小皿	口縁～底部	H地区	SR006H		7.2	0.8	6.7		2003073	150
474		58	72	土師器		底部	H地区	SR006H			1.3+	5.4		2003073	148
475		58	72	土師器		底部	H地区	SR006H			1.8+	5.3		2003073	145
476		58	72	土師器	タコ壺	口縁	H地区	SR006H		12.2	6.7+			2003073	152
477		58	72	土師器	鍋	口縁	H地区	SR006H		(25.8)	5.6+			2003073	153
478		58	72	土師器	鍋	口縁	H地区	SR006H		23.5	5.6+			2003073	154
479		58	72	土師器	鍋	口縁～体部	H地区	SR006H		27.5	10.2+			2003073	159
480		58	72	土師器	鍋	口縁～体部	H地区	SR006H		26.7	12.3+			2003073	155
481		59	72	土師器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		(31.4)	5.1+			2003073	158
482		59	72	土師器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		(26.0)	6.1+			2003073	157
483		59	72	土師器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		21.6	5.6+			2003073	156
484		59	72	土師器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		26.4	8.0+			2003073	163
485		59	72	土師器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		19.8	6.6+			2003073	146
486		59	72	土師器	羽釜	口縁～体部	H地区	SR006H		23.2	12.3+			2003073	147
487		59	72	土師器	三足付鍋	体部～脚部	H地区	SR006H						2003073	-
488		59	72	土師器	三足付鍋	脚部	H地区	SR006H						2003073	-
489		59	72	瓦質土器	羽釜	口縁～体部	H地区	SR006H		20.9	8.3+			2003073	162

別表 1　土器一覧(6)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
490		59	73	瓦質土器	羽釜	口縁～体部	H地区	SR006H		(22.7)	7.5+			2003073	165
491		59	73	瓦質土器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		(21.7)	6.2+			2003073	164
492		59	73	瓦質土器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		(23.5)	4.3+			2003073	161
493		59	73	瓦質土器	羽釜	口縁	H地区	SR006H		(19.0)	6.9+			2003073	160
494		59	73	白磁	碗	口縁	H地区	SR006H		(15.6)	4.2+			2003073	171
495		59	73	白磁	碗	口縁	H地区	SR006H		(15.0)	3.1+			2003073	168
496		59	73	白磁	碗	口縁	H地区	SR006H		(15.5)	2.5+			2003073	169
497		59	73	白磁	碗	底部	H地区	SR006H			2.0+	8.2		2003073	170
498		59	73	白磁	碗	底部	H地区	SR006H			1.9+	5.6		2003073	166
499		59	73	青磁	碗	底部	H地区	SR006H			1.7+	4.6		2003073	167
500		60	73	瓦	丸瓦	玉縁～体部	H地区	SR006H		長 17.6+	幅 12.3	厚 2.1		2003073	113
501		60	73	瓦	平瓦	小片	H地区	SR006H		長 6.6+	幅 7.5+	厚 1.3		2003073	112
502		60	74	須恵器	鉢	口縁～底部	H地区	SR080H		27.6	10.9+	8.6		2003073	199
503		60	74	須恵器	鉢	口縁	H地区	SR080H		(28.0)	4.3+			2003073	200
504		60	74	須恵器	椀	底部	H地区	SR080H			2.3+	6.4		2003073	197
505		60	74	土師器		底部	H地区	SR080H			2.2+	5.7		2003073	196
506			74	土師器	鍋	口縁	H地区	SR080H		(23.3)	3.4+			2003073	198
507		60	74	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	包含層		17.3	5.0	5.6		2003073	219
508		60	74	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	包含層		16.0	4.2+	5.2		2003073	217
509		60	74	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	包含層		15.8	4.6	7.4		2003073	218
510		60	74	須恵器	椀	口縁～底部	H地区	包含層		(15.7)	4.2	6.0		2003073	222
511		60	74	須恵器	小皿	口縁～底部	H地区	包含層		8.3	2.5	5.9		2003073	216
512		60	74	須恵器	小皿	口縁～底部	H地区	包含層		7.8	1.6	6.1		2003073	221
513		60	74	瓦器	椀	口縁～底部	H地区	包含層		14.3	5.1+	6.3		2003073	220
514		60	74	緑釉陶器		底部	H地区	包含層			1.7+	7.7		2003073	173
515		–	74	須恵器	提瓶	体部片	H地区	SD302H						2003073	–
516		–	74	須恵器	提瓶	体部片	H地区	SD302H						2003073	–
517		–	74	須恵器	提瓶	体部片	H地区	SD302H						2003073	–
518		62	76	土師器	皿	口縁～底部	I地区	SK002I		12.7	3.1	10.3		2003226	225
519		62	76	土師器	小皿	口縁～底部　完形	I地区	SK002I		8.6	1.6	3.4		2003226	228
520		62	76	土師器	小皿	口縁～底部	I地区	SK002I		8.6	1.3	4.6		2003226	229
521		62	76	土師器	小皿	口縁～底部	I地区	SK002I		8.4	1.3	5.0		2003226	230
522		62	76	土師器	小皿	口縁～底部　ほぼ完形	I地区	SK002I		8.3	1.3	6.5		2003226	224
523		62	76	土師器	小皿	口縁～底部	I地区	SK002I		7.9	1.2	6.2		2003226	226
524		62	76	土師器	小皿	口縁～底部	I地区	SK002I		7.4	1.4	4.1		2003226	227
525		62	76	土師器	羽釜	口縁	I地区	SK002I			3.6+			2003226	231
526		62	76	白磁	碗	口縁	I地区	SK002I		16.0	2.0+			2003226	232
527		62	76	須恵器	坏B蓋	口縁～天井部	I地区	SD001I		15.4	1.8+			2003226	223
528		66	82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SB101J	P110J	15.9	5.0+	5.6		2001074	040
529		66	82	須恵器	椀	口縁～体部	J地区	SB101J	P118J	15.8	5.4+	5.7		2001074	044
530		66	82	須恵器	鉢	口縁	J地区	SB101J	P116J		5.8+			2001074	043
531		66	82	須恵器	小皿	口縁～底部	J地区	SB101J	P111J	9.0	2.0	5.2		2001074	045
532		66	82	土師器	坏	底部	J地区	SB101J	P110J		1.7+	7.0		2001074	041
533		66	82	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SB101J	P111J	9.3	1.6	6.0		2001074	042
534		66	82	土師器	皿	口縁～底部	J地区	SB101J	P109J	(15.0)	2.8			2001074	039
535		66	82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK103J		15.6	5.3	4.7		2001074	046
536		66	82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK103J		16.2	4.8	5.4		2001074	051
537		66	82	須恵器	鉢	口縁～体部	J地区	SK103J		(33.6)	8.8			2001074	047
538		66	82	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SK103J		7.8	1.2	5.3		2001074	048
539		66	82	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SK103J		8.4	1.3	5.1		2001074	050
540		66	82	土師器	鍋	口縁	J地区	SK103J		(33.6)	7.2+			2001074	049
541		66	82	白磁	碗	口縁～体部	J地区	SK103J		(15.8)	2.9+			2001074	052
542		66	8・82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		16.7	5.8	5.9		2001074	008
543		66	8・82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		17.1	5.2	5.1		2001074	007
544		66	83	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		16.9	4.8	5.9		2001074	016
545		66	8・82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		16.3	5.5	5.4		2001074	015
546		66	8・82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		(14.6)	5.1	6.4		2001074	014
547		66	83	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		(15.7)	4.9	5.0		2001074	009
548		66	8・82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		(16.2)	5.5	(5.6)		2001074	010
549		66	83	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		16.1	5.7	5.7		2001074	012
550		66	8・82	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		16.4	5.3	5.7		2001074	011
551		66	83	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK101J		(17.1)	5.7	6.0		2001074	013
552		66	8・82	須恵器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.2	2.7	4.8		2001074	001
553		66	8・82	須恵器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.5	2.2	4.8		2001074	004
554		66	8・82	須恵器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.4	2.3	4.7		2001074	006
555		66	8・82	須恵器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.7	2.0	5.7		2001074	005
556		66	8・82	須恵器	小皿	口縁～底部　完形	J地区	SK101J		8.7	2.0	4.6		2001074	002
557		66	83	須恵器	鉢	口縁～体部	J地区	SK101J		32.7	10.9			2001074	003
558		67	83	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.0	1.6	5.7		2001074	017
559		67	8・83	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.2	1.7	5.2		2001074	021
560		67	8・83	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.0	1.3	5.5		2001074	019
561		67	8・83	土師器	小皿	口縁～底部　完形	J地区	SK101J		7.8	1.5	5.3		2001074	020
562		67	83	土師器	坏	口縁～底部	J地区	SK101J		14.3	3.7	7.4		2001074	023
563		67	83	土師器	皿	口縁～体部	J地区	SK101J		15.9	3.1+			2001074	024

別表 1　土器一覧(7)

報告No.	挿図	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土分析	調査番号	実測No.
564		67	8・83	土師器	小皿	口縁～底部 完形	J地区	SK101J		8.9	1.6	7.3		2001074	018
565		67	83	土師器	小皿	口縁～底部	J地区	SK101J		8.7	1.6			2001074	022
566		67	83	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK101J		(33.2)	13.7+			2001074	025
567		67	83	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK101J		35.2	12.3+			2001074	026
568		67	83	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK101J		25.6	14.5+			2001074	027
569		67	8・83	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK101J		28.1	17.3+			2001074	029
570		67	84	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK101J		24.3	11.5+			2001074	028
571		67	8・84	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK101J		21.8	10.1+			2001074	030
572		68	84	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK102J		15.7	5.2	5.6		2001074	032
573		68	84	須恵器	椀	口縁～底部	J地区	SK102J		16.2	4.7	5.5		2001074	033
574		68	84	須恵器	小皿	口縁～底部	J地区	SK102J		8.3	2.1	4.8		2001074	031
575		68	84	須恵器	鉢	口縁	J地区	SK102J			3.3+			2001074	035
576		68	84	土師器	鍋	口縁～体部	J地区	SK102J		33.2	13.6+			2001074	036
577		68	84	土師器	坏	底部	J地区	SK102J			1.6+	7.7		2001074	034
578		68	84	須恵器	椀	口縁	J地区	SD101J		(15.9)	2.8+			2001074	053
579		68	84	須恵器	坏A	口縁～底部	J地区	SD103J		13.4	3.5	8.8		2001074	054
580		68	84	青磁	碗	口縁	J地区	包含層		(16.0)	2.7+			2001074	037
581		68	84	瓦	平瓦	側端面？	J地区	包含層		(8.2)	3.1			2001074	038
582		73	88	須恵器	椀	口縁～体部	K地区	SB001K	P121K	15.7	4.8+			2001215	098
583		73	88	須恵器	椀	底部	K地区	SB001K	P029K		1.8+	(5.5)		2001074	092
584		73	88	須恵器	鉢	口縁	K地区	SB001K	P036K		2.9+			2001074	096
585		73	88	須恵器	小皿	口縁～底部	K地区	SB002K	P007K・P002K	7.6	2.2	4.7		2001074	091
586		73	88	須恵器	小皿	口縁～底部	K地区	SB004K	P042K	8.3	2.1	4.6		2001074	094
587		73	88	土師器	椀	底部	K地区	SB004K	P045K		1.7+	(6.0)		2001074	095
588		73	88	須恵器	小皿	口縁～底部	K地区		P113K	8.3	2.5	5.0		2001215	097
589		73	88	須恵器	坏身	口縁～体部	K地区	SD003K		13.1	3.7+			2001215	085
590		73	8・88	須恵器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		15.1	5.8	8.0		2001215	084
591		73	88	須恵器	椀	体部～底部	K地区	SD003K			3.9+	7.4		2001215	087
592		73	8・88	須恵器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		15.2	5.3	7.5		2001074	083
593		73	8・88	須恵器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		14.6	5.3	6.9		2001215	063
594		73	88	須恵器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		15.3	4.9	6.8		2001215	058
595		73	8・88	須恵器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		14.4	5.6	6.8		2001215	086
596		73	8・88	須恵器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		13.7	5.7	7.6		2001215	057
597		73	88	須恵器	坏	口縁～底部	K地区	SD003K		14.2	3.9	8.4		2001215	064
598		73	88	須恵器	壺	口縁	K地区	SD003K		(20.2)	5.3+			2001215	060
599		73	88	須恵器	壺	肩部	K地区	SD003K			5.6+			2001074	056
600		73	88	須恵器	壺	胴部	K地区	SD003K			6.2+			2001215	062
601		73	88	須恵器	壺	底部	K地区	SD003K			5.3	(13.5)		2001215	059
602		73	-	須恵器	甕	口縁	K地区	SD003K		(23.6)	7.1+			2001215	061
603		73	-	須恵器	甕	口縁	K地区	SD003K		(26.0)	5.3+			2001074	082
604		74	8・88	土師器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		13.2	4.5	7.5		2001074	073
605		74	88	土師器	椀	口縁～底部	K地区	SD003K		(13.1)	4.8+	6.8		2001215	079
606		74	8・88	土師器	椀	体部～底部	K地区	SD003K			5.5+	6.7		2001215	065
607		74	88	土師器	椀	底部	K地区	SD003K			3.9+	7.7		2001074	075
608		74	88	土師器	椀	底部	K地区	SD003K			4.0+	(9.0)		2001215	080
609		74	89	土師器		底部	K地区	SD003K			3.2+	8.1		2001074	074
610		74	8・89	土師器	坏	口縁～底部	K地区	SD003K		13.3	3.5	8.7		2001215	066
611		74	8・89	土師器	坏	口縁～底部	K地区	SD003K		12.9	3.5	7.8		2001215	076
612		74	8・89	土師器	坏	口縁～底部	K地区	SD003K		(12.9)	3.3+	8.4		2001215	077
613		74	8・89	土師器	坏	口縁～底部	K地区	SD003K		13.0	3.0	8.4		2001215	070
614		74	88	土師器	坏	口縁～底部	K地区	SD003K		12.5	2.6	8.0		2001215	078
615		74	8・89	土師器	皿	口縁～底部	K地区	SD003K		12.4	1.5	9.3		2001074	072
616		74	8・89	土師器	皿	口縁～底部	K地区	SD003K		11.5	1.7	9.1		2001215	067
617		74	89	土師器	羽釜	口縁	K地区	SD003K		19.0	5.8+			2001215	068
618		74	89	土師器	鉢	口縁～体部	K地区	SD003K		32.2	8.8+			2001215	069
619		74	89	灰釉陶器	碗	口縁～底部	K地区	SD003K		(15.4)	4.9	8.1		2001215	088
620		74	89	灰釉陶器	碗	底部	K地区	SD003K			3.0+	9.2		2001215	089
621		74	89	須恵器	椀	底部	K地区	SD002K			1.1+	4.4		2001215	090
622		74	89	土師器	皿	底部	K地区	SD001K			1.0+	13.4		2001074	071
623		74	89	須恵器	鉢	口縁～体部	K地区	4～6層		(25.0)	6.8+			2001074	100
624		74	89	須恵器	鉢	口縁	K地区	4～6層		(29.2)	6.6+			2001074	103
625		74	89	須恵器	鉢	口縁	K地区	4～6層		(29.8)	7.8+			2001074	099
626		75	90	須恵器	甕	口縁	K地区	4～6層		30.4	5.3+			2001215	109
627		75	90	須恵器	甕	口縁	K地区	4～6層		22.6	5.8+			2001215	107
628		75	90	須恵器	甕	口縁	K地区	4～6層		(24.1)	6.9+			2001215	104
629		75	90	土師器	羽釜	口縁	K地区	4～6層		19.8	8.3+			2001215	108
630		75	90	白磁	碗	口縁～底部	K地区	4～6層		16.1	6.4	7.1		2001074・2001215	102
631		75	90	白磁	碗	口縁～底部	K地区	4～6層		(17.0)	6.9+	7.5		2001074	101
632		75	90	白磁	碗	底部	K地区	4～6層			2.1+	5.8		2001215	105
633		75	90	瓦	平瓦	端部	K地区	4～6層		長 10.8+	幅 10.0+	厚 2.4		2001215	106
634		75	90	弥生土器	長頸壺	口縁～底部	J地区	8層		(12.8)	27.5	18.0		2001074	055

別表 2　鉄器一覧

報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		調査番号	実測No.
M001	30	40	鉄製品	椀形滓		B地区	SH301B		4.9	4.7	1.2		980213	635
M401	60	75	鉄製品	釘		H地区	P043H		7.7	1.4	0.6		2003073	246
M402	60	75	鉄製品	釘		H地区	SR080H		3.5	0.7	0.5		2003073	245
M403	60	75	鉄製品	鉄鏃		H地区	SR006H		4.0	1.2	1.0		2003073	244
M404	60	75	鉄製品	不明		J地区	SK001H		5.0	0.3	0.3		2003073	243
M405	68	84	鉄製品	鉄鏃		J地区	SB101J	P105J	4.9	1.7	0.3		2001074	239
M406	68	84	鉄製品	鉄鏃		J地区	SK103J		6.8	1.6	0.4		2001074	241
M407	68	84	鉄製品	鉄鏃		J地区	SK103J		3.2	1.5	0.6		2001074	240
M408	68	84	鉄製品	釘		J地区	SK102J		3.6	0.8	0.5		2001074	242

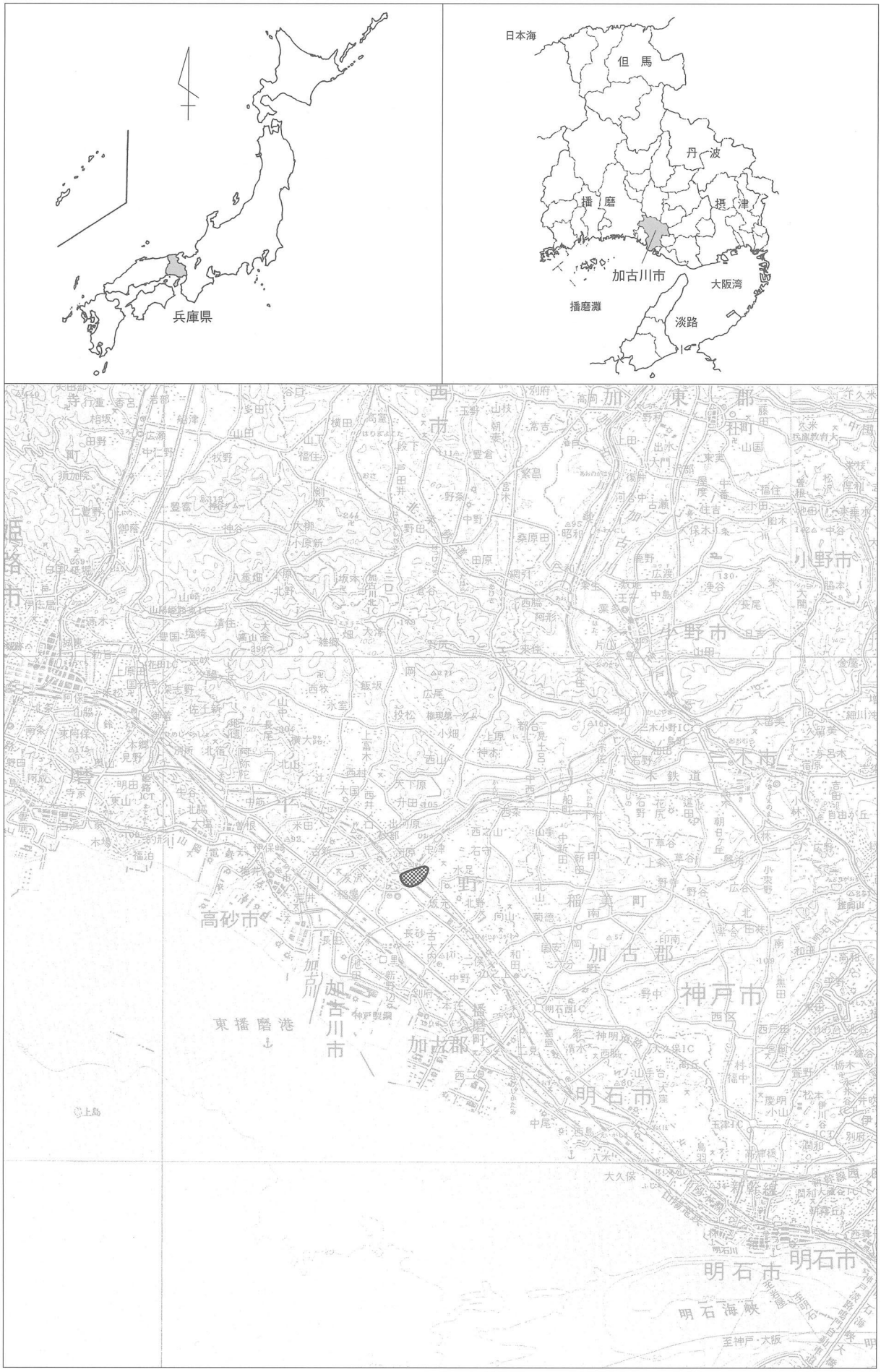
別表 3　木器一覧

報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		調査番号	実測No.
W001	15	18	木器	板材		A地区	SD203A		17.9	6.8	1.3		980213	2
W002	15	18	木器	組合箱側板		A地区	SD203A		54.4	11.1	0.6		980213	1

別表 4　石器一覧

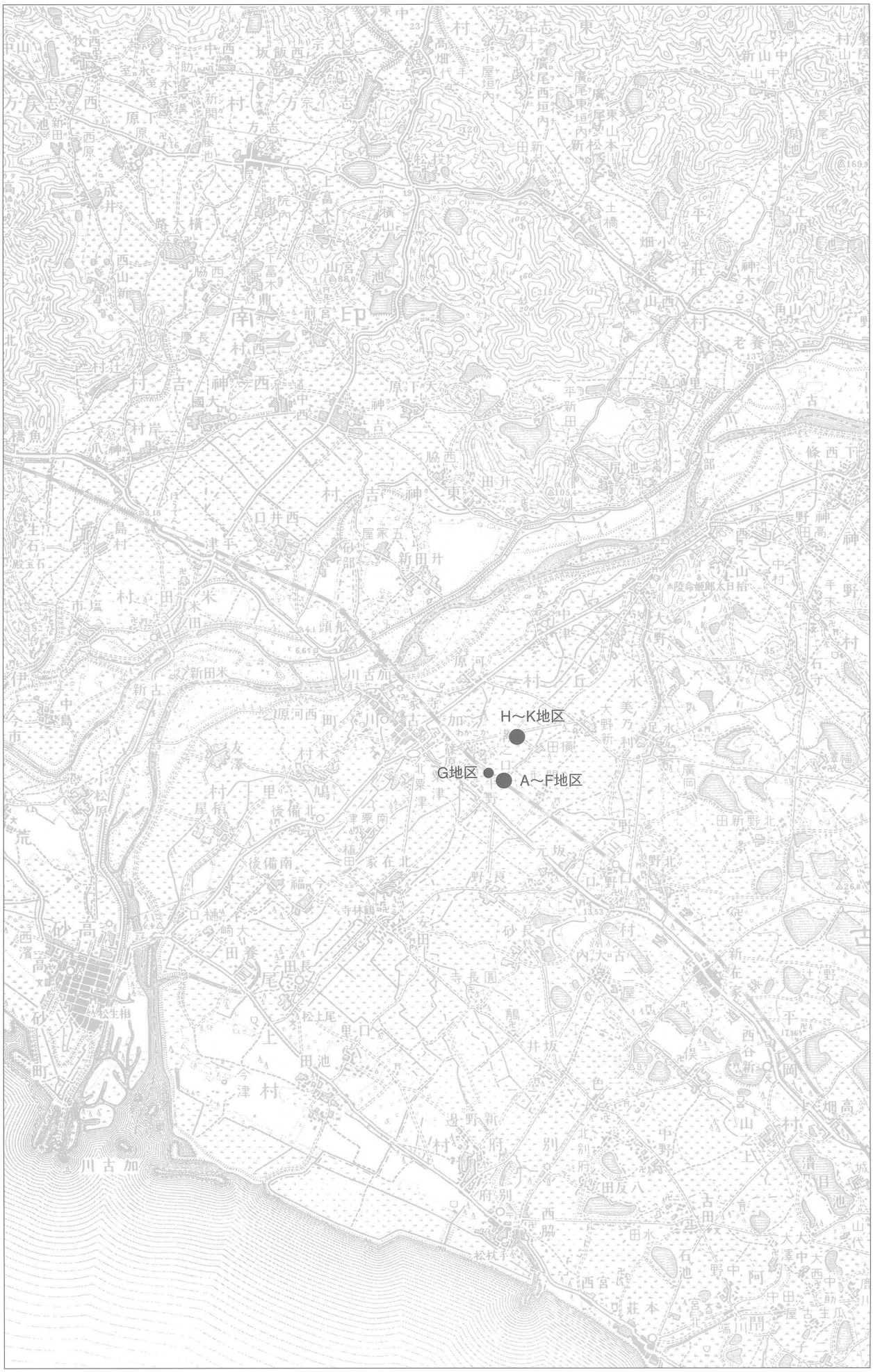
報告No.	図版No.	写真図版No.	種別	器種	部位	調査区	遺構	遺構2	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	調査番号	実測No.
S001	14	21	石器	有孔円板		A地区	SD206A		23.0	24.0	3.5	3.2	980213	601
S002	15	20	石器	円板状		A地区	SS201A		82.5	99.5	23.5	178.8	980213	603
S003	15	20	石器	円板状		A地区	SS201A		100.5	109.0	16.0	184.9	980213	604
S004	15	20	石器	円板状		A地区	SS201A		115.0	99.0	13.0	141.9	980213	605
S005	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		87.5	100.5	19.0	178.6	980213	606
S006	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		58.0	92.0	16.5	72.0	980213	607
S007	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		78.0	102.0	24.0	132.6	980213	608
S008	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		63.5	109.0	16.5	102.0	980213	609
S009	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		80.0	117.0	17.0	177.2	980213	610
S010	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		95.0	94.0	21.5	224.9	980213	611
S011	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		91.0	96.0	15.0	133.4	980213	612
S012	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		93.0	103.5	19.0	176.1	980213	613
S013	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		82.5	96.0	21.0	202.8	980213	614
S014	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		105.0	130.0	21.0	265.5	980213	615
S015	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		92.0	107.0	21.0	184.8	980213	616
S016	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		97.0	118.0	20.0	253.3	980213	617
S017	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		82.0	95.5	18.0	145.7	980213	618
S018	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		83.5	97.0	19.0	149.3	980213	619
S019	16	20	石器	円板状		A地区	SS201A		91.5	106.0	20.0	175.9	980213	620
S020	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		81.5	99.0	20.5	181.7	980213	621
S021	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		97.5	95.0	20.0	191.4	980213	622
S022	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		84.0	103.0	22.5	201.6	980213	623
S023	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		81.0	101.0	27.0	240.6	980213	624
S024	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		107.5	115.0	15.5	218.3	980213	625
S025	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		86.5	115.0	16.0	131.8	980213	626
S026	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		85.0	111.0	19.0	199.6	980213	627
S027	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		83.0	109.0	21.0	160.1	980213	628
S028	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		94.0	118.5	21.0	227.0	980213	629
S029	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		91.5	112.0	28.0	183.5	980213	630
S030	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		106.5	115.0	22.0	240.7	980213	631
S031	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		91.5	89.5	21.0	174.4	980213	632
S032	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		100.5	102.0	21.5	214.4	980213	634
S033	17	21	石器	円板状		A地区	SS201A		74.0	104.0	26.0	196.6	980213	633
S034	44	59	石器	砥石		F地区	SD602F		111.0	116.0	81.5	1822.0	980213	602
S401	61	75	石器	擂り石？		H地区	SB205H	P096H	42.0	40.0	28.0	71.8	2003073	236
S402	61	75	石器	石皿？		H地区	SB205H	P096H	115.5	108.0	16.5	373.4	2003073	237
S403	61	75	石器	叩石		H地区	SD047H		80.5	60.5	44.5	266.6	2003073	238
S404	61	75	石器	砥石		H地区	SR006H		88.3	31.5	25.5	95.5	2003073	234
S405	61	75	石器	砥石		H地区	SR006H		66.0	56.9	47.8	261.6	2003073	235
S406	68	84	石器	砥石		J地区	SB101J	P115J	92.5	70.5	42.0	378.9	2001074	233

図　　版



1　兵庫県の位置　2　加古川市の位置
3　溝之口遺跡の位置（1/200,000）

4　溝之口遺跡周辺の地形分類と条里（1/3,000）

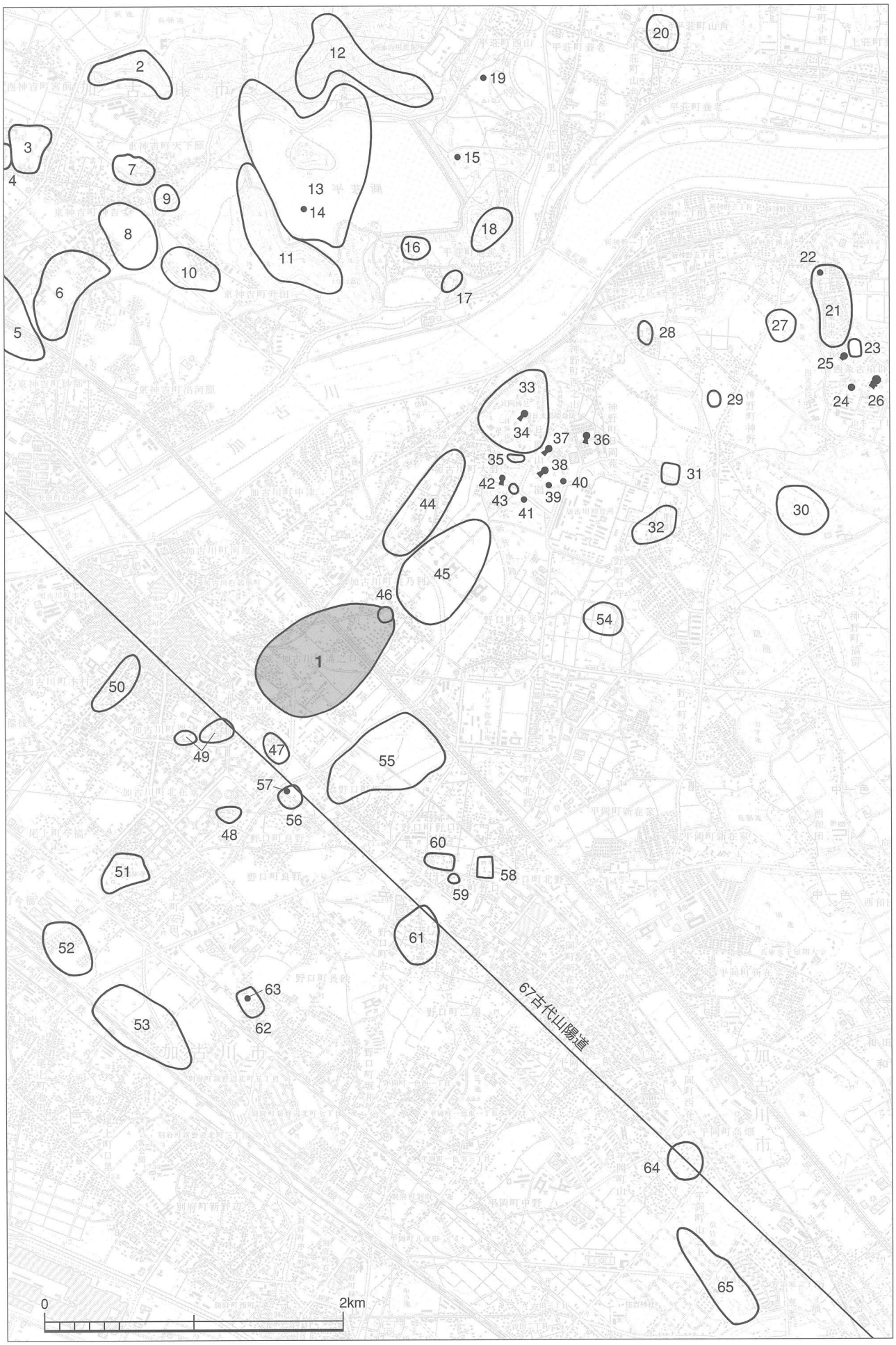


5 大正6年の溝之口遺跡周辺（1/50,000）

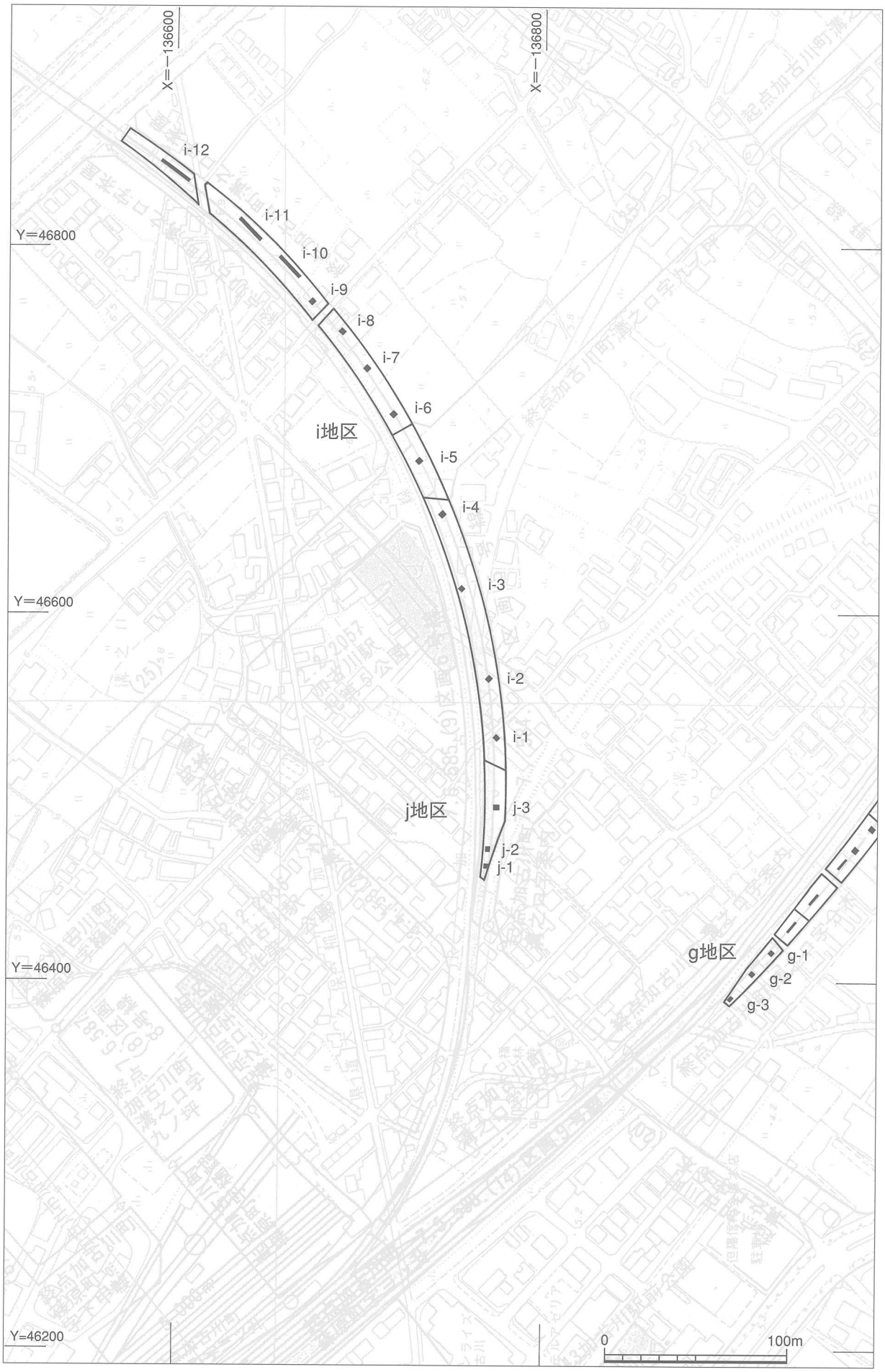
図版4

溝之口遺跡周辺の主要遺跡一覧

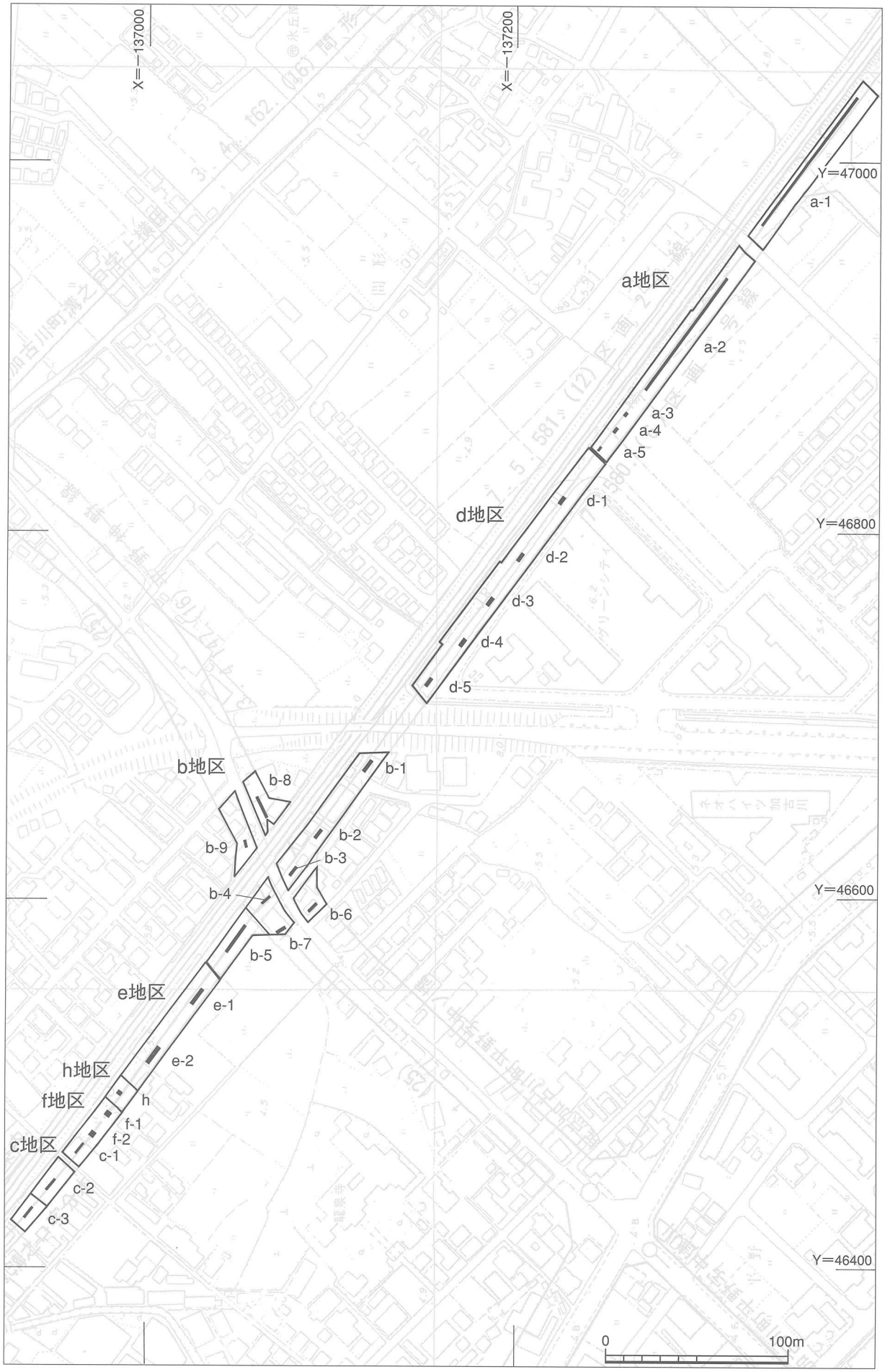
図版5	県遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
2	110201～110205	神吉山古墳群	加古川市東神吉町神吉	古墳	古墳
3	110013	中西台地遺跡	加古川市西神吉町中西	弥生～中世	集落
4	110228	中西廃寺	加古川市西神吉町中西	奈良	寺院
5	110008	東神吉遺跡	加古川市東神吉町西井ノ口	弥生・古墳	集落
6	110009	砂部遺跡	加古川市東神吉町砂部	縄文～奈良	集落
7	110015	神吉遺跡	加古川市東神吉町神吉	弥生	集落
8	110221	神吉南遺跡	加古川市東神吉町神吉	弥生～奈良	集落
9	110222	天下原遺跡	加古川市東神吉町天下原	弥生～奈良	集落
10	110219	升田遺跡	加古川市東神吉町升田	奈良	集落
11	110190～110199	升田山古墳群	加古川市東神吉町升田	古墳	古墳
12	110126	飯盛山古墳群	加古川市平荘町飯盛山	古墳	古墳
13	110140～110189	池尻古墳群	加古川市平荘町池尻	古墳	古墳
14	110045	カンス塚古墳	加古川市平荘町池尻	古墳	古墳
15	110044	池尻2号墳	加古川市平荘町池尻	古墳	古墳
16	110011	平山遺跡	加古川市平荘町池尻、平山	弥生	集落
17	110137～110139	平山古墳群	加古川市平荘町池尻	古墳	古墳
18	110132～110136	地蔵寺古墳群	加古川市平荘町池尻	古墳	古墳
19	110042	里古墳	加古川市平荘町里	古墳	古墳
20	110506	山角廃寺	加古川市平荘町山角	奈良	寺院
21	110062～110094	西条古墳群	加古川市山手	古墳	古墳
22	110089	西条52号墳	加古川市山手	弥生	墓
23	110226	西条廃寺	加古川市神野町西条	奈良	寺院
24	110032	尼塚古墳	加古川市山手	古墳	古墳
25	110033	人塚古墳	加古川市山手	古墳	古墳
26	110031	行者塚古墳	加古川市山手	古墳	古墳
27	110485	神野遺跡	加古川市神野町西条	縄文～平安	集落
28	110095～110096	二塚古墳群	加古川市神野町二塚	古墳	古墳
29	110249	手末遺跡	加古川市神野町東神野	弥生・平安	集落
30		神野大林窯跡群	加古川市神野町	古墳	生産
31	110225	石守廃寺	加古川市神野町石守	奈良	寺院
32	110118～110509	石守古墳群	加古川市神野町石守	古墳	古墳
33	110098～110117	日岡山古墳群	加古川市神野町西ノ山	古墳	古墳
34	110026	ひれ墓古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
35	110004	日岡山遺跡	加古川市加古川町大野	旧石器	散布地
36	110030	北大塚古墳	加古川市神野町大野日岡苑	古墳	古墳
37	110029	西大塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
38	110028	南大塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
39	110027	西車塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
40	110022	東車塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
41	110024	狐塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
42	110025	勅使塚古墳	加古川市加古川町大野	古墳	古墳
43	110234	日岡遺跡	加古川市加古川町大野	弥生・古墳	集落
44		大野遺跡	加古川市加古川町大野	中世	集落
45	110218	美乃利遺跡	加古川市加古川町大野	弥生～中世	集落
46	110224	溝之口廃寺	加古川市加古川町美乃利	奈良	寺院
1	**110010**	**溝之口遺跡**	**加古川市加古川町溝之口**	**弥生～平安**	**集落**
47	110357	平野遺跡	加古川市加古川町平野	弥生	集落
48	110292	北在家遺跡	加古川市加古川町北在家	弥生・古墳	集落
49	110294	粟津遺跡	加古川市加古川町粟津	弥生・古墳	集落
50		粟津大年遺跡	加古川市加古川町粟津	中世	集落
51	110614	鶴林寺	加古川市加古川町北在家	平安	寺院
52	110212	尾上遺跡	加古川市尾上町長田	弥生・古墳	集落
53	110213	浜の宮遺跡	加古川市尾上町口里	弥生・古墳	集落
54	110119	水足古墳群	加古川市野口町水足	古墳	古墳
55		坂元遺跡	加古川市野口町坂元	縄文～中世	集落
56	110617	具平塚遺跡	加古川市野口町良野	弥生	散布地
57	110305	具平塚古墳	加古川市野口町良野	古墳	古墳
58	110223	野口廃寺	加古川市野口町野口	奈良	寺院
59	110259	野口城跡	加古川市野口町野口	中世	城
60	110621	教信寺	加古川市野口町野口	平安・中世	寺院
61	110220	古大内遺跡	加古川市野口町古大内	奈良	駅
62	110017	長砂遺跡	加古川市野口町長砂	弥生	集落
63	110023	聖陵山古墳	加古川市野口町長砂	古墳	古墳
64	110555	長畑遺跡	加古川市平岡町長畑	弥生	集落
65	110001	山之上遺跡	加古川市平岡町山之上	旧石器	散布地
66	340006	大中遺跡	加古郡播磨町大中	弥生	集落
67	110488	古代山陽道	加古川市野口町～平岡町	奈良	道路



6 溝之口遺跡周辺の主要遺跡（1/35,000）

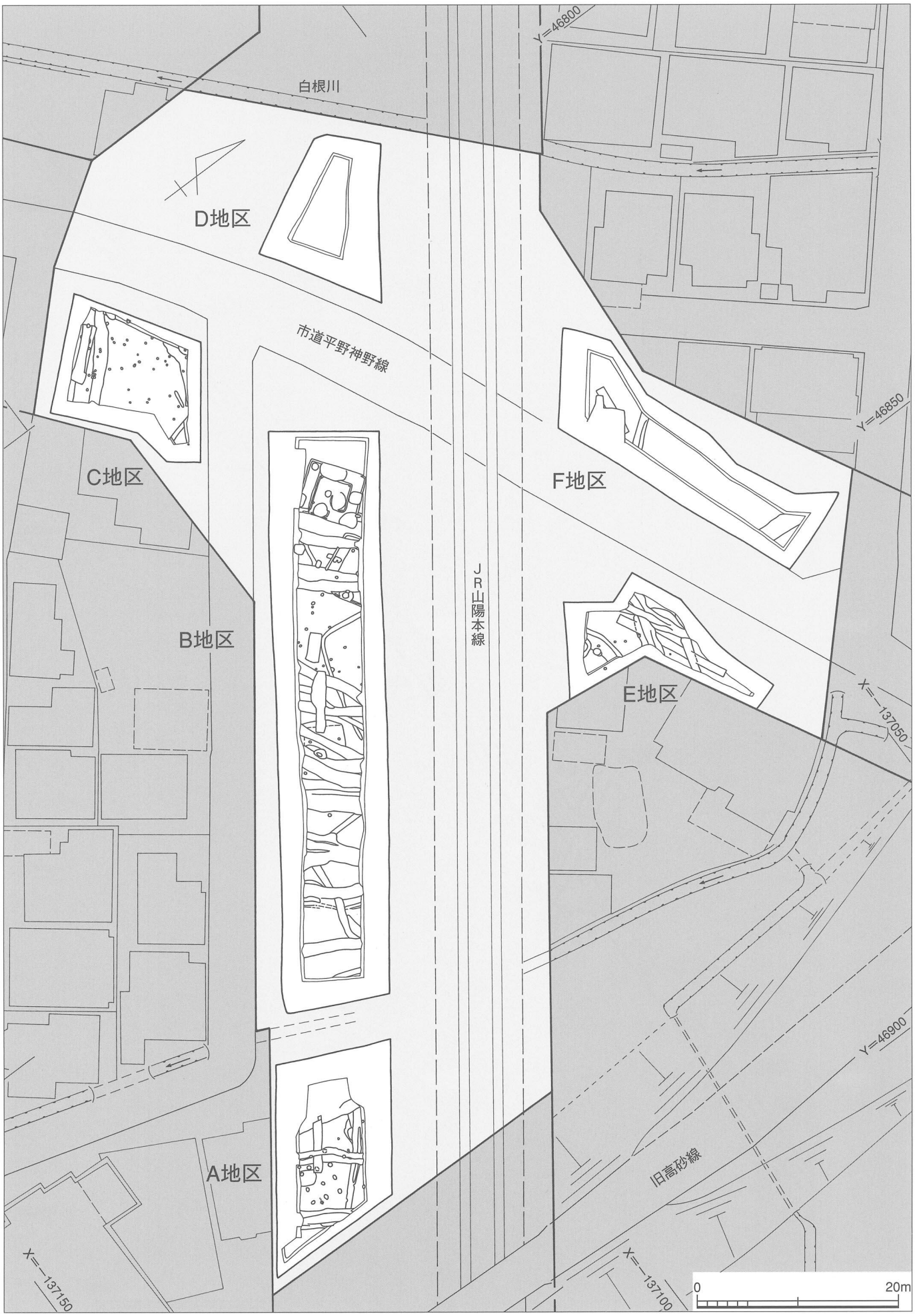


7 確認調査と本発掘調査の位置①（1/3,000）

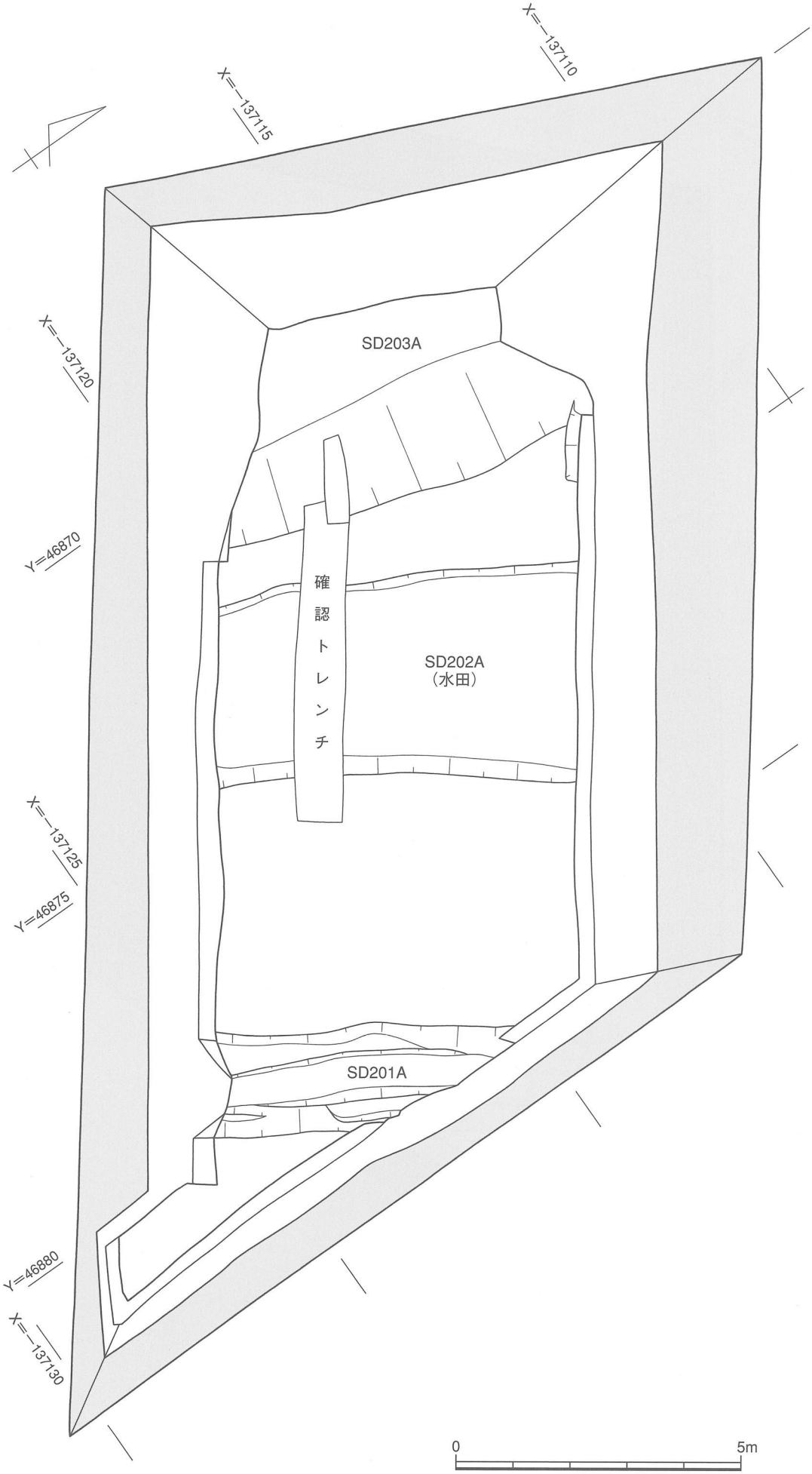


7 確認調査と本発掘調査の位置②(1/3,000)

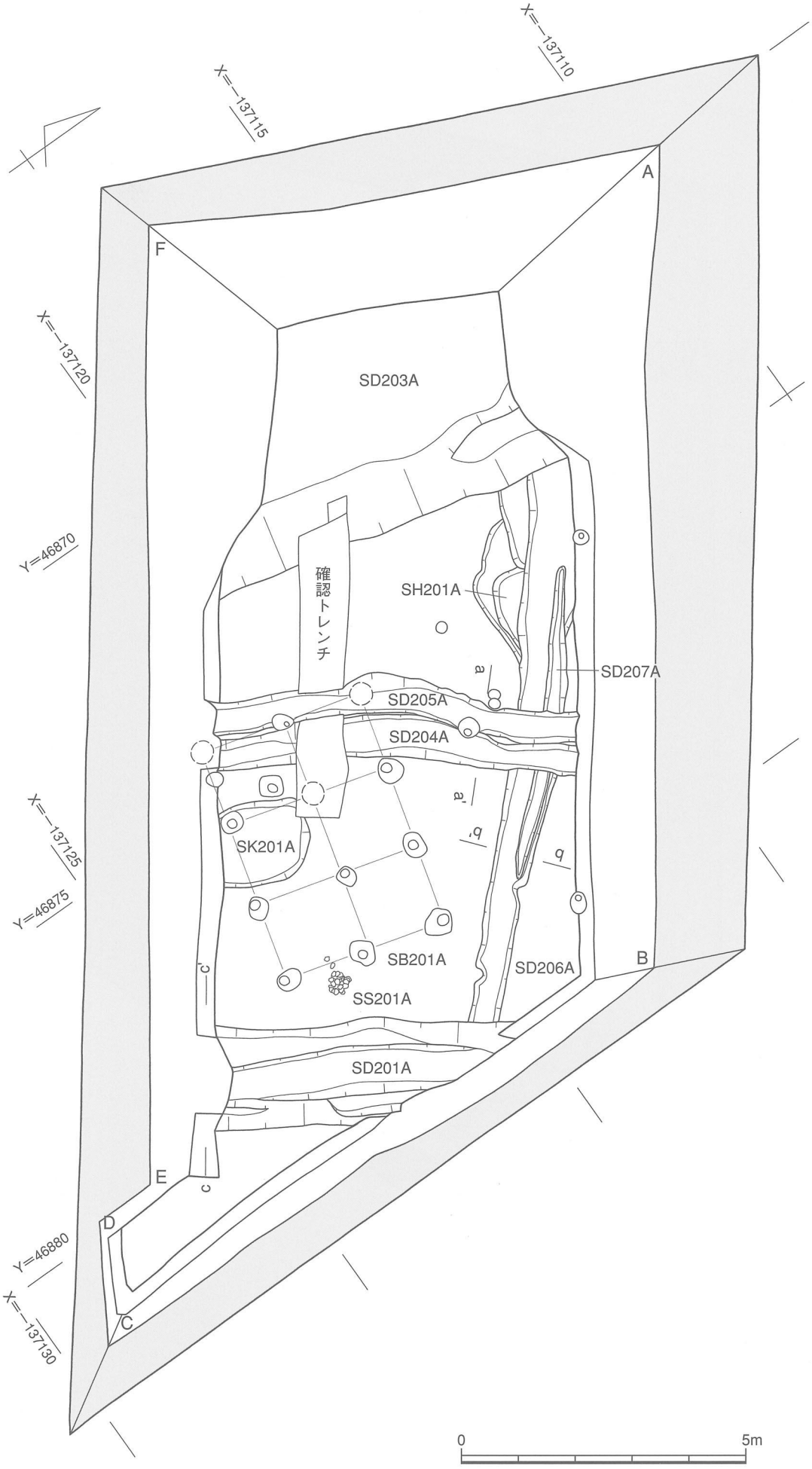
図版8　A～F地区　遺構



8　山陽本線地区調査位置（1/500）

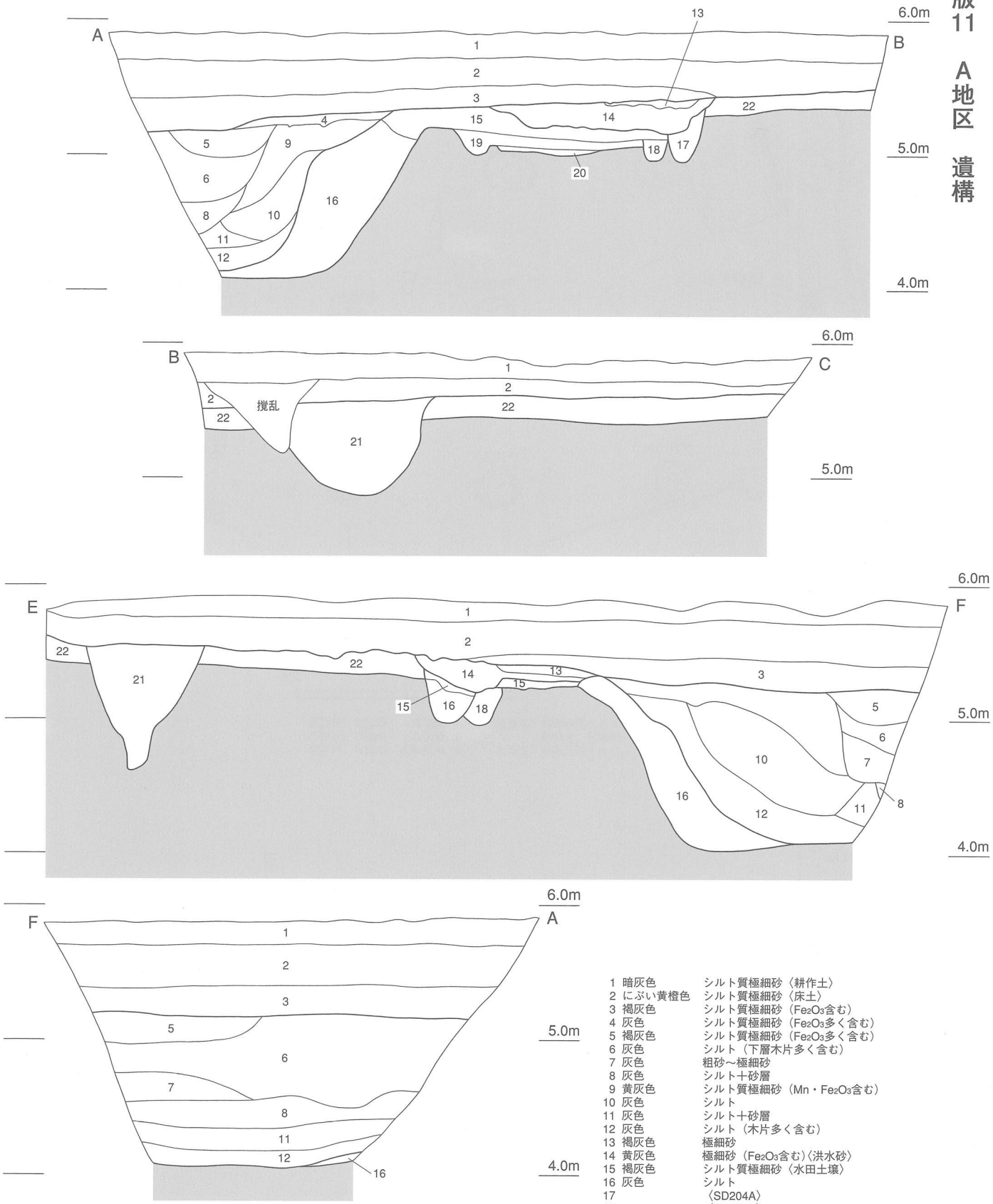


9 第1面遺構配置（1/80）



10　第2面遺構配置（1/80）

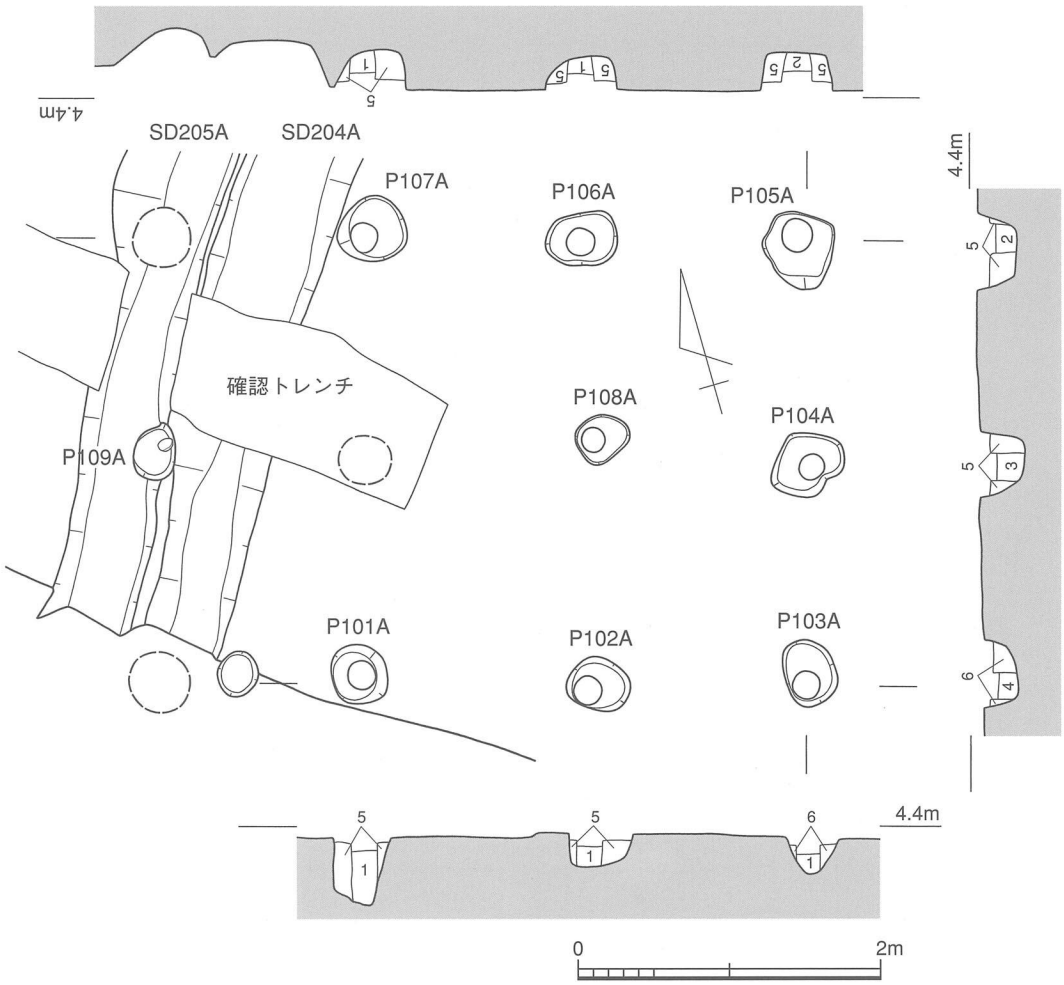
図版11 A地区 遺構



1	暗灰色	シルト質極細砂〈耕作土〉
2	にぶい黄橙色	シルト質極細砂〈床土〉
3	褐灰色	シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）
4	灰色	シルト質極細砂（Fe_2O_3多く含む）
5	褐灰色	シルト質極細砂（Fe_2O_3多く含む）
6	灰色	シルト（下層木片多く含む）
7	灰色	粗砂～極細砂
8	灰色	シルト十砂層
9	黄灰色	シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）
10	灰色	シルト
11	灰色	シルト十砂層
12	灰色	シルト（木片多く含む）
13	褐灰色	極細砂
14	黄灰色	極細砂（Fe_2O_3含む）〈洪水砂〉
15	褐灰色	シルト質極細砂〈水田土壌〉
16	灰色	シルト
17		〈SD204A〉
18		〈SD205A〉
19	黒褐色	シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3・炭・土器含む）〈SH201A〉
20	褐灰色	極細砂（シルト質極細砂ブロック混じり）〈SH201A〉
21		〈SD201A〉
22	褐灰色	シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）

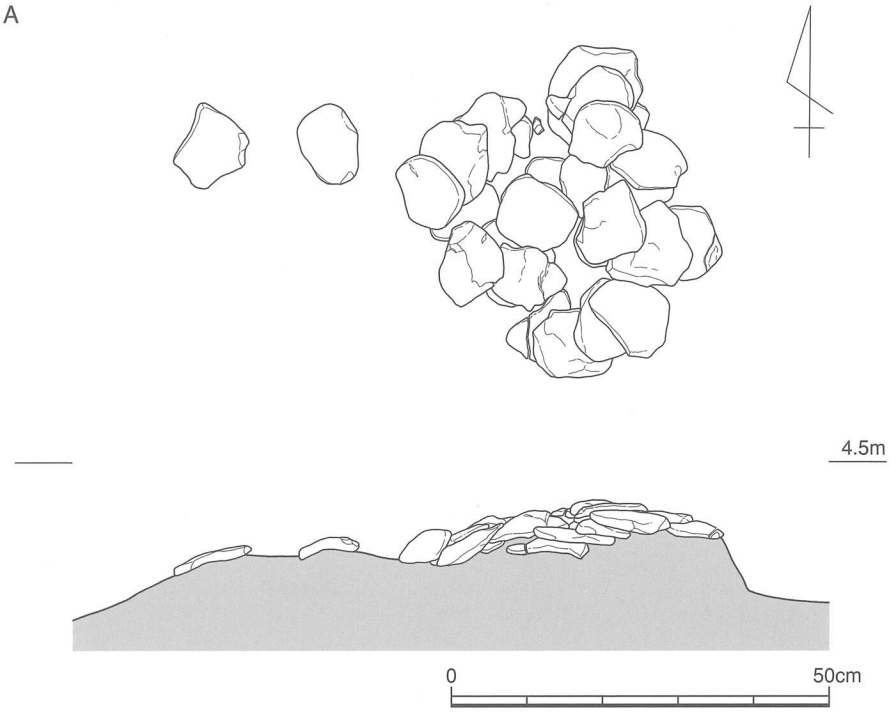
11 土層断面（1/40・1/100）

12 SB201A



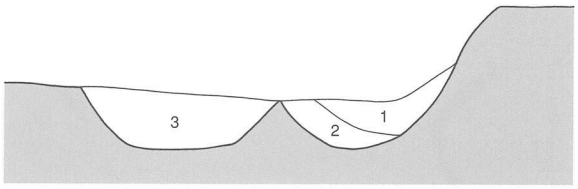
1	褐灰色	シルト質極細砂〈柱痕跡〉	4	褐灰色	極細砂〈柱痕跡〉
2	灰黄褐色	極細砂〈柱痕跡〉	5	褐灰色	極細砂〈柱掘形〉
3	灰白色	シルト質極細砂〈柱痕跡〉	6	灰黄褐色	極細砂〈柱掘形〉

13 SS201A



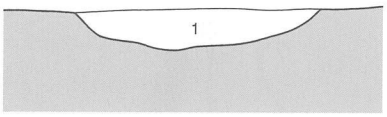
12 掘立柱建物SB201A(1/50)
13 集石SS201A(1/10)

14 SD205A・SD204A



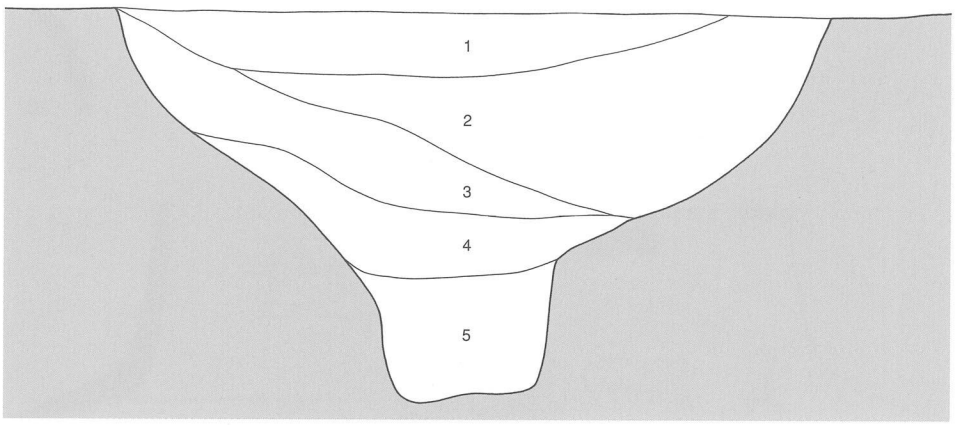
1 褐灰色 シルト質極細砂
2 灰白色 シルト質極細砂（褐灰色のシルト質極細砂ブロック含む）
3 褐灰色 シルト質極細砂（灰白色の炭混極細砂含む）

15 SD206A



1 褐灰色 シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）

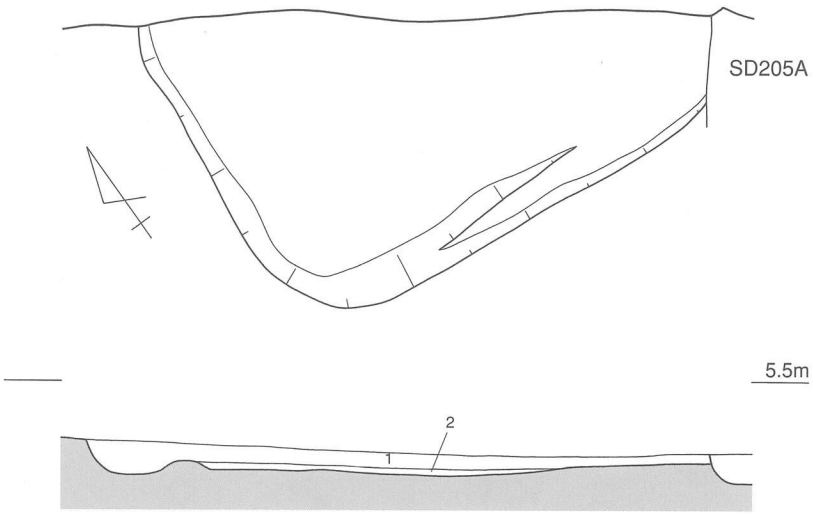
16 SD201A



1 褐灰色 シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む、下層に小礫含む）
2 褐灰色 シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）
3 褐灰色 シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3多量に含む）
4 灰白色 シルトブロック含む細砂（Fe_2O_3含む）
5 灰色 シルト（砂含む）

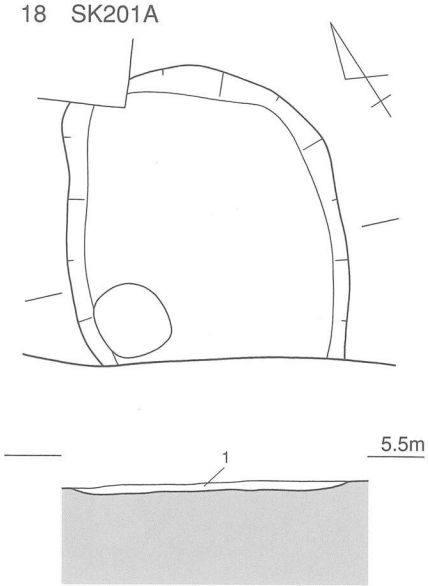
0 1m

17 SH201A



1 黒褐色 シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3・炭・土器含む）
2 褐灰色 極細砂（シルト質極細砂ブロック混じり）

18 SK201A

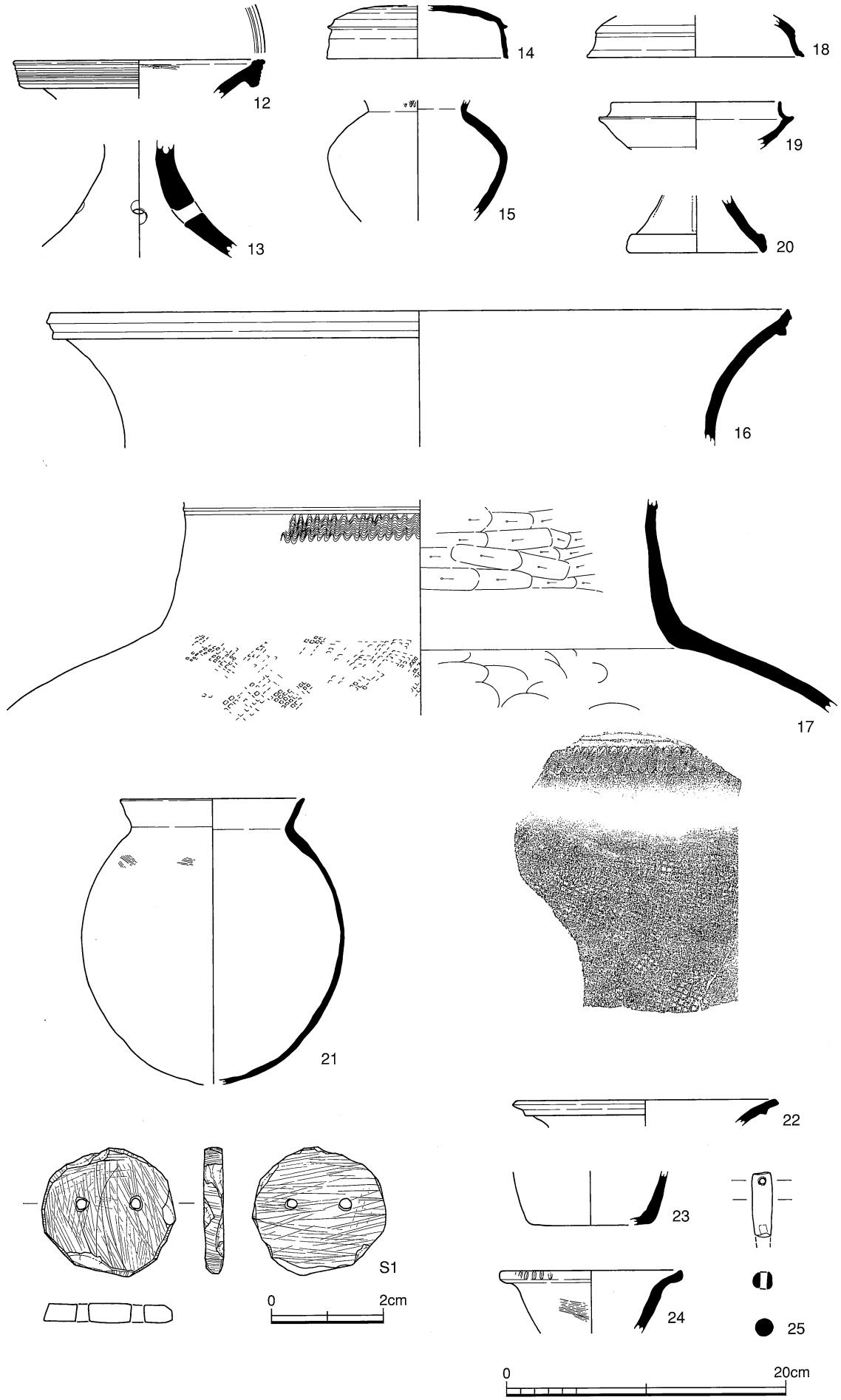


1 褐灰色 シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）

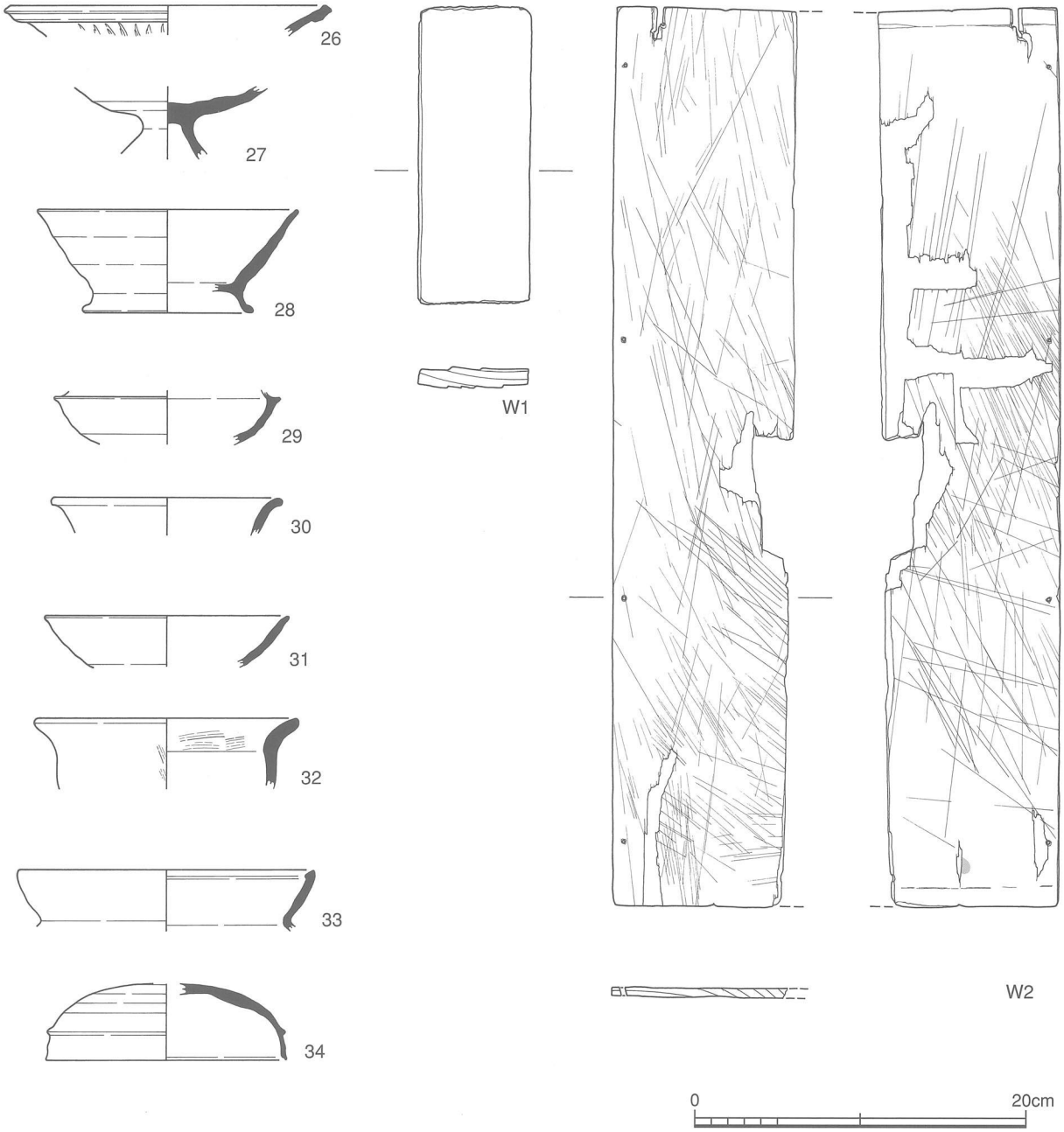
0 2m

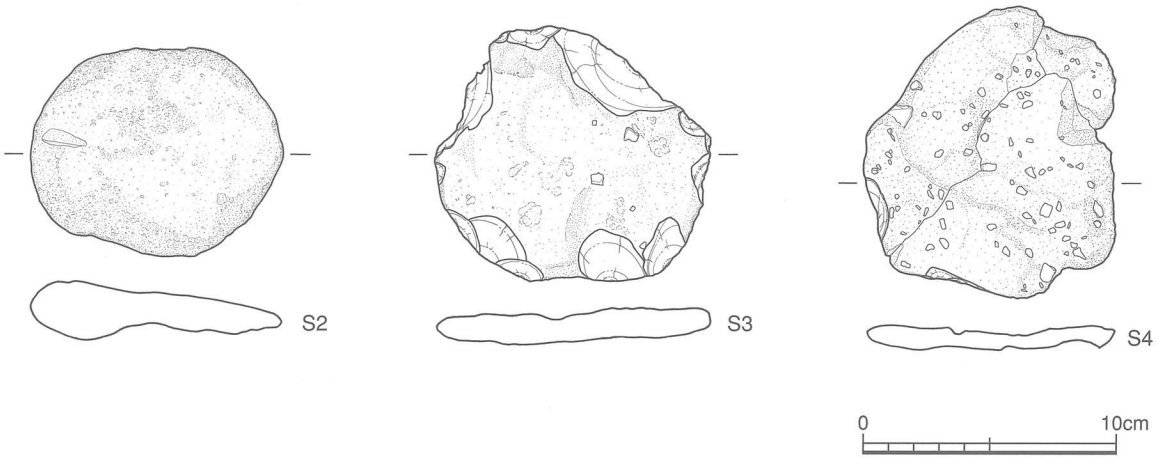
14 溝SD205A・SD204A断面（1/20） 15 溝SD206A断面（1/20）
16 溝SD201A断面（1/20）
17 竪穴住居SH201A（1/40） 18 土坑SK201A（1/40）

図版14　A地区　遺物



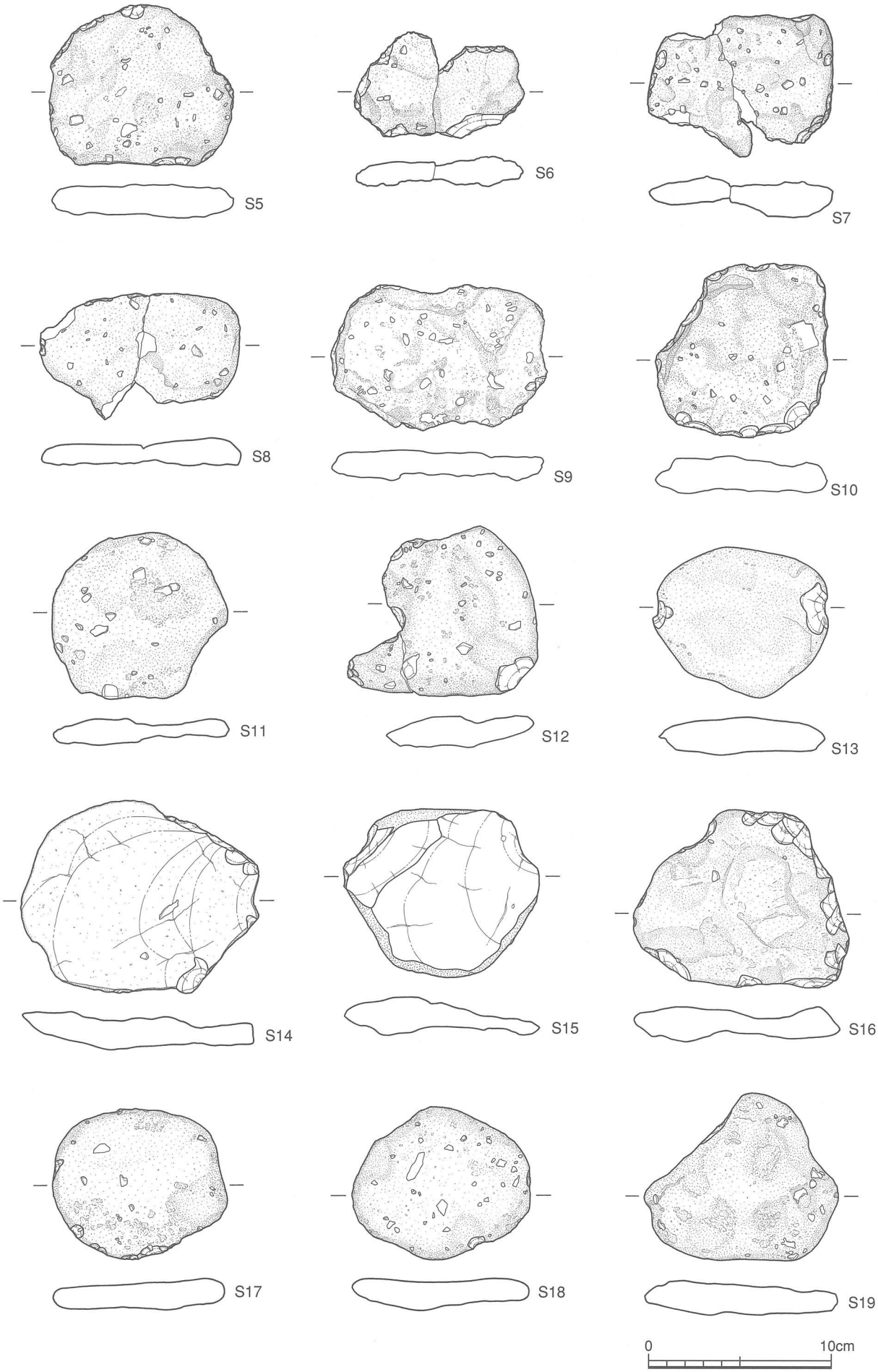
SD201A（12～17）　SD202A（18～20）
SD206A（21・S1）　包含層（22～25）



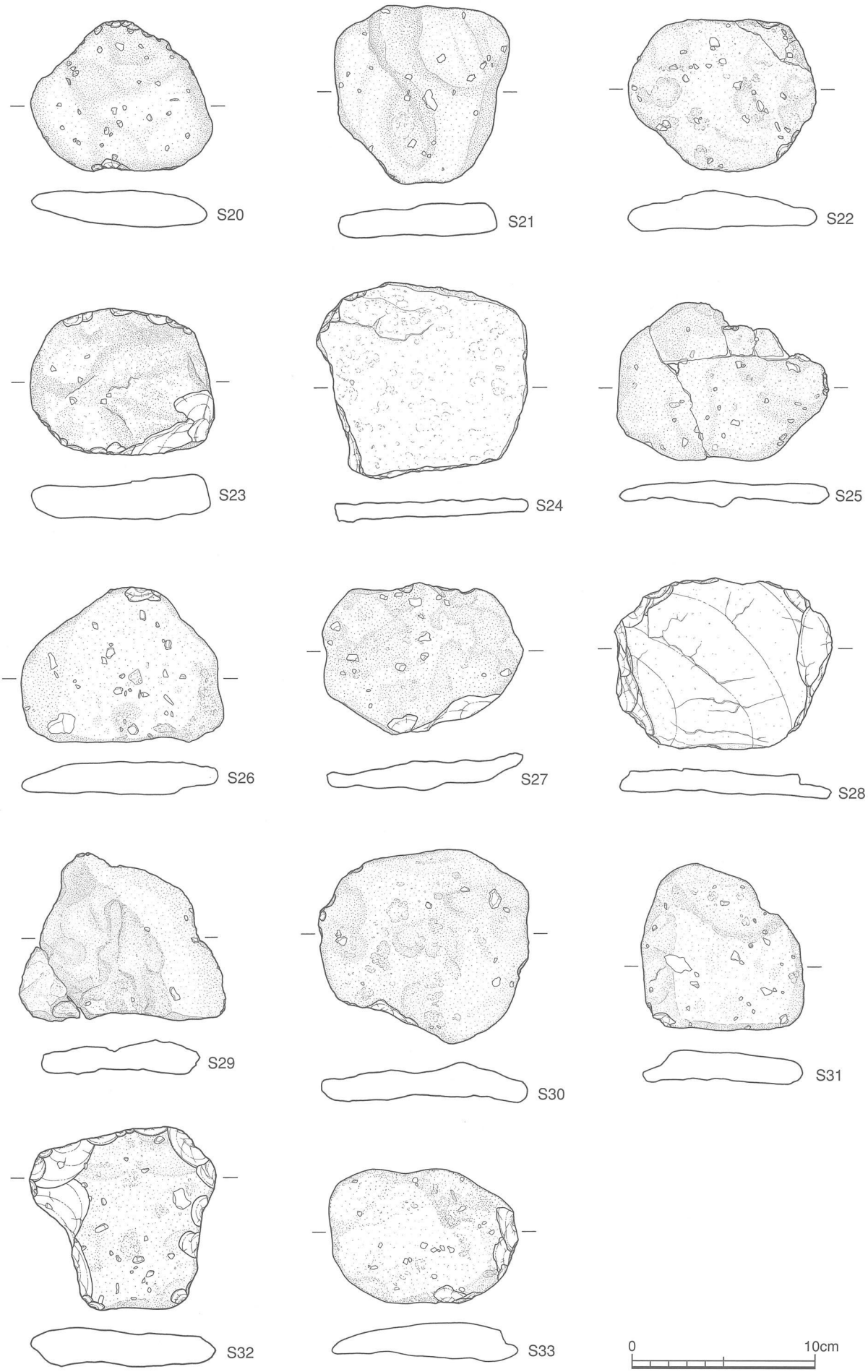


SD203A（26～28・W1・W2）　SB201A（29・30）
P201A（31・32）　SK201A（33・34）
SS201A（S2～S4）

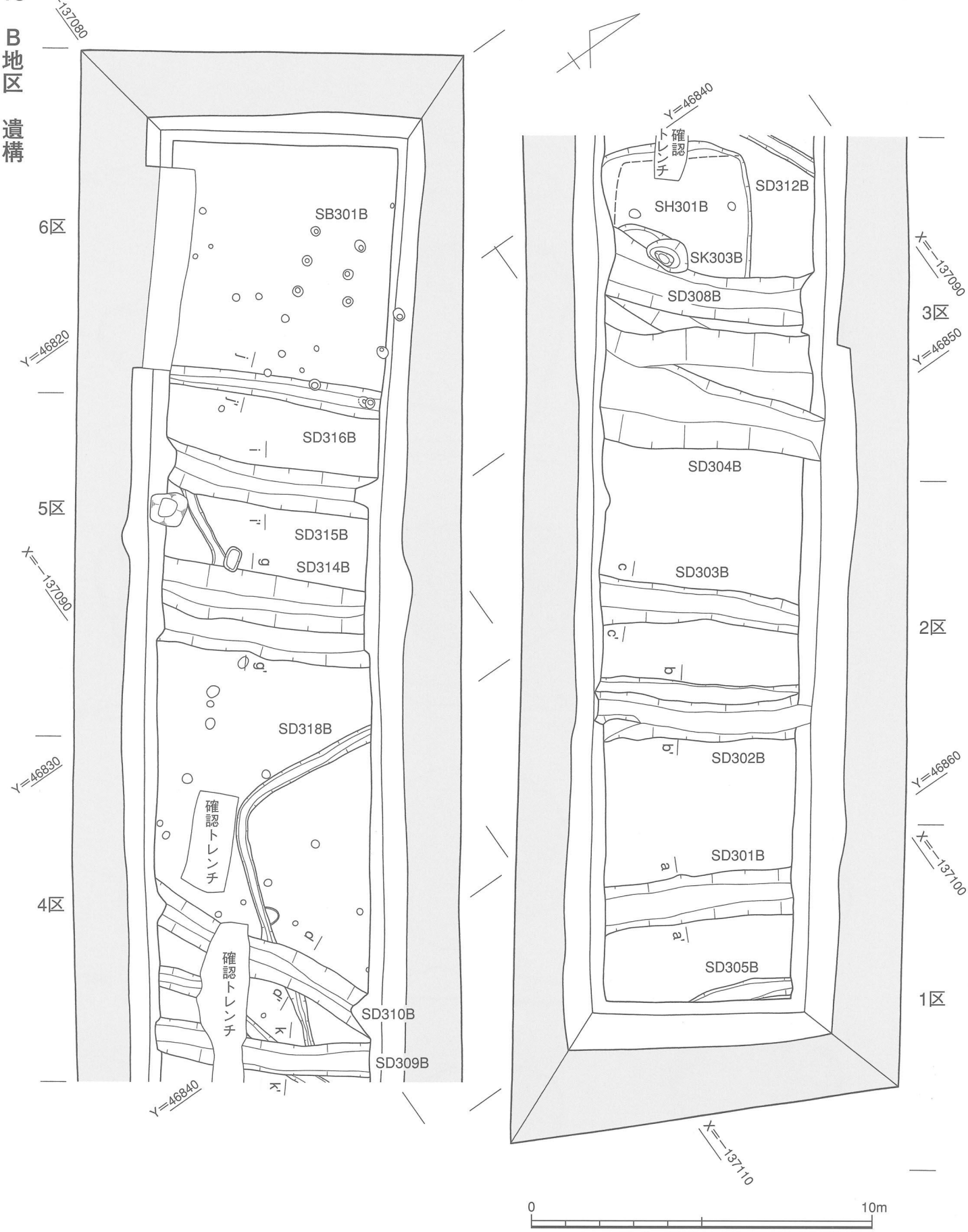
図版16　A地区　遺物



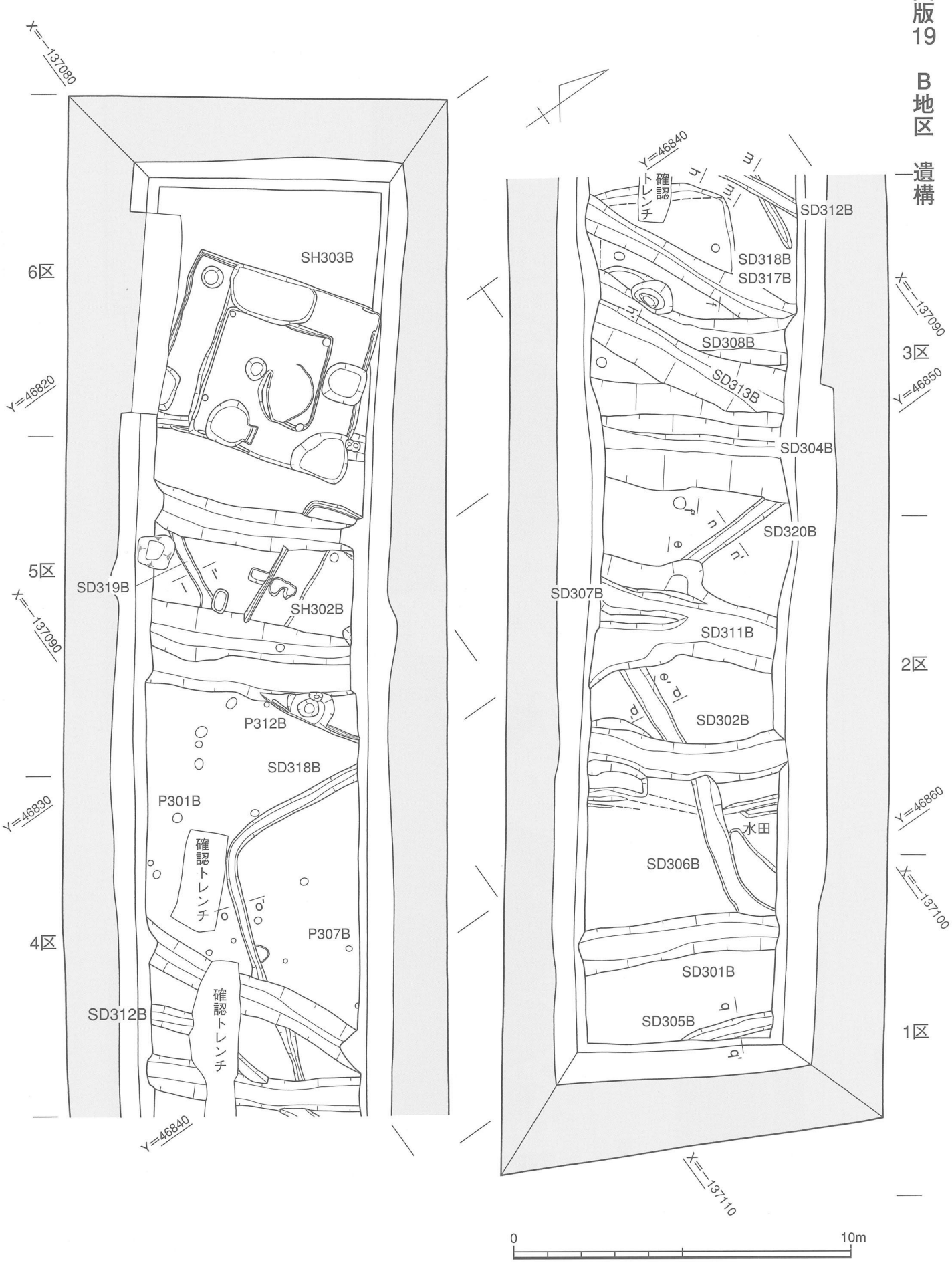
SS201A（S5～S19）



SS201A（S20～S33）

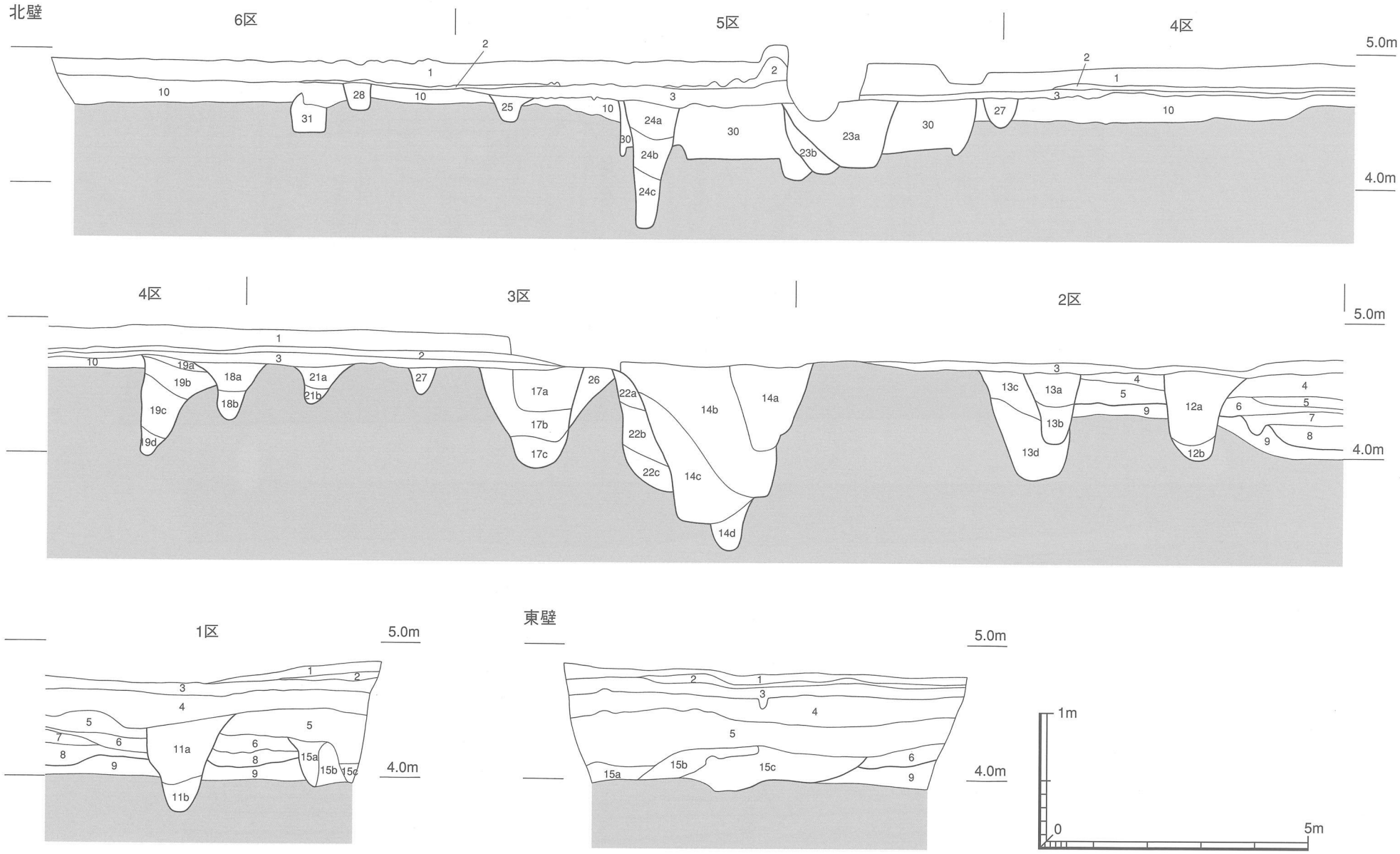


19 第1面遺構配置(1/150)



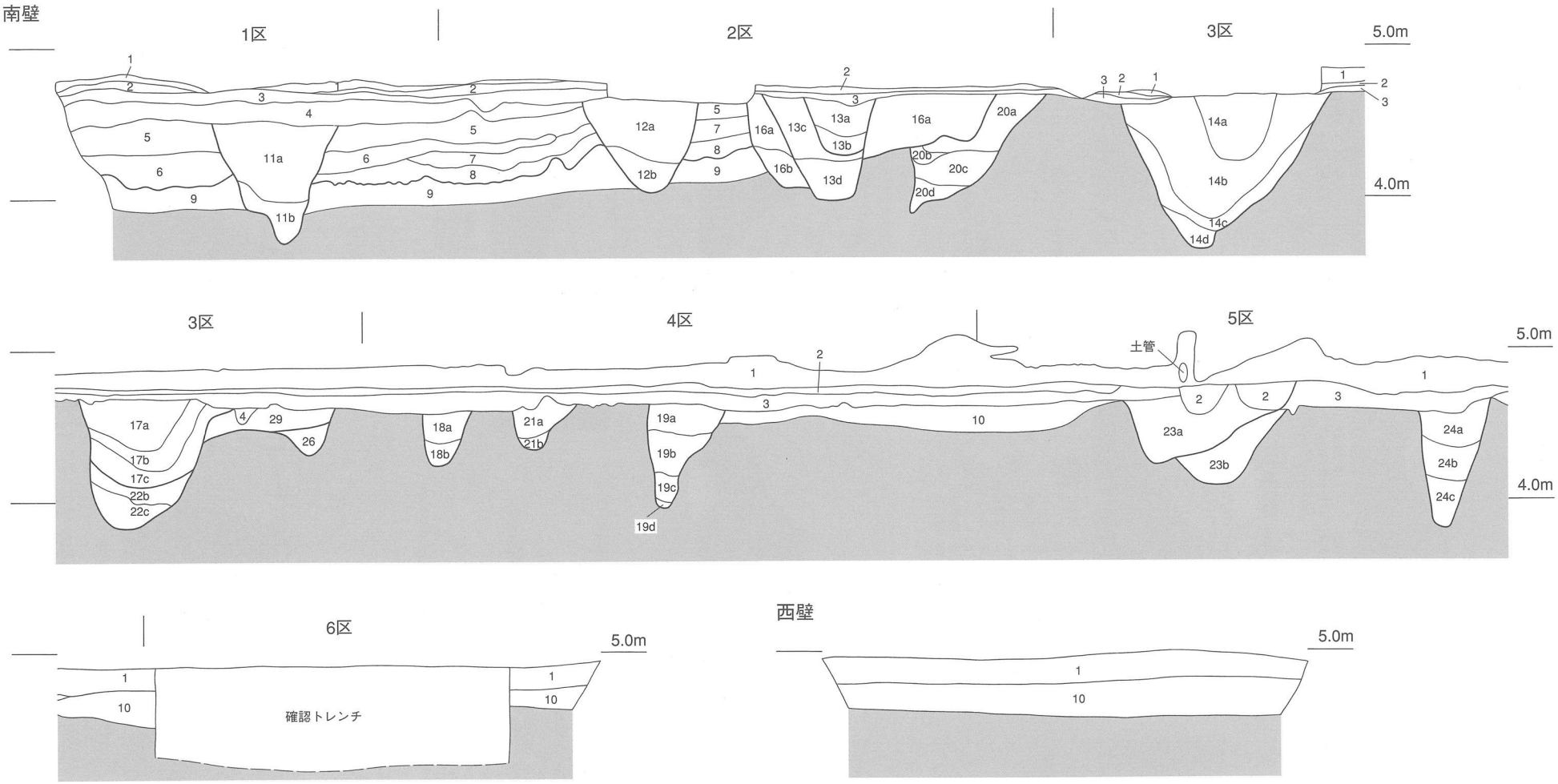
20 第2面遺構配置(1/150)

図版20　B地区　遺構



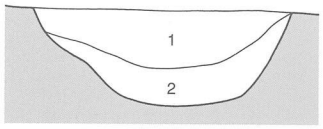
21　土層断面①(1/100・1/40)

21 土層断面②(1/100・1/40)



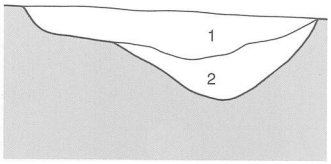
1	黒褐色	シルト質極細砂〈耕作土〉
2	褐灰色	シルト質極細砂〈耕作土〉
3	明黄褐色	シルト質極細砂〈床土〉
4	灰黄褐色	シルト質極細砂
5	にぶい黄橙色	シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）
6	褐灰色	シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）
7	褐灰色	極細砂（Fe_2O_3含む）
8	褐灰色	シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3多量に含む）
9	明黄褐色	シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）〈水田土壌〉
10	褐灰色	シルト質極細砂
11a	にぶい黄橙色	シルト質極細砂〈SD301B〉
11b	褐灰色	シルト〈SD301B〉
12a	褐灰色	シルト質極細砂〈SD302B〉
12b	褐灰色	シルト質極細砂＋明黄褐色ブロック含む〈SD302B〉
13a	褐灰色	シルト質極細砂〈SD303B〉
13b	灰白色	極細砂〈SD303B〉
13c	灰色	シルト質極細砂〈SD303B〉
13d	褐灰色	シルト質極細砂〈SD303B〉
14a	灰白色	シルト質極細砂〈SD304B〉
14b	褐灰色	シルト質極細砂〈SD304B〉
14c	灰白色	極細砂～細砂〈SD304B〉
14d	灰色	シルト質極細砂〈SD304B〉
15a	褐灰色	細砂～極粗砂〈SD305B〉
15b	灰黄褐色	極細砂～細砂〈SD305B〉
15c	灰黄褐色	シルト質極細砂〈SD305B〉
16a	灰色	シルト質極細砂〈SD307B〉
16b	灰オリーブ色	シルト質極細砂＋灰色極細砂（Fe_2O_3多量に含む）〈SD307B〉
17a	黄褐色	シルト質極細砂〈SD308B〉
17b	褐灰色	シルト質極細砂＋暗褐色ブロック含む〈SD308B〉
17c	褐灰色	極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）〈SD308B〉
18a	灰色	シルト質極細砂〈SD309B〉
18b	褐灰色	シルト質極細砂〈SD309B〉
19a	明オリーブ灰色	シルト質極細砂〈SD310B〉
19b	褐灰色	シルト質極細砂〈SD310B〉
19c	黒褐色	シルト質極細砂　極細砂混じる〈SD310B〉
19d	黒色	シルト〈SD310B〉
20a	褐灰色	シルト質極細砂（黒褐色シルト質極細砂ブロック含む）〈SD311B〉
20b	灰白色	極細砂〈SD311B〉
20c	褐灰色	極細砂（黒褐色シルト質極細砂ブロック含む）〈SD311B〉
20d	褐灰色	極細砂〈SD311B〉
21a	黒褐色	シルト質極細砂〈SD312B〉
21b	灰色	極細砂〈SD312B〉
22a	黒褐色	シルト質極細砂〈SD313B〉
22b	黒褐色	シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）〈SD313B〉
22c	灰色	シルト質極細砂〈SD313B〉
23a	黄灰色	シルト質極細砂〈SD314B〉
23b	褐灰色	シルト質極細砂〈SD314B〉
24a	黒褐色	シルト質極細砂（灰白色シルトブロック含む）〈SD315B〉
24b	褐灰色	シルト質極細砂（にぶい黄橙色シルト質極細砂ブロック含む）〈SD315B〉
24c	黒褐色	シルト質極細砂（にぶい黄橙色ブロック含む）〈SD315B〉
25	灰白色	シルト質極細砂〈SD316B〉
26	黒褐色	シルト質極細砂〈SD317B〉
27	黒褐色	シルト質極細砂〈SD318B〉
28	灰白色	シルト質極細砂（褐灰色ブロック含む）
29		〈SH301B〉
30		〈SH302B〉
31		〈SH303B〉

22 SD301B



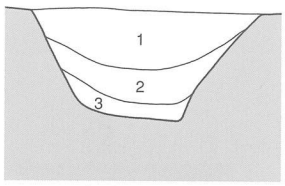
1 褐灰色 極細砂（Mn含む）
2 灰色 シルト

23 SD302B



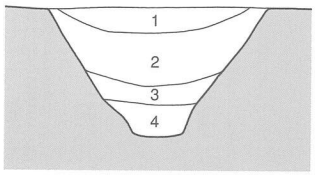
1 オリーブ灰色 シルト質極細砂
2 オリーブ灰色 シルト質極細砂
（Mn含む灰色砂層混じる）

24 SD303B



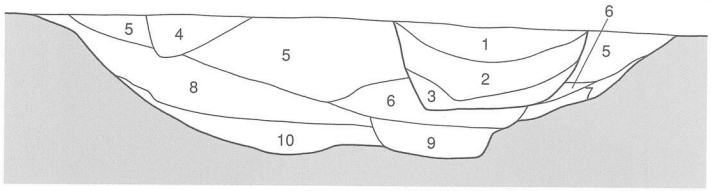
1 オリーブ灰色 シルト質極細砂
2 オリーブ灰色 シルト質極細砂
（灰色シルト質極細砂）
3 褐灰色 シルト質極細砂

25 SD310B



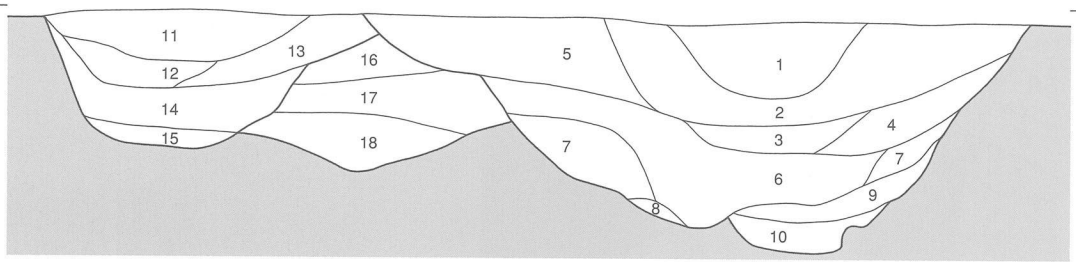
1 明オリーブ灰色 シルト質極細砂
2 褐灰色 シルト質極細砂
3 黒褐色 シルト質極細砂 極細砂混じる
4 黒色 シルト

26 SD303B・SD311B



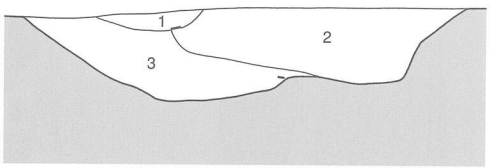
1 オリーブ灰色 シルト質極細砂〈SD303B〉
2 オリーブ灰色 シルト質極細砂（灰色シルト質極細砂）〈SD303B〉
3 褐灰色 シルト質極細砂〈SD303B〉
4 灰白色 極細砂〈SD311B〉
5 灰オリーブ色 シルト質極細砂〈SD311B〉
6 灰黄褐色 シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）〈SD311B〉
7 褐灰色 シルト質極細砂（シルト含む）〈SD311B〉
8 にぶい黄褐色 シルト質極細砂（黒褐色シルトブロック含む）〈SD311B〉
9 褐灰色 シルト十極細砂含む〈SD311B〉
10 褐灰色 シルト十極細砂含む〈SD311B〉

27 SD304B



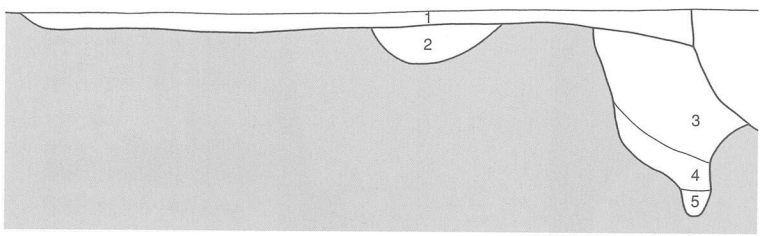
1 灰色 シルト質極細砂〈SD304B〉
2 褐灰色 極細砂（シルト質極細砂含む）〈SD304B〉
3 灰色 細砂〈SD304B〉
4 褐灰色 極細砂（シルト質極細砂含む）〈SD304B〉
5 灰色 極細砂（シルト質極細砂含む）〈SD304B〉
6 にぶい黄橙色 シルト質極細砂（下部は灰色極細砂、最下部は細砂）〈SD304B〉
7 黒褐色 シルト質極細砂（褐灰色極細砂含む）〈SD304B〉
8 灰色 極細砂〈SD304B〉
9 灰オリーブ色 シルト質極細砂（下部は灰色細砂）〈SD304B〉
10 灰色 極細砂〈SD304B〉
11 灰色 シルト質極細砂〈SD308B〉
12 灰白色 シルト質極細砂（下部に灰色シルト質極細砂堆積）〈SD308B〉
13 灰色 シルト質極細砂〈SD308B〉
14 黄灰色 シルト質極細砂〈SD308B〉
15 褐灰色 極細砂（シルト若干含む）〈SD308B〉
16 褐灰色 シルト質極細砂〈SD313B〉
17 灰黄褐色 シルト質極細砂（Fe_2O_3多く含む）〈SD313B〉
18 褐灰色 シルト（黄橙色地山シルトブロックと褐灰色細砂含む）〈SD313B〉

28 SD314B



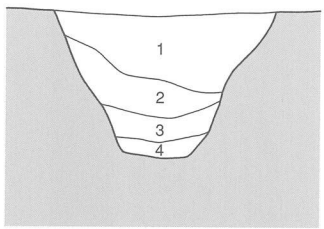
1 灰色 シルト質極細砂
2 灰黄色 シルト質極細砂（Mn・Fe_2O_3含む）
3 黒褐色 シルト質極細砂（Mn多く含む）

29 SH301B・SD317B・SK303B



1 黒褐色 シルト質極細砂（下面に炭含む）〈SH301B〉
2 黒褐色 シルト質極細砂〈SD317B〉
3 黒褐色 シルト質極細砂〈SK303B〉
4 灰色 シルト（灰色シルトブロック含む）〈SK303B〉
5 灰白色 シルト質極細砂〈SK303B〉

30 SD315B

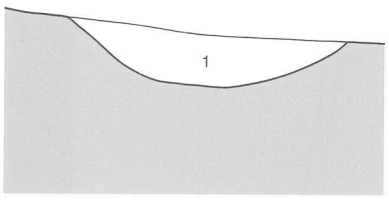


1 黒褐色 シルト質極細砂（灰白色シルトブロック含む）
2 褐灰色 シルト質極細砂（にぶい黄橙色シルト質極細砂ブロック含む）
3 黒褐色 シルト質極細砂（にぶい黄橙色ブロック含む）
4 灰白色 細砂

0 2m

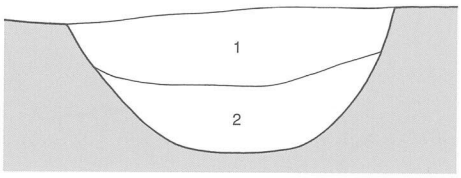
土層断面（1/40）（22 溝SD301B 23 溝SD302B 24 溝SD303B
25 溝SD310B 26 溝SD303B・SD311B 27 溝SD304B
28 溝SD314B 29 竪穴住居SH301B・溝SD317B・土坑SK303B 30 溝SD315B）

31 SD316B



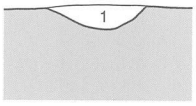
1 灰白色 シルト質極細砂

32 SD309B



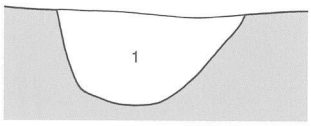
1 灰色 シルト質極細砂
2 褐灰色 シルト質極細砂

33 SD319B



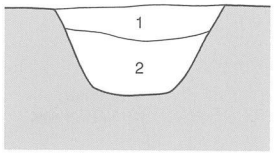
1 褐灰色 シルト質極細砂

34 SD312B



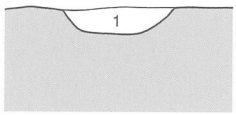
1 黒褐色 シルト質極細砂

35 SD320B



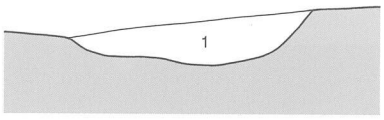
1 黒褐色 シルト質極細砂
2 黒褐色 極細砂

36 SD318B



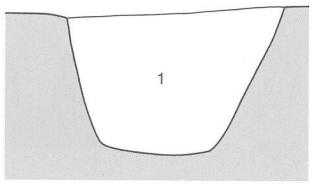
1 黒褐色 シルト質極細砂

37 SD306B



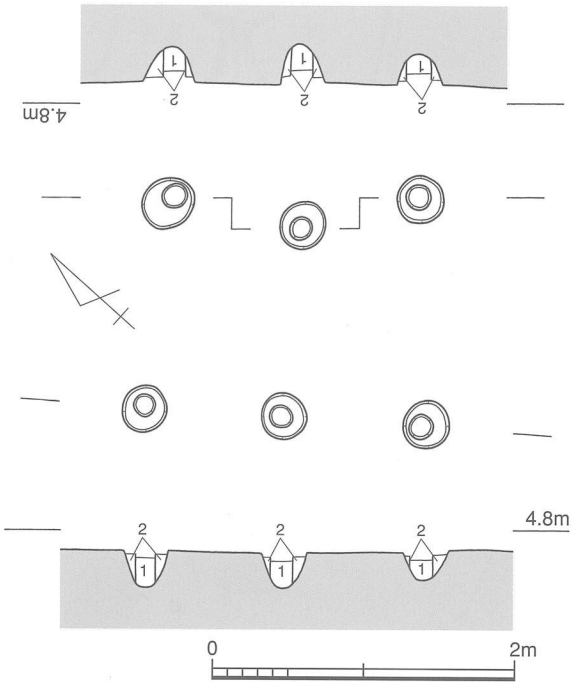
1 灰白色 シルト質極細砂

38 SD305B



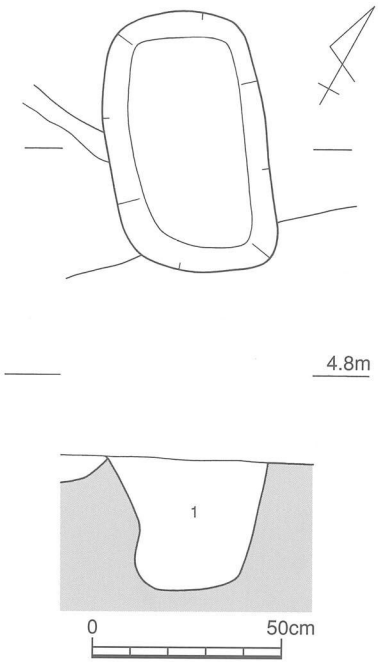
1 褐灰色 細砂

39 SB301B



1 褐灰色 極細砂 2 褐灰色 シルト質極細砂

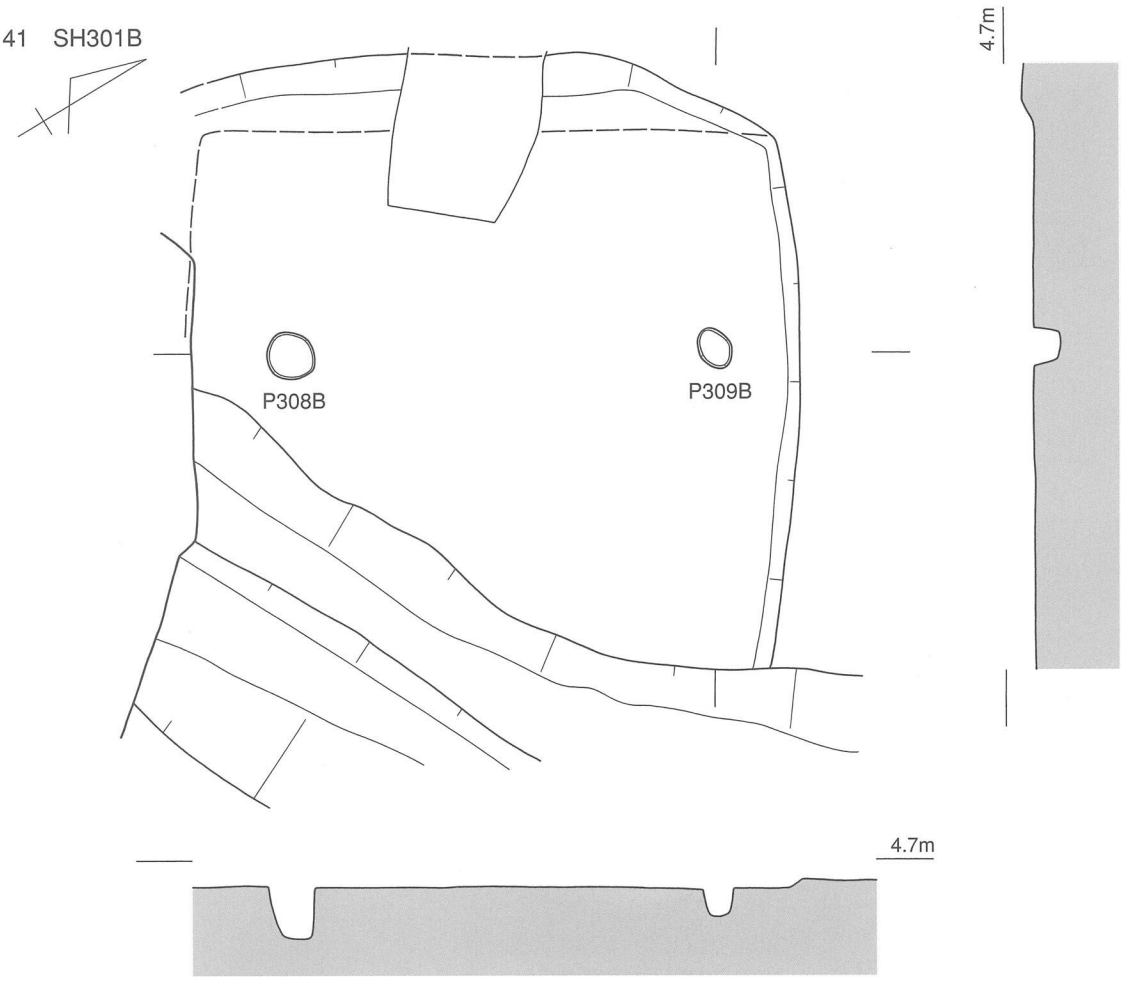
40 SK302B



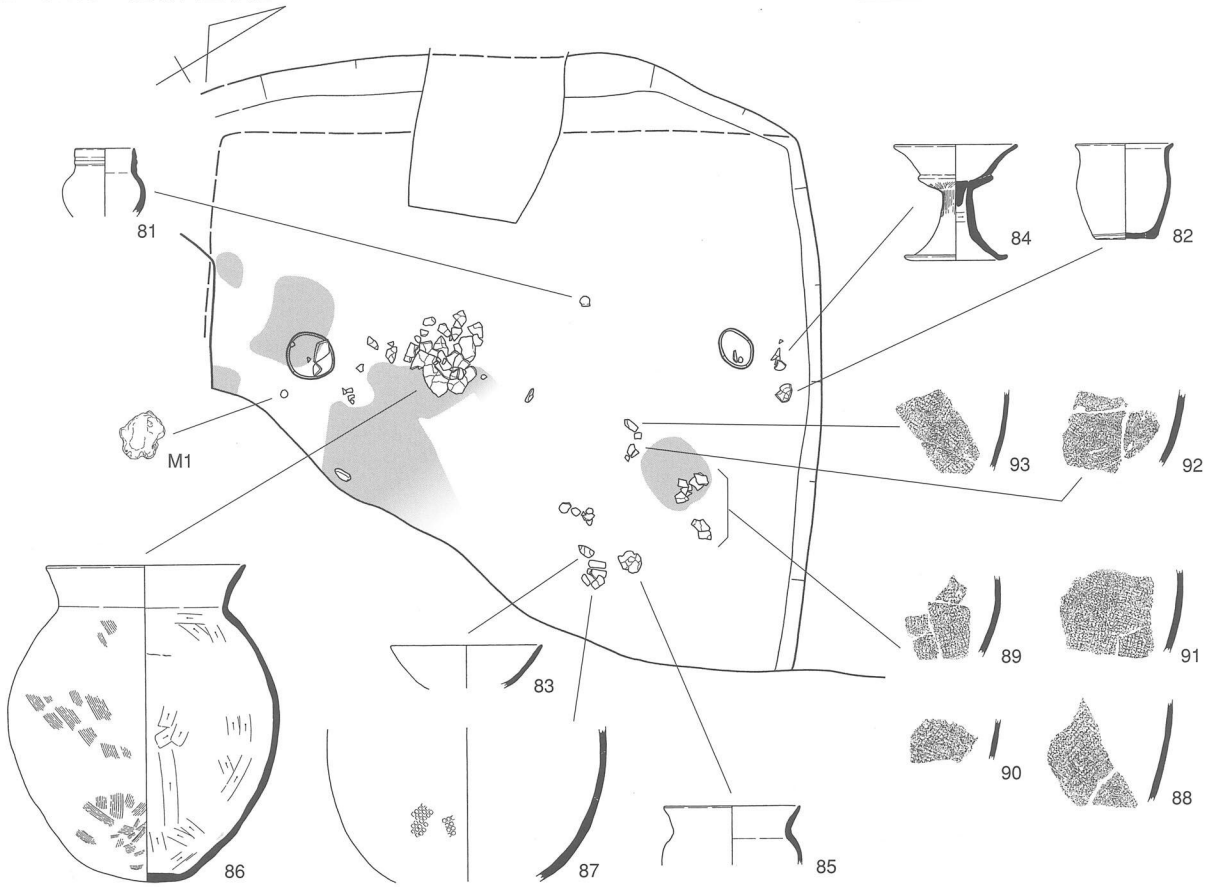
1 黒褐色 シルト質極細砂（にぶい黄色シルト質極細砂ブロックと炭含む）

土層断面（1/20）（31 溝SD316B 32 溝SD309B 33 溝SD319B 34 溝SD312B 35 溝SD320B 36 溝SD318B 37 溝SD306B 38 溝SD305B）
39 掘立柱建物SB301B（1/40） 40 土坑SK302B（1/20）

41 SH301B

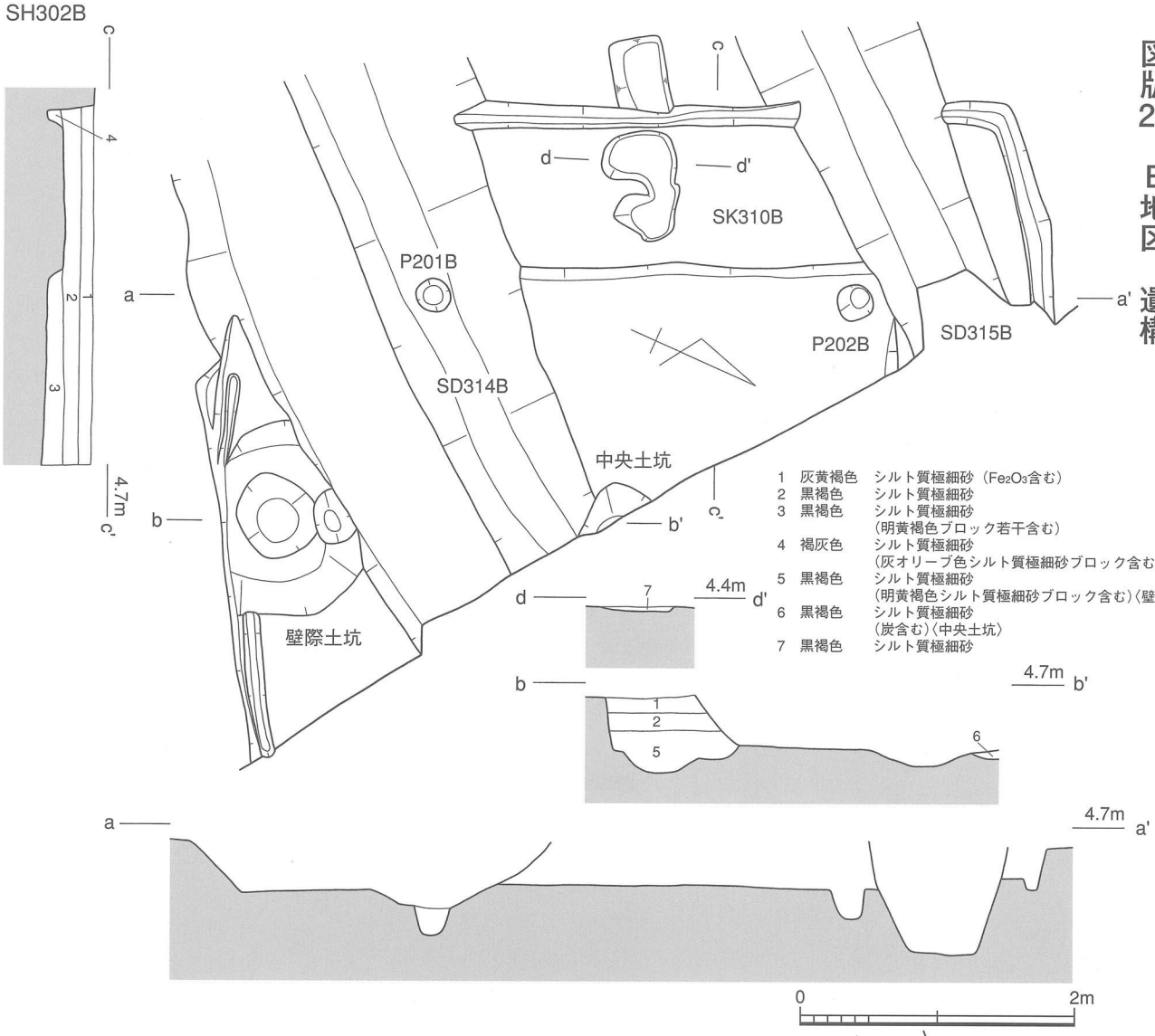


42 SH301B遺物出土状況

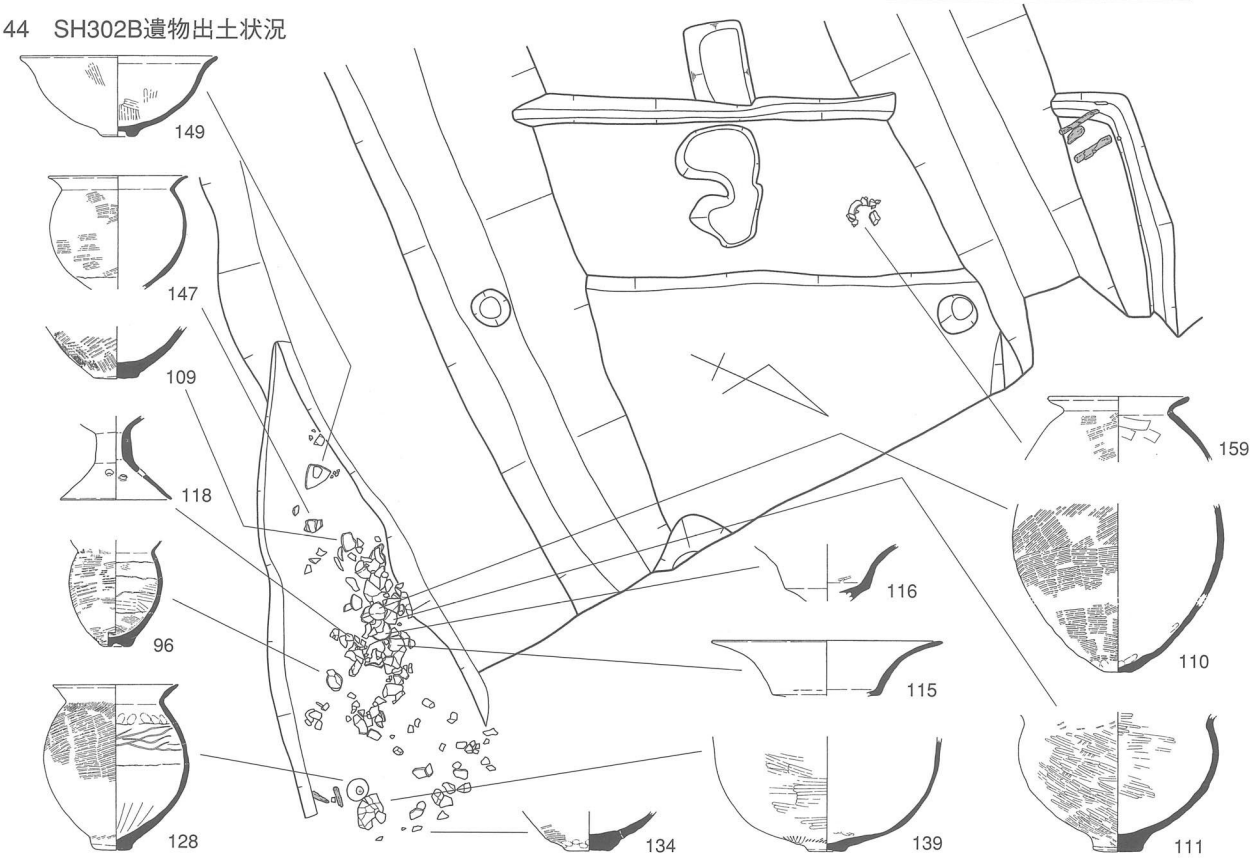


41 竪穴住居SH301B(1/50)
42 SH301B遺物出土状況

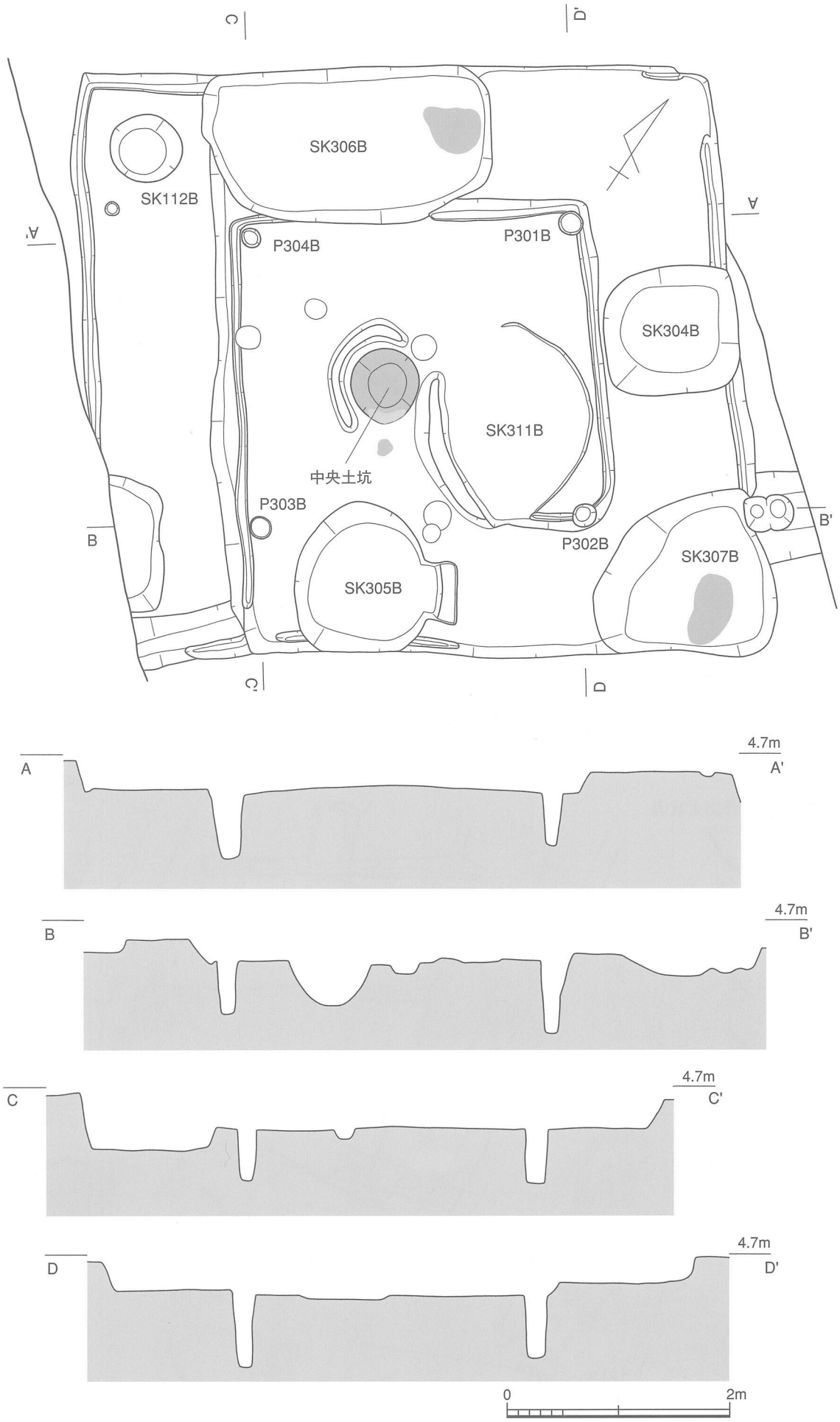
43 SH302B



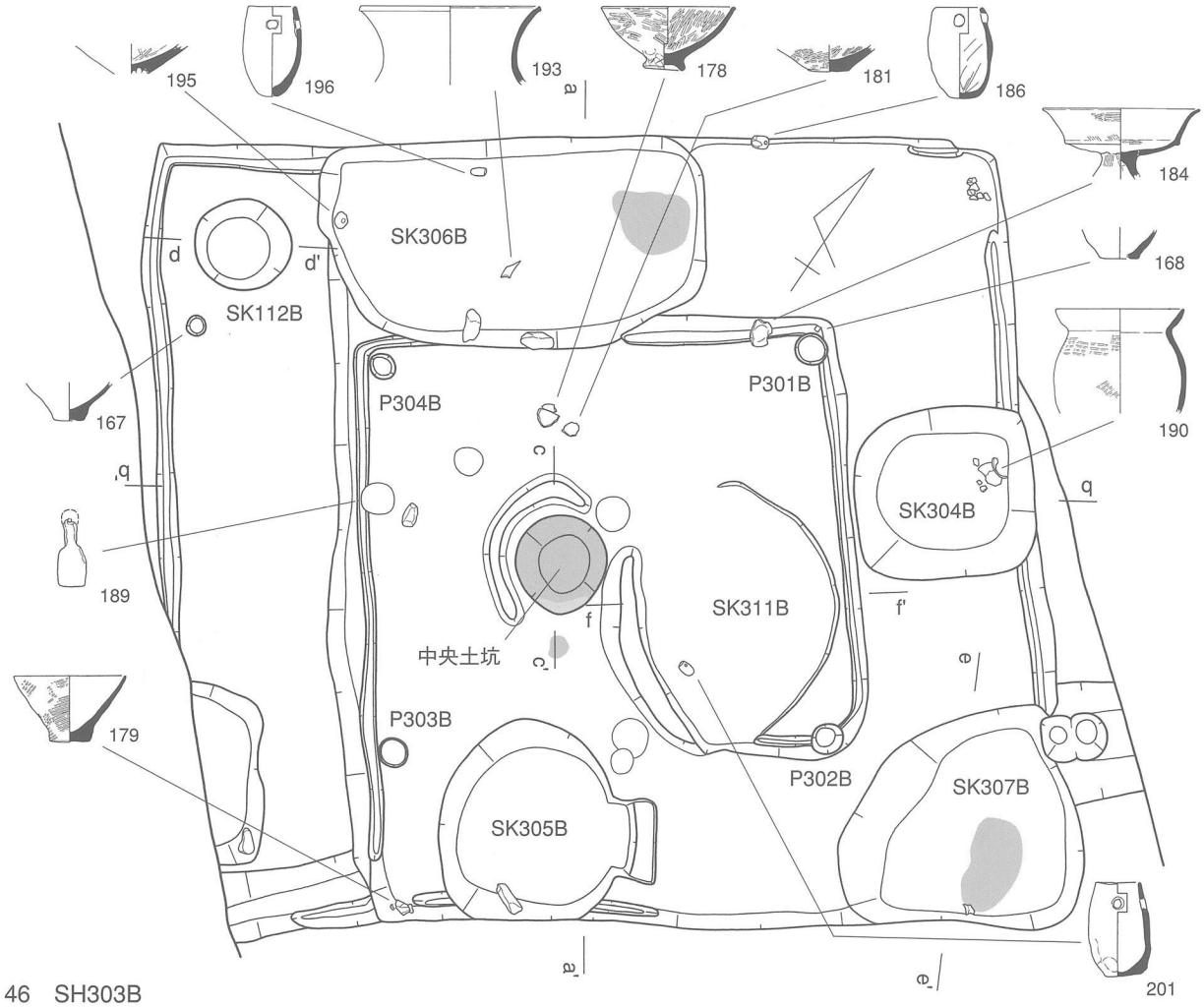
44 SH302B遺物出土状況



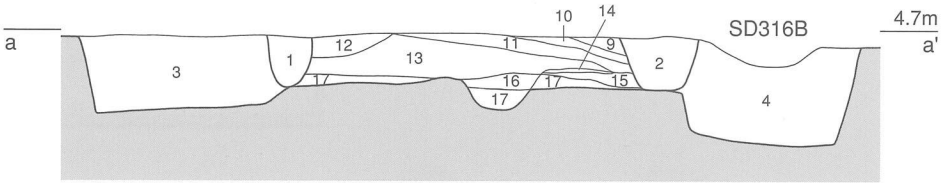
43 竪穴住居SH302B（1/50）
44 SH302B遺物出土状況

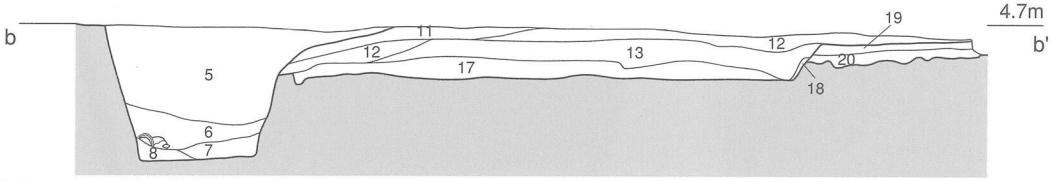


45 竪穴住居SH303B（1/50）



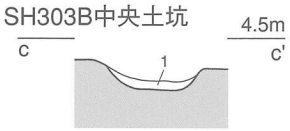
46 SH303B





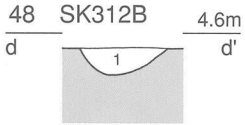
1 褐灰色 シルト質極細砂（灰オリーブ色と明黄褐色ブロック若干含む）
2 褐灰色 シルト質極細砂（明黄褐色ブロック若干含む）
3 黒褐色 シルト質極細砂（にぶい黄褐色ブロック含む）〈SK306B〉
4 黒褐色 シルト質極細砂（明黄褐色ブロック含む）〈SK305B〉
5 黒褐色 シルト質極細砂（浅黄色・明黄褐色ブロック含む）〈SK304B〉
6 褐灰色 シルト質極細砂（明黄褐色ブロック含む）〈SK304B〉
7 明黄褐色 シルト質極細砂（褐灰色ブロック含む）〈SK304B〉
8 灰白色 細砂
9 黒褐色 シルト質極細砂
10 浅黄色 ブロック（黄灰色ブロックを含む）
11 灰黄褐色 シルト質極細砂（黄灰色ブロックを含む）
12 褐灰色 シルト質極細砂（浅黄色シルト質極細砂ブロック若干含む）
13 浅黄色 シルト質極細砂（黄灰色シルト質極細砂ブロック含む）
14 黒褐色 シルト質極細砂（浅黄色シルト質極細砂ブロック若干含む）
15 浅黄色 シルト質極細砂（褐灰色ブロック含む）
16 にぶい黄色 シルト質極細砂（黒褐色ブロック含む）
17 黒褐色 シルト質極細砂（浅黄色シルト質極細砂ブロック若干含む、下層に炭あり）
18 黒色 炭
19 明黄褐色 シルト質極細砂（灰黄褐色ブロック含む）〈高床部盛土〉
20 灰黄褐色 シルト質極細砂ブロック（明黄褐色ブロック含む）〈高床部盛土〉

47 SH303B中央土坑



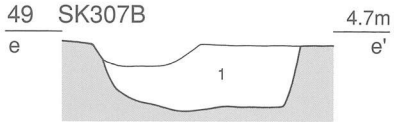
1 黒褐色 シルト質極細砂
（黒色シルト質極細砂ブロック炭含む）

48 SK312B



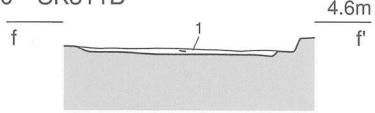
1 黒褐色 シルト質極細砂
（浅黄色ブロック 炭・土器を含む）

49 SK307B



1 灰黄褐色 シルト質極細砂（明黄褐色ブロック）

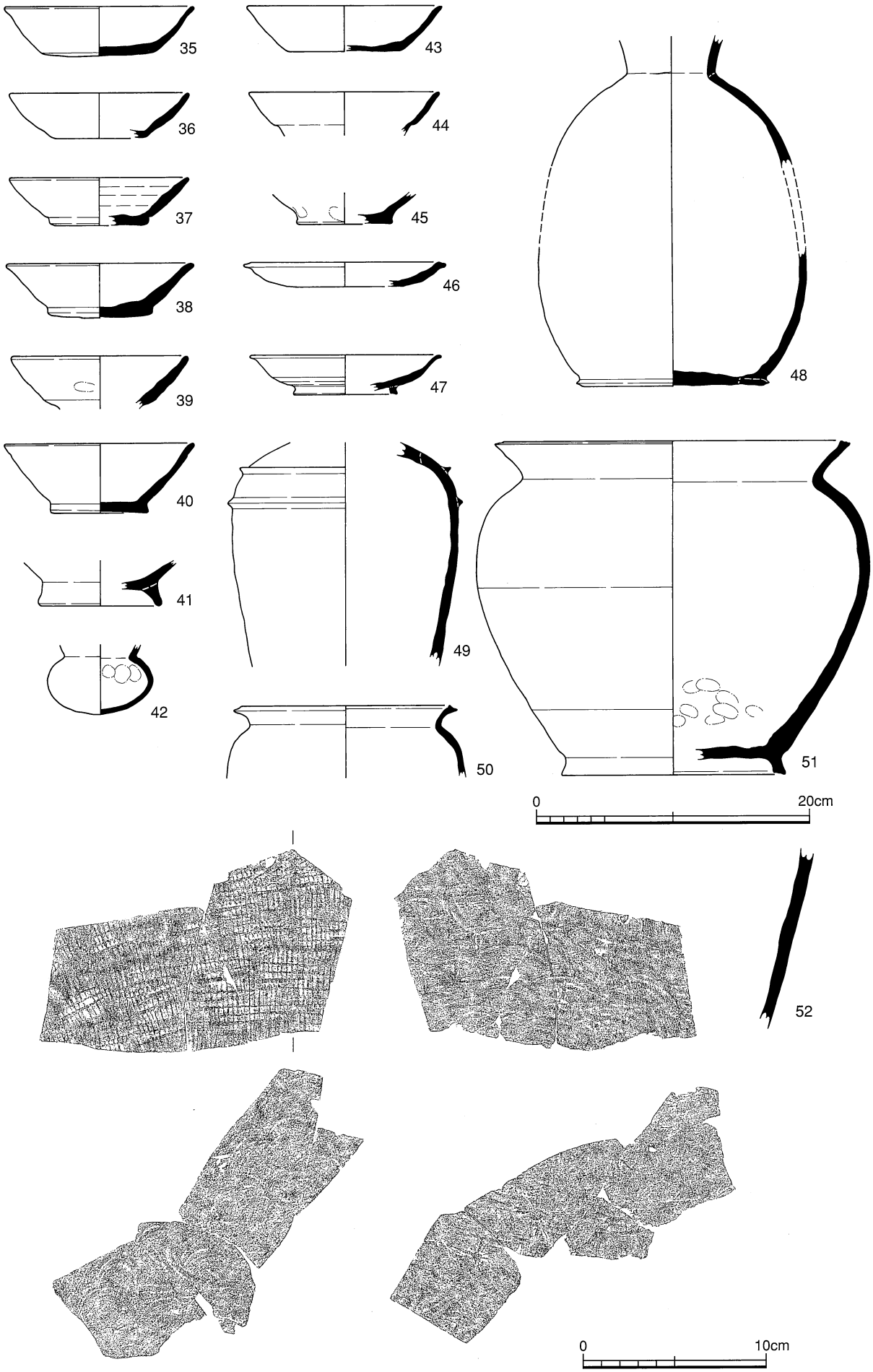
50 SK311B



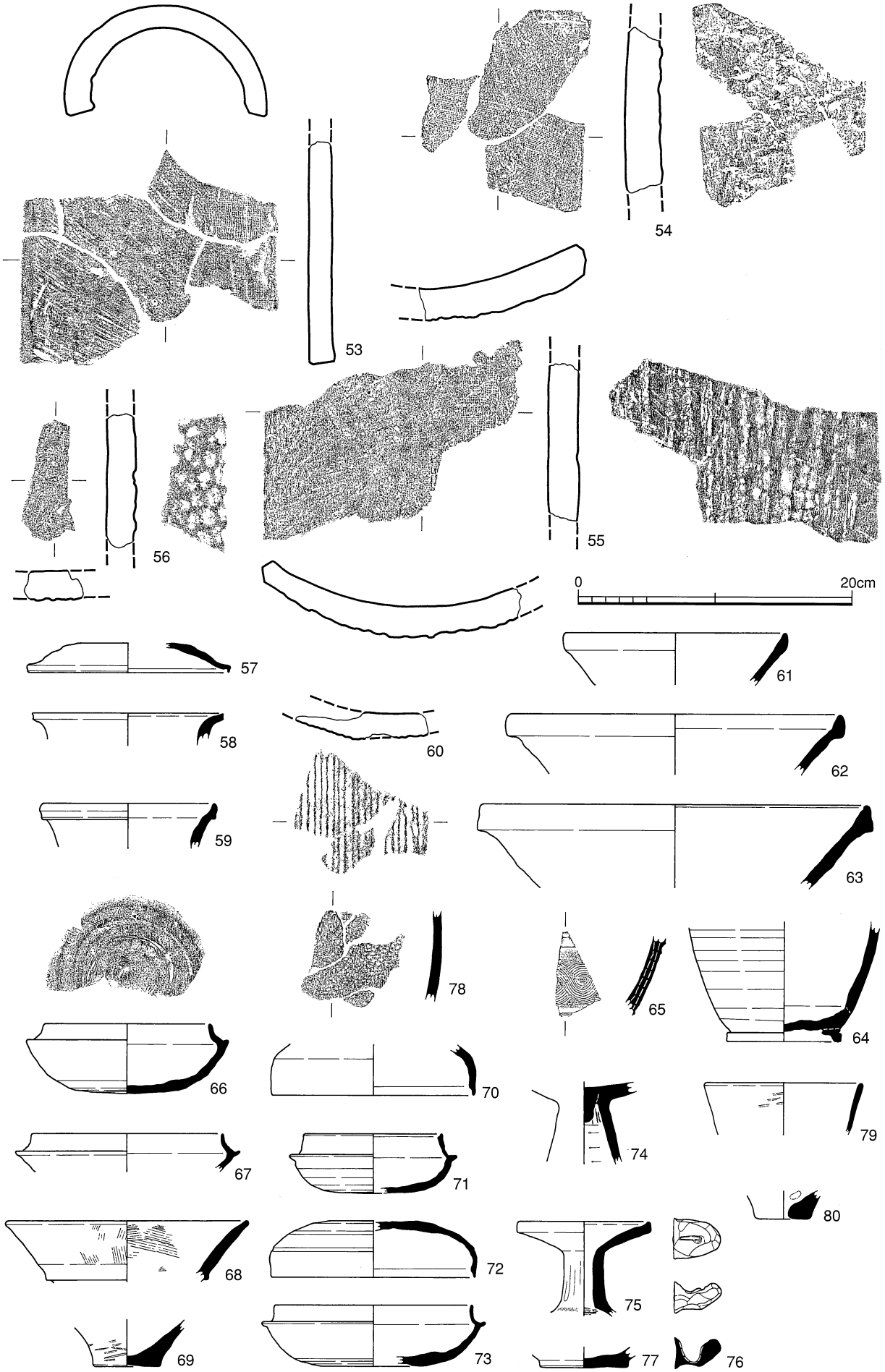
1 黒褐色 シルト質極細砂（明黄褐色ブロック 底に炭含む）

46 竪穴住居SH303B遺物出土状況・土層断面
47 SH303B中央土坑土層断面
土層断面（1/50） （48 土坑SK312B 49 土坑SK307B 50 土坑SK311B）

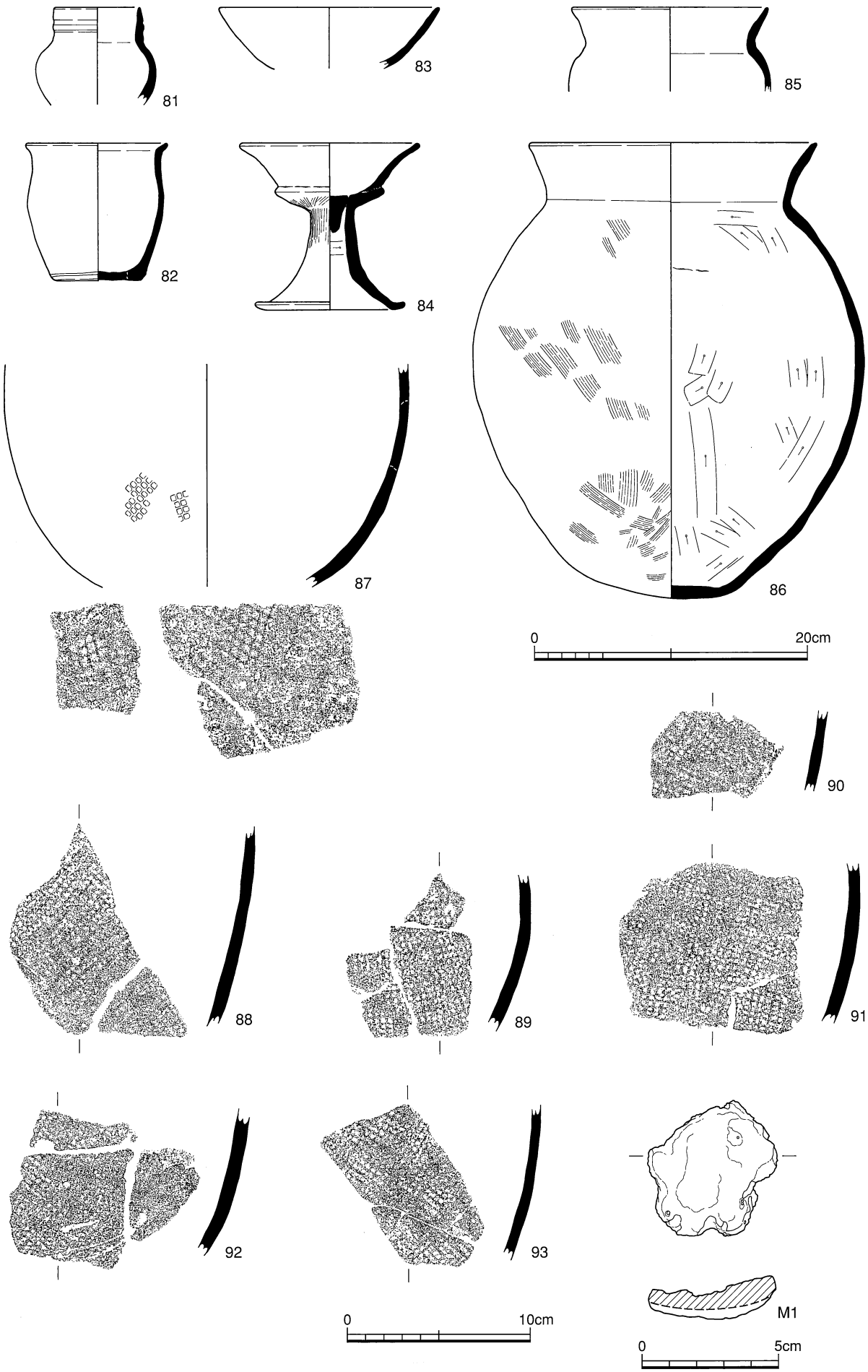
図版28　B地区　遺物



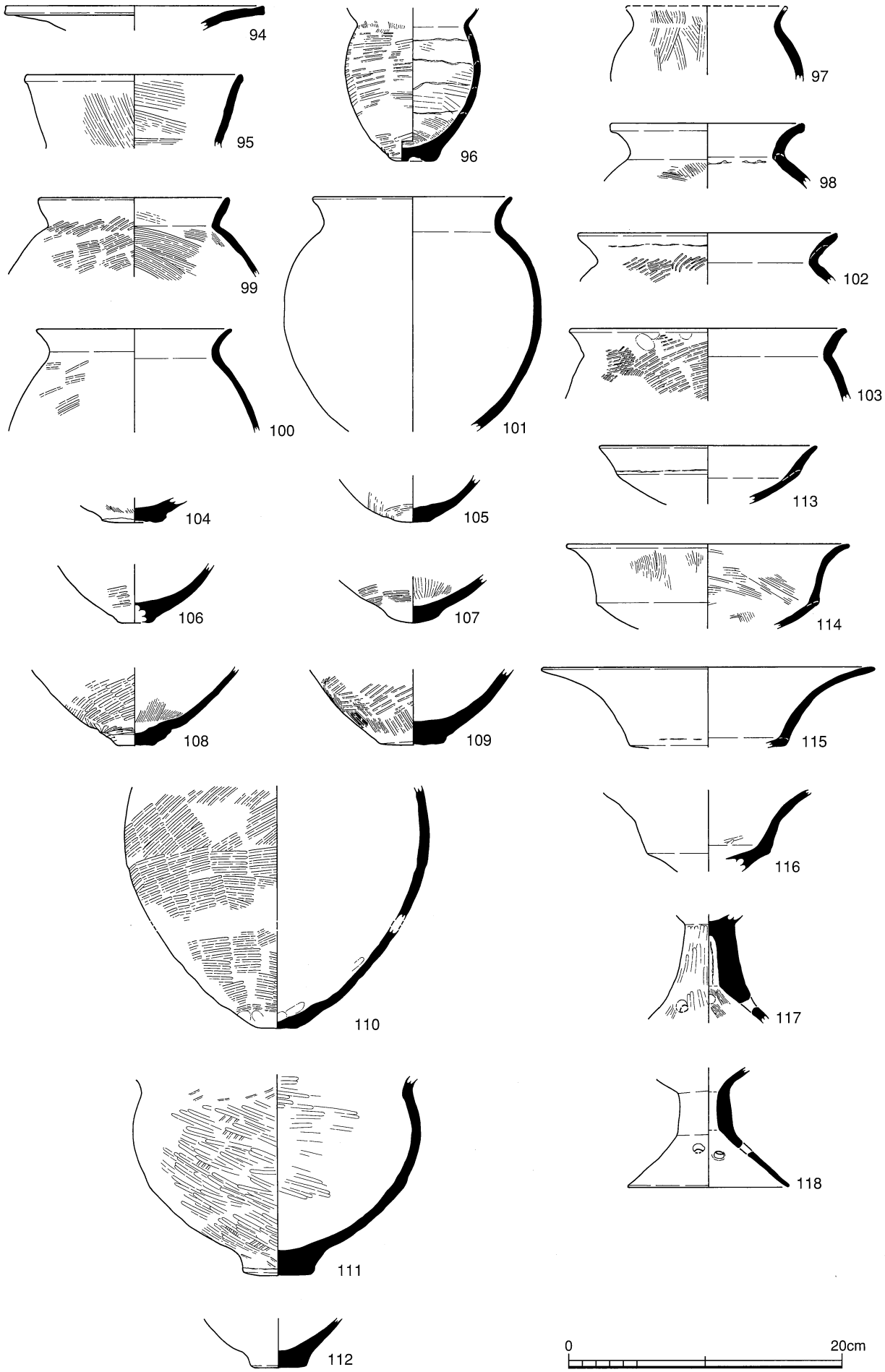
SD304B①(35～52)



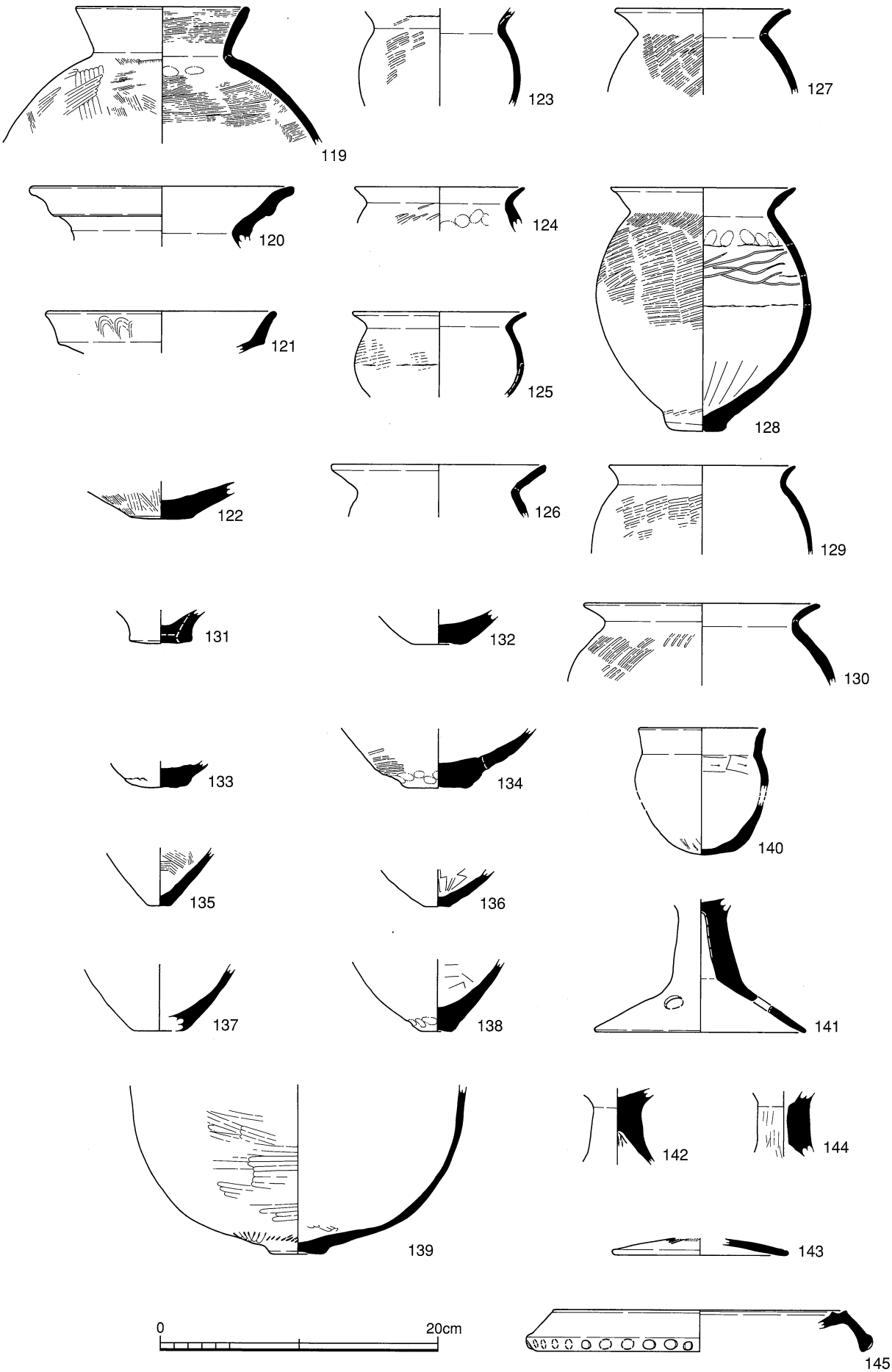
SD304B②(53～55) SD301B(56～58) SD302B(59・60) SD314B(61～65)
SD307B(66～69) SD313B(70) SD311B(71～73) SD308B(74)
SD315B(75～77) SD306B(78) SD317B(79) SD309B(80)



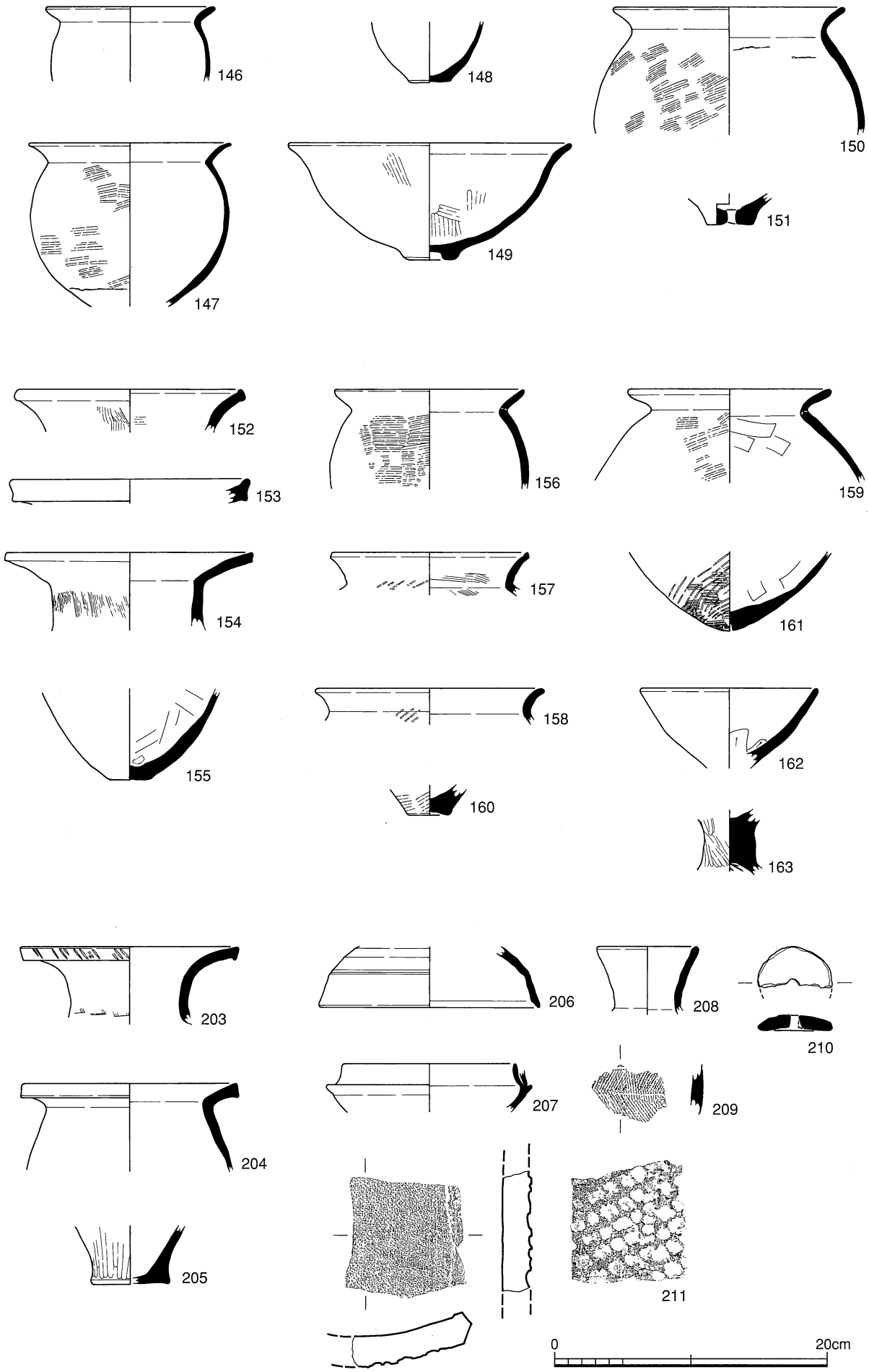
SH301B（81～93・M1）



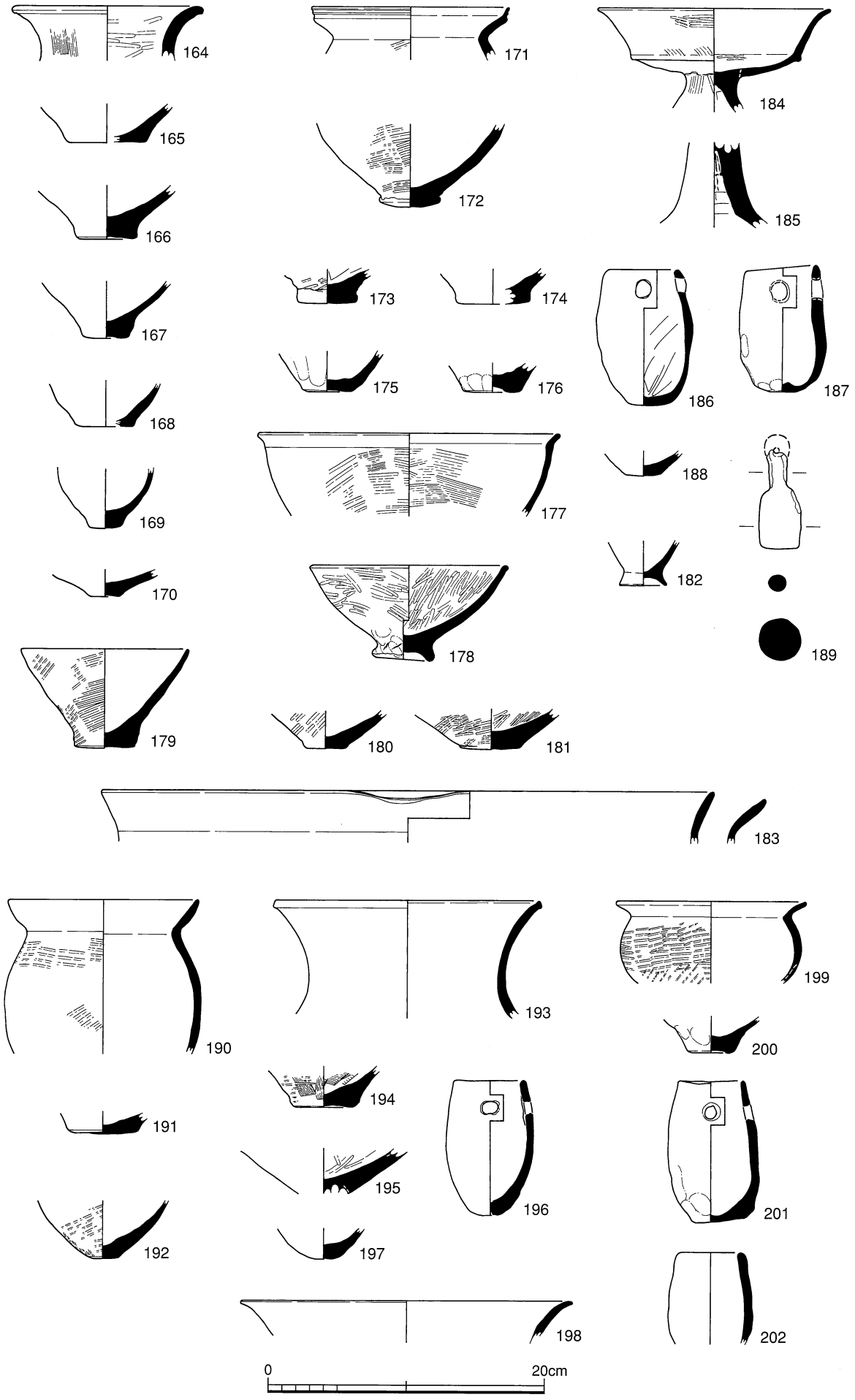
SH302B①(94～118)



SH302B②(119～145)

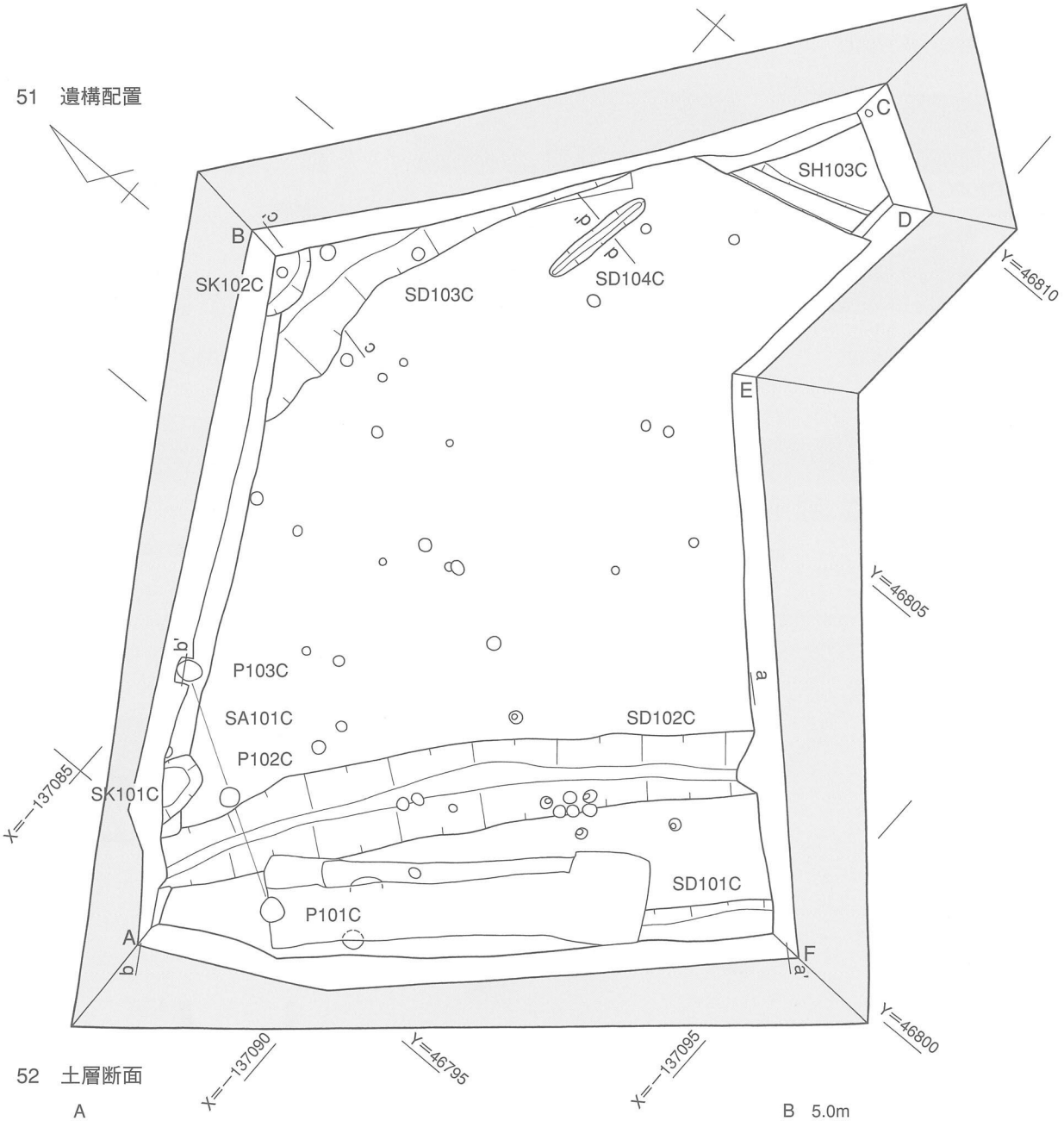


SH302B③(146～163)　P301B(203)　P307B(204)
P312B(205)　包含層(206～211)

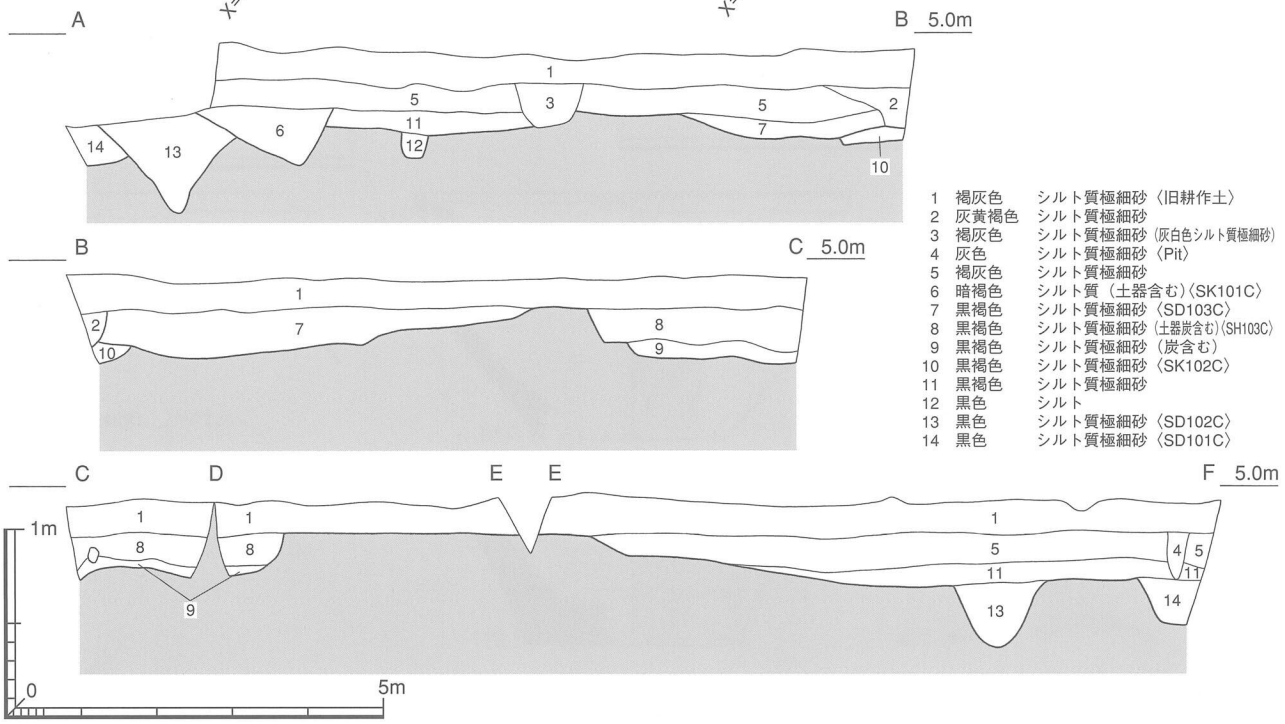


SH303B (164～202)

51 遺構配置



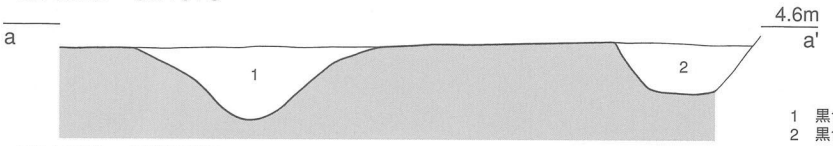
52 土層断面



1	褐灰色	シルト質極細砂〈旧耕作土〉
2	灰黄褐色	シルト質極細砂
3	褐灰色	シルト質極細砂（灰白色シルト質極細砂）
4	灰色	シルト質極細砂〈Pit〉
5	褐灰色	シルト質極細砂
6	暗褐色	シルト質（土器含む）〈SK101C〉
7	黒褐色	シルト質極細砂〈SD103C〉
8	黒褐色	シルト質極細砂（土器炭含む）〈SH103C〉
9	黒褐色	シルト質極細砂（炭含む）
10	黒褐色	シルト質極細砂〈SK102C〉
11	黒褐色	シルト質極細砂
12	黒色	シルト
13	黒色	シルト質極細砂〈SD102C〉
14	黒色	シルト質極細砂〈SD101C〉

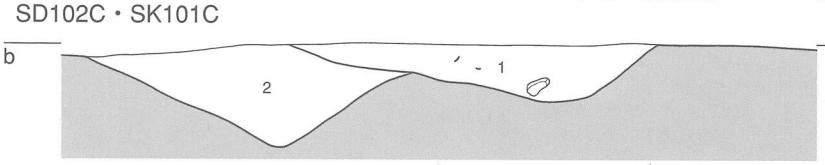
51 遺構配置（1/100）
52 土層断面（1/100・1/40）

53 SD102C・SD101C



1 黒色 シルト質極細砂〈SD102C〉
2 黒色 シルト質極細砂〈SD101C〉

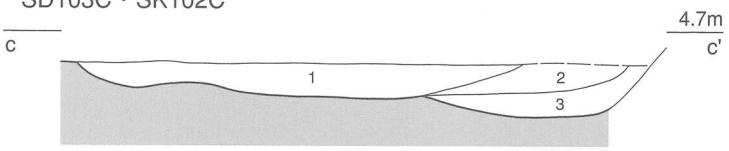
54 SD102C・SK101C



1 暗褐色 シルト質（土器含む）〈SK101C〉
2 黒色 シルト質極細砂〈SD102C〉

0 2m

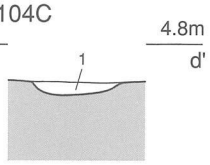
55 SD103C・SK102C



1 黒色 黒色シルト質極細砂（灰色シルトと褐色粒子含む）
2 青灰色 青灰シルト質極細砂（褐色ブロック含む）〈SK102C〉
3 黒褐色 シルトブロック〈SK102C〉

0 1m

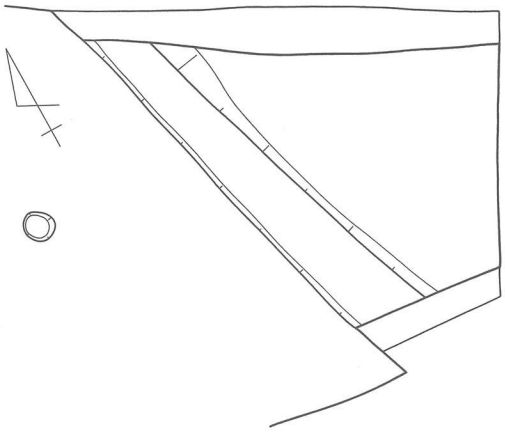
56 SD104C



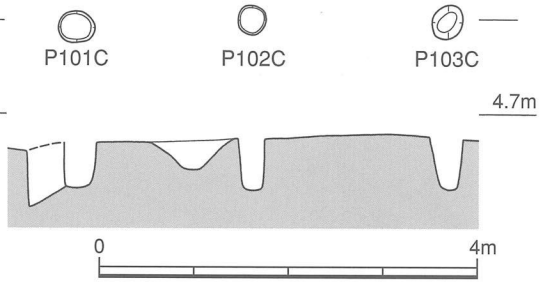
1 暗黒褐色 シルト質極細砂

0 50cm

57 SH103C

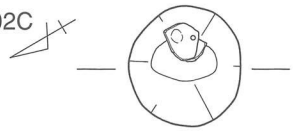


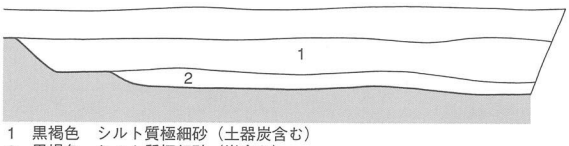
58 SA101C



0 4m

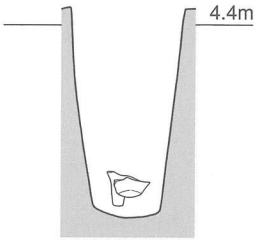
59 P102C



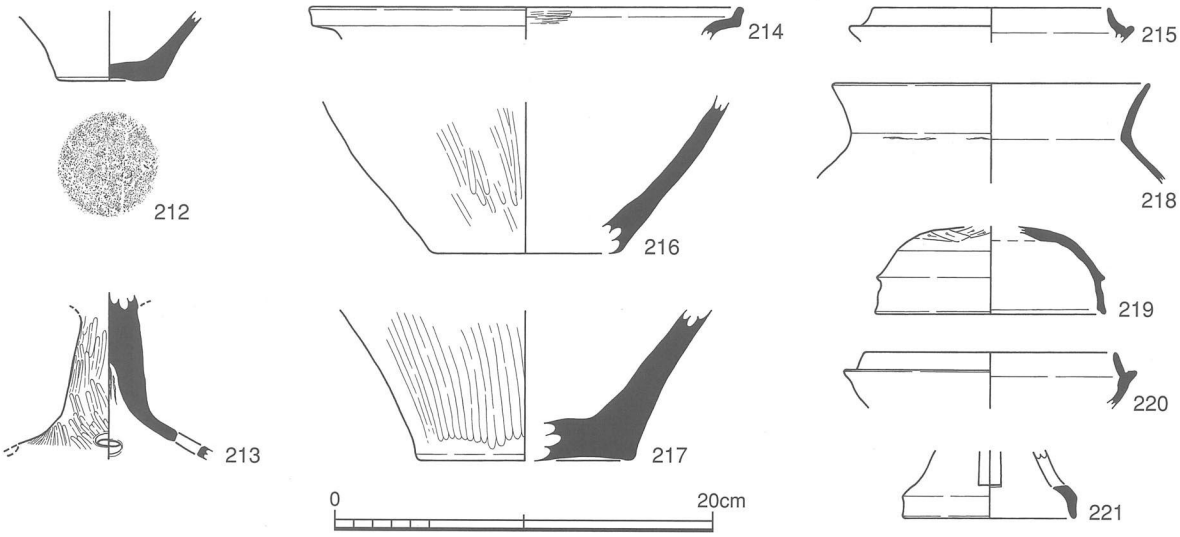


1 黒褐色 シルト質極細砂（土器炭含む）
2 黒褐色 シルト質極細砂（炭含む）

0 2m

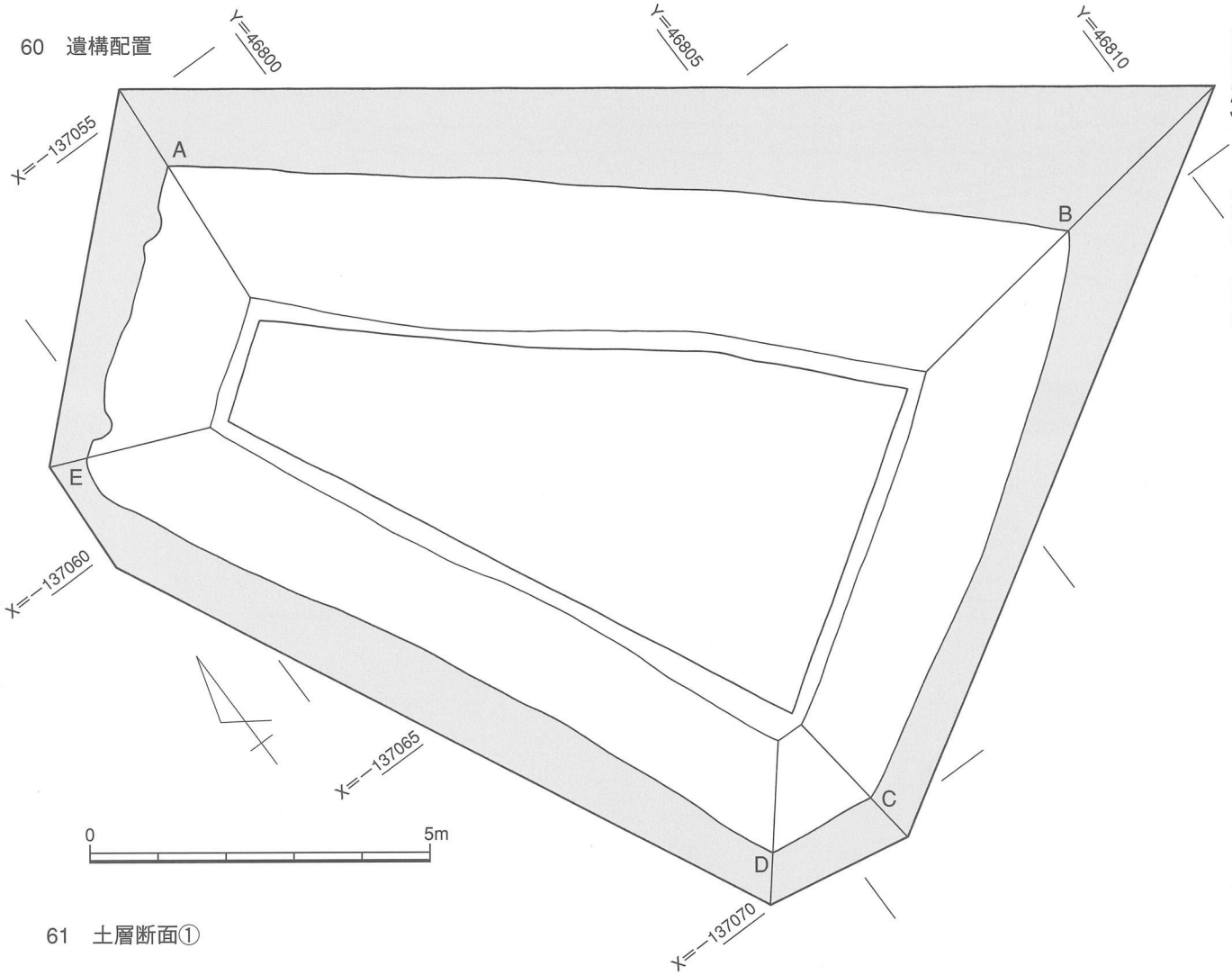


0 50cm

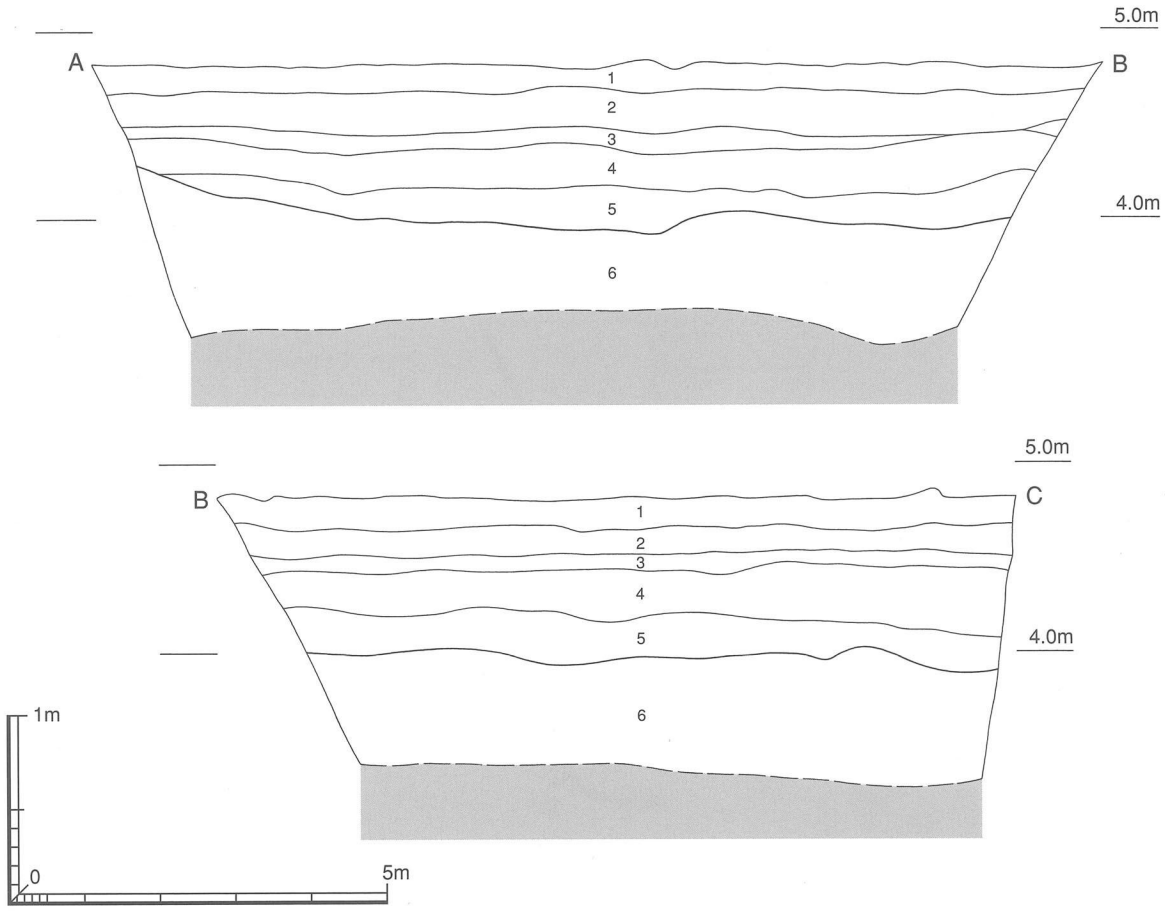


53 溝SD102C・SD101C土層断面（1/40） 54 溝SD102C・土坑SK101C土層断面（1/40） 55 溝SD103C・土坑SK102C土層断面（1/20）
56 溝SD104C土層断面（1/20） 57 竪穴住居SH103C遺構（1/40） 58 柵SA101C遺構（1/40）
59 柱穴P102C遺構（1/20） P102C遺物（212・213） P103C遺物（214） P108C遺物（215） SD102C遺物（216・217）
SK102C遺物（218） SK103C遺物（219） 包含層遺物（220・221）

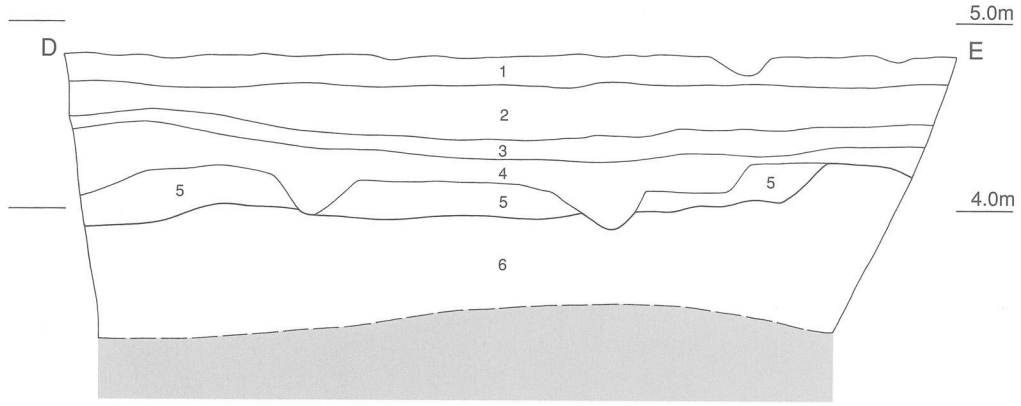
60 遺構配置

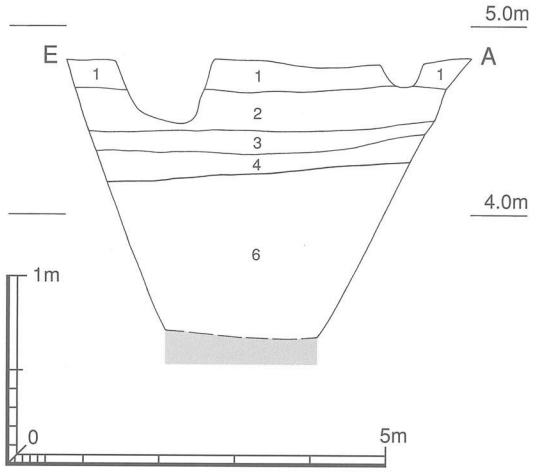


61 土層断面①



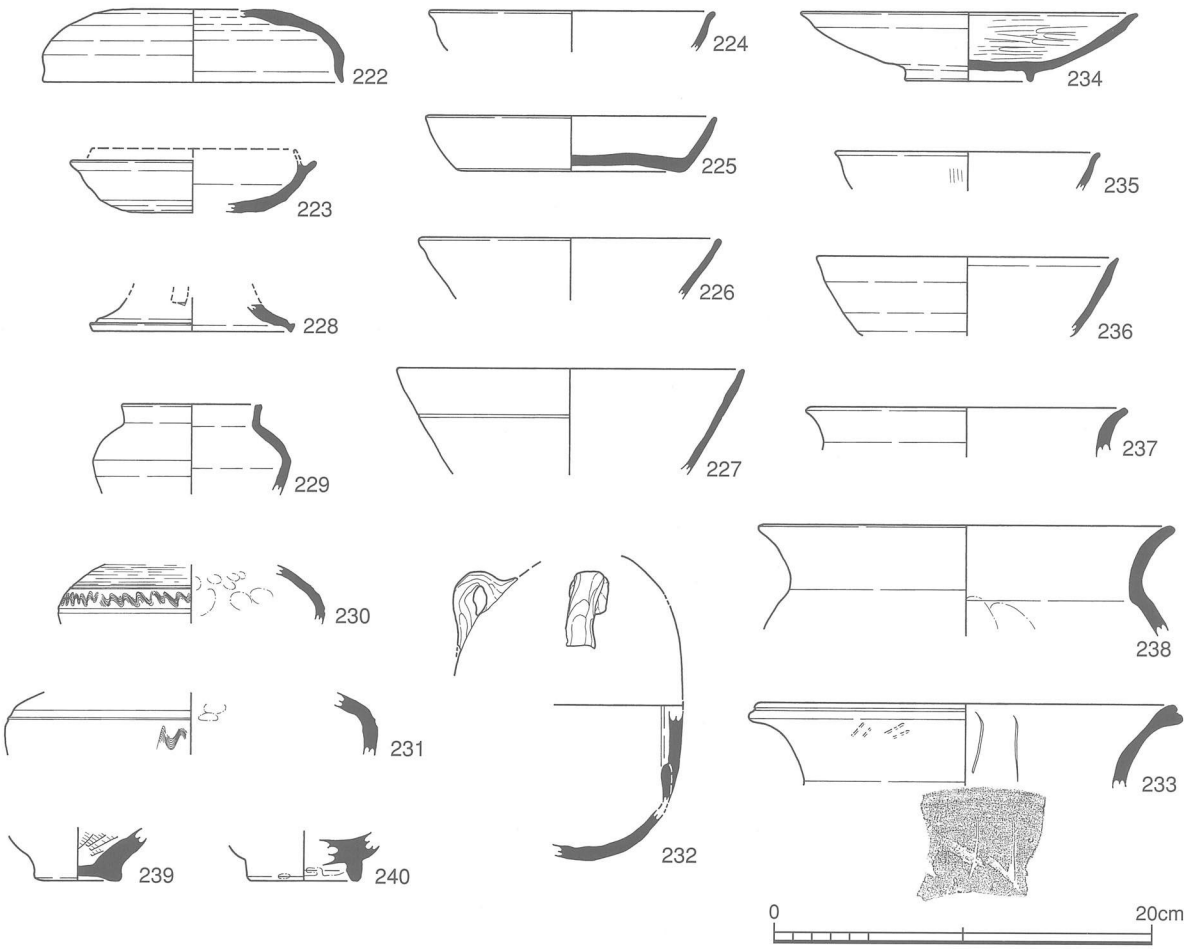
60 遺構配置(1/100)
61 土層断面①(1/100・1/40)



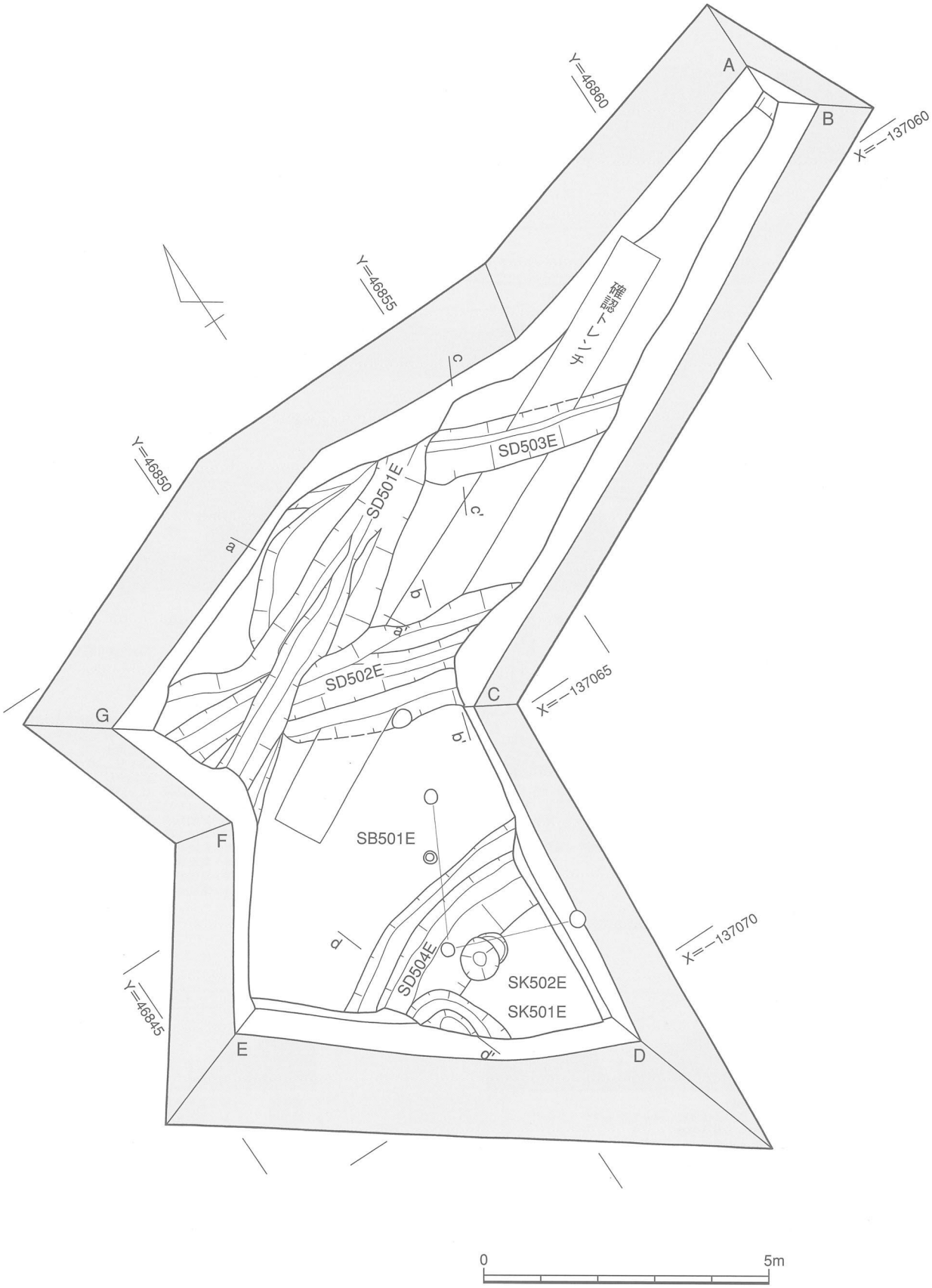


61　土層断面②

1	黒色	シルト質極細砂
2	灰オリーブ色	シルト質極細砂
3	灰色	シルト質極細砂
4	灰オリーブ色	シルト質極細砂
5	灰黄褐色	シルト質極細砂（Mn含む）
6	灰色	細砂～シルト（ラミナ・流木あり）

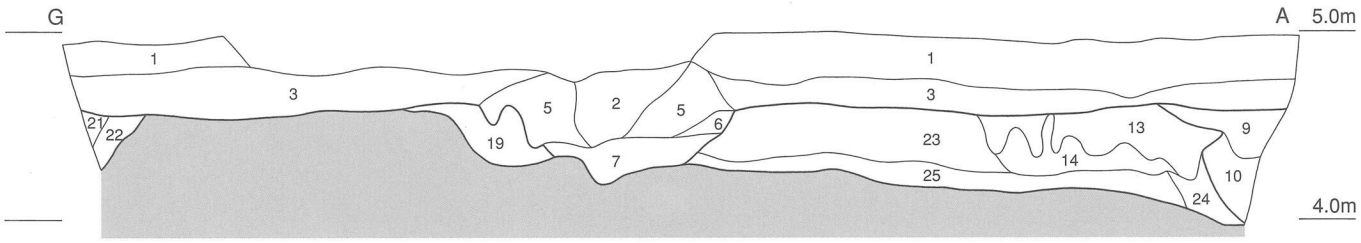


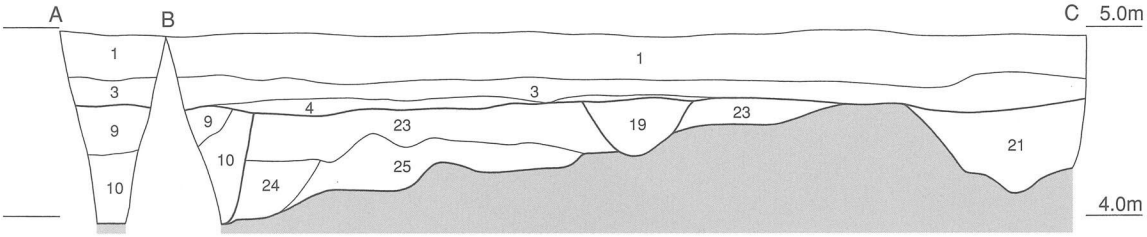
61 土層断面②（1/100・1/40）
遺物（222～241）

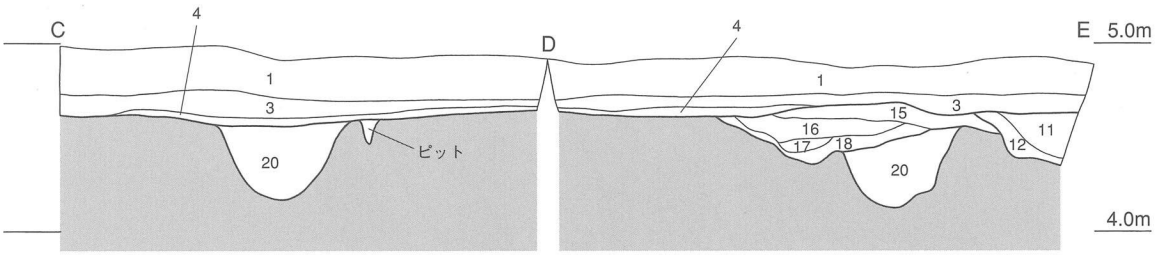

A
B
C
D
E
F
G
Y=46860
Y=46855
Y=46850
Y=46845
X=−137060
X=−137065
X=−137070
SD501E
SD502E
SD503E
SD504E
SB501E
SK502E
SK501E
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
0
5m

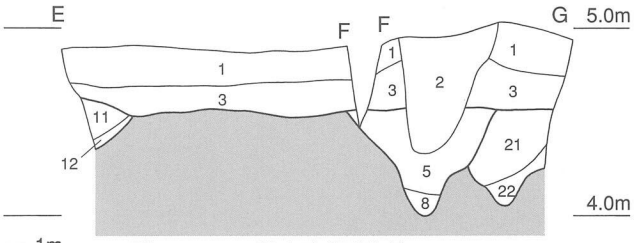
62 遺構配置(1/100)

63 土層断面





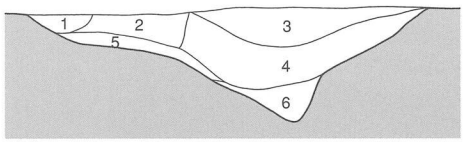




1 黒色 シルト質極細砂〈旧耕作土〉
2 褐灰色 シルト質極細砂礫含む（現代の土管あり）
3 明黄褐色 シルト質極細砂〈旧耕作土〉
4 灰白色 シルト質極細砂〈床土〉
5 灰白色 シルト質極細砂～極細砂
6 褐灰色 シルト質極細砂
7 灰色 シルト質極細砂
8 褐灰色 シルト質極細砂（Fe_2O_3多く含む）〈SD502E〉
9 灰白色 極細砂
10 褐灰色 シルト質極細砂
11 灰白色 極細砂
12 灰白色 シルト質極細砂
13 灰白色 極細砂（黒褐色シルト質極細砂ブロック多く含む）
14 灰白色 ブロック（黒褐色シルト質極細砂含む）
15 灰黄褐色 シルト質極細砂十明黄褐色ブロック含む
16 黒褐色 シルト質極細砂（最下層に炭と土器含む）〈SK501E〉
17 黒褐色 シルト質極細砂〈SK501E〉
18 黒褐色 シルト質極細砂（にぶい黄橙ブロック若干含む）〈SK501E〉
19 黒褐色 シルト〈SD503E〉
20 黒褐色 シルト質極細砂（Mn含む）〈SD504E〉
21 褐灰色 シルト質極細砂〈SD502E〉
22 黒色 シルト質極細砂（Mn多く含む）〈SD502E〉
23 褐灰色 シルト質極細砂（褐灰色ブロック含む）
24 黒褐色 シルト質極細砂
25 黒褐色 シルト質極細砂

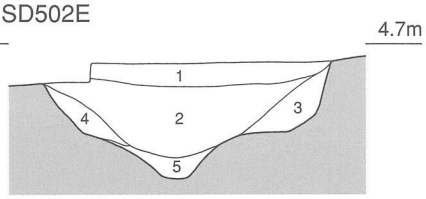
1m
0
5m

64 SD501E



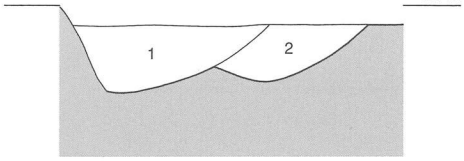
1 灰白色 極細砂
2 褐灰色 シルト質極細砂（灰色シルトブロック含む）
3 褐灰色 シルト質極細砂
4 褐灰色 シルト質極細砂（上層にMn含む）
5 褐灰色 細砂
6 灰白色 細砂

65 SD502E



1 褐灰色 シルト質極細砂（にぶい黄橙色混じる）
2 褐灰色 シルト質極細砂
3 黒褐色 シルト質極細砂（Mn多く含む）
4 褐灰色 シルト質極細砂（Mn含む）
5 灰黄褐色 極細砂（灰色シルトブロック含む）

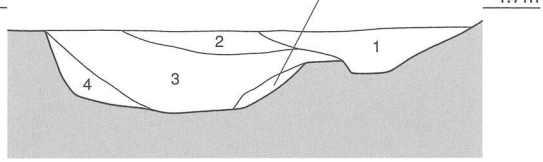
66 SD503E



1 にぶい黄橙色 シルト質極細砂
2 黒褐色 シルト質極細砂

0
2m

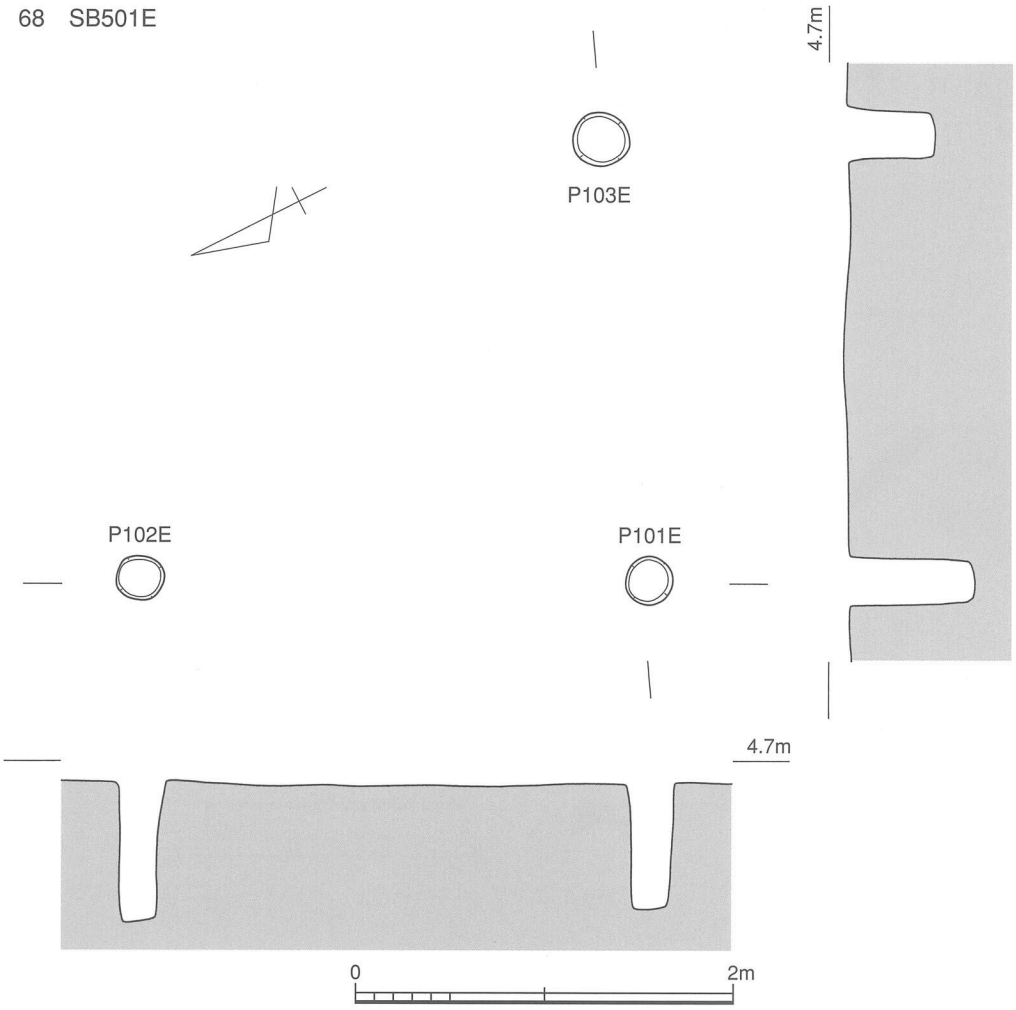
67 SD504E



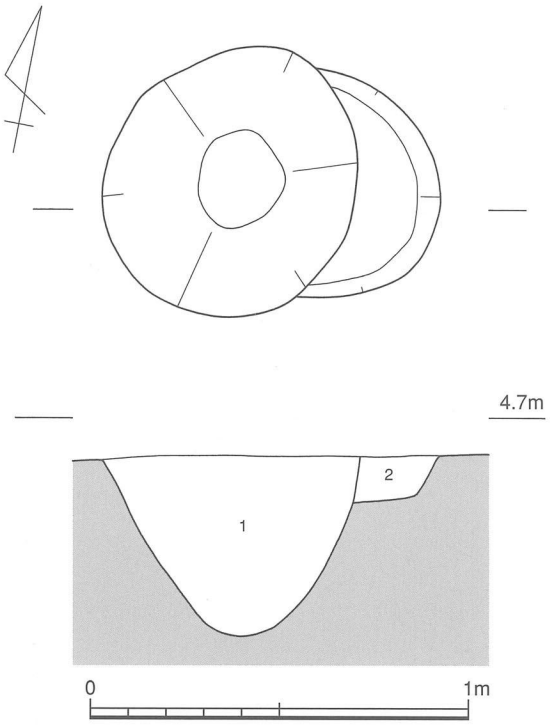
1 褐灰色 シルト質極細砂（にぶい黄橙色シルト質極細砂ブロック含む）〈SK501E〉
2 褐灰色 シルト質極細砂（褐灰色シルトブロック含む）〈SK501E〉
3 褐灰色 シルト質極細砂〈SK504E〉
4 褐灰色 シルト質極細砂（Fe_2O_3含む）〈SK504E〉

63 土層断面（1/100・1/40）
溝土層断面（1/40）（64 SD501E 65 SD502E 66 SD503E 67 SD504E）

68 SB501E



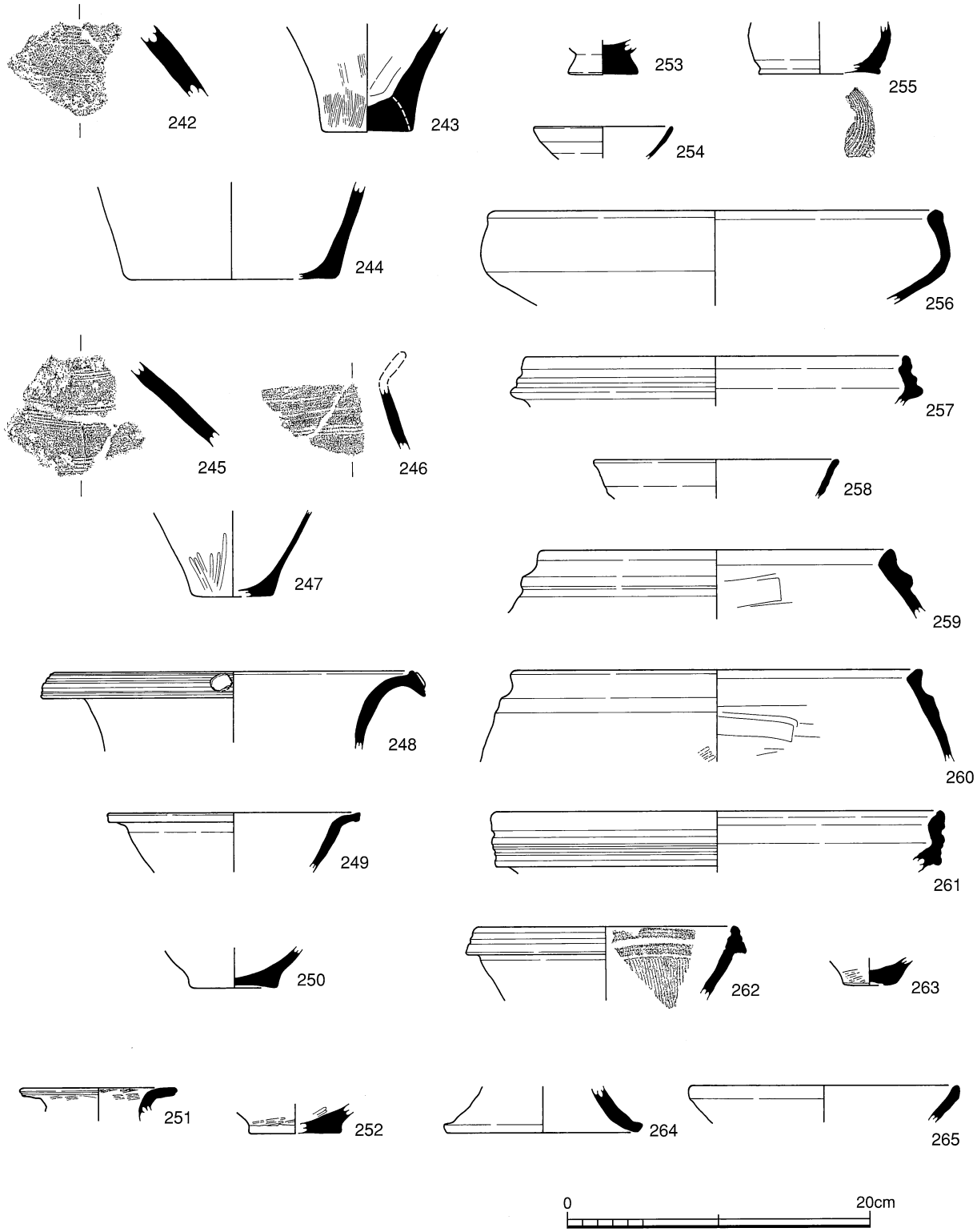
69 SK502E



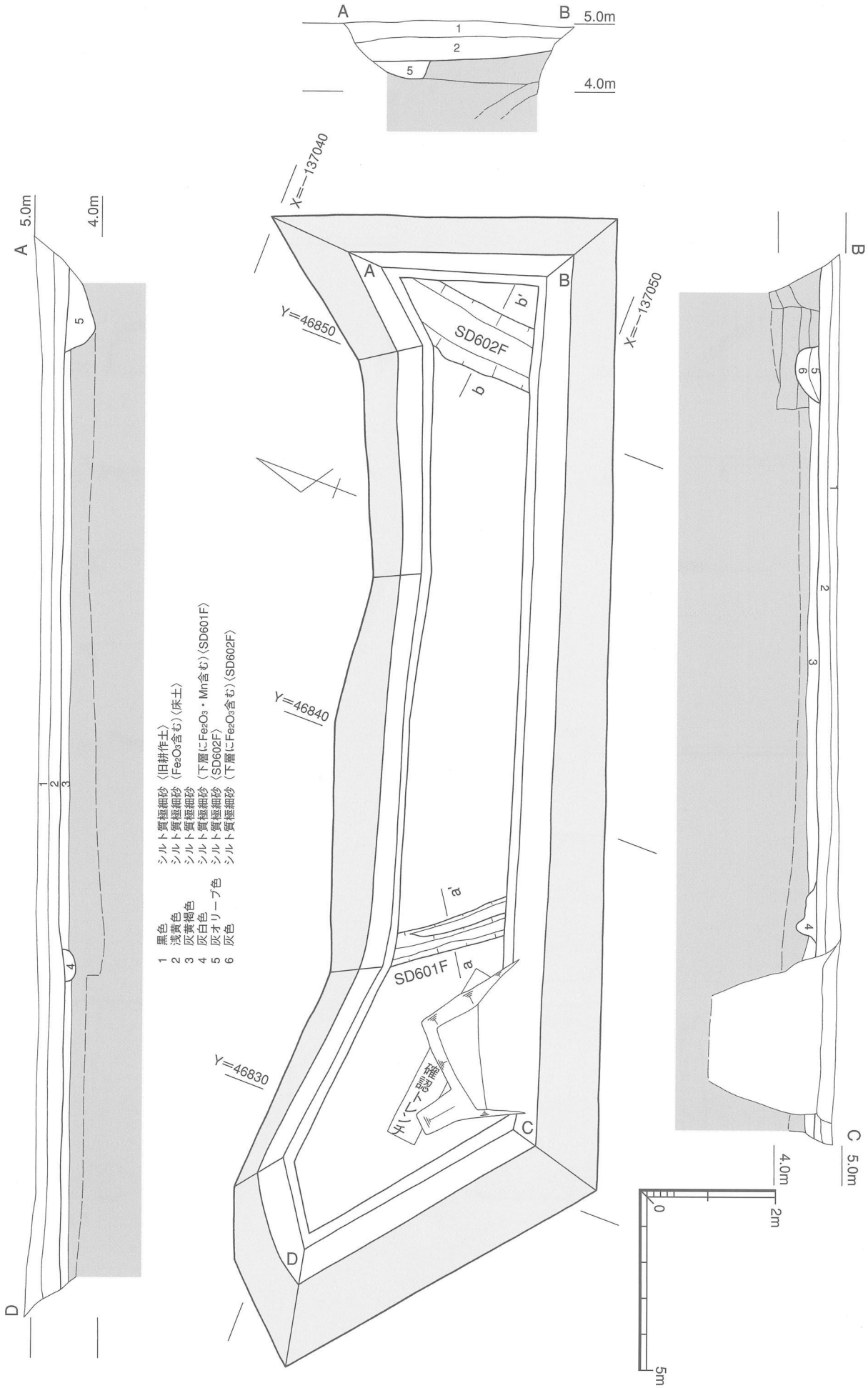
1 黒褐色 シルト質極細砂（褐灰色シルト質極細砂ブロック含む・下層に炭多く含む）
2 褐灰色 シルト質極細砂（Mn含む）

68 掘立柱建物SB501E（1/40）
69 土坑SK502E（1/20）

図版42　E地区　遺物

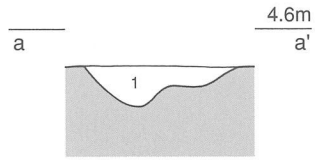


SD502E（242～244）　SD504E（245～247）　SD503E（248～250）
SK502E（251・252）　SD501E（253～263）　包含層（264・265）



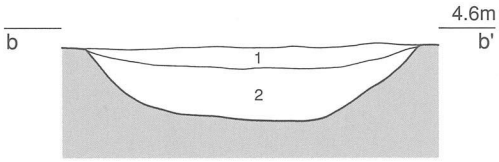
70　遺構配置・土層断面（1/150・1/80）

71　SD601F



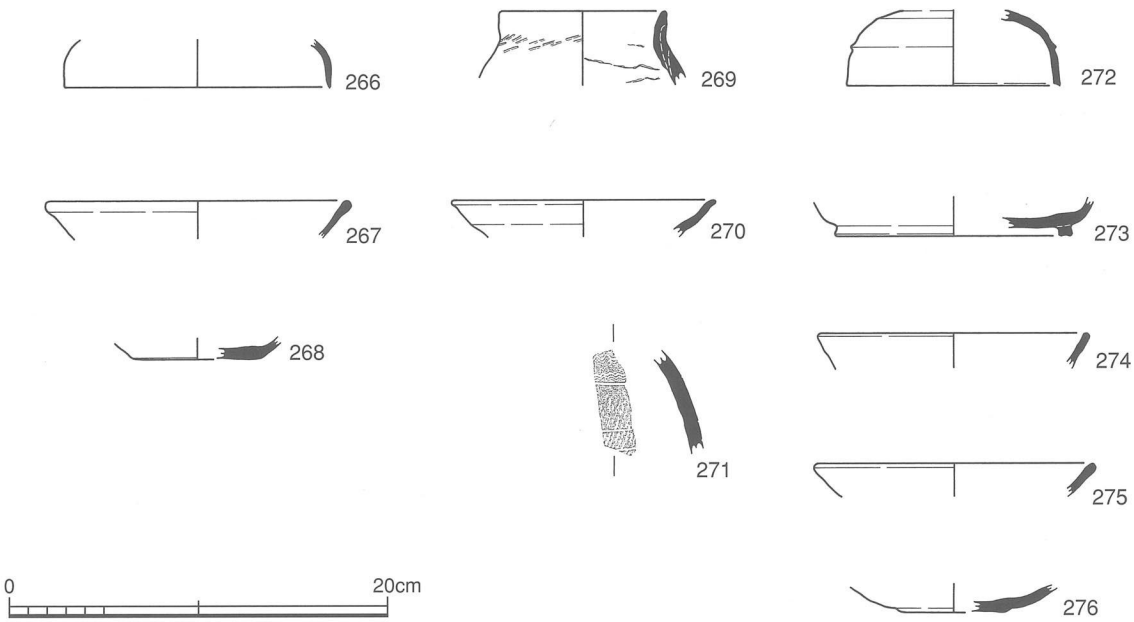
1　灰白色　シルト質極細砂（下層にFe_2O_3・Mn含む）

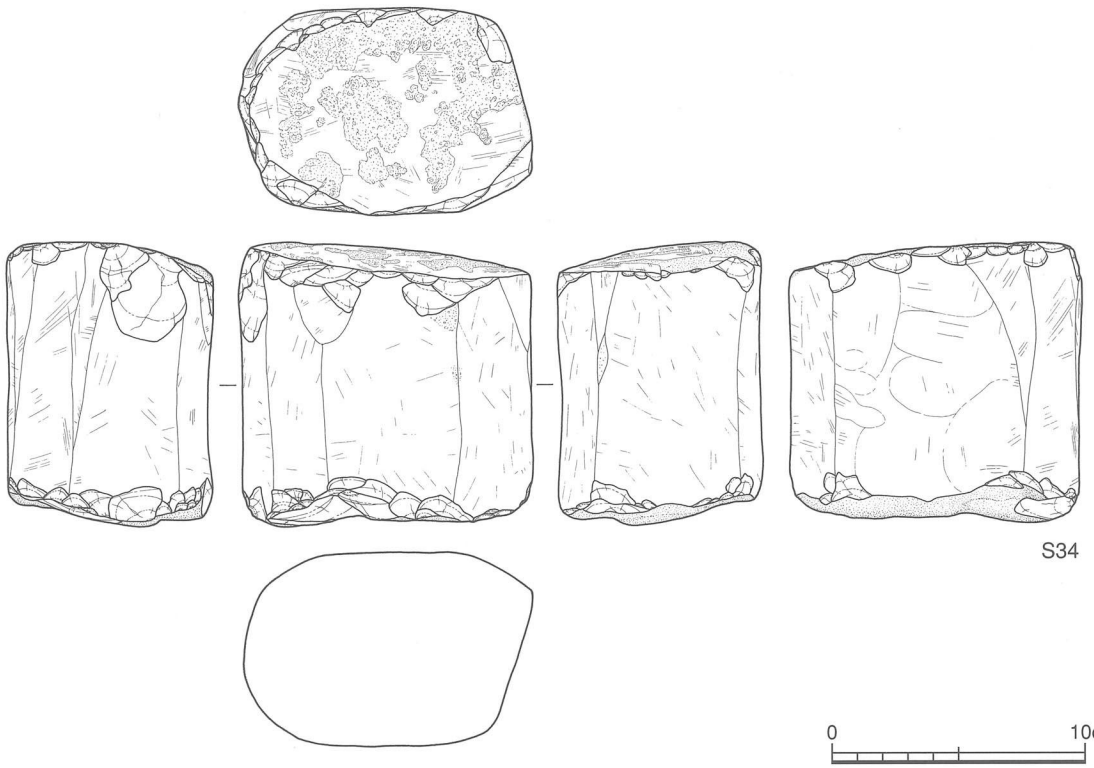
72　SD602F



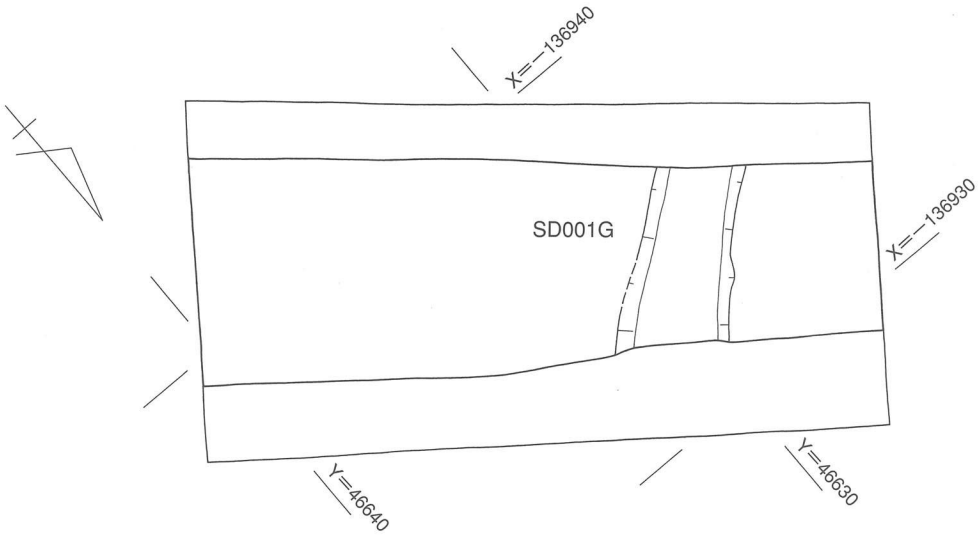
1　灰オリーブ色　シルト質極細砂
2　灰色　シルト質極細砂（下層にFe_2O_3含む）

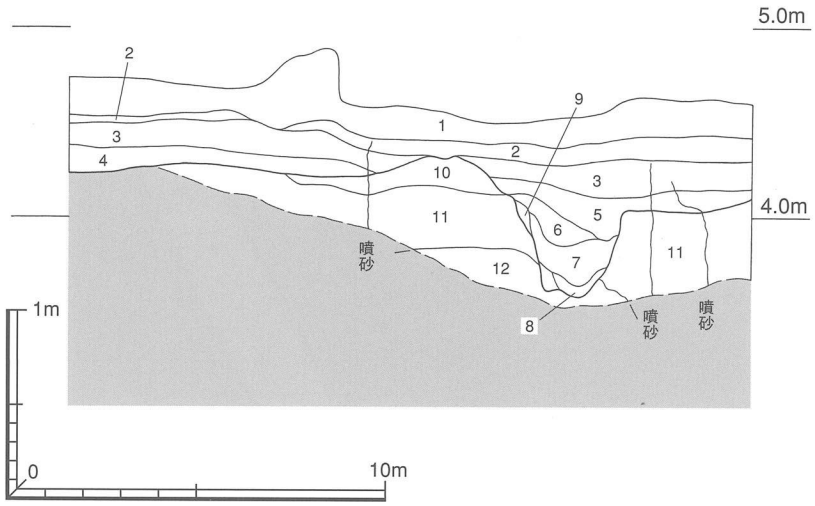
0　2m





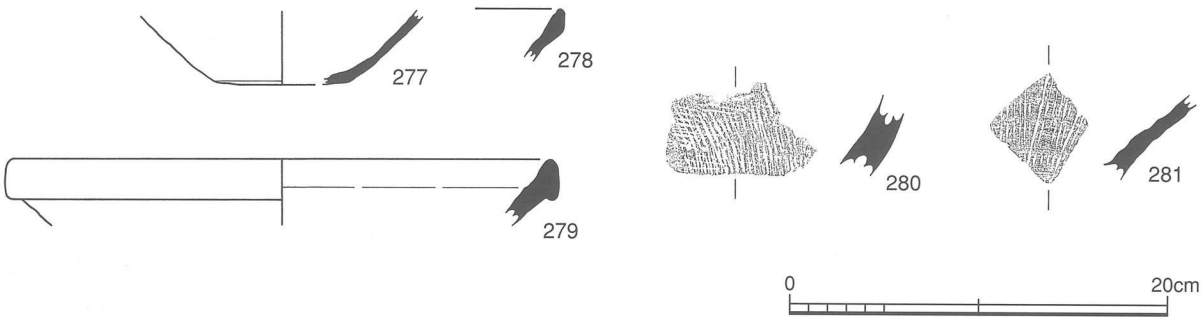
土層断面（1/40）　（71 溝SD601F　72 溝SD602F）
SD601F（266～268）　SD602F（S34）　包含層（269～276）



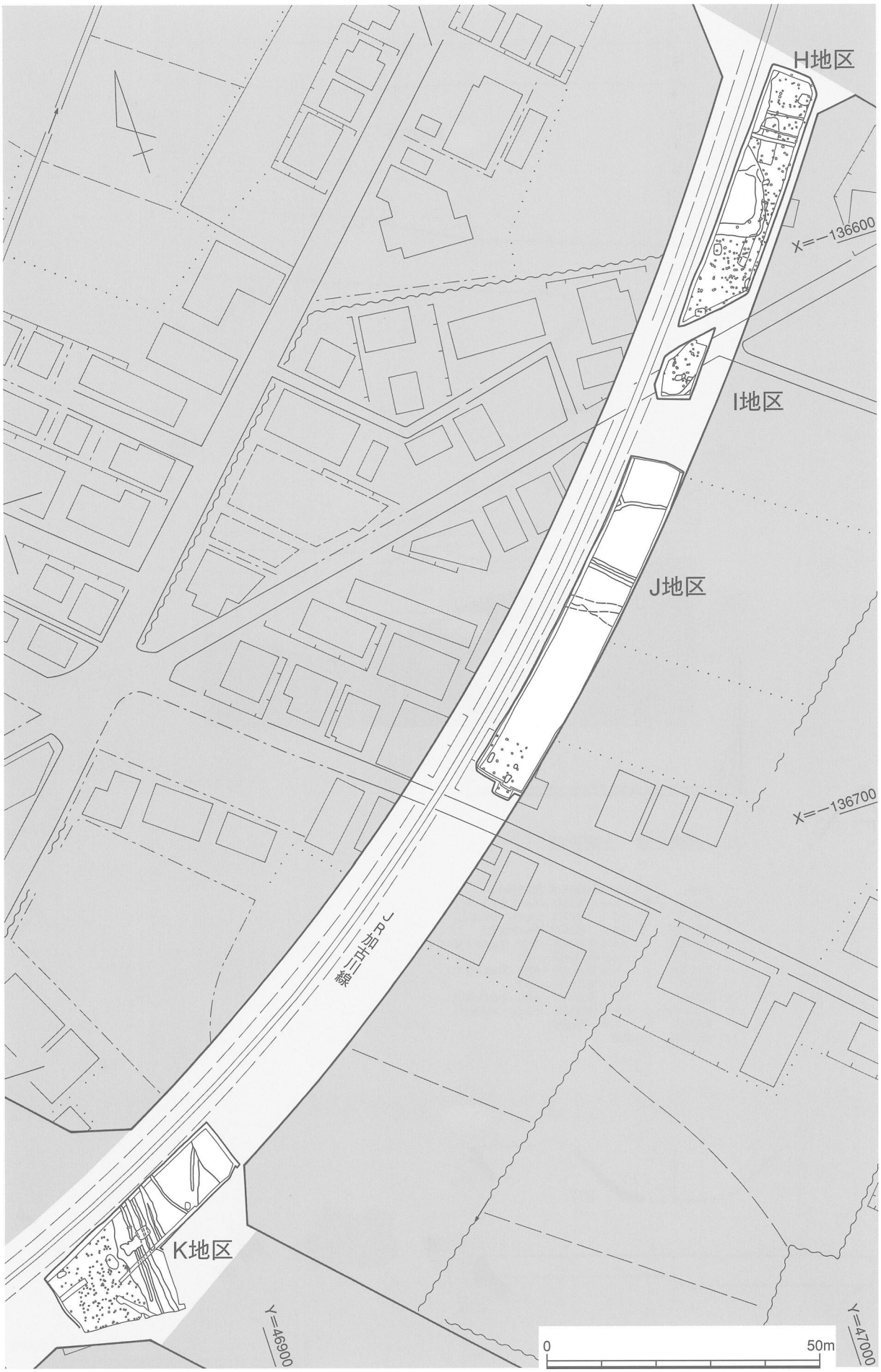


73　遺構配置・土層断面

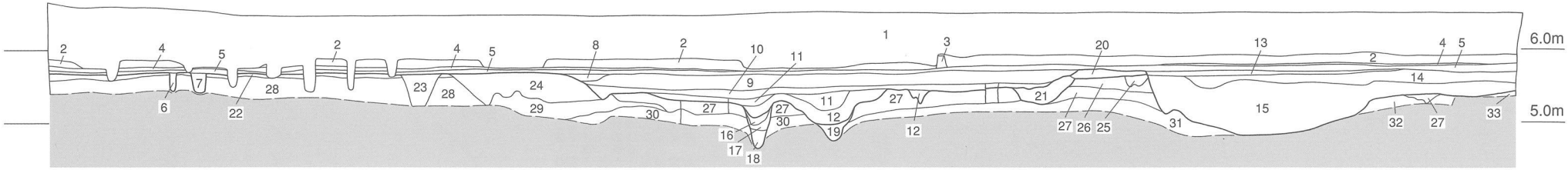
1	黒色	シルト質極細砂〈旧耕作土〉
2	灰オリーブ色	シルト～極細砂（Fe_2O_3含む）〈床土〉
3	灰色	シルト～極細砂（Fe_2O_3・Mn含む）
4	暗灰黄色	シルト～極細砂（Fe_2O_3含む）
5	暗灰黄色	シルト質極細砂～中砂（Fe_2O_3・Mn含む）
6	黄褐色	シルト質極細砂～中砂
7	灰黄褐色	シルト質極細砂～細砂（Fe_2O_3含む）
8	褐灰色	シルト質極細砂～細砂
9	灰黄色	シルト質極細砂～細砂（Fe_2O_3含む）
10	にぶい黄色	シルト質極細砂（Fe_2O_3・Mn含む）
11	黄褐色	シルト～極細砂
12	暗灰黄色	細砂

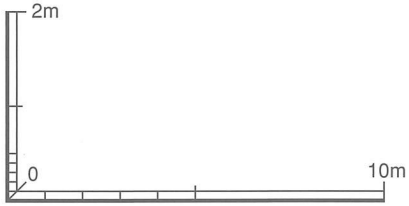


73　遺構配置・土層断面（1/100・1/40）
包含層遺物（277～281）



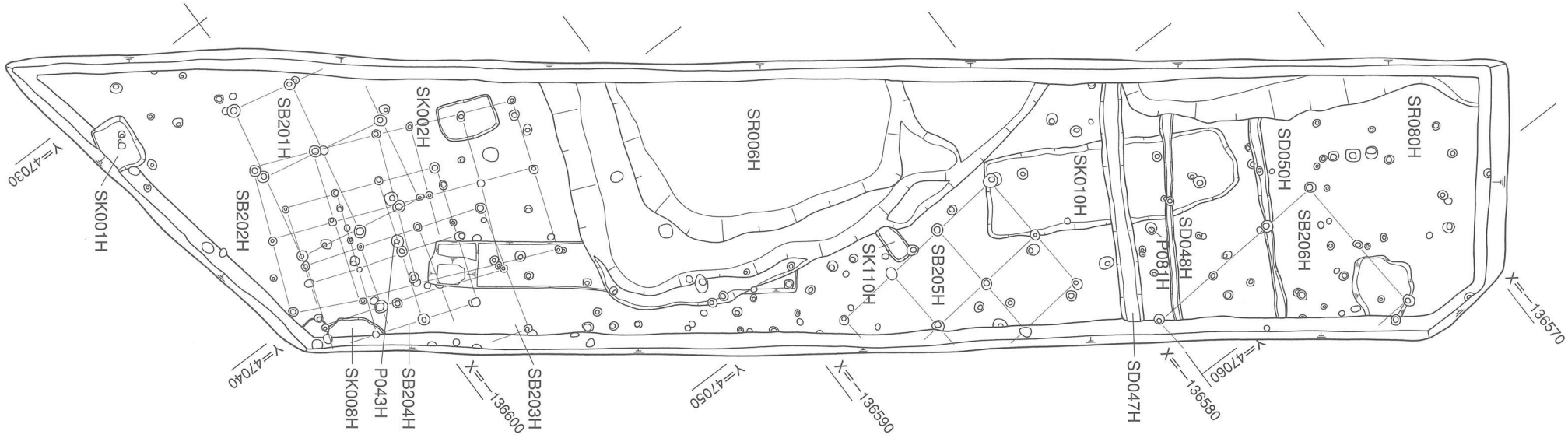
74　加古川線地区調査位置（1/500）





西壁断面

1 盛土
2 オリーブ黒色 シルト質極細砂（粗砂～小礫を含む）：旧耕土
3 灰オリーブ色 極細砂
4 暗灰黄色 極細砂（粗砂～小礫を少し含む）：旧耕土
5 黄褐色 シルト質極細砂（粗砂～小礫を含む）：床土
6 柱穴
7 柱穴
8 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂を含む）：SR006H
9 灰オリーブ色 シルト質極細砂（粗砂～中礫、土器を含む）：SR006H
10 暗灰黄色 シルト質極細砂（小～中礫、土器を含む）：SR006H
11 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂～中礫）：SR006H
12 オリーブ褐色 極細砂（粗砂を少量含む）：SR006H
13 黄灰色 細砂～極細砂（粗砂～小礫を含む）：SR080H
14 黄灰色 極細砂（粗砂～小礫、土器を含む）：SR080H
15 黒褐色 シルト質極細砂（粗砂～小礫を少量含む、土器を含む）：SR080H
16 オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂を含む）：SD301H
17 オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂を含む）：SD301H
18 黄褐色 極細砂：SD301H
19 オリーブ褐色 シルト質極細砂：SD302H
20 黄灰色 極細砂（粗砂～小礫を含む）
21 オリーブ褐色 シルト質極細砂：SD303H
22 黄灰色 極細砂（土器を含む）：土壌化層
23 暗灰黄色 シルト質極細砂
24 黄褐色 極細砂（粗砂を少量含む）
25 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂～小礫を含む）
26 黄褐色 シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
27 黒褐色 シルト質極細砂
28 オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
29 オリーブ褐色 シルト質極細砂
30 暗褐色 細砂～粗砂
31 暗灰黄色 細砂～粗砂
32 暗灰黄色 中砂～粗砂
33 黄灰色 細砂～粗砂

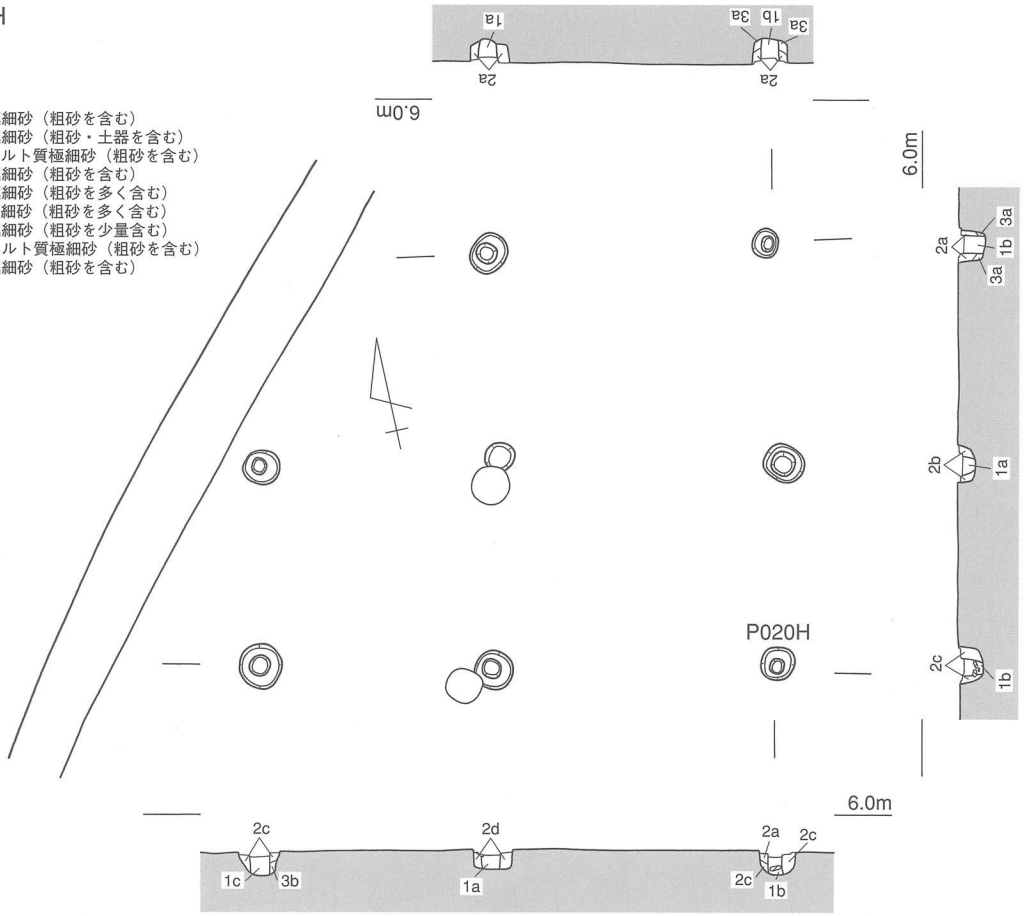


75 第1面遺構配置・土層断面（1/200・1/80）

図版47 工地区 遺構

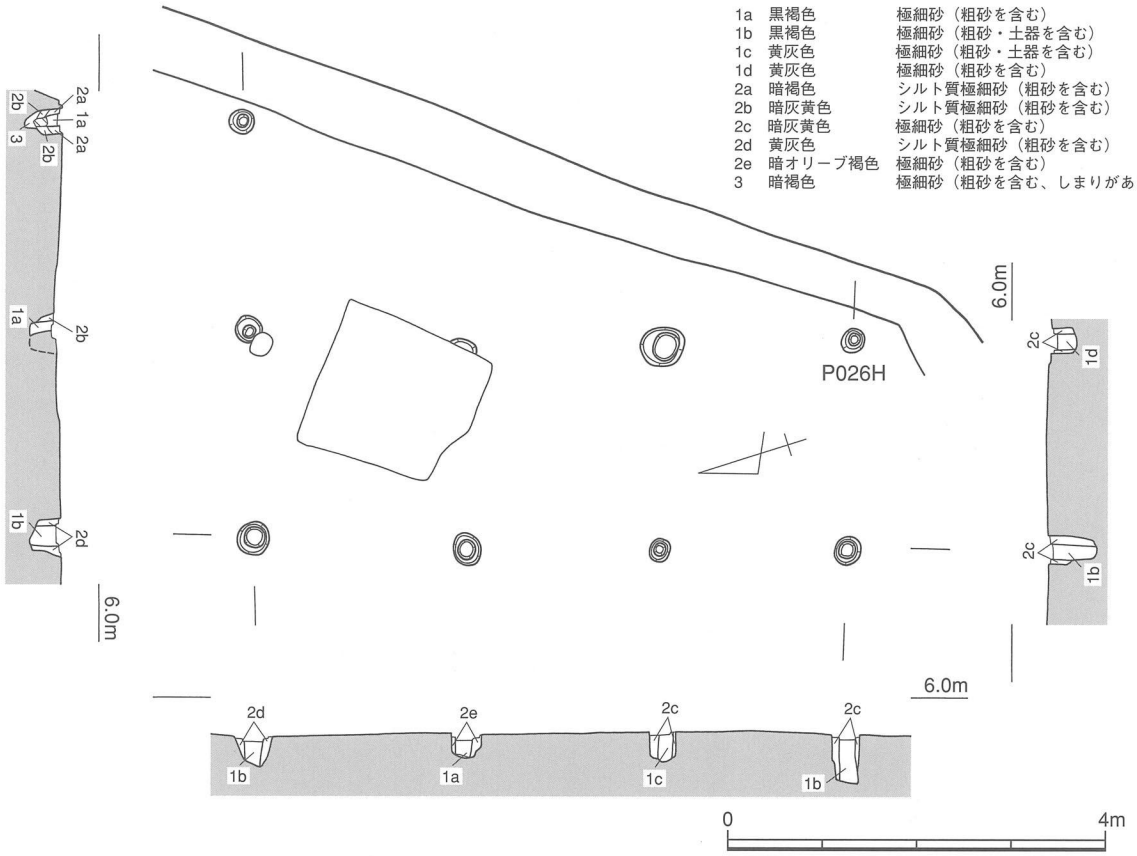
76 SB201H

1a 黒褐色 極細砂（粗砂を含む）
1b 黒褐色 極細砂（粗砂・土器を含む）
1c 黒褐色 シルト質極細砂（粗砂を含む）
2a 暗灰黄色 極細砂（粗砂を含む）
2b 暗灰黄色 極細砂（粗砂を多く含む）
2c 黄灰色 極細砂（粗砂を多く含む）
2d 黄灰色 極細砂（粗砂を少量含む）
3a 黒褐色 シルト質極細砂（粗砂を含む）
3b 黒褐色 極細砂（粗砂を含む）



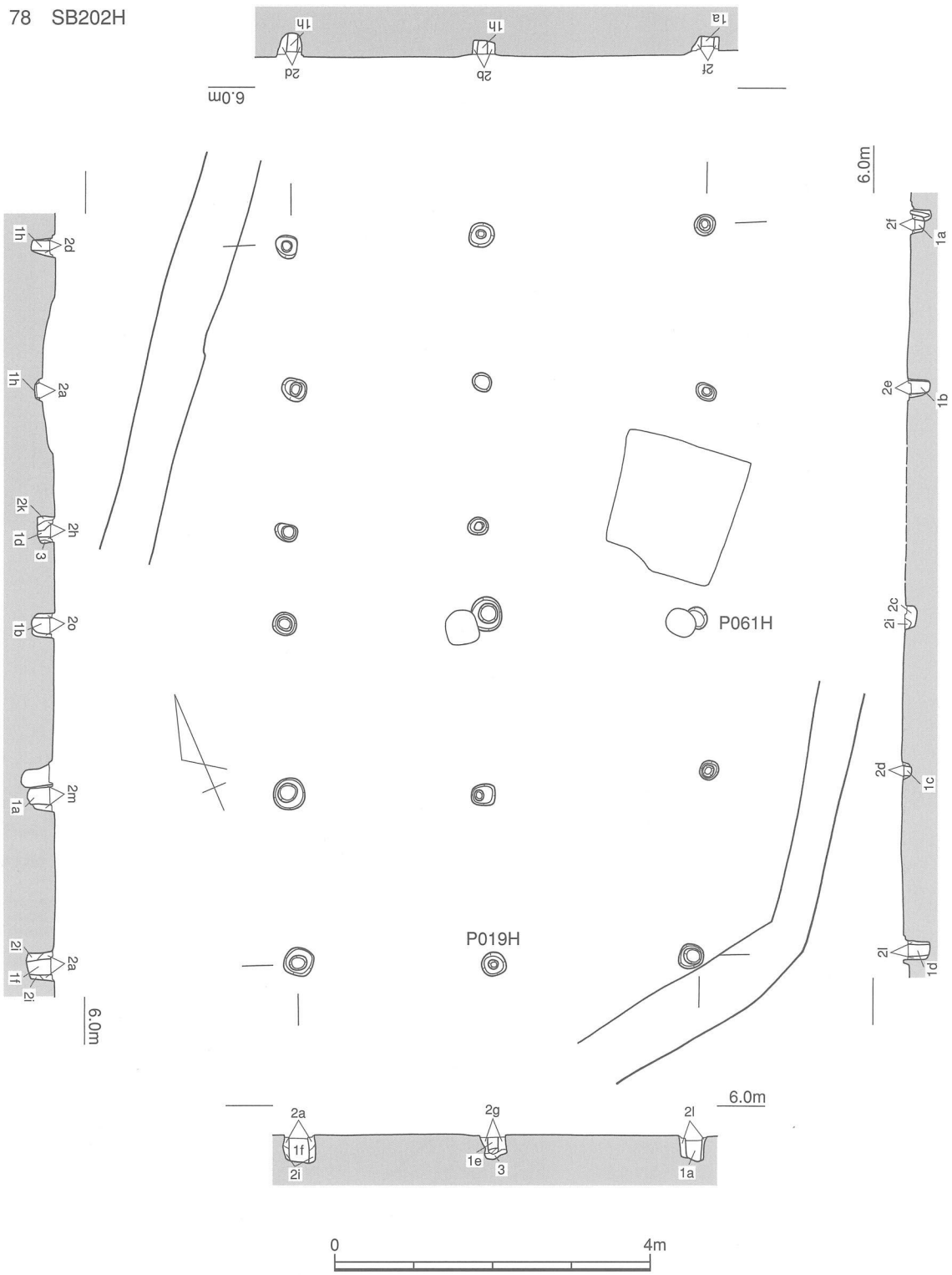
77 SB203H

1a 黒褐色 極細砂（粗砂を含む）
1b 黒褐色 極細砂（粗砂・土器を含む）
1c 黄灰色 極細砂（粗砂・土器を含む）
1d 黄灰色 極細砂（粗砂を含む）
2a 暗褐色 シルト質極細砂（粗砂を含む）
2b 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂を含む）
2c 暗灰黄色 極細砂（粗砂を含む）
2d 黄灰色 シルト質極細砂（粗砂を含む）
2e 暗オリーブ褐色 極細砂（粗砂を含む）
3 暗褐色 極細砂（粗砂を含む、しまりがある）



76 掘立柱建物SB201H（1/80）
77 掘立柱建物SB203H（1/80）

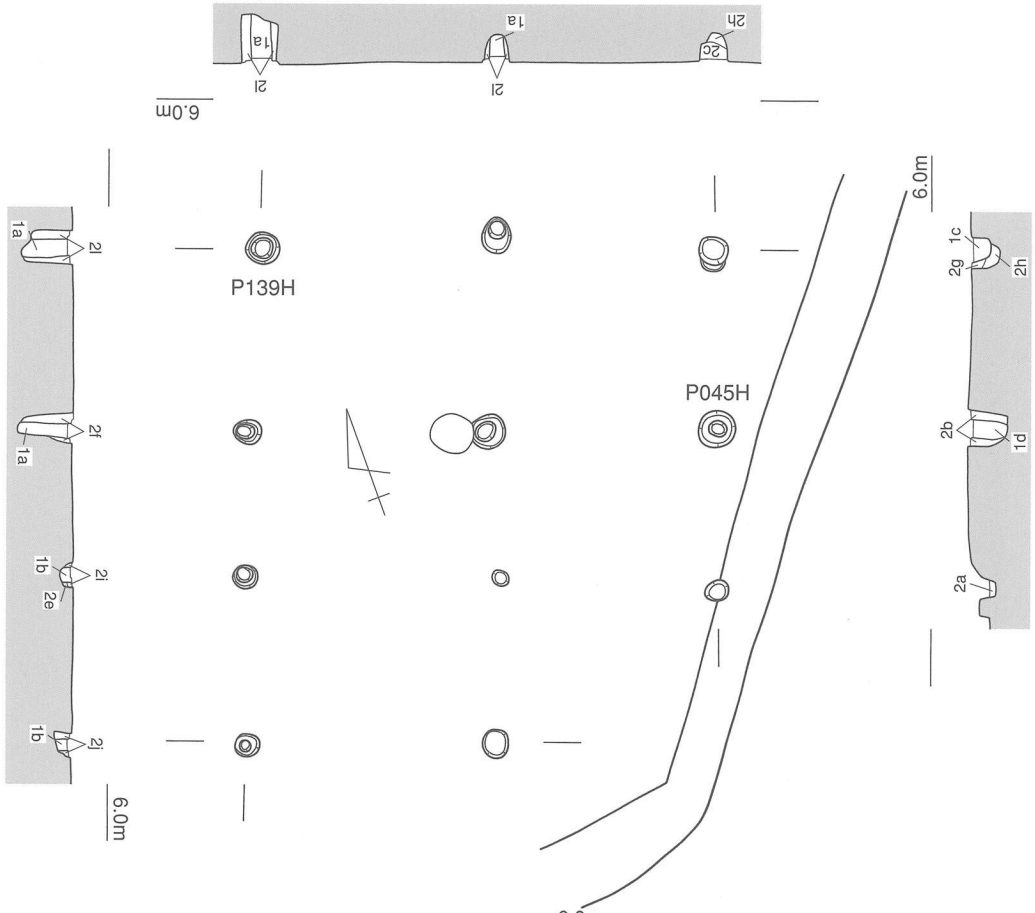
78 SB202H



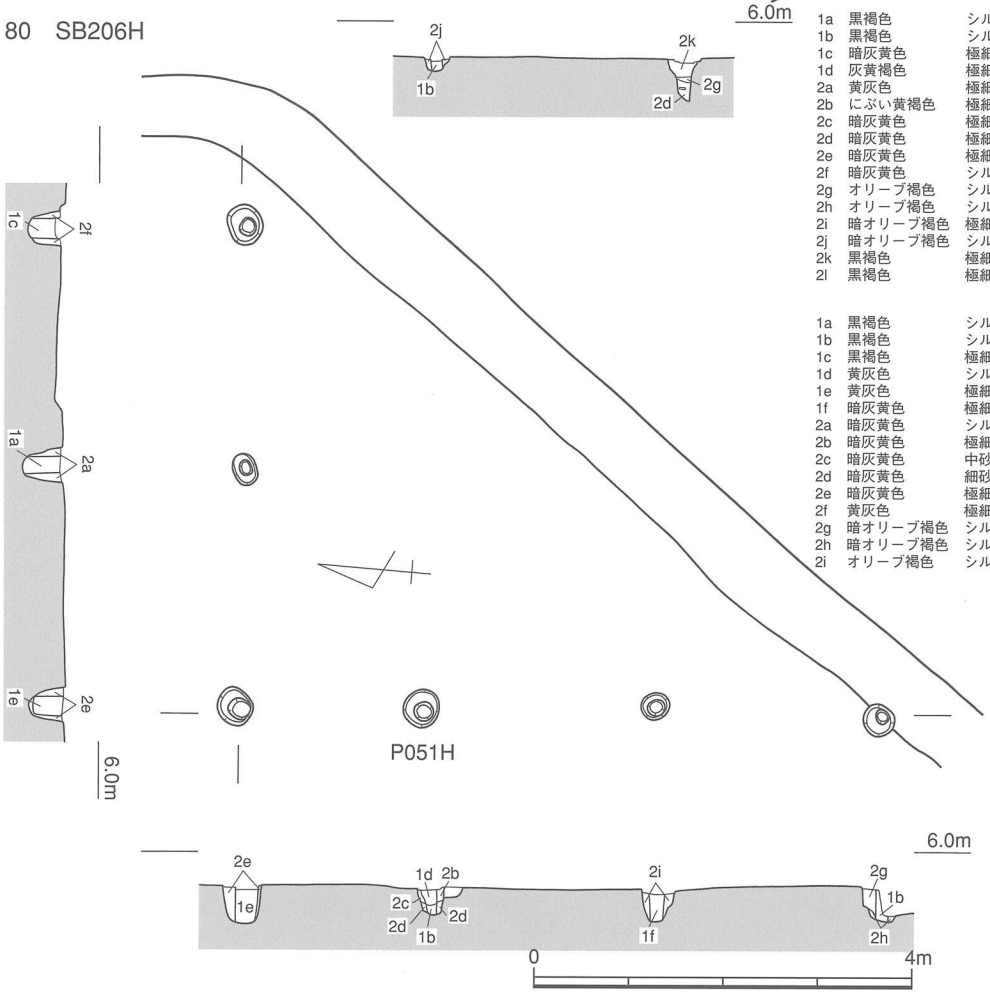
1a	黒褐色	極細砂（粗砂を少量含む）
1b	黒褐色	極細砂（粗砂・土器を含む）
1c	黒褐色	極細砂（粗砂を少量含む、土器を含む）
1d	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
1e	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）
1f	黄灰色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む、土器を含む）
1g	黄灰色	極細砂（粗砂を含む）
1h	黄灰色	シルト質極細砂（粗砂を含む）
2a	暗灰黄色	シルト質極細砂（粗砂を含む）
2b	暗灰黄色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2c	暗灰黄色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2d	暗灰黄色	極細砂（粗砂を少量含む）
2e	暗灰黄色	極細砂（粗砂を少量含む）
2f	灰黄褐色	極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）
2g	黄灰色	極細砂（粗砂を多く含む）
2h	オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を多く含む）
2i	オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を含む）
2j	オリーブ褐色	極細砂（粗砂を含む）
2k	暗オリーブ褐色	極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）
2l	暗オリーブ褐色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2m	暗オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2n	暗褐色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2o	黒褐色	極細砂（粗砂を少量含む）
3	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）

78 掘立柱建物SB202H（1/80）

79 SB204H



80 SB206H

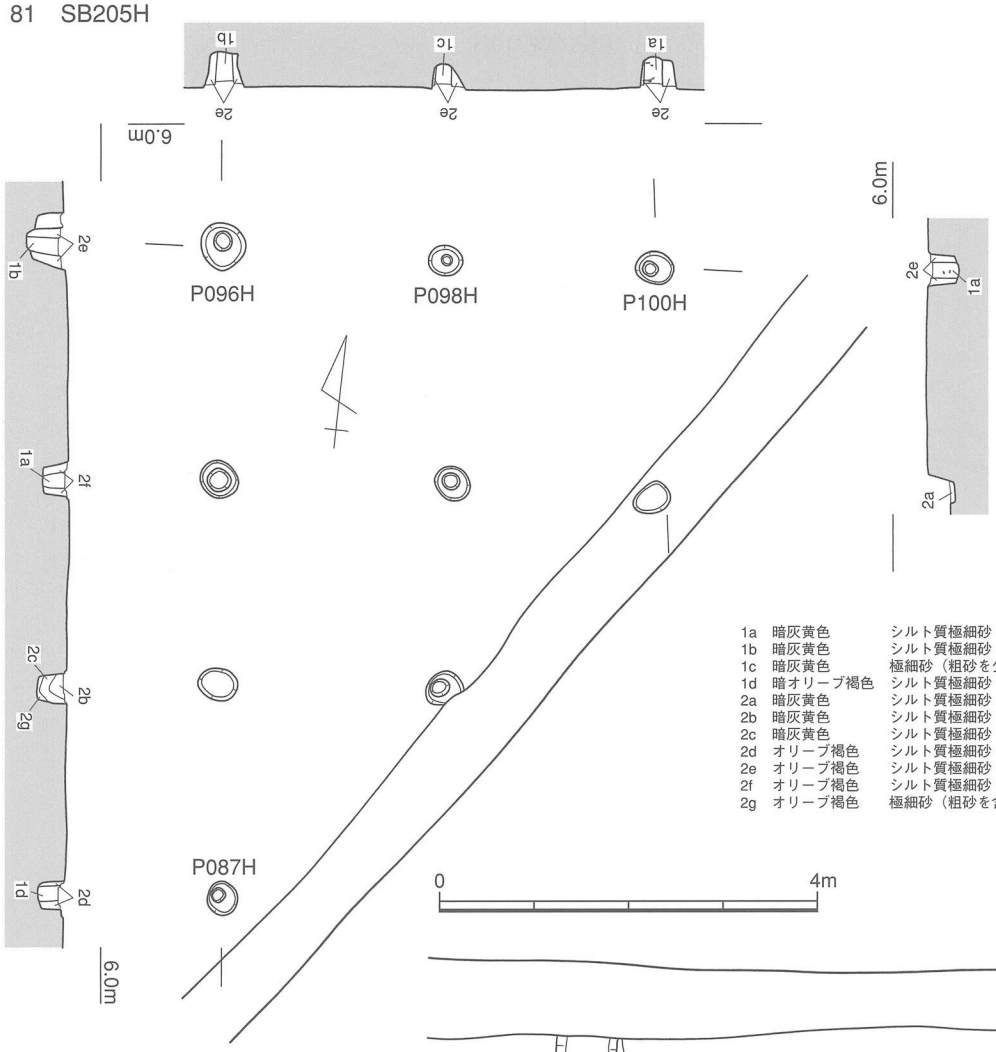


1a	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む、土器を含む）
1b	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
1c	暗灰黄色	極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）
1d	灰黄褐色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2a	黄灰色	極細砂（粗砂を少量含む、土器を含む）
2b	にぶい黄褐色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2c	暗灰黄色	極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）
2d	暗灰黄色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2e	暗灰黄色	極細砂（粗砂を含む）
2f	暗灰黄色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
2g	オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
2h	オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
2i	暗オリーブ褐色	極細砂（粗砂を含む）
2j	暗オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
2k	黒褐色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2l	黒褐色	極細砂（粗砂を含む）

1a	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
1b	黒褐色	シルト質極細砂（粗砂を含む）
1c	黒褐色	極細砂（粗砂を含む）
1d	黄灰色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
1e	黄灰色	極細砂（粗砂を少量含む、土器を含む）
1f	暗灰黄色	極細砂（粗砂・土器を含む）
2a	暗灰黄色	シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2b	暗灰黄色	極細砂（粗砂を多く含む）
2c	暗灰黄色	中砂～粗砂
2d	暗灰黄色	細砂～粗砂
2e	暗灰黄色	極細砂（粗砂を含む）
2f	黄灰色	極細砂（粗砂を含む）
2g	暗オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を多く含む）
2h	暗オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を含む）
2i	オリーブ褐色	シルト質極細砂（粗砂を含む）

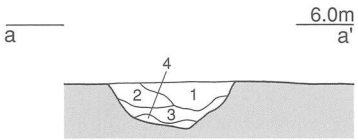
79 掘立柱建物SB204H（1/80）
80 掘立柱建物SB206H（1/80）

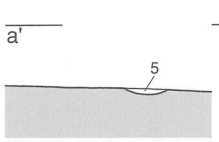
81 SB205H



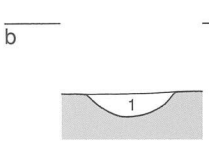
1a 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
1b 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
1c 暗灰黄色 極細砂（粗砂を少量含む、土器を含む）
1d 暗オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2a 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
2b 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2c 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2d オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂を含む）
2e オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
2f オリーブ褐色 シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
2g オリーブ褐色 極細砂（粗砂を含む）

82 SD047H・SD048H・SD050H



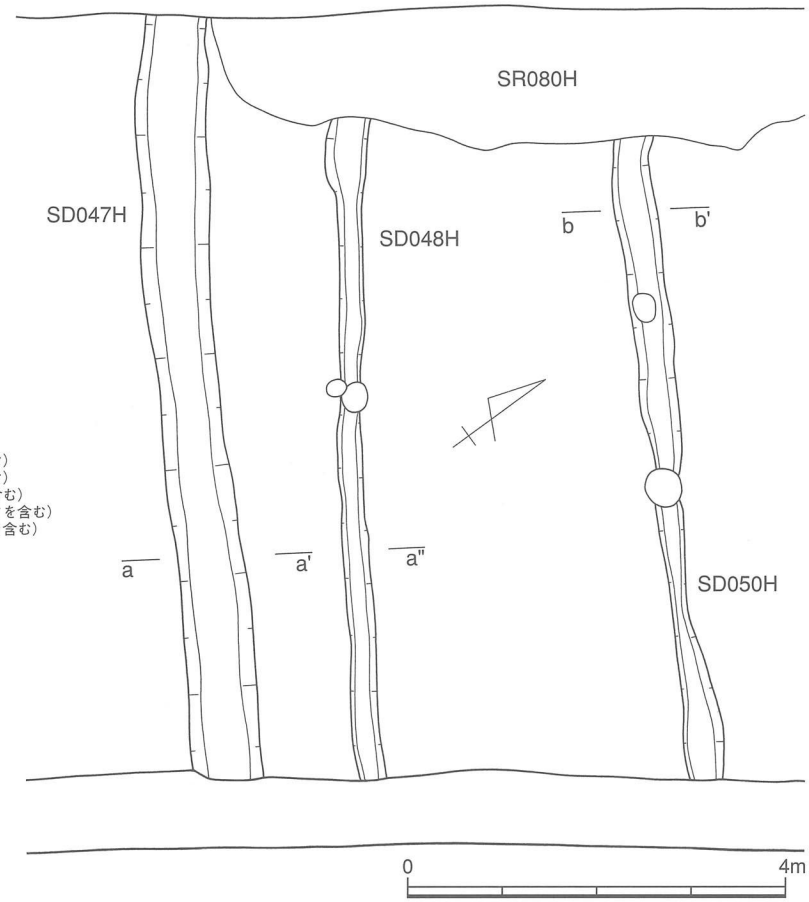


1 暗灰黄色 極細砂（粗砂～小礫・土器を含む）
2 暗灰黄色 極細砂（粗砂～小礫・土器を含む）
3 黄灰色 シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
4 オリーブ褐色 極細砂（粗砂・ベース土ブロックを含む）
5 黄灰色 極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）



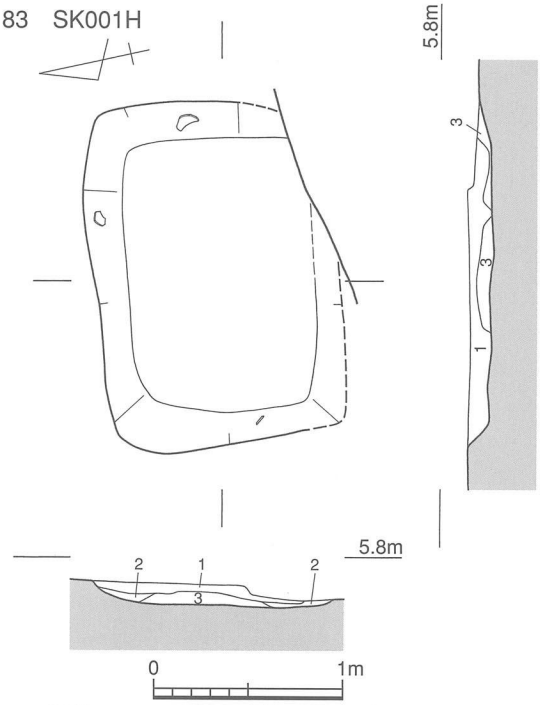
1 黄灰色 極細砂（粗砂を多く含む）

0 1m



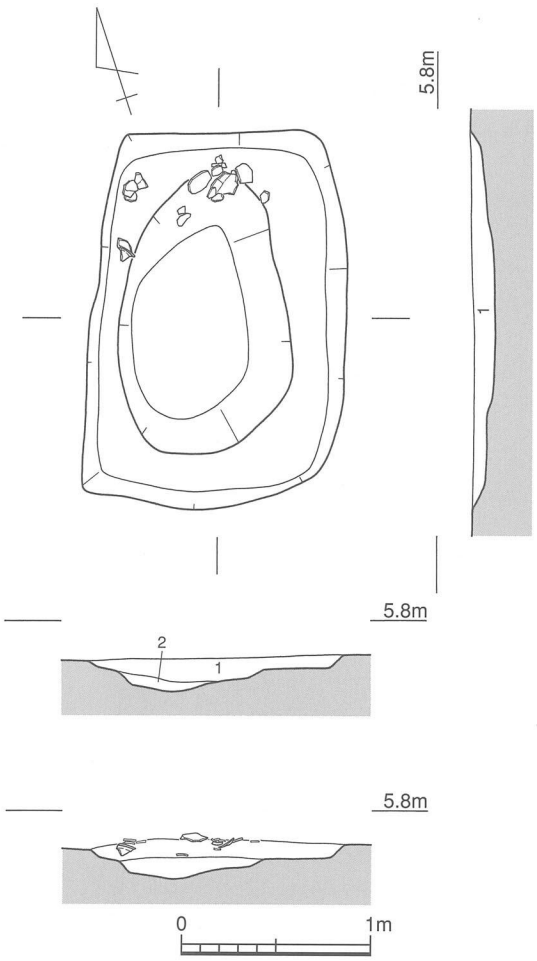
81 掘立柱建物SB205H（1/80）
82 溝SD047H・SD048H・SD050H（1/80）

83 SK001H



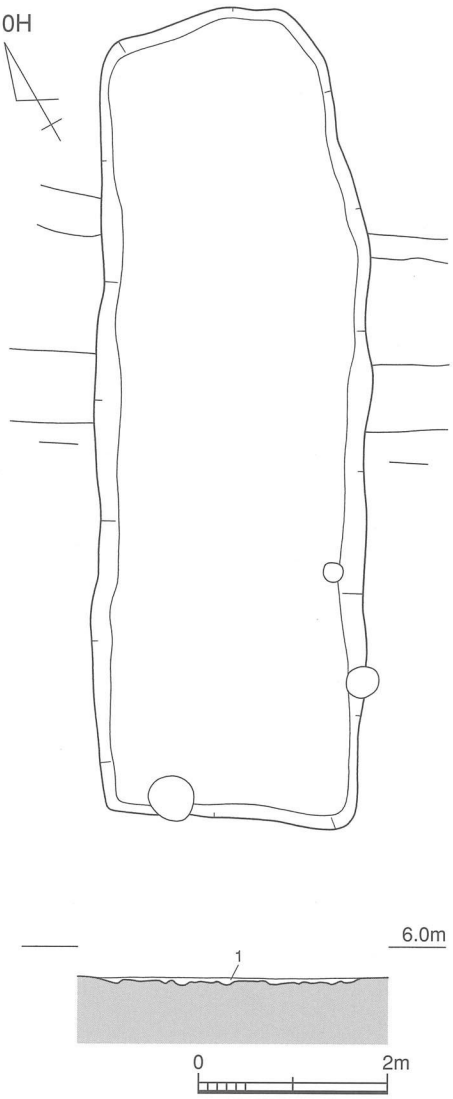
1 黄灰色 シルト質極細砂（小礫・土器を含む）
2 暗灰黄色 シルト質極細砂
3 にぶい黄色 シルト質極細砂

84 SK002H



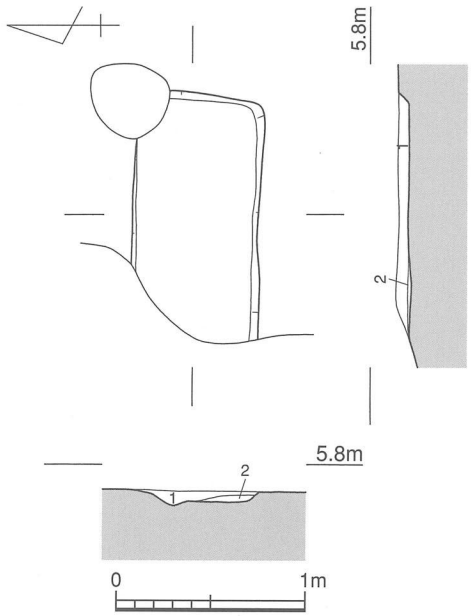
1 黄灰色 極細砂（粗砂～小礫・土器を含む）
2 暗灰黄色 シルト質極細砂

85 SK010H



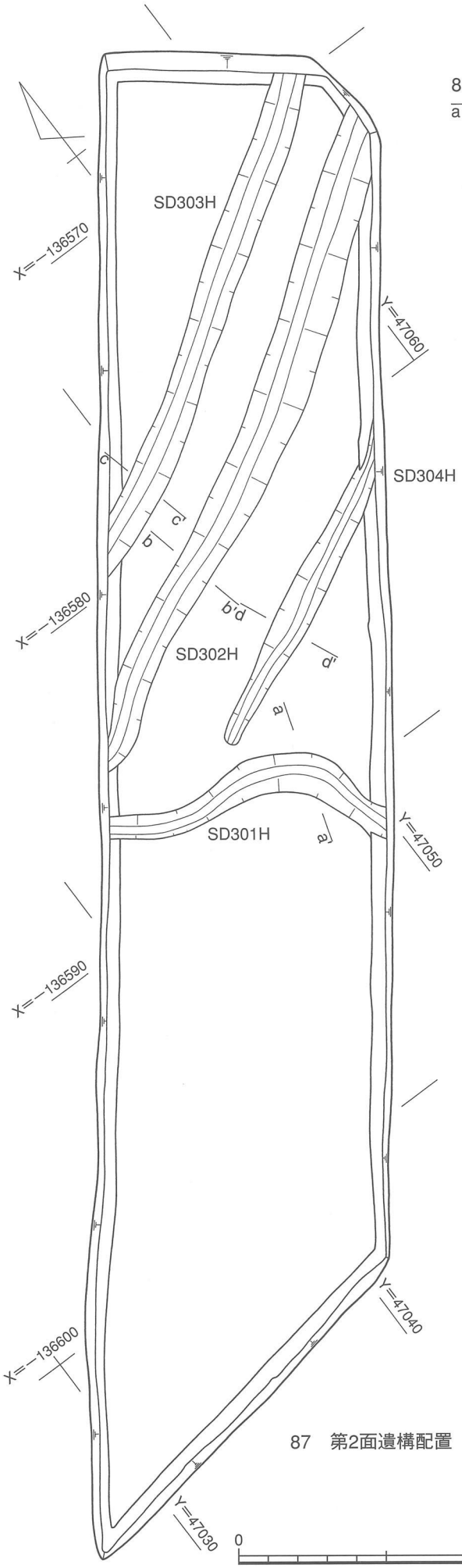
1 灰オリーブ色 極細砂～細砂
（粗砂を含む、牛などの踏み込みが多い）

86 SK110H



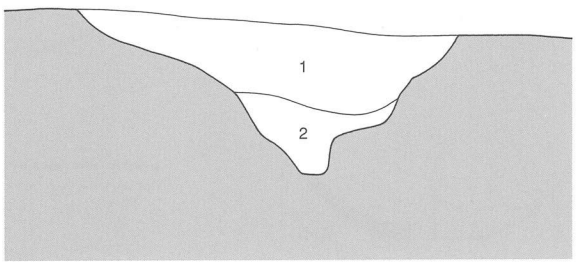
1 暗灰黄色 極細砂（粗砂を多く含む、土器を含む）
2 暗灰黄色 シルト質極細砂（粗砂を含む）

83 土坑SK001H（1/40） 85 土坑SK010H（1/80）
84 土坑SK002H（1/40） 86 土坑SK110H（1/40）



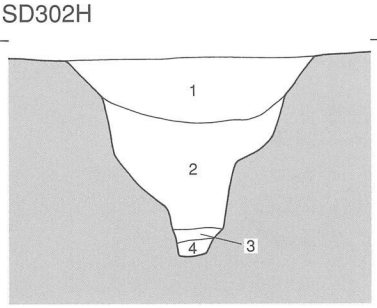
87　第2面遺構配置

88　SD301H



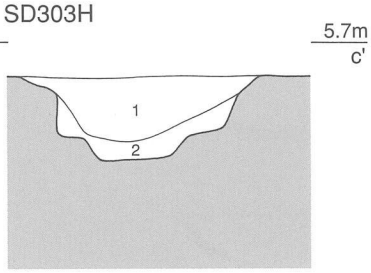
1　暗灰黄色　シルト質極細砂（粗砂を多く含む）
2　黄褐色　シルト質極細砂（粗砂を含む）

89　SD302H



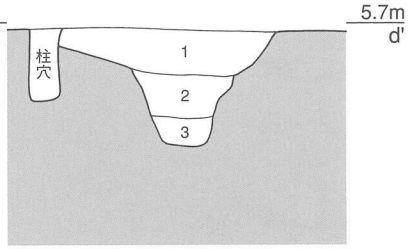
1　暗灰黄色　極細砂（粗砂を多く含む）
2　オリーブ褐色　シルト質極細砂（粗砂・土器を含む）
3　にぶい黄色　細砂
4　暗灰黄色　シルト質極細砂（粗砂を含む）

90　SD303H



1　暗灰黄色　シルト質極細砂（粗砂を含む）
2　黄褐色　シルト質極細砂（粗砂を多く含む）

91　SD304H

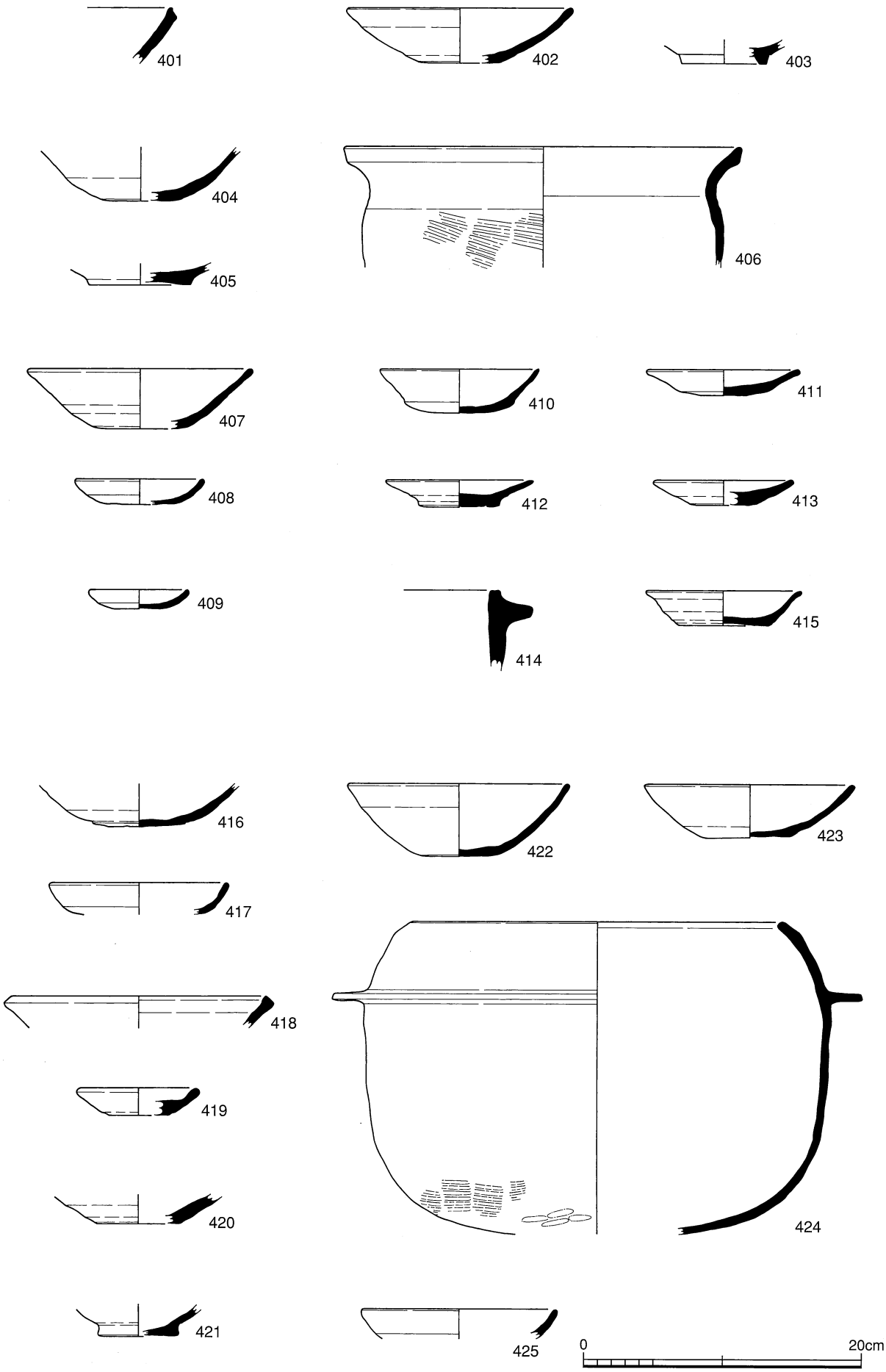


1　オリーブ褐色　シルト質極細砂（粗砂を含む）
2　黄褐色　シルト質極細砂（粗砂を少量含む）
3　暗灰黄色　極細砂～細砂（粗砂を多く含む）

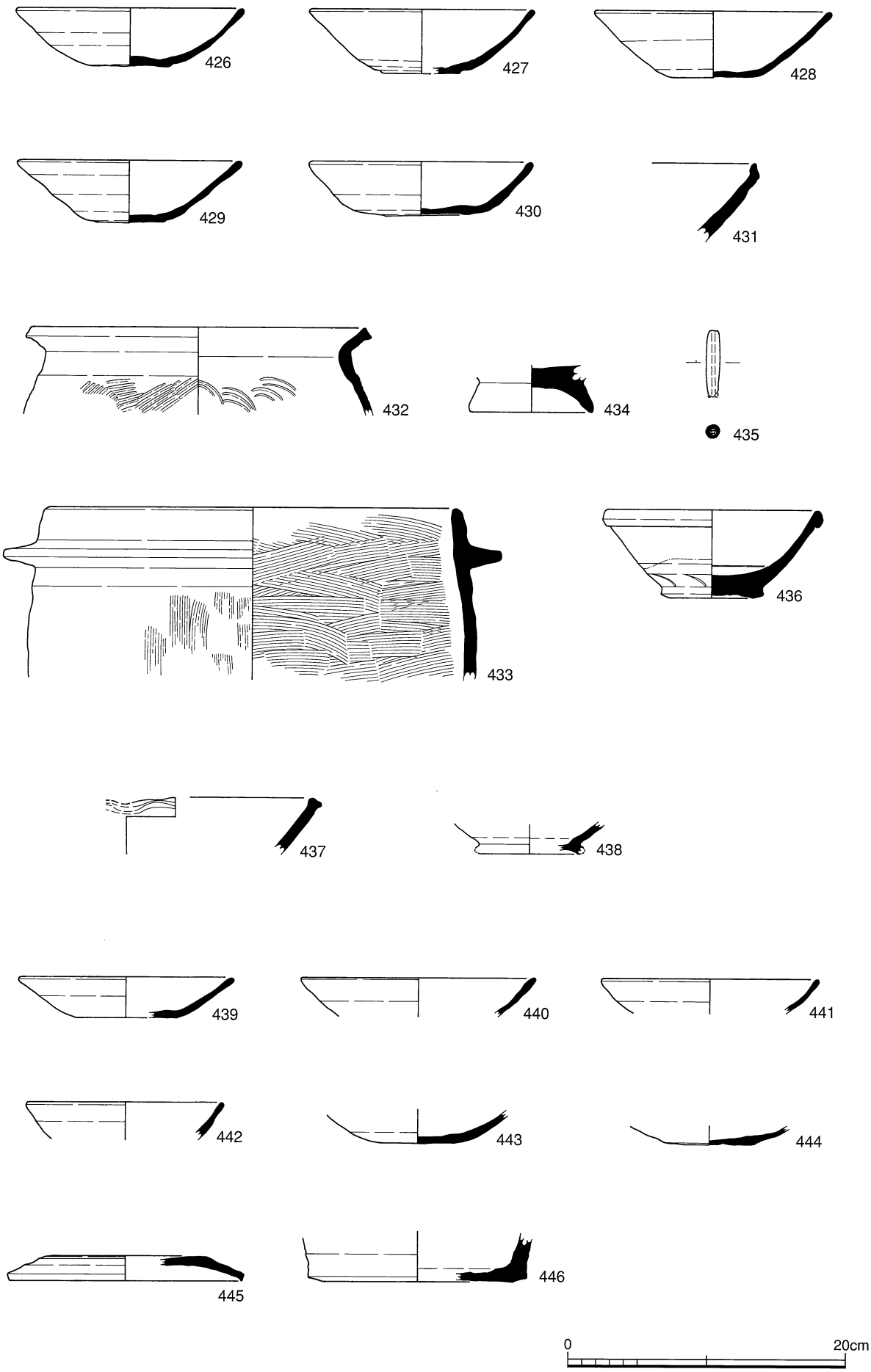
0　2m

87　第2面遺構配置（1/200）
溝土層断面（88　SD301H　89　SD302H　90　SD303H　91　SD304H）

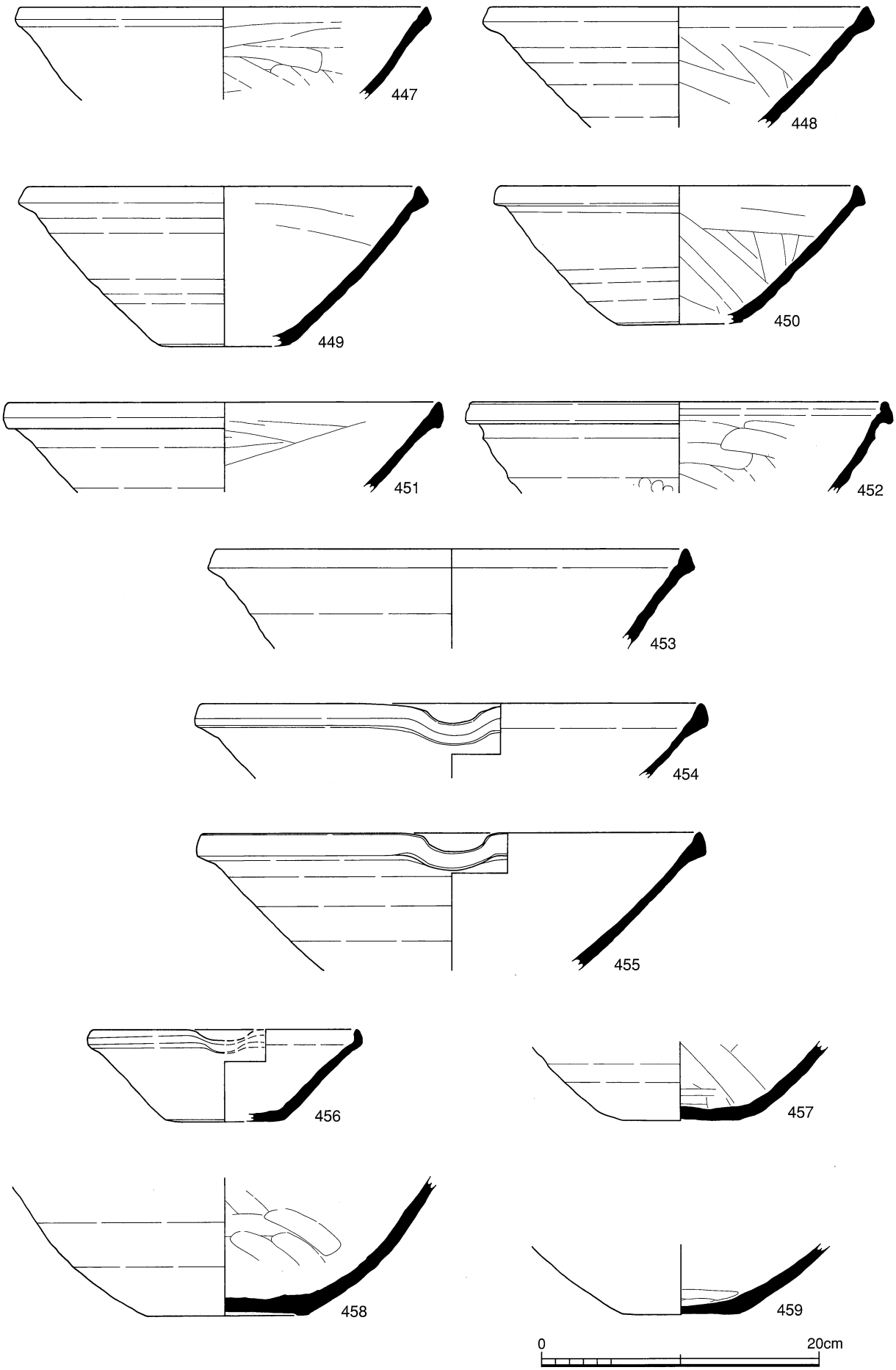
図版54　H地区　遺物



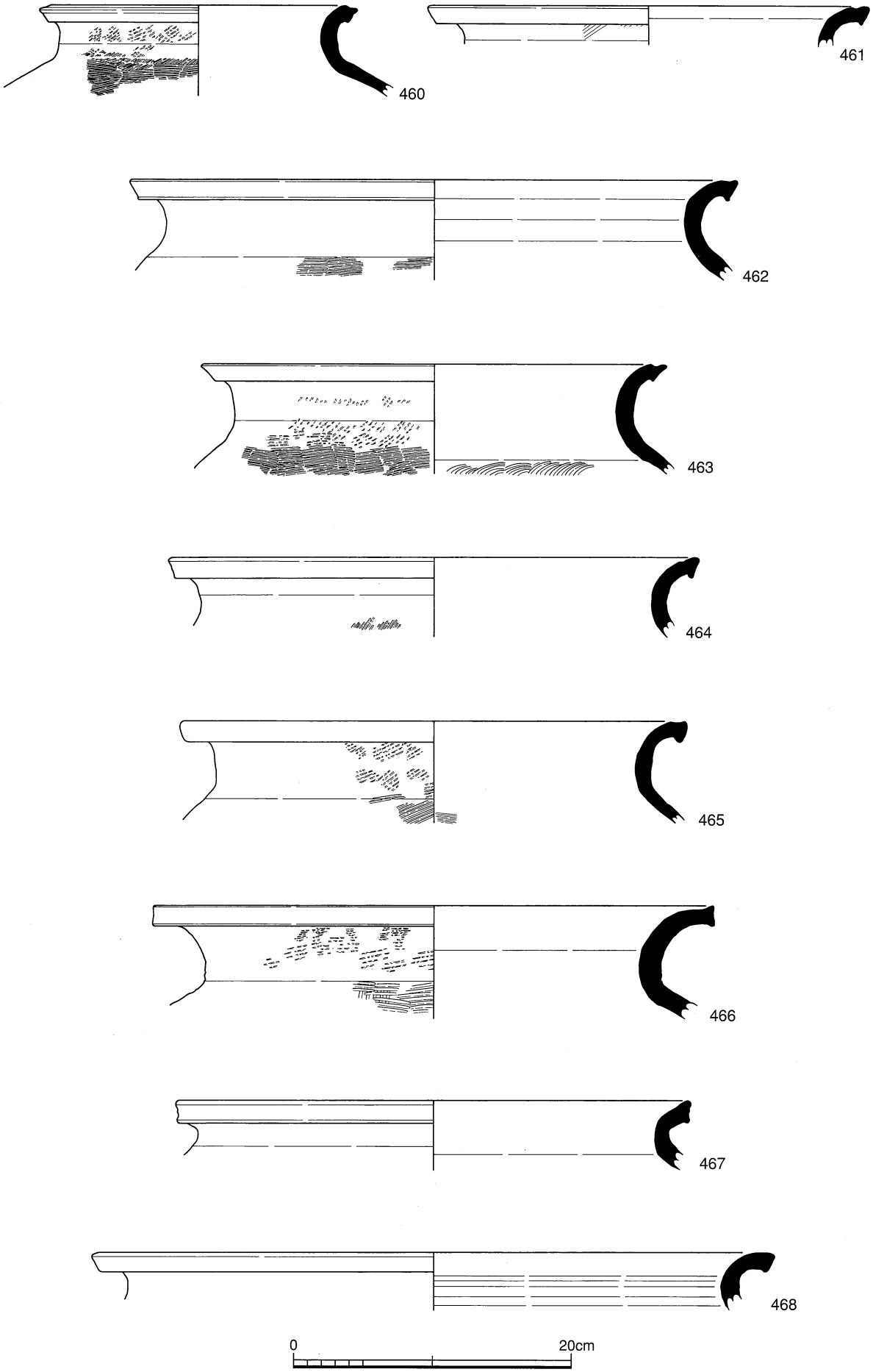
SB201H（401）　SB202H（402・403）　SB203H（404～406）　SB204H（407・408）
SB206H（409）　SB205H（410～414）　P081H（415）　SK001H（416・417）
SK008H（418・419）　SK010H（420）　SK110H（421）　SK002H（422～425）



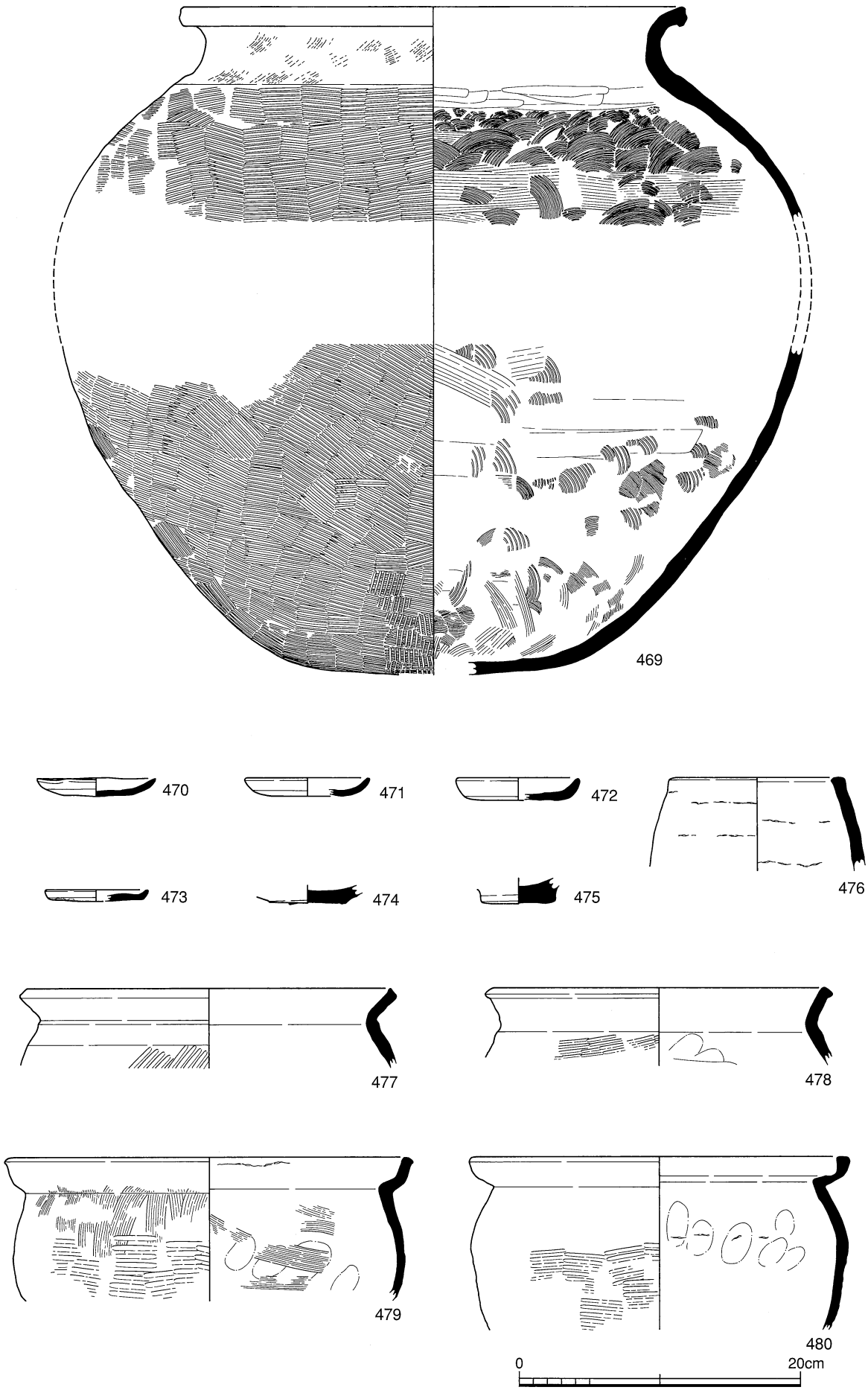
SD047H (426～436)　SD048H (437)　SD050H (438)　SR006H (439～446)



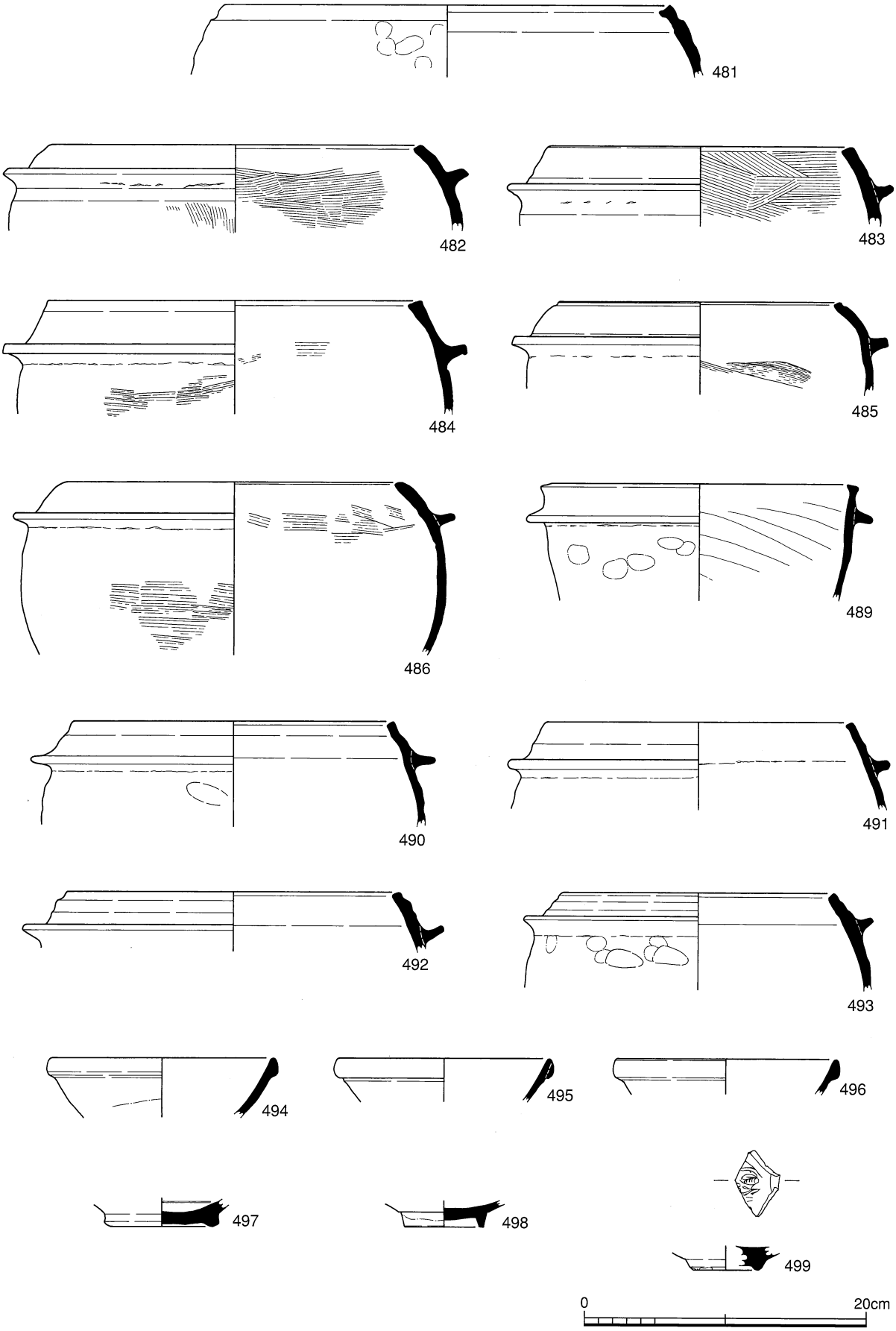
SR006H（447～459）



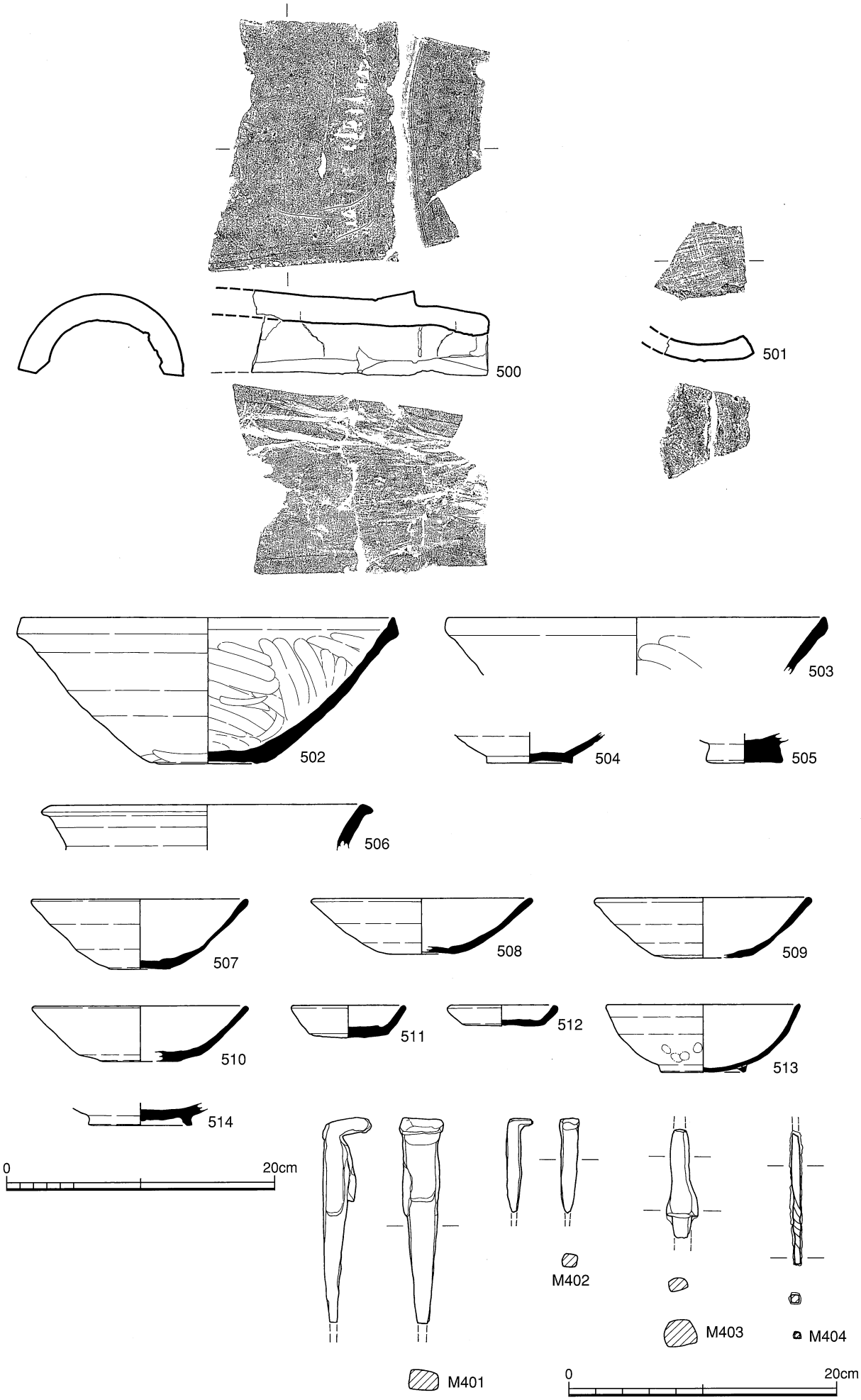
SR006H（460～468）



SR006H（469～480）



SR006H（481～499）



SR006H（500・501）　包含層（507～514）
SR080H（502～506）　鉄器（M401～M404）